ワイズ必携 －LTの為の副読本－

ワイズメンズクラブ国際協会 西日本区

「ワイズ必携」発刊にあたり

良質で多量であることが力になると森田惠三元理事は主張されていました。

「良質とは何か」と言う問題にひとつの答を与えてくれるのが、この「ワイズ必携」ではないかと思います。私自身、理事の指名を受け何を準備したら良いのかと迷っていたときに、元理事の方から「ワイズ理解の手引き」を読むようにアドバイスをいただきました。その手引きはワイズの心と誇りが満ちていて、大変良い勉強になりました。それは、ワイズの枠にとらわれない人生や宗教など多岐にわたる内容が盛りだくさんであり、人生の指針としてもたいへん有益であると感銘を受け、何度も読み返しました。

この「ワイズ必携」は「ワイズ理解の手引き」の改訂版であります。さらに内容を吟味していただき、ワイズスピリットあふれるものとなったと思います。機会あるごとに開いていただき、皆様の心の栄養剤となれば幸いです。

なお、この必携の中に非常に重要な記事として奈良　伝著「若き日のジョージ・ウイリアムズ」（日本YMCA同盟出版部）を転載しました。

快く転載をお許しいただいた奈良　信第19代日本区理事に心よりの感謝を申し上げますとともに、執筆いただいた皆様そして冊子の編集にご尽力をいただいたアカデミー委員の皆様に御礼を申し上げます。

ワイズメン、メネットの皆さんに是非ワイズの心と誇りが凝縮されたこの冊子を活用していただきたいとの思いを込めて、発刊のご挨拶といたします。皆様のワイズライフの指針として有効に活用されることを期待いたします。

2001年12月1日

西日本区理事　吉　本　貞一郎

目　　次

「ワイズ必携」発刊にあたり …… 西日本区理事　吉　本　貞一郎　1

地域奉仕とボランティア …… 阿　部　志　郎　5
生きる意味 ── 21世紀における新しい福祉社会をつくりだすために ── … 阿　部　志　郎　13
分かち合う姿こそボランティア …… 井　口　　延　22
クラブ・ライフは誰の為にあるか …… 一　瀬　齊　男　23
やあ、やあ　ワイズは良き友仲間！ …… 一　瀬　齊　男　25
ワイズは変革の時、EMCは？ …… 一　瀬　齊　男　27
生涯学習とEMC－YMCAとの関係 …… 一　瀬　齊　男　29
ビジョンを共有し、共に進もう …… 今　井　鎮　雄　30
次の時代を担うワイズの働き …… 今　井　鎮　雄　35
ワイズメンズクラブとワイズメンの在り方 …… 岡　本　尚　男　42
“LT（リーダーシップトレーニング）”についての一考察 …… 抱　井　五　郎　44
YMCAとワイズメンズクラブを考える …… 抱　井　五　郎　45
ワイズメンズクラブにおける宗教の扱いについて …… 加　藤　寅　尾　51
ワイズメンズクラブは人を変える …… 菅　　正　康　52
組み合わせが秘訣 …… 上　林　順一郎　53
YMCAのミッションとワイズメン …… 上　林　順一郎　53
奉仕クラブとしてのワイズのあり方 …… 小　堀　憲　助　61
ワイズメンの賢い話 …… 澤　　正　弘　64
クラブ強化への歩み　ワイキチを育てよう …… 宍　戸　良　美　64
LEADERSHIP IN Y' SDOM …… 鈴　木　功　男　65
THE INDUCTION CHARTERは語りつづけています …… 鈴　木　功　男　69
バランス感覚 …… 鈴　木　功　男　77
新しい年、1989年の初めに強く感ずる事ども …… 鈴　木　謙　介　77
新しい年、1989年の初めに強く感ずる事ども …… 鈴　木　謙　介　78
ワイズあれこれ ── ワイズっぷりがいいワイズメンを願って ── …… 鈴　木　謙　介　79
21世紀に向けてのYMCAミッション ── キリスト教使命とその働き ──　隅　谷　三喜男　87
八十五歳のウエルネス …… 鳥　居　一　良　89

YMCAとワイズをもっと知るために …… 長井　潤 90
——YMCAとワイズ設立の精神をいま一度再確認する——
心当たりはありませんか？ワイズ自滅の10カ条 …… 長島精吉 93
今、ワイズダムとは——そのアイデンティティを問う—— …… 奈良　信 93
今、ワイズダムとは——そのアイデンティティを問う—— …… 西崎照一 95
Y' sとYMCAとキリスト教 …… 西村　清 97
ウエルネス10則 …… 堀内浩二 99
クラブとコーヒー …… 堀江　宏 101
クリスチャン・エンファシス …… 堀江　宏 103
ワイズ温泉どっぷり論 …… 森田恵三 104
ワイズを学ぼう——その歴史と活動分野 …… 山川一郎 117
世界YMCA同盟について …… 124
YMCAをつくるために・始めるために …… 127
クラブ設立の方法 …… 131
MC　FISHBONE …… 133
入会式（加盟認証状伝達式）式文 …… 134
役員就任式式文 …… 136

資　料

若き日のジョージ・ウイリアムズ …… 奈良　伝 137

編集後記 …… 158

地域奉仕とボランティア

横須賀基督教社会館館長　阿　部　志　郎

私は、熱心に活動されていられる方に誘われてワイズメンに入りました。服部さんも20代だったそうですが、私も20代の時でございまして、まわりは叔父様方ばかりでございまして隅の方で小さくなっておりました。それから5年後にこんど横須賀にまいります。横浜YMCAに替わりました。横浜Yのことを考えますとワイズメンは念頭になかったのでございました。10年近く横浜Yで会員活動をいたしましたけれど段々足が遠のいてきまして、山根さんの顔をみると肩身が狭いです。ワイズメンには福岡の中村次郎さんが担当理事のときに一度お招きいただいたことがございましたが、ほとんど関係なく今日までまいりました。罪滅ぼしをしろということで今ここに立っているわけでございます。よろしくお願いをいたします。

学Yのメンバーでございました時は、戦後の混乱期でございますが戦争が終わって2年後の9月の14日という日に大型台風が関東地方を襲いました。今も14号、15号が近ずいているところでございますが、当時は台風に女性名詞が付きましてこれをキャサリン台風と申しました。東京、神奈川、埼玉、千葉、茨城を直撃いたしまして、利根川、江戸川、荒川が決壊をしまして、東京の下町一帯が冠水をいたしました。2,200名の犠牲者をだす大惨事でございました。当時の学Yのメンバーたちが、いくつかの大学にわたりまして集まりまして救援活動をしようとということになりました。物の無い時ですけれどもいろいろ歩いて物資を出していただいてそれを背負い、小学校からテントを借りて担ぎまして現地にまいりましたのが、冠水をした3日後でありました。わずか3日の間に集まり、相談をして役割を決め物資を調達して現地に行ったのでありますので若者ばかりでございまして、自負がございました。行けば感謝される、とこういう気持ちでございました。現地にまいりましたら、大きなテント張りの本部がありまして救援の申し込みをいたしました。何軒かの町内会長が国防色の服を着て、戦闘帽をかぶり、長靴を履いて座っておられました。案に相違してその方々が私たちに示した反応はまことに冷ややかでありました。「こんなはずではないのに」と思いました。その中の一人の方が「まあいいからお座りなさい」とむしろの上に座らせまして地区の被害状況を説明してくれました。

その方がエピソードを加えたのです。それは浅草の言問橋の橋の袂に当時バタヤさんと呼ばれる廃品業者の集落があったそうでございます。一晩の中に洗い流されました。この集落の人々を指導していましたのがゼノさんと言うカトリックの修導士で、当時“髭のゼノさん”と有名な方でありました。このゼノさんの門下生の江上しずきという方がつい数日前亡くなられましたが、このゼノさんが浅草の闇市でたくさんの蝋燭を買いまして、一艘のボートを借りてそのボートを助手に漕がせて回りました。まだ避難体制ができていない時でしたので、皆2階にのがれました。夜になりましてもちろん明りは無し、食べる物も無し、飲む水も無い不安におののいている人々のところを一軒一軒ゼノさんがボートで回りました。水が刻々増水してまいりまして東京の下町は2メーターの冠水でございました。その人々にはげましの言葉とともに蝋燭をマッチと一緒に配ったのであります。でその町内会長がこのゼノさんにわれわれはどれだけ力づけられたかわかりません。こういう話しをされたのです。賢明な方でありましてそれ以上おっしゃいませんでした。しかしそれを聞く我々は頭を打ちのめされる気持ちでして、「今頃君達来て何をするのか」ということを言外に感じて大変ショックを受けましたのを私は今でも忘れることが出来ません。災害に襲われた人々が求めるものは、いま食べるパンであり、着る着物であり、住む家であります。その人々に一本の蝋燭を配ったところで何の価値もないはずであります。にもかかわらずその蝋燭を配るゼノさんの行為に人々が災害から立ち上がる勇気をあたえられたと言う事では無かろうかと理解をいたしました。ベジャエフという思想家が残しました言葉に「自分のパンを心配するのは物質的である。人のパンを心配するのは精神的問題である」と申しました。ゼノさんの行為はまさに精神的でありますけれど、しかし戦後それから歩んでまいりました私どもはじつに物質的な生活を送って来たと思います。戦後、物が無い

時代に物に囚われました。そして物の消費生活を拡大することに私どもは狂奔してきたと思います。

昭和33年（1958年)、日本は初めてアメリカに車を輸出しました。30台の小型車をアメリカに持って行ったのであります。この小型車はアメリカのハイウエーに乗れないのです。ダッシュ力がなく、よたよたと入って危険でありました。ハイウエーに入ってもすぐに故障したのです。故障している車は日本車だと言われまして実に評判が悪かった。持って行ったのはトヨペットでありましたが、その時アメリカ人は何といったか「トイペット」ではないか「オモチャ」だと笑ったのであります。

日本は年とともに車に改良を加え輸出台数を延ばしました。アメリカに一年に240万台車を輸出する年がまいりました。飛ぶ様に売れるのです。あまりに売れてアメリカの自動車産業をおびやかし貿易摩擦になりました。以来日本は自主規制をしています。30台の評判の悪い車から200万台の飛ぶ様に売れる時代へと発展するのに要した時間は20年でありました。この20年という時間の短さ、スピードの速さを経済成長の上にわざわざ「高度」とつけて高度経済成長と表現したわけであります。しかしながら20年という時間は短すぎました。短いがゆえに無理が生じ、矛盾が起こるのであります。

これが今私たちの社会に影を落としております。この経済成長期にいろいろキャッチフレーズがでましたが、その一つに「家つきカー付きババ抜き」という言葉であります。若い女性の間にささやかれた言葉でありまして自分の結婚相手のこれが条件です。持ち家があること、車の少ない時代でありますけれど車を持っていること、もう一つ姑がいないこと。長男はゴメン。こういう事であります。「ババ抜き」、これは人間否定であります。物を、家、車は大事にする、しかしババはいらない。人間を軽視するという風潮が広まったのは経済成長期でございました。経済が成長していくにはいくつかの要件がございます。例えば原料を運び込む港湾を整備しなければなりません。横浜はまさにそれに成功したのでございます。原料を運びこんで、それを製品にして輸出する手段がいります。飛行機、船、産業道路、新幹線であります。経済成長の工業化をはかる一つは、水資源でございました。工業用水が豊富でなければ工業化できません。これに苦しんできたのが沖縄でございまして水がありません。神奈川県という所は内山知事の時代からダムに力をいれた県で、近いうち宮が瀬ダムが通水いたしますと21世紀の半ばまでは水の心配はないのかと思いますけど、水に恵まれているのが京浜工業地帯が発展出来た大きな理由でございますが、もう一つは労働力であります。日本の工業は誰でもいいといった事がないです。日本の工業が要求した労働力というのは3つあります。まず第一は若くて力があって長続きする人間、第二は教育を受けた人間、第三は低賃金で働く。この三つに該当するのは年少労働者でございまして一番歓迎されたのは中学の新卒でありました。横浜で申しますと毎年何万、5万、6万、7万という労働者を新しく必要といたしました。横浜市が供給し得た中学の新卒者は第3次産業を含めて4500から5000程度でありまして絶対量が足りません。そこで地方へ地方へと、横浜で申しますと奄美大島まで人を探しに行ったわけでございまして、そして集団就職としてその労働力を工業が迎えたわけでございます。この頃中学の新卒のことを金の卵、月の石、ダイヤモンドと呼んで貴重品扱いをいたしました。それは中学新卒に求人が平均20件あったからでありまして、今から考えると夢のようであります。取り残される子供が出ました。それは障害児でありました。障害を持った子供は工場で働けないだけでなく、学校に入れなかったのであります。障害児が学校に入る就学権を得たのは昭和54年でありますので、戦後34年と言う長い時間を必要と致しました。障害児をなぜ学校にいれなかったかというならば、一番大きな理由は障害児に生産性がないからなのです。働けないからなのです。日本の社会が求めたのは働ける人間、この働ける人間を送り出すのが教育の課題でございましたし、一度傷ついた、事故を起した人を再び社会へ復帰させるのが福祉の存在理由でもございました。こうした中からもう一つ取り残した大きなグループが生じました。それが年寄りであります。老人、先程65才、70才という話しがありましたけれども、年をとるそれは復興を担って来た人でありますけれど、老人になるということは、労働能力の喪失を意味いたしますので、日本の社会には用がない。そのままにいたしました。その数があまりにも高齢化で増えて問題が深刻化して老人問題として火をふきましたのが1970年を境目にしております。

こういうことで物とか生産とか効率、あるいは知識、学歴主義が人間を判断する基準として定着してきたのが戦後社会でございました。物を重視

する中で物は巷に溢れるようになりました。ここで新しい問題と私どもは直面をせざるをえなくなったのでございます。経済成長の後、横須賀が隣の町でございますけれど、横須賀というのは人口43万の町でございますけれども、大変深刻な教育問題にぶつかりました。中学生が学校に弁当を持ってまいりますのに箸を付けない、箸を持って来ない生徒が現れたのであります。「箸持って来い」と教師が申しましても「おれ箸無くても食えるぞ」と開き直られたのであります。箸を持って来ない生徒はどうするかというと、弁当箱にそのままかぶりついて食べるのであります。これを教師が犬食いとよびました。犬が食べるように弁当を食べる。横須賀に公立中学が25校ございますけれど、その全部に広がりましてお手上げでございました。

私どもはパン無くして生きることは出来ません。しかしそのパンはいかなる形でも、与えられれば良いというものでもないのであります。日本で一番受ける芝居は忠臣蔵で、12月にもなりますと忠臣蔵ばやりでございます。花見の茶屋という場面があります。大石蔵之助が茶屋遊びをし、酒に酔しれ、市井の人が足蹴にさせられたものを、四つん這いになって食べる場面でございます。蔵之助が敵討ちをする意思をもっていないことを表そうといたしました。パン無くして生きることは出来ない。しかしそのパンは私どもは権利としてのパンが欲しいのであります。権利というのはもともと自分に属するもので、手にしようと思えば手にできるものを権利と申します。人が上から下へ投げ与えたものを四つん這いになって食べたいとは、あのひもじかった戦中戦後でさえ誰ひとりとして願わなかったのです。なぜならそれは人間の心を失うことを物語っているからであります。動物と人間は違います。動物は下をむいてえさを求めてさまよい歩きます。えさを得ることが動物の目的でございます。人間はどんなに貧しくてもパンを得ることが目的になり得ないのです。衣食住を手段にしてより高い人生に向かって歩もうとするのが人間でございまして人間・アントローポスというのは上を仰ぐという意味でございまして、上を仰いでやまない存在が人間でございます。この手段であるべきパンがいつのまにか豊かさのゆえに飽食のゆえに目的化されたのが犬食いなのではないか、目標を見失う、言い方を変えるならば生きる意味の喪失ということではないかということを恐れるのでございます。最初に伊東先生から信仰と健康という話しがございました。健康・サルベイオというのは救いという意味でございます。WHOで健康というものに対する定義がございまして、それは肉体的、心理的、社会的に快適な状態を健康と申しましてこの病気になったという状態でわけるわけではございません。社会的に快適な状態を健康と呼ぶわけでございます。この健康の定義に、近い内に一つ加えられます。まだ総会を経ておりませんからどうなるかわかりませんけれども理事会では決議しております。それは健康にスピリチュアウェルビーイングと言う言葉を加えようということであります。健康というのは人間のスピリチュアという言葉は何と訳すのかは解りませんけれどもこの精神・魂にまで及ぶ問題でございまして、そうした心に深くかかわる問題の癒しをどうするのかというのが先程の伊東先生の問題提起だったと思います。物の豊かさのゆえに心の問題、魂の問題を私どもが見失う、こういう状況が今の私どもの社会の現実ではないかということを考えさせられるのであります。

20年前から不確実性の時代が登場してまいりました。不確実性の時代とは明日が読めないのです。あまりの変化の激しさの故に明日が見えない。実に不安定にして不透明な状況、不確実性という言葉で表したわけでございまして、日本ではベストセラーでございました。石油ショックが経済の成長の最初のつまづきでございました。狂乱物価になり、その後地上げやバブルがございました。そしてバブルがはじけたとたん経済不況、経営不安、組織犯罪、構造汚職。大きな企業が一晩で消え去ってももう誰も不思議に思わないというそういう時代になってまいりまして、まさに不確実でその中に置かれた私どもは不安でございます。じつに不安な状況に私ども今位置しているかと思います。この不安から自分を守らなければなりません。いつの間にか守る方法を身につけました。3つございます。

第1は現世幸福主義でございます。明日が約束されないのなら今日幸せでありたい。高校生の6割が明日に希望が無いと答えているのです。それなら今幸福でありたいという思いをたいへん強めている。

第2はマイホーム主義でございまして、ある精神医学者はこれを要塞家族と名付けました。家族の回りに砦を築いて人を入れず、自分も外に出て行こうとしない。これがマイホーム主義、自分だけを守るだけでございます。正月三が日に、初詣で

に行った方が8700万人という記録を作りました。初詣でに行って色々の願をかけます。安心立命・商売繁盛・家内安全・無病息災・学校合格まあ色々あるわけでございます。その割りにはあまり賽銭を出していないのですね。ある神社にいきましたら受験生ですけれども「〇〇大学に合格をさせてくれれば賽銭を出します」という絵馬が掛かっておりまして、取引をしているのです。願い事はたくさん持っております。しかしその願い事は自分と自分の家族の幸せを願うのでございます。初詣でというのは歴史的には五穀豊穣を祈ったものです。いまは人の幸せ、世界の平和を初詣でで祈れる人はどれだけいるのか。

第3はシステム依存ということでございまして、システムとは法であり制度であり行政でございます。経済成長期、公的依存ということを私どもは身に付けました。特に福祉国家ということが台頭してまいりまして福祉国家というのは国家責任ということだといわれまして、すべて行政に責任を押しつけたのでございます。家の前の通りにゴミが落ちている。自分で掃除をしないで役場に電話してゴミを拾えといったのです。役場の方では住民から文句を言われる前に「先取り行政」という言葉ができまして「すぐやる課」と向かいの町房総半島の方にございますけれど、すぐに電話をするとドブさらいでも役場の人が来てしてくれるとこういうことをしたわけでございまして、私どもは行政に要求をし責任を追及致しました。しかし自分自身は腕をこまねいて体を動かさない。これが経済成長期の私どもの行動のパターンでございました。すべてシステムに依存をしたわけでございます。そこに阪神淡路大震災に襲われました。神戸市役所5階がペシャンコになりました。水道局がございました。水道の配管図が失われたのが神戸市の水道復旧が大幅に遅れた理由でございます。神戸市に笹山市長というたいへん立派な方でございますが、笹山市長が神戸市の被害状況を把握出来たのは12時間後でございます。行政は何も出来なかったし、状況すら解らなかったのであります。こういう中で行政に依存出来ないという気持ちをたいへん私どもは深くいたしまして、システムを変えるべきではないか、行・財政改革、ビッグバーン、農政改革、教育改革、福祉改革と今改革ばやりでございます。システムをどう変えるのか。

東京の芝愛宕山と申しますとNHKの発祥地でありますけれども、愛宕神社がございまして昔と同じく今も81段の石段があります。間垣平九郎が馬で一気に乗り上げたといわれる講談に出てくる石段であります。あの石段の下に立って私が上を見上げますととても怖くて登れないです。急です。幅は狭い。踊り場はない。足を踏み外したらどうなるかという心配が先に立ちまして登る意欲が沸いてまいりません。これが私どもが作って来た戦後社会の構造でございます。5階建てのアパートにエレベーターがなくとも建築基準法はパスするのです。安全であればいいのです。エレベーターがありませんので5階にはお年寄り、障害者、妊婦、乳児は生活が出来ない。それを厚木のYMCAはお変えになる、いいですね。バリアフリーになさるというわけでございますね。そのままにしてきたのです。ということは健康な働ける若者を中心に社会を作ってまいりました。それ以外の人は不便を忍んだわけでございます。このシステムを変えなければならない。どう変えるか。沖縄本島の北部に「今帰仁」という古いお城がございます。このお城に上って行く石段が83段ございましてこれは村人が汗を流して自分達で作った石段でございます。幅が広く、奥行きがあり傾斜はなめらか、しかも3段、5段、7段ごとに広い踊り場があるのです。私でもゆっくり歩いていくといつの間にか城に到達が出来ます。これが私どもが必要とする新しいシステムでございます。それは年寄りが障害者が妊婦が安全であるだけでなく、かつ快適に生活する条件に変えるのでございます。年寄りが快適に生活できる条件は、健康な若者にとっても快適なのです。難点は金が掛かるのです。厚木Yで既存の建物にエレベーターを付けるのは大変ですよ。いま県立高校で神奈川県はエレベーターを付けています。1基1億円かかります。1億円かかると解りますと生徒からも教師からもPTAからもそれならこれを買え、これを換えろ、これを直せという要求が出るのが当然でございますけれども今エレベーターを付けております。この金を誰がどうやって負担をするのかが今の日本の大きな政策課題でございまして大変議論が紛糾している問題でございますが、しかし誰かが負担をしなければそれは出来ないわけでございまして、その負担に私どもが応ずる用意があるかどうかをいま問われているところでございます。こうしたハードは金をかければバリアフリーになります。たいへん立派な、快適な条件の建物ができるわけでありますけれども、金をかけても出来ないものがあります。近県でご

ざいすけれどもあるJRの大きな駅でエレベーターで障害者が14時間缶詰になる事件が起こりました。JR東日本に約1700の駅がございまして、障害者が乗れるエレベーターが付いているのが100ちょっとというところでございますので、エレベーターがある駅というのは近代的な設備が完備しているという大変望ましいことであります。そのエレベーターに障害者が乗った。車椅子からボタンに手が届かない。そのまま14時間閉じ込められたのであります。その間誰一人そのことに心を配った人がいなかった。どんなに立派な設備を施しましても人がかかわらなければ機能しないです。この人と人のかかわり、これが命でございます。教育も、福祉もこれが命でございます。

この人と人のかかわりをこれからどうしていくのかということが私どもにとっての大きな宿題になってまいります。特に今日はハイテクの時代でございまして、すべて機械が処理をしてまいります。つい先週ICUの図書館が出来ました。私まだ見ておりません。聞きますと全部コンピューターがするとの事でございまして表に本が無いのですね。私は味気無いと言ったのですけれど、私にはやっぱり本を手にして開ける感触が楽しみですけれども本がなくてすべてコンピューターが全部こう……今病院のカルテがそうでございまして、本が手元に送られて来るそうでございまして人件費がいらないのです。それだけ光熱費が掛かりましてもまあこういうふうにだんだんなっていくのかと思います。

大きな会社で社員一人一人の机の上にパソコンがございます。イントラネットでございまして、パソコンをたたけば地方の、あるいは海外の支店とも一瞬にしてコミュニケーションが出来るという、実に能率的でであります。しかしその社員は隣同志話しをしない。話しをするということはムダなことでありましてなにか言いたければボードをたたけばいいのですね。会話が無いのです。これからの社会はますます会話を失います。スーパーに行って買い物をして出てくる間、一言も言葉を交わさなくてもすむのです。この会話が無くなって行くというのに今苦しんでおりますのが一人暮らしのお年寄りでございまして会話が無いのです。誰も言葉をかけてくれない、自分も話す相手が無い、というのが大変深刻な問題なってまいりました。駅で券売機にお金をいれてキップを買います。今実に良く出来ておりまして、釣り銭から全部計算されて、私もイオカードを使いますけれども一瞬にして書き込まれますので、私は不思議で不思議でしょうがないのですけれども実に便利になりました。あの券売機が出始めました頃性能が悪かったです。お金をいれてもよくキップが出なかったのです。駅員にキップが出ませんと言うと言われた言葉は「本当にお金をいれましたか？」。発達をしていく機械は私どもは信用をいたしますけれど人間と人間との間隔はますます広がり不信に陥るのでございます。こうした中で、人と人の触れ合いというのはいったいどういう意味を持ち得るのかということでございます。

阪神淡路大震災の時一番大きな被害をうけたのは長田区でございました。YMCAの保育所も同じでございました。長田区に「まの」という地区がございましてここだけ長田区の中で被害者がすくなかったのです。まの地区で救助された人の4人に3人は近隣の人によってでありました。区役所でもなく、消防でもなく、警察でもなく、自衛隊でもないのです。隣り人が倒れた家屋から助け起したのです。地域活動が盛んな地域だったからでございます。神戸で人々が災害を受けて仮設住宅に移りました。この仮設住宅で孤独死をなさった方が230名おられます。中のお一人は10ケ月見つからなかったのです。隣同志さえ顔を知らず挨拶もしないまま一人でひっそり死んで行く。人と人の触れ合いを失うからでございましょう。ワシントンにあります日本の大使館で働いている若い外交官でございますけれども、ある夜遅く3才のお嬢さんがひきつけを起しました。あわてましてすぐに電話をいたしました。アメリカは911番だったとおもいます。救急の電話をいれた。そうしたらどういう状態か聞かれた。気が動転しておりまして英語が出て来ない。奥さんに代わった。奥さんもヘルプヘルプというだけです。あと何も言えない。そしたら「お前は何語をしゃべるのか」といわれた。「ジャパニーズ」と答えたら、日本語を話す人に代わったのですね。それで状況を話したらすぐに救急隊が20人送られてきてそこに医者がおりまして、診察を受けてすぐに入院。ご主人は後始末をして後から来なさいと言われて、品物を揃えているとドアを叩く音がして、出たら隣のご主人「救急車の音を聞いた。お役に立つことがあれば何でも、何時でもするからすぐに電話しろ」といってこんな大きな紙に自分の家の電話番号を書いて渡してくれた。病院に入って幸い検査を受けたけれども

たいしたことはなかった。翌朝、誰から聞いたのかそのお嬢さんが行っている幼稚園の園長が真っ先に見舞いに来た。そして病室で子供用のビデオを楽しみ、電話は一切無料、2晩泊まってようやく退院で家へ帰った。いたれりつくせりのサービスだった。帰って驚いたのは請求書が来た。40万円ですよ2晩で。それは医療保険であとで全部支払われるのですけど一時立て替えをしなければならず、びっくりしちゃったわけですね。この医療保険に入っていない人がアメリカでは現在4400万人おりまして今非常に深刻な社会問題でございます。

救急車のサイレンを聞いて隣のご主人がすぐに飛んできた。「なんかすることがないか」ここが私どもと違うところでございます。そしてワシントンに日本人が何人居るかしりませんけれど24時間救急電話をとる日本語の人がいる。マイノリティの配慮でございます。こういう土壌があって始めて地域社会と言うものが成り立つのでなかろうかと思います。私横須賀にまいりまして施設の都合もございまして4回引っ越しをしております。4回とも引っ越しをしますと、昔なら引っ越しソバでございますけれど私はタオルを持って近所の家を挨拶にまいりました。新入りでございますからよろしくどうぞと挨拶をいたしますし、また、近くに引っ越して来た方が挨拶におみえになります。新しく行った住民が挨拶に回らなければなりません。

ところがアメリカでは新しい住民がまいりますと近所の人がその家に来るのです。歓迎の挨拶をしてくれ、ゴミはどうやって出すか、ミルクはどこにいけば買えるか、生活のノウハウを教えるのでございます。これは大変大きな違いだと思います。私どもは昔から地縁社会でございます。地縁の縁というのは縁起でございまして、新しくその地縁社会に入りますと、縁で結ばれるのです。受動的なのです。これを存在概念と申しまして、地縁社会というものが存在をしておりましてその中に入ると結ばれますので、そのことに対する私どもは挨拶を怠ってはならないわけでございます。コミュニティというのは何処にもないのです。作らないかぎりコミュニティは存在しないのです。コミュニティというのは形成概念と申しまして、自分達で作って行くということでございまして、それは新しく来ようが前から居ようが一緒に協力をしながら創造していくという所に、コミュニティというものの意味があるわけでございますけれども、この辺の感覚の違いというのが私どもの生活に現れて来るのではなかろうかとおもいます。こうした人と人の触れ合い、新しい人が来ればそこにちゃんと挨拶に行き自分の方から出掛けていくのはなぜか。聖書には一番最初にアダムとイブがいました。神様はアダムの助け手としてイブを創造するのですね。人と人が助け合うということが人類の創造でございます。一人でいるのはよろしくないと、助け合え、助け合うように人間は創造されたのでございます。この助け合いをするという、私どもはいかなる心情に基づいてするのかということでございます。

沖縄の離島、石垣島の奥に西表がございます。この西表からさらに南に波照間島という島がございまして、ここが人が住んでいる最南端の島でございます。この波照間に戦争中に日本軍の軍隊が接収をいたしました。一説によりますと、その波照間の人々が持っておりました500近くのブタと牛の食料を徴発するためだったといわれておりますけれども、ともかく軍隊がまいりまして人々を強制的に疎開をさせたのです。1275名の島民が全員強制的に西表に移されました。「はえみ」という海岸でございまして、西表でもたいへん不便なところです。そこに全員強制疎開になった。その「はえみ」にマラリヤが蔓延いたしまして、結局最後には500名近くの方が命を落とすのでありますけれども、その中に66名の小学生がおりました。この小学生を引率をなさったのが「識名　ますのぶ」という校長でございました。次から次へと子供たちがマラリヤに感染して死んでいくのでございます。この識名校長がはえみの海岸に石を建てました。これを「わするな石」と呼んでおりますけれど、この「わするな石」波照間、識名と波照間を見晴らす海岸に石を置いたのでございます。おそらく痛恨の思いをこめて識名校長はそれを建てたに違いがございません。この思い、この心情を沖縄では「ちむぐりさ」という言葉で表すのですね。ちむぐりさとは「キモがいたむ」という字の様でございます。ちむぐりさというのをどう考えましても本土の私どもには訳せないのです。その言葉は校長が自分が引率をし責任をもっている子供たちが失われた。申し訳ないのです。人が失われて申し訳ないというその思いが「ちむぐりさ」という言葉だと思います。いいかえますと、私どもが健康である。たいへん嬉しいことであります。幸せであります健康で。その健康な私どもが病に倒れ、傷ついて寝て居る人に対して「自分が健康で

あることをすまない」そういう気持ちを「ちむぐりさ」と呼ぶのだとおもいます。実に豊かな優れた言葉だと思います。この「ちむぐりさ」自分は安全な所にいて、人は傷ついている申し訳ないという、それが私はボランティアの原点ではなかろうかと思います。

英国で戦争中に社会保障が出来ました。ここが英国の特色でございまして戦時中に社会保障をした、国民の生活の為に。この社会保障を立案いたしましたのがウイリアム・ベバリッジ氏という人物でございましてベバリッジ法案と呼ばれております。このベバリッジが国の責任で社会保障をすべきだという法案を出すわけでございますけれど、このベバリッジがこう言うのです「英国にはボランティアがたくさんいる。しかしボランティア活動をしていない人々もたくさんいる。ボランティア活動をしていない人々がボランティア活動をしていないことに対する罪意識を持っている。これを大事にしなければならない」と言う事をベバリッジは言うのです。社会保障制度を作ったベバリッジがボランタリーアクションということを強調したというのが英国の特徴でございます。その法案が出されました時、ロンドンはドイツの空襲下にございました。バッキンガム宮殿も空襲を受けたのです。先日100才を迎えたエリザベス皇太后、バッキンガムにおりました。そしてバッキンガムが空襲を受けて被爆した。そうしたらエリザベス皇太后がこれで自分は初めて市民に顔向けができるといったのです。そして、最後まで人々の勧めを断って疎開をしないでバッキンガムにエリザベスは残りました。これが英国の国民の尊敬をうけている大きな理由なのでございます。自分の建物が傷ついて初めて市民に顔向けができるというその言葉にボランティアの思想があるのではなかろうかと思うのであります。

聖書にはこういう物語りがございます。イエスさまが飼う羊飼いが羊のように弱り果ている群衆をごらんになって「あわれまれた」と聖書は書いております。「あわれみ」という言葉の原語は「内臓が動く」といいます。「ちむぐりさ」なのであります。自分の全部をイエス様は動かされた、「ちむぐりさ」なのであります。「ちむぐりさ」であるが故にそこから全人格的な対応が起こるのでございます。この全人格的対応を「サービス」と申します。アジアの国々の中に幾つかの仏教国がございます。代表的なのがタイ、スリランカ仏教は小乗仏教でございまして、日本は大乗仏教でございますけれど、日本の大乗仏教は小乗仏教を軽視してまいりました。しかし最近変わりまして小乗仏教と呼ばずに乗座仏教と日本の仏教界も呼ぶようになったわけでありますけれど、戒律のきびしい仏教でございます。たとえばタイで申しますと男は20才になりますと一度仏門に入ります。子供のとき入ってもかまいません。この仏門に入る若者を家族や友人が担ぎ上げて寺に届けるのが一家の誉れでございます。朝早く、タイでは指紋の見える時と申しますが、夜が明けますと僧侶は托鉢に町や村へ列を作って出て参ります。托鉢はこの辺は鎌倉が近いものですからさかんなのですけれども我々は門付けでございまして一軒一軒僧侶が回りまして、そして布施をしますと僧侶が感謝しておがんでるのです。門付けでございます。しかしタイでは僧侶が村へまいりますのに村人は通りに出て待ちうけるのです。そして僧侶がまいりますと布施を致します。我々の布施は金ですけれどもタイでは食べ物でありまして、托鉢というのは元来食べ物でございました。今でもそれを守っているのであります。そして僧侶はその食べ物を受けて寺に帰って食事になります。同時にこの食べ物を貧しい人々と分かち合うのでございます。みますと、布施をする村人が僧侶の前にひざまずくのです。僧侶は立ったまま受けます。一言も礼を言わないのです。礼を言わないのが礼儀でございます。これは私どもの常識に反するものでして私たちの常識は与えるものが上から下へ与え、受けるものがひざまずく。ところがタイ仏教、小乗仏教は逆でございまして与える人がひざまずき受ける人が立っている。これがタイの小乗仏教でございます。仏教に「喜捨」という言葉がございますね。「喜びをもって捨てる」と書きます。捨というのは私どもの言葉でいえば「ささげる」ことであります。喜びをもってささげる「喜捨」をするわけです。それは喜びが内に伴えばひざまずいて捧げることが出来るのだと思います。拝跪ということです。喜びがなければ拝跪はできません。これが「サービス」でございます。イエス・キリストは腰に布をまとって弟子の足を洗ったのでございます。足を洗うというのは奴隷の仕事でございました。それをイエスさまはなさったのですね。洗足ということでございまして、まさに拝跪のサービスをそこで物語るのではなかろうかと思います。こうしたサービスによって人と人の触れ合いということが起こるわ

けでございます。ただしそれは犠牲を伴うのです。

YMCAの本部があるのがスイスのジェノバ（ジュネーブ）でございます。ジュネーブという町は昔貧しい小さな町でございました。そこに戦争の被害者が町にたくさん押しかけてまいりました。難民でございます。この難民をジェノバの町の人々が受け入れるかどうか一日協議をいたしました。その結果受け入れたのでございます。受け入るに際して町の人全部が一日断食をしたのであります。断食をして難民を受け入れなければまずしい人々の生活に耐え得なかったのでありましょう。この断食をするというのが、これが犠牲でございましてサクリファイスでございます。サクリファイスというのは台風の被害を受けるという犠牲ではないのです。これはビクティブでございます。サクリファイスというのは選択肢のなかで、より困難な道を自分の意思で選びとることがサクリファイスでございまして、このサクリファイスがあってはじめて真実のサービスが成り立つのかとおもいます。このサクリファイスをしながら、なお、お互いに結ばれて一つの目的に向かって歩もうというのがアソシエーションでございます。YMCAはアソシエーション、ワイズメンはアソシエーション。これは単なる団体ではない。アソシエーションというのは一人一人が自覚的に世界のために、隣人のために、自分達の力をサクリファイスしながら高めようというそのグループがアソシエーションでございまして、それがワイズというものを作ってきたのではないかと申し上げたいわけでございます。いわばボランタリズムでございます。ボランタリズムというのは、枠の中にとどまるのではなく枠から外に出て行く、そのたくましいエネルギーをボランタリズムと呼ぶわけでございまして、一つの制約、制度、規則の中に終始するのではなくて、それを乗り越えて新しい時代を切り開きそれに対応していこうというその力、その意思、その努力をボランタリズムと呼ぶのでございまして、私はワイズメンというのはそのボランタリズムにかたく立っている団体であると理解をしております。

これからの課題はなにかということでございますけれども、沖縄で今度サミットで皆さんがいらっしゃった所ですけれど、石杖という所がありますね。石杖と書いて「いしじ」と読みますけれど石杖というのは沖縄戦で亡くなったすべての人、沖縄の人、台湾の人、韓国の人、敵兵のアメリカ人、英国人、そこで戦争で失われたすべての23万4000名の人を記念した石碑でございます。まさに石杖、平和の石杖でございます。私はこういう敵味方の恩讐を越えて、全体の人がそこでひとつ記念されるというのは世界に例が無いと思います。すばらしいものだと思いますが、これが私はボランタリズムの目標でなければならないだろうと。私どもは色々な意味で違いを持っております。ワイズメンの中でもクラブによって違いがありますし、あるいは、エイズのサービスをしていらっしゃるタイ。大きな違いがございます。その違いをお互いの触れ合いによって学び合い、それを理解し、お互いに信頼し、尊敬をしあって行動に移す、いわば異なった文化と文化とが接触をする事によって新しい文化を作り出す、英語にアカルチュレーションという言葉がございます。日本語でこれを「文化変容」と訳しますけれどもアカルチュレーションとはそういう意味でございます。文化と文化が接触して戦うのではないのです。文化と文化が触れ合ってお互いが学び合うことによってともに新しい一つの文化を作り出すという意味でございまして、湘南と沖縄が文化と文化を異にしながらなお一つのワイズメンを生み出して行く。そういう新しい時代でございまして、そうした新しい文化を生み出すアソシエーションというのは、私は21世紀に大きな課題と意味を持っていると確信をするのであります。

与えられた時間がまいりました。一つだけ加えさせていただきますと、長野のオリンピックでフィギュアーで15才のお嬢さんが金メダリストになりました。英雄のように報道されていました。リピンスキーというアメリカの15才のお嬢さんでございました。ファンがたくさん贈物を持ってまいります。みんな今はぬいぐるみだそうでございます。たくさんのぬいぐるみを貰いまして、そのぬいぐるみを持って病院の小児病棟にいってそこに寝ている子供たちに笑顔でぬいぐるみを配って歩いた。

同行した新聞記者やテレビのカメラマンに向かって15才のリピンスキーが「これは私のプライベートな行為ですから取材をしないでください」と頼みました。とうとう日本のメディアには一言も報ぜられなかったのでございます。私はこれが15才の少女の取りうる行動であることに驚きを覚えました。私ならぬいぐるみをもらったら持って帰って自慢をいたします。小児病棟に行ってお見舞いをしようという発想は出てこない。新聞に書き、テレビでオンしてくれれば美談でありますから喜

んでやってくれます。ところが15才のリピンスキーはそれをしなかったわけでございます。じつに積極的な行動なのです。しかし自己抑制、自己に対して実にきびしいですね。このバランス私はどういう家庭で育った少女だろうか、どういう地域があの少女を支えているのだろうかと思いました。このバランスがこれからの私どもにとって大きな課題なのではないかと思います。救世軍の司令官、山室軍平がこういう言葉を残しました。「船は海の水の上にいなければならない。船に水が入ってはならない」。社会、世界の中に入って行くということ、しかし、その私どもに水が入って沈没してはならないのでございまして、その均衡、そしてそれをいかに一つにしていくかということが私どもの使命を遂行していくことの大きな課題なのではございませんでしょうか。

（2000年9月10日　湘南・沖縄部部会　講演）

生　き　る　意　味

―21世紀における新しい福祉社会をつくりだすために―

横須賀基督教社会館館長　阿　部　志　郎

胸に小さな赤いマークをつけております。エイズの国際会議が日本に開かれました時に採用されたシンボルマークなのです。各国からみえた1万人の参加者、4千名のボランティア、そして市民の人々がこれを胸にいたしました。現在エイズ財団がこれをシンボルマークにしておりますので、時々このマークをつけた方にお目にかかることがあります。

第二次世界大戦の時、北欧のデンマークはドイツと戦い、そして破れました。ドイツの占領下に置かれたのです。ナチスドイツはドイツ国内にのみならず、ドイツが占領した国々で600万のユダヤ人を虐殺をしたという有名な話があります。デンマークを占領したドイツ軍も同じ命令を受けていたと思われます。その最初に命令をデンマーク国民に出しました。デンマークに在住するユダヤ人は必ず所定の赤いマークを胸につけなければいけない。マークをつけずに外出するものは即刻逮捕する。

その命令が実施に移される日の朝早く、コペンハーゲンにおられました王様が一人で馬に乗って町を散歩しました。コペンハーゲンの市民達は馬上の王様を見上げると、なんとデンマーク人の王様の胸に真っ赤なユダヤ人の印がついています。それを見たコペンハーゲンの市民たちが誰言うともなし自分から進んでユダヤ人のマークをつけ始めました。1週間出ですしてデンマーク全土の多くの国民が、自主的に恥の印であるユダヤ人の赤いマークを胸に帯びたのです。さすがのドイツ占領軍、これにはどうすることもできません。ドイツが占領した国々でユダヤ人が守られたのはデンマーク唯一国であります。その故事に習ってエイズの国際会議がこのマークをつくったのです。これは連帯の印です。連帯はただ仲良くしようという意味ではありません。

私は14年前に自分の町のJRの駅で階段を踏み外し、階段の縁に額を打ちつけました。出血が止まりませんのでやむをえず自分でダイヤルして救急車に来てもらって病院に運んでもらいました。そして12針縫いました。治療を受けている間、これから1週間ぐらいだめかな、予定をなんと言い訳して断ろうかと一生懸命考えておりました。手当てを終えてドクターが「今日はお休み下さい」と言われますので、「えっ、明日から働いていいですか」「ええ、結構ですよ、1週間後においでください」と言われますので1週間後にまた病院へ行きましたら、もう抜糸でした。いかに自分が若くて健康であるかを自信を持ったようなことがございました。

人間の身体はまことに神秘的なものなのです。一つの部分が傷を負って出血をしますと、身体中の何百億という細胞が力を合わせてこの血を止めようといたします。だから止まるのです。人間の身体には手のようによく働くと思われる部分、盲腸のようになくてもいいのではないかという部分があります。外から見えるところ、見えないところがあります。そのすべての部分が共に働いて、苦しみを共に担おうとするのが人間の身体なのです。有機体です。社会というのは身体と同じです。社会にはいろんな人がおります。みんな違うので

す。しかしその社会の中で苦しみを負う人がいれば、その苦しみを共に担いあう、これを連帯と申します。一つの身体の中で節々がお互いに支え合い助け合うこと、この連帯という思想を人類は2千年伝えてまいりました。このマークはその連帯のシンボルマークです。

今から42年前にマリアンヌちゃん事件という子供の事件が起こりました。父親がスウェーデン人、母親がアメリカ人の夫婦が日本に在住をし、マリアンヌという娘が1人おりました。不幸にして両親が亡くなりマリアンヌが1人とり残されました。制度によって養護施設という子供の施設で育つことになります。これに対してスウェーデンからマリアンヌを引き取りたいと申し出でがありました。話がどこでどうこじれたのか裁判になりました。参考人として出廷をしたスウェーデンの領事が申しました。スウェーデンには1人の孤児に対して養育を希望するボランティアが100名おります。その通りになりました。私がその言葉を忘れることができないのは、当時私どもの社会では100人の孤児に対して1人ボランティアがいるかいないかという時代であったからです。私のいます神奈川県で申しますと、子供の施設で生活をしている子供たちが1500名おりますが、里親に引き取られてそこで家庭的な生活を送っている子供は140名です。これが実情です。しかしスウェーデンには1人の孤児に100名のボランティアがいるのです。いったいどういう国かと思いました。

36年前に初めてスウェーデンに行き、三つのことに感心しました。町や村にたくさん子供の公園、遊ぶ広場があります。見ますとそれが全部違うのです。つくりが違い、遊具が違ってました。私どもの場合には、公園、幼稚園、保育所、どこへ行っても遊具は同じで、ブランコ、滑り台は大量生産をしていて鋼鉄製です。そして砂場はコンクリートでまわりを固めております。北海道から九州、沖縄に至るまで全部画一的に同じになってます。それがスウェーデンで違うのです。公園をつくるのに行政が金を出します。しかしそれを設計し、それをつくるのは地域の住民なのです。子供たちのために地域の大人たちが出てきて、自分たちで汗を流して遊具を作りますので遊具はすべて木製でした。

第2に町を歩いている若い夫婦が子供をはさんで手をつないで歩いてます。その子供の中にアジアの難民の子、黒人の子が少なくありません。スウェーデン人は大きな体をして真っ白な皮膚をした民族ですので、黒人の子を連れて歩くと目立ちます。その家族連れとすれ違う人が誰一人後を振り向かない、それに感心しました。今皆さんがこの福岡の街で、これだけ近代化された街で、黒人の子と手をつないで歩けばきっと人々は冷たい好奇心で振り向いて見ます。スウェーデンでは誰も振り向かない、当たり前の事だからでしょうか。

第3に電車に乗るのに切符を買いました。その切符にはさみを入れる改札がないのです。切符を持ったまま電車に乗ります。降りる時にその切符を渡す駅員がおりません。知っていれば私は切符を買わなかったかと思いますけれども、それなのにみんなきちんと切符を買って乗っているのです。

教育にオーナーシステムというのがあります。名誉を重んずる制度でしょう。試験をします時に先生が試験官として立ち合わない。生徒・学生だけで答案を書く。ヨーロッパでは普及してますけども日本ではほとんど行なわれません。生徒と先生、学生同士の信頼がなければ成り立たないのです。このシステムの社会的応用でしょうか、ヨーロッパにおいでになった方はよくご存じのように、例えばベルリンの地下鉄に改札はありません。ジェネバのバスに改札はありません。こういう国から、こういう背景を持った歴史の中からボランティアが育ち、福祉国家が生まれたのです。そしてこういう国々の中からデモクラシー・民主主義も芽を出しました。

民主主義に二つの原則があります。一つは最大多数の最大幸福という原則です。1人でも多くの人を幸福にしなければならない。ここから多数決という方法が生まれました。多数が賛成をしなければ物事を決めない多数決。ところが多数決で多数を取りますと、ともすると少数を抑圧し、横暴になるきらいがあります。もう一つの原則は、人間は1人以上にも1人以下にも数えられてはならないという原則なのです。福沢諭吉は「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」と表現しました。どんな人もあくまでも1人の人間である。ここから生まれた方法が1人1票主義であります。総理大臣のように権力がある人も、私のような庶民も同じ1票しか選挙では与えられない。平等の人間だからです。この少数、1人という存在を大事にするかどうか、ここに民主主義の価値が問われるのです。多数と少数とのバランスがちゃんととれなければ、成熟した民主主義ということはできま

せん。私どもの場合はどうだろうかと。

昭和33年に日本は初めてアメリカに車を輸出しました。30台小型車を持っていったのです。この車がハイウエーに乗れませんでした。ダッシュカがありませんでよたよた々入って危険でありました。高速に乗ってもすぐに故障したのです。実に評判が悪かったのです。このとき持っていった車がトヨペットです。アメリカでなんと言われたかというと、トイペットではないかと、おもちゃだと。こういって笑われたのです。この車に改良を加え、年とともに輸出台数を伸ばし、アメリカに1年240万台車を輸出する年がまいりました。飛ぶように売れます。あまり売れて、アメリカの自動車産業を脅かし貿易摩擦になりました。以来日本は輸出台数を自主規制をしてます。30台の評判の悪い車から、200万台の飛ぶように売れる車へと発展をするのに要した時間は20年でした。この20年という時間の短かさ、スピードの速さを経済成長の上にわざわざ「高度」とつけて表現をしてまいりました。20年という時間は短かすぎたのです。無理がおこるのです。矛盾が生じてまいります。それが今、私どもの社会に影を落としています。

日本は工業化に成功しましたから経済成長をすることができたのです。工業化するのにはいくつかの条件が必要です。外国から原料を運んで、それを入れる港湾を整備しなければなりません。そしてそれを工場で製品にして搬出する産業道路・高速道路・新幹線・航空機が必要になってまいります。鉄1トンに水10トンと申しますけれども、実際に車1台つくるのに100トン水がいるのです。この工業用水があるかどうか。工業用水がなくて工業化できないところがあります。代表は沖縄県です。しかし工業化するのになんといってもいちばん大きな条件は労働力で、働く人がいなければ工業は成り立ちません。日本の工業は、誰でもいいとは決していったことがありません。日本の工業が求めた3つの要件があります。

第1は若くて力があって長持ちする人。第2は教育を受けた人。第3は低賃金。この要件に該当するのが若年労働者、若い労働者。ここにもたくさん若い方がいらっしゃいますけれど、皆さん方はちょっと該当しないようであります。ちょっともう臺（とう）がたっていらっしゃいます。若年労働者は中学の新卒をいうのです。中学を出たばかりでこれから力を出し、いつまでも働いてくれる。

私は戦争中に造船所で働きました。不勉強にして青写真が読めませんでした。今でも青写真を私は読めません。今、工場で働いている人はみんな青写真が読めます。こういうのはアジアでは数えるほどしかないのです。教育程度はそこまで高まりました。そして中学の新卒ですから安く働いてくれます。この新卒を先を争って探したのです。工業のお膝元にいない。神奈川県で申しますと、京浜工業地帯ですけれど、毎年約7万人の新しい労働者を必要としました。ところが横浜が供給できた新卒は4千名でした。いないんです。なぜいないかというと、みんな高校にあがったからです。戦争前は義務教育の小学校を終えて中学に進学をした人は20％に達しませんでした。戦後、中学までが義務教育になり、だんだん々高校進学をはじめて現在96％です。この高校進学は経済成長とともに高まって、大都市圏、福岡のような大都市圏から始まっています。大都市圏とは工業圏です。足元に新卒がいない。やむをえず地方へと地方へとその新しい若年労働者を探しにまいりまして、集団就職というかたちで工業圏にきて働いてもらいました。いまその人達は中堅労働者です。この頃、この新卒のことを金の卵、月の石、ダイヤモンドと呼んで貴重品のように扱ったのです。なぜなら1人の中学の新卒に求人が平均20件あったからです。

この時とり残される子供がでました。それは障害児です。障害を持った子供は工場で働けないだけでなく学校に入れませんでした。少数者です。障害児が学校に入れるようになったのは昭和54年からです。戦後34年という長い時間を必要としたことを忘れることはできません。障害児を学校に入れなかった隠れた理由は、障害児が生産性がないからです。働く力がないからです。日本の社会が要求した人間像は労働能力を持ち、効率の高い人間でした。これが多数社会を形成しました。それからとり残される子供はかえりみられなかったのです。残念ながら私どもの社会はそうして少数者をないがしろにしてきた歴史をもってます。

ヨーロッパではじつは教会も、キリスト教の教会もまた少数でした。圧倒的多数の教会は国教会という国の制度による教会でした。これに対して少数のクリスチャンたちが自分たちの信仰を告白しました。これがプロテスタントという新教の教会をつくっていくのです。国教会は税金によってまかなわれる教会ですけれども、そうではなくて自分たちの自由な意思で、自分たちの努力で、自分たちの献金で教会をつくり、それを支えるのが

自由教会です。これをディセッティングトラディション、ディセッティングというのは申し立てる、抗議するのです。多数のマジョリティの教会に抗議を申し出ながら、そのプロテスタントの教会のいわば信教の自由を確保してまいりました。たいへんな弾圧を受けましたので、アメリカに多くの人々が植民をしていったのです。でもこうしてプロテスタントの教会がつくられ、そしてそれがだんだんマジョリティへと発展をするという歴史を持っています。この教会の伝統の中から、ボランタリズムがつくられてまいります。ボランティアの基礎になる思想です。そしてその関連でアソシエーションが形成されるのです。

YMCAのAはアソシエーションです。アソシエーションは想いを等しくするものが自分たちで集まって、自分たちで汗を流し、自分たちで金を出しあって一つの団体を維持していく。プロテスタントの伝統の中から生活協同組合が生まれ、農業協同組合が生まれ、労働組合が生まれ、各種の文化団体が育ち、そしてYMCAというアソシエーションが育ってきたのです。1844年にジョージ・ウイリアムズという人が12名の同志と一緒に集まって、一つの目的のためにYMCAをつくったのが最初でした。12名のクリスチャンの群れがYMCAをつくった、まさにアソシエーションでした。こういうヨーロッパ的な背景の中からYMCA運動が育ってきたのです。日本にも、もう明治の昔にYMCAがつくられ今日に至ってます。そのヨーロッパ的な理念に立つアソシエーション、クリスチャンアソシエーションであるYMCAが実際に働く場は、日本社会です。土壌は日本社会です。これはヨーロッパ社会とは歴史も文化も思想も異にする社会です。

私は先日、学童保育、というのは鍵っ子の子供たちですけども、50数名の鍵っ子の子供たちにこういう話をしました。友達が遊びにきた。お母さんがおやつを心配した。押入を探したけれど、お菓子がない。かんからの中にようやく1枚、お煎餅をお母さんが見つけた。それをくれた。「困るだろう、2人いるのにお煎餅1枚しかないんだよ、きみたちどうする」。「簡単だよ、お煎餅を手で2つに割ればいいんだよ」。「1枚のお煎餅を半分に割る、これを半分こというんだよ。ところが手でお煎餅を割るとどうしても大きいほうと小さいほうになってしまう。先生はね、子供の時いつも大きいほうを先に取って、小さいのを妹にやりました。妹にいやがられたのです。きみたちはそれをしてはだめ、君たちは半分こして大きい方を友達にあげなさい。そうすと友達は喜ぶよ、友達が喜んでくれたら君たちもうれしいだろ、半分こしようね」。

「アジアにバングラディッシュという国があります。貧しい国で収入は日本の165分の1しかありません。高い山のふもとにあって、雪解けの水が川を流れています。暖かい冬が来たり嵐が襲ってきたりすると川が氾濫をして洪水になります。毎年毎年洪水があります。去年大きな洪水があって、何万という人が家を洗い流されてしまいました。世界からたくさんのボランティアがそれを助けに行きました。日本からも行きました。そして救援物資をトラックに積んで現地に行きました。お米、お菓子、タオル、石けんなど1つの袋に入れてそれを配りました。それを子供たちが取りにきました。ずらっと一列に並んだ子供たちが1人1袋ずつもらいました。その袋を先生がもらったら、きっとくるっと後を向いて人にわからないようにそっと袋を開けておいしいお菓子を先に取ってしまいます。バングラディッシュの子供たち、誰一人袋をその場で開ける子がいません。みんな大事そうに抱えて帰りました。それは家族と分かち合うためです。君たちも、君たちの持っているいろんな才能があります。お菓子もあり勉強の道具もあり、みんな友達と分かち合いながら一緒に仲良くしてこうね」。こういう話をしたんです。

そのあとで何名かの父兄がまいりまして一緒にお茶を飲んだんですけども、こう言いました。「半分こという言葉は初めて聞きました、聞いたことありません。半分こした経験もありません」。聞きますと「親も子も一人っ子、半分こもしてないし、兄弟げんかした経験がない。第一、お菓子が家にないということはありえないですよ。今はもうたくさんどこの家にもお菓子が余るほどあります」。こういわれまして私は時代に遅れたのかなと思ったわけです。半分こが今日は死語、半分こする経験を今やお互いに持っていない、実に恵まれた豊かな社会に生活ができるようになりました。しかし日本の社会は昔は半分こしながら生きてきたのです。これが共同体です。家・村という共同体はみんな持てるものを相互に分かち合い扶助しながら貧しさに耐えてきたのです。アジア社会は今日でも共同体社会です。もう一つの特色はアジアの共同体は、それがヒンドゥであれジャイナであれイスラムであれ仏教であれキリスト教であれ宗教と不可分の関係においてアジアの共同体は成り立っ

てます。

さて、この共同体を私どもはどうしたか。私のおります神奈川県で鎮守の森が2850ありました。15年前に県が調査しましたら鎮守の森と呼べるのが42しかありません。2800あった鎮守の森が40になった。今、いくつあるかわかりません。それは鎮守の森をつぶして工場を建て、住宅に変え、駐車場にしたからです。そのおかげで経済が発展することができたのです。でも何か大事なものを失ってしまったのではないか。

西田哲学をつくられました西田幾多郎という大変有名な先生が、子供の頃食事をするたびに嘆異抄を暗唱させられたと書いておられます。これが昔の日本の家における宗教的訓練でした。どこの家にも仏壇があって、家族が朝か夕べの一時にそこに集まって一緒にお経を詠んだのです。家族が一つになり、自分を越える存在の前で等しくされ謙虚にされる場が家にありました。今、街を歩いていて、家族がお経をあげている声は聞こえなくなりました。仏壇は年とともに減って団地では仏壇の置き場所にさえ困ってます。伝統的な共同体をなくしました。否定をしました。伝統的共同体は古くて閉鎖的で前近代的だと否定をして壊したのです。いまや昔の家・村はありません。にもかかわらず大変興味深いことは、昔の共同体の習慣をそのまま私どもは守ってきてるのです。

お葬式に行きますときに香典を包みます。香典を持っていきますと香典返し、これを半返しと申しますけども、香典返しを頂戴するのです。今度こちらが香典を頂く時には、持っていった同額を頂戴するのが昔からのしきたりなのです。結婚式に招かれますとお祝金を包みます。すると引出物を頂くのです。必ずお返しがあります。昔は手間返しといいまして、田植えを手伝いますと刈取は手伝ってもらう。お返しをしながらきたのです。この習慣を私どもは残しました。これを互酬制といい、互いに報酬の酬、報い合う。今でもお中元、お歳暮、やりとりは非常に盛んでして、デパートはそれでもっているといわれているのです。葬式、結婚式にお金を包む習慣はヨーロッパ、アメリカには全くありません。共同体の崩壊とともになくなりました。私どもは共同体を壊したのに、その生活習慣だけは今日なお続けているというのは、極めて日本的な特色なのです。

こうした互酬の上に立って新しいボランティア活動がおこってまいりました。COOP（生活協同組合）、JA（農業協同組合）、労働組合、在宅の各種の福祉サービスグループ、あるいは今、堀田さんという法務省にいらした方がさわやか運動という時間貯蓄制をしてます。時間貯蓄制は、例えば20時間老人の介護をしますと、それは貯金しときまして、自分が介護を必要とするときにまた20時間分返していただく相互扶助のシステムですが、これは生協なら生協という限られた会員の中の助け合い、助けられるときには一定金額を負担し、助けた人はそれに見合う手当てをいただく。特定の会員の中ですので、いわばそれは互酬の延長です。今、澎湃（ほうはい）としてこうした運動が起こっているのです。これが将来どうなっていくのかが、これからの課題になってまいります。

こうした互酬に立つ有償ボランティアグループが大変増えているのですけど、しかし、みますとこのグループも友愛共同の精神に立って成されてます。そして、自分の自発的な意志によって自主的なサービスが行なわれているのです。有償ですからいくらかの手当てがでますけれども、それは労働の対価ではありません。すなわち営利事業ではないという意味においてこれは新しい、私はボランティア活動だろうと考えてます。こういう活動がこれからどうなっていくかということです。奥尻の災害の時に老人ホームで1人のお年寄りが義援金を持ってみえました。こう言われたのです。「私は関東大震災で助けられました。これはお返しです。北海道に届けてください」。注目すべき事はお返しが70年後です。そしてそのお返しが助けてくれた当事者にではなく、見ず知らずの第3者に向けられたことだと思います。互酬、お返しが見ず知らずの第3者に広がっていくゆく可能性がそこに示されるのです。

ここに赤い手帳を持ってます。これは昔の献血手帳です。血液は今から32年前まで売血でした。血を売って、買って、それを供給したのです。ライシャワー事件が起こり肝炎の問題が起こり、日本は献血制度に切り替えた時にこの手帳をつくりました。この手帳を見ますとこう書いてあるのです。「あなたが献血した同量を、あなた、あるいはあなたのご家族が必要とする時には優先的に確保します」。私が400cc献血をしますと、私が交通事故を起こしたときにまず400ccは先に返してくれるのです。見返りがあるのです。互酬に立って、この献血制度が普及をしました。今、皆さんがお持ちの献血手帳はこれとは違い、こういう鮮やかな

色をした、しかも薄い手帳です。今、皆さんが手にしていらっしゃるこの献血手帳には、皆さんが献血した血液を皆さんにお返ししますという約束は一言も書いてありません。まったく一方的に血を捧げるという制度になっているのです。この献血が始まるまで、毎年420万の人が血を売りまして、中にはそれによって生計をたてる人々が多くおられました。その頃、血を捧げる献血をした方は1年に7万人です。今何の見返りもない、お返しがないのに献血をしておられる方が720万人です。7万人から30年の間に700万人と数が増加をしてきたという、まことに輝かしい記録がつくられています。

郵便局にボランティア貯金があります。普通預金の利息の20%を寄付するのです。NGO、日本から海外にボランティア活動される方々のためにそのお金が寄付をされています。まったくの寄付です。このボランティア貯金に今加入をしている方が2400万件になりました。ボランティアが、あるいはボランティアを支援する人々の数が次から次へと増えてまして、見返りのある互酬という時代を越えて、まったく見ず知らずの者同志が連帯をしていこうという考え方が広がってきているのです。これを推し進めていくのがこれからのYMCAの任務です。特定の人の助け合い、支え合いを見ず知らずの市民の中へと広げていく。YMCAはマイノリティを守るために始まった運動でした。マイノリティを擁護しながら、なおかつマジョリティの市民へとこの運動を広げていこうというのがYMCAの思想でした。50年その試みをしてまいりました。その50年の歴史に立って、新しいこれからの50年を目指してYMCAが歩んでいこうとしているわけであります。

これからの歩みを考えますとYMCAに求められる態度が四つございます。第1はYMCAは社会より一歩遅れて歩むことです。社会がとり残した問題、そこに置き忘れられたマイノリティを共に働きながら、それをマジョリティへと導いていくのがYMCAの働きでして、時代・社会から一歩遅れて歩まなければなりません。

難民定住促進センターというのがあります。この定住促進センターに入っている難民の子供たちが近所の学校に通います。小学校6年生のベトナムの女の子が自分の行っている学校の運動会で校庭を何周か回るマラソンに出ました。走るのが苦手なのか後ろの方を走ってました。前を走っている同級生の日本の子が転んだのです。そしたらベトナムの子がそこに走り寄って、その子が立ち上がるのを待ちました。立ち上がるとその2人の子が一緒に走りだしました。さらに前を走っている同級生の女の子が転んだ、うずくまって泣きだした、立ち上がろうとしないのを見た後ろからきたベトナムの子が、またそこに走り寄って手を差し伸べてその子供を友達を助け起こして、両手で両側に友達と手をつないで走り始めまして、見事ゴールインしました。びりでした。担任の先生がそのベトナムの子に「これは競走なんだから助けなくていいんだよ」と教えたのです。そしたらベトナムの子が「助ける、なぜ悪い」、先生に食ってかかりました。ベトナムの子にとって、戦火のベトナムで家族・仲間と命からがら逃げ出し、みすぼらしい船に乗せられ水も食物もないまま、何日も何日も海の上を漂流したあげく、日本船に助けられて定住促進センターに送られてきたのです。仲間と助け合うことなしには生き延びることができない経験が「助ける、なぜ悪い」という言葉になってほとばしり出たに違いありません。私どもはもはや「助ける、なぜ悪い」という叫び声を出す体験を持っていないのです。でも助け合うことなしに私どもは生きることはできないのです。これをYMCAがこれからの社会に、これからの人々にどう伝えていくのかが第1の道です。

第2は社会よりも一歩先んじて、一歩先を読む、この態度が必要になってまいります。先程ご挨拶なさった末永理事長が、末永理事長のお宅に九州交響楽団のリハーサルホールをおつくりになったんです。これがまことに素晴らしいホールで、海外の指揮者たちが絶賛しました。これをモデルにして大阪にホールができ、京都にホールができ、横浜にホールができるという具合に普及をしてきています。開拓者、先駆者です。一歩先に歩む、それは先駆するということです。先駆することは1人で孤立することではありません。一歩先に歩めば人々がその後をついて歩いてくるというモデルを示さなければならないのです。

私は今から41年前に瀬戸内海の余島で神戸YMCAがしました肢体不自由児のキャンプに参加をしました。3年夏続けて参加をしました。これが日本最初の肢体不自由児のキャンプでした。このキャンプから京都YMCAが、東京YMCAが同じキャンプを始め、今、日本全国でYMCAはもちろんでございますけれど、いろいろの団体が障害児のキャン

プを実施をしているのでして、YMCAが最初の一歩を印したのです。私のところでもその経験から脳性小児麻痺の子供たちの仕事を最初にいたしました。こういうふうに先駆の仕事、一歩先を歩む仕事がだんだん、だんだんと厚みを増し、波紋を広げていくことが起こるならば、それは開拓者としての新しい喜びでございましょう。

第3の道は時代に逆らって、という道です。日本における福祉施設、子供の施設の最初はアルメイダが大分に建てた施設です。ヨーロッパ的な施設を初めてアルメイダは日本でつくりました。この施設に対してごうごうたる非難が巻き起こったのです。それは、武士の子、町民の子、農民の子をまったく分け隔てなく一緒に子供を育てたからです。身分制の厳しい時代で、武士の子は武士の子だけ、町人の子とは口を聞かないという時代の中で、武士であろうと農民であろうと子供は子供として一緒にアルメイダが育てましたので大変な非難を浴びたのです。しかしアルメイダは自分の信念に従って仕事をしました。これが今日の福祉の理念を形づくったのです。社会に逆らってでも、自分が正しいと思うことはそれを実行する、これがアソシエーションなのです。アソシエーションは一つの理想を掲げて、一つの目的を持って、これに共鳴する同志が一緒に歩いていく、それは社会から反対を受けてもなお、その道を歩むことでなければならないのです。

第4は社会と共に、ということです。社会と共に歩んでゆく。医師、弁護士、牧師、三つとも師（士）がつきます。医師、弁護士、牧師、この三つの職業には共通点があるとヨーロッパで申します。この三つの職業は高い学歴が要求されます。大学を出ませんとなれない職業なのです。そして社会的信用があり、社会から尊敬を受ける職業です。もう一つ共通点があるのです。それは弱さを担うのです。人間の持つ、肉体的、精神的、社会的な弱さを担う職業なのです。弱さを担いますと、弱さにつけこむことができます。弱さを利用することもできます。弱さを商売にすることもできるのです。最近起こった汚職事件はそれでございましょう。食い物にする。それをしてはならない高い倫理がこの職業に求められるのです。YMCAはその弱さを担って、弱さと共に歩むのです。聖書には、強い人は強くない人の弱さを担わなければならない、自分だけを喜ばせてはならないと書いてあります。人間の強さとは何か、人間の弱さとは何か、これがはっきり分かりませんのが今日の教育でございまして、教育に人間の強さとは何か、弱さとは何かという考え方が欠落をしてます。聖書では人間の強さは、人を押し退けて、踏み台にして立つ、それが強さなのではない、弱さを担うところに真実の人間の強さがあると私どもに示しております。福祉の専門学校が創立をして10周年、福祉の専門学校、それは弱さを担う人をそこで育てるのです。専門学校の目的は弱さを担うことです。その人材を養成する学校です。YMCA、それは弱さを担ってゆかなければならないのであります。

1980年代に不確実性の時代が登場してまいりました。本はベストセラーでした。社会があまりにも変化をしました。変わっていくもんですから先が読めないのです。それどころか自分の立っている足元さえおぼつかない状況にあることを自覚させられました。金融不安が起こり、組織犯罪が起こり、低成長になり、津波がきて、火山が噴火して、大地震がきて、様々の不安が連続して私どもを見舞っております。こういう不確実で、不安定で、不透明な状況に立たされた私どもが選んだ道が三つあります。

第1は現世幸福主義、幸福になりたい。第2がマイホーム主義、マイホームにたてこもるということ。この正月三が日に初詣をなさった方々が8700万おられまして記録でした。3人に2人の方は初詣に行ってらっしゃる。初詣に行って色々願をかけます。安心立命、家内安全、商売繁盛、無病息災、子供の県立大学入学と様々の願い事をもって初詣に行くのです。その願いが多いわりにはあまりお賽銭出していらっしゃらないようです。先日ある神社へ行きましたら受験生でしょうけども、合格させてくれれば賽銭を出しますという絵馬がかかっておりました。取引をしています。これらの願い事は自分と自分の家族の幸せを願うのです。このときに人の幸福を願い、世界の平和を祈れる方がどれだけおられるのか。今、国民の関心事は家族の健康、子供の教育、自分の老後、この3つにしぼられてまいりました。それは、自分と家族の幸せを願う表れです。そしてますますマイホーム主義の中に閉じこもってくる。ある精神医学者はこれを要塞家族と呼んでいます。自分の家族の周りに砦を築いて、人は入れない、自分も外に出て行こうとしない。

もう一つは、制度、行政への依存です。税金を納めているのだから何でも行政でやれという主張

です。家の前のどぶが詰まった、役所に電話してどぶさらいをしろと。今でも自治体の中にはすぐやる課があり、すぐに飛んできてやってくれるところがあります。何でも行政に依存をして、自分は腕をこまねいて要求するだけという態度がだんだん強くなってきたのです。

そこに2年前、1月17日、阪神淡路大震災が襲ってまいりました。最愛の家族を亡くし一瞬にして築いてきた財産を失いました。だんだん神戸の街は復興してまいりましたけれども、今神戸で困っています問題はアル中の増加です。仮設住宅で孤独死された方が120名おられ、その中のお1人は10ヵ月見つかりませんでした。自殺をした方が40名おられます。老人クラブの調査では今だに8割の方が心身が不調で戻らないと訴えているのです。孤独死された方の6割の方が肝臓を痛めておりました。大地震によって生活の目標を喪失をしました。そして生きる意味を見いだすことができないのです。こういう人々がたくさんおられるのです。これはひとり、神戸の人々の問題ではなく、実は今日の私どもの問題なのではないのか。あまりの豊かさに、飽食のゆえに、生きる意味を失ってきたのが私どもの現実ではなかろうかと思います。

しかしそうした中で、新しい人生を私どもは探そうとしているのです。10年ほど前から聞き慣れない言葉が次から次へと私どもの前に投げ出されてます。（いわく、申し訳ありません、手話通訳泣かせなのです）男女産分け、胎児チェック、体外受精、冷凍受精、代理出産、遺伝子組み替え、脳死、臓器移植、安楽死、尊厳死、インフォームドコンセプト。今まで知らない言葉が次から次へと登場しています。ご注意いただきたいのは、そのどれ一つとして解決してません。解決できないのです。これらの問題は、いかに生まれ、いかに生き、いかに老い、いかに死ぬかという問題で、人生80年になって、混迷を続けて、分からないのです。しかしそれは、新しい生き方を私どもが求めている表れでもあります。今までは1日でも長く生きたい、少しでも豊かに生きたいと願ってまいりました。しかし人生80年になって、老人問題が起こり、命を植物状態で長らえることにどれだけの意義があるのだろうか、長くただ生きるだけでは満足できなくなったのです。今、私どもが求めているのは、生きるからにはより良く生きたい、ただ生存をするのでは意味がない、実存的に生きたいという欲求です。この新しい生き方、新しい意味をこれからのYMCAは私どもに提示していかなければならないのではないかと思うのであります。

一昔前にはやったキャッチフレーズがあります。家付き、カー付き、ばば抜きという言葉で、社会に進出をしていく若い近代的女性像を描こうとしたのです。家付き、カー付き、結婚をする相手は持ち家があること、車を持っていること、同時に姑のいないこと、長男はご免ということでした。家付き、カー付き、家、車という、それは物を大事にするのです。ばば抜き、人間否定です。物を大事にして人間を軽視するのが実は今日の問題なのです。今日の社会、また明日の社会はますます非人間化されてまいります。駅でキップを買うのにお金を入れて券売機でキップを買います。あの機械が出回り始めました頃、お金を入れてもなかなかキップが出ないことがあったのです。キップが出ませんので駅員にキップが出ませんと言うと何と言われたか。「本当にお金を入れましたか」。発達をしていく機械は私どもが信用するのです。でも人と人の間はますます溝を深めていくのが今日の社会です。

今やインターネットですが、大きな企業ではイントラネットになってます。イントラネットとは社員の机すべてにパソコンが置かれてます。隣同士、話をしないのです。全部パソコンで意志を伝えるのです。そうすると隣だけでなしに全部にそれが伝わっていくという、こういうシステムが今、だんだん々広がってきてまして、会話をしない、すべて機械でそれをやってもらうことです。今日の時代の特色は手間を省くことです。手間をかけない、なるべく機械で取って代わってもらう、そのほうがはるかに効率がいい。だんだん人と人の間の会話、話し合いも消滅をしてまいります。YMCAは手間を省く社会の中で、できるだけ手間をかける運動なのです。YMCAは機械にではなく人間にあくまでもこだわります。そして人と人のふれあいを大切にするのがYMCAなのです。人と人がふれあっていく、そのことなくしてYMCAの命はないのです。

アメリカの視覚障害児、目の見えない子供の施設にまいりましたら、玄関に大きな写真が掛けてあります。2人の小学校1年か2年の男の子の写真です。1人の子がもう1人の子の肩を抱いて耳元でほほ笑みを浮かべながら何か話しています。それを聞いているもう1人の子が少し高いところを向いてにこっと笑ってそれを受けています。かわいらし

い写真でした。白人と黒人の子供、2人とも視覚障害、目の見えない子供でした。その下に字が書いてありましたので、近づいてその字を見ました。簡単な言葉でした。The blind are also color blind. と書いてあります。blind目の見えない人は、color白い色も見分けることができない、こう書いてあります。生れながら目の見えない方は色の判別ができないだけでなく、見えることがどういうことかよくお分りにならないのです。だから目の見えない人は色の識別ができない、当たり前のことです。その当たり前のことがなぜ書いてあるのかと思って、私はふと立ち止まって考えたのです。はっとしたのはcolorという字です。color、私にとってはそれはこの赤いというこの色がcolorです。しかしアメリカには特別の意味があり、colorというと皮膚の色を指すのです。皮膚の色が白いか、黄色いか、黒いか。中でも黒人をcolored、色の付いた人と軽蔑をし、差別をしてまいりましたことに今日のアメリカは苦悩しています。2人の白人と黒人の子供が目が見えないがゆえに、相手の皮膚の色の見分けがつかない、肩を抱き合ってにっこり笑っていられるという意味だと了解をしました。

私は目が見えます。目が見えると、つい見なくていいものを見たいのです。見てはいけないものを見たいのです。それでいながら本当に見なければならないものを見る目がないのです。目の見えない方は、相手が誰であろうとその人の人格の深みに降りて行く可能性を与えられるのです。人と人のふれあいは、力のある者が力のない者に対して何かをすることではございません。私のように肉眼は見えても心眼の見えない者と、肉の目は見えなくても心の目が見える人とがふれあうことによって、お互いの魂の目を開き合う、これがふれあいであり、出会いであります。YMCAはその出会いの場です。

阪神大震災の翌週に私は神戸へまいりました。福岡YMCAからもたくさんのボランティアが神戸へまいりました。雨が降っておりました。たくさんの若いボランティアたちが働いてます。そのボランティアたちが雨の中、自分の体を雨に濡らしながら、救済物資だけは濡らすまいと、ひたすらかばいながら避難所に運んでいる姿に感動しました。これが無関心、無責任、無気力と言われている青年の実像なのか、私はそこに優しさを見ました。優しいという字は憂いに人が関わると書きます。憂いを分かち合い、苦しみを共有することによって優しさが生まれ育つのです。なのに今の私どもの社会は、優しいという字をもう一つの呼び方をいたします。それは優等の優という字でして、戦後社会が求めてきたのは優等生です。効率の高い、生産力のある、優秀な人間を社会が必要としてまいりました。それを大事にしました。しかし、新しい時代、それは心に優しさを持つ人が担わなければならない社会なのではないか。YMCAはその人間の持つ暖かさ、優しさを育ててゆく運動であり団体であります。

特別養護老人ホームで1人の老人が亡くなられました。そのご老人が寮母に亡くなる前こう言ったのです。「このつぎ生まれ変わるときには世話をする人になりたい」。6年間世話になってきたご老人の切実な遺言です。今度生まれ変わったら私が世話をするよと。人と人がふれあい、人が人を助け、人が人に仕え、人と人が共に生きる、それは何という喜びであり、人間的光栄なのではありませんでしょうか。

（1997年2月22日　福岡YMCA創立50周年　記念講演）

分かち合う姿こそボランティア

東京YMCA総主事　井　口　　延
（東京多摩クラブ）

YMCAは来年、創立150周年を迎えて、その発祥の地であるロンドンで記念の世界同盟総会が開催されることとなっておりますことは、既にご案内の通りであります。近年は東ヨーロッパの諸国にもYMCAの復活が伝えられて、世界で130ケ国もが世界同盟に加盟、準加盟、登録をしております。イギリスの片田舎、小さなダンバートン村からロンドンに出て来た一青年とその仲間11名からなるグループがこのように世界最大の青少年団体までに成長するとは、その時誰れが想像したでしょうか。YMCAがここまで多くの人に受け入れられ、成長した秘密の一つは、キーワードで言えば「ボランティア」であると思います。YMCAは世界でも有数のボランティア団体であります。

先日、朝日新聞の天声人語に「ボランティア」にあたる日本語がなかなか見つからない、どうもピッタリした言葉が日本語には無いのではないかということが出ていました。

ボランティアを日本語に置き換えると「奉仕」とか「犠牲」とか「有志」とかでなにか「ただ働き」といったイメージやら、何かを「してあげる」という上から下への「お情け」「おめぐみ」というニュアンスが含まれてしまって、本来の「ボランティア」からは遠くなってしまうというのです。

私は「ボランティア」とは人間を人間たらしめている、人間の本来的なものであって、時間やお金のある人が、余裕をもってするものではないと考えております。どんなに時間やお金がない人でも、なんとかやりくりしなから行うもので、そこから「生きる喜び」が与えられるものであると考えています。「共に生きる」という言葉もよく使われていますが、喜びも悲しみも共に「分かち合う」ことこそ人間本来の姿であり、人に生き甲斐を与えるものだと思います。その意味で「ボランティア」は何か人に「してあげる」ものではなく「させていただく」ものなのでしょう。子育ての理念で「人に迷惑をかけない人になって欲しい」という親の言葉を耳にすることがありますが、果たして人は本当に他人に迷惑をかけないで生きてゆけるのでしょうか。「人に迷惑をかけない」という言葉の中には、「自分も人から迷惑をかけられたくない」という言葉も含まれているように思います。マザーテレサは「愛」の反対語は「憎しみ」ではなくて「無関心」であると言っていますが、「他人に迷惑をかけず、迷惑をかけられない人」は少しずつ人に無関心になってしまう。つまり人を愛することが出来ない人になってしまうのではないでしょうか。

私達は申し訳ないけれども人の迷惑になりながら、また同時に人のめんどうも見ながら共に生きていきたいものであります。

最近、私は「多摩いのちの電話」のボランティアをすることになり、財務を担当しています。困難で貧しい財政ですが、地域の人々に支えられていることを実感させられています。バザーに参加して、汗を流して荷物を運び、声をからして売り子をすることから、大きな「満足」と「幸せ」を与えられています。一橋大学の金子柳容教授によれば「ボランティア」は「バルネラブル」（「傷つきやすい」「危うい」）という言葉と関係があるようです。あえて自分自身「冒険」と思われるような場に「危うい」立場においてこそ初めて発見することの出来る大切なものがあるのではないでしょうか。

（京都キャピタルクラブ　1993年12月号会報）

クラブ・ライフは誰の為にあるか

（南東部EMCシンポジウムとの関連で）

一　瀬　齊　男
（横浜とつかクラブ）

南東部のEMCを担当して、自分の所属クラブと部所属の他クラブを比較する機会を得た。丁度海外に出た人が海外と日本を比較してどこが弱いか、どこが良いかが分かるように。

まず、最初に古くて新しい問題としてEMCは捉えられるべきである事。これは誰も異存があるまい。昨年召天された東京山手クラブの小山（おやま）五郎ワイズ、医師で社会福祉法人や医療法人の理事長を勤め、またワイズにも献身的奉仕をされた畏敬するワイズの先輩であるが、日本区から発行された「日本ワイズメン運動史II」の210ページに「新しいクラブの誕生を！」という表題でアピールされている。この最初の一節を是非読み直して頂きたい。これは皮肉ではなく、如何にEMCを日常のテーマとして日に心新たにしていかなければならないかという思いを持って記されている。

横浜とつかクラブではチャーターの際、初代会長の加藤ワイズよりチャーターメンバー全員にこのワイズ運動史IとIIを記念に頂戴した。ワイズの新人メンバーにこのようにワイズの歴史と伝統を学んで欲しいとは口では言っても、実行してくれるワイズ先輩は少ない。この貴重な機会を活かすか活かさないかは我々の選択であり、責任でもある。

“東京山手（今年創立42年）の25周年記念式典は1978年10月10日だった。当日奈良信君の挨拶に、山手は昔は若くて溌剌、東のホープだったのが、中年になってややショボクレてきた。然し25周年を機会に心機一転。大いに若返りますと述べていた事。それから10年、若手も加わって当時20名のメンバーが36名まで増え活気を取り戻したかにみえたが10年経つとやはりメンバーも10歳齢をとります……。”この至極当然の事を私たちは時として忘れている。

クラブを構成するメンバーの背景は様々、だからこそ清新なクラブ・ライフも有り得る。考え方が皆同一となったら何の変哲もない面白みのないクラブとなってしまう。クラブ・カラーとはそういうものではなくて、多種多様な人で構成されている事がクラブ・カラーを多彩にし、思い新たにしてくれるオアシスとなり、収穫の多いクラブ・ライフと言える。異文化社会と同じく、慣れるまで疲れるかも知れない。しかし疲れ甲斐のあるワイズ生活と言える。

1）クラブ会費だけ納入し、出席しない人

この人はクラブに魅力を感じていない。出席するより他にやりたい事のある人といったら言い過ぎだろうか。クラブに責任があるとは言えないだろうか。

先日のシンポで東京まちだクラブ（創立4年）の新クラブ展開計画が示された。YMの会館移動に伴い玉川学園クラブ（仮称）を新しく作ろうというもの。今年1月から10月まで新年会、日本区大会、合同納涼会を除いて7回の例会全部にスピーカーを用意している。11月もゲストスピーカーを用意されている。この努力は評価されるべきではないだろうか。このようなクラブならメンバーも自分の尊敬している人を卓話者に紹介しなければ申し訳ないという気にもなるのではないだろうか。

どのクラブも、交際範囲の広い、人脈の広い友人を持つワイズ、珍しいまたは視野の広い職業経験を持つワイズはクラブの内外に大勢いる。ワイズの中の役職ではなく、個人としてメンバーは参加している。もっと個人を大切にするプログラム構成が必要に思う。クラブに魅力を感じなくなった人はクラブというより、構成人員に関心を持ったらどうだろうか。この人の職業背景は、人生観は、家族的背景は、あまり立ち入らない範囲で知ろうとする。例会に来ない人に何回も電話するよりも、「私はあなたにクラブで話して欲しい」との意志表示のほうが人を動かす。

例会の後、いつも同じ方向に一諸に帰るメンバーがいる。その人の友人の話として聞いているが、同じ職業分野の人の発明、発見の苦労話は、私には例会のテーマよりも楽しく私の視野を広げてくれる。そして、一人になった道すがら、今日も気分転換が出来た、ありがたいと思う。

2）クラブ・メンバーは質か、量か。

クラブは1名では成り立たない。常に複数が必要。クラブ新設では最低20名は越さないとリジョンとして国際にチャーター申請は出来ないと言われる。ワイズは企業組織ではないので、会長の指令一下で動き出す集団ではない。一騎当千は言えない。それより集う要素が必要でそれなりの魅力を作り出す。魅力のないプログラムをやっているクラブは意味が乏しい。誰の感ずる魅力かと言えば、それは幹部が感ずるそれではなく、一般メンバーの感ずるそれであるとすれば、自己満足的ではなく、メンバーに奉仕する姿勢が貴重なものとなる。シンポジウムでも例会が大事。例会が充実しているクラブはよく準備されている。よく準備されるためには役員会が大切。役員会が成功するためには委員会で十分検討される必要がある。との声が出た。EMCシンポジウムでありながら、あるクラブからは6名、5名と出席され、各クラブとも問題意識と強い関心を持って対応しておられるとお見受けした。

3）マンネリ克服の為に

変化と刺激が必要。ワイズの海外大会や国内の他の地域の部会へのゲスト参加、他クラブへのメイキャップ出席なども薦められる。自クラブでの参加報告はクラブ運営に彩りを増し活性化につながる。メイキャップは、クラブ例会に出られなかった際のメンバー出席率算定に寄与する目的が本来であるが、この発想を転換し、自クラブの活性化とマンネリ脱出のためにメンバーの他クラブへのメイキャップ出席をお薦めしたい。これはEMCのオーソドックスな方法論ではなく、よそのクラブ会長さんからお叱りを頂戴するかも知れないがEMCに結び付くすべての方策を動員する意味では役立つ。

結果としてクラブの淘汰現象が起きるかも知れない。メンバーの自然減少による淘汰を免れるためには、ブリテンを工夫し、例会のメインテーマである卓話を充実させ、またスピーカー紹介を上手に記載し、魅力的な例会構成を工夫することで、逆に他クラブからのメイキャップ、転会、その延長線上に更に新会員を増やせるかもしれない。メイキャップ、転会はトータル的に6000達成には直接貢献しない。しかし淘汰されまいとする努力はお互いのクラブ運営の切瑳琢磨につながり、ダイナミックな新しい視点のクラブが出来、結果としてワイズ全体が燃え上がり、6000メンバー達成も夢では無くなる期待も持てる。

クラブの生存競争に生き残れない要素を持つクラブは、放っておいても自然消滅する。それが克服できなければ、活気あるクラブへの吸収合併しか残された道はないかもしれない。1995～1996ワイズ年度も前半期も終え、間もなく後半期に入ろうとしている。前半期に新人を確保出来たクラブはその理由を考えよう。偶然な転会なら後半期には是非新人獲得を目指そう。生き残り対策はこれをした方が良い、あれをしたらどうでしょうと助言されて講ずるものではなく、自分自身で知恵を絞り、汗を流して学習し、生き残りから繁栄への道を模索発見すべきでは無いだろうか。その点では企業の生き残りと同様と思う。経営経験が少なければコンサルタントが必要かもしれない。しかし、選択は己のする事であって、選択しない、また誤れば倒産となる。

ある南東部のクラブで「開かれたクラブ、奉仕する例会」を会長標語に掲げているクラブがある。クラブの中での、コップの中での問題意識ではなくて、クラブの外を意識し、新しい血（新人だけでなく、内部の発言を含めて）を求める認識、新しいメンバーを呼び込む貢献を意図する例会を考えているクラブとして敬意を表したい。

高齢化時代を迎えて全体的に平均年齢が上昇している。若い世代は先輩世代への理解が十分か。年配世代は若い世代を経験しているが、2～30年前の経験で現代の若い世代とは異なる。以前新聞の調査で、年齢差による相互理解の容易さの％が出ていた。集計は年長者の年少者への理解の度合いが年少者の年長者への理解より多かった。親の世代と子の世代ではどちらがお互いを理解しやすいかと言い替えて保護者と生徒間の対話の必要性を強調した事がある。どのクラブも内部的な、また、世代間のコミュニケーションを欠いているクラブが多い印象を持つと言ったらこれまたお叱りを頂くだろうか。

（横浜とつかクラブ　1995年12月号会報）

やあ、やあ　ワイズは良き友仲間！

一　瀬　齊　男
（横浜とつかクラブ）

南東部ソングは「いつでも、どこでも、笑顔と握手。ヤアヤアワイズのよき友仲間。強くて固い、奉仕のきずな、ワイワイワイズは、世界の南東部」で歌い始まる。部の再編成で北東部、東部、南東部が5部に再分割される。この馴染みの深いリズミカルで活気に溢れた南東部ソングはどの部に引き継がれるのだろうか。

この部再編成は既定の方針であって、現在は95－96年度小山部長、96－97年度小原次期部長、97－98年度、部の再編成による5部となり、南東部現14クラブは、4クラブ（世田谷、目黒、東京南、まちだ）は他の北東部の4クラブと合同し新しい8クラブとなり、他の4クラブ（山手、サンライズ、東京西、武蔵野）は北東部2クラブ、東部3クラブと合同し新しい9クラブとなり、残りの6クラブ（横浜、横浜ノース、鎌倉、横浜とつか、那覇、沖縄しぃーさぁー）で単独部を作る。

果してこれで、私はあえてワイズは生き残れるかとは言わない。ワイズは新生出来るだろうか、強力になるだろうか。私はこのブリテンの95年12月号に「クラブ・ライフは誰の為にあるか＝南東部EMCシンポジウムとの関連で」と題して書かせて頂いた。ブリテンエディターは気を使って下さって「辛口だがご意見をお寄せ下さい」と編集後記に書いて下さった。書かせて頂いた事は特に横浜とつかクラブについてではなく一般論も多かったが、正しく私はブリテンに書かせて頂いた以上、クラブ・メンバーからの反応を頂きたかった。

クラブの事業を推進するのは決して会長だけでなく、また副会長、書記・会計さんだけでなく、多くは各事業委員長の役割でもある。ワイズは会長の指揮のもと全員が一丸となって目標を達成する為にまとまる事は普通ではない。むしろ私のささやかな経験では、79－80年度に日本区のYMCAサービス事業主任に推された時、当時の日本区理事からはどうやって欲しいとは言われなかった。

今回の南東部EMC事業主査就任の場合、南東部長からは直接話はなく、クラブの加藤利榮会長（当時）から次期小山南東部長から部のEMC担当を「横浜とつか」から出して欲しいとの事で話があり、任期前の95年3月4日に95－96年度南東部役員会が招集され部長から「まずやろう、理屈はあと」の部長標語が紹介され、その趣旨の説明があり、「部役員の任務の確認」として「前期の主査との連携プレーで」との主旨のお勧めがあっただけで後は部則、部再編成、年間主要日程の提示があった程度。

ワイズでは、一番大事なのはクラブ会長であり、クラブの生命を握っている。部役員、日本区役員は皆会長経験のある事が選考の要件とされているが、これは会長経験の重要性を意味している。そしてその会長を支えるクラブ役員（ワイズではクラブ4役のほかに事業委員長も会長を補佐する上で重要な役割を担う。BFにせよ、CSにせよ、EMCにせよ）クラブのメンバー全員がお役を分担する事も会長を扶ける意味を持つ。

だから会長は自分ですべての責任を負う立場ではなく、事業委員長が動かない場合、クラブのその分野の機能は会長が職業上多忙過ぎる場合、会長は委員長を代行出来ないので停止してしまう。前出の日本区役員、部役員の場合がそうであるように、クラブ役員も会長の指示を待たず、むしろ自分で判断、企画して、次の事務会（役員会、第二例会）で提案し（その為には予め会長に電話して次の会合の議題にいれて貰う必要がある）メンバーの協力を求め、実施に移していく。しかしクラブ事業の目標が多くなると（BFのような継続事業は別として＝会長に相談し、メンバーの中の会長経験者に教えてもらって）メンバーの関心が目移りするから会長はそれを交通整理をする必要が出る。要はメンバーが進んで自分の担当を推進する時、交通整理役が会長の役割となる。

今期早々に、部長方針として1クラブ1目玉事業が提案された。本来は恒常的事業であるBF、ブリテン、ドライバーなどを除き、年度ごとに目標を決めるCS、EMCやYMCAサービスにしても何を目玉にするか、最近はワイズ事業が細分化されそれがワイズ新人に分かり難くしている面もあるが、全員が事業を分担する場合、委員長も多忙である場合が多い。多忙でもクラブ事業に興味があり、アイデアのある人なら、会長がバックアップする

事で実現するアイデアも多い。何故なら職業が多忙過ぎて、ある事業部長が例会出席だけが唯一のワイズ貢献である場合、それ以上は望むのは酷な場合もある。ワイズにはこのようなケースもある。

このような状態が継続するとワイズとしての事業が資金スポンサーのような事業に傾く。金さえ出していればそれで社会貢献になるのか、ロータリーやライオンズのように。クラブ・メンバー数がそれらの団体のように多ければ、それもいいかも知れない。しかしワイズはもっと知恵を出し、時には若いリーダー達と一緒に汗を流すのがワイズらしい伝統であると私は思っているが間違っていたら訂正して頂きたい。

ワイズは主体的な組織であり、YMCAに所属し、社会に貢献することをもってYMCAにも貢献する。だからワイズの社会的活動はYMCAとの連名にすることにより、YMCAの活動を多彩にすることに貢献する。ワイズにはそれだけ職業分野でも人後の役割ではないということは、多くのワイズ、外国のワイズと交流することによって自然に分かってくる。

その為にはお互いのコミュニケーションが必要。クラブの中でも、また部の中でも、区の中でも必要です。会合の中でコミュニケーションが持てなかったら、あとは電話とファックスを利用するしかない。例会と第二例会に出席していたらコミュニケーションの為だけに更に会合する時間的余裕はない。ワイズメンで家庭にファックスを所有している人が多いゆえんです。

その為には、お互いの連絡の取り易い時間帯、曜日を知らせ合い、電話連絡する事。またその時利用出来る電話番号も教えてあげる。このようなリストをクラブの中でアンケートを利用して作成しておくことは非常に役にたつ。人により朝７時前が都合の良い人、また夜8時以後が都合の良い人、週末は困る人、週末が連絡に便利な人、いろいろいます。これらの調査はクラブとして会長さんの音頭で実行されないと、他のメンバーは遠慮するでしょう。これも新しいクラブが軌道に乗るプロセスと思います。ワイズのベテラン同志は皆不思議な嗅覚で分かり合っているようです。

今の時代は、クラブ・メンバーの高齢化を迎え、世代差が大きくなり、また新人が溶け込み難くなっています。つまり顔ぶれが固定化されます。ダイナミックなクラブ運営もやり難くなっています。この様な時期に新しく会長を勤められる方々には本当にご苦労さまで、私も20年前に会長を経験しましたが、今会長をやったら只に会員数の伸び悩みの時期であるのみならず、バブル崩壊後の社会の不透明時代で、公私ともに問題の多い時期であり、会長職も辛い時代です。

その意味では、クラブ役員4役、事業委員長、メンバー全員が自分で考え、自分の責任でクラブでの役割を果たしていく気持ちが必要で、ワイズはボランティア（自発的）集団ですから「何もやらなくても誰も文句も批判もでません」、しかし何か一つを1年間の任期中には出来ます。多忙ななかで仲間とその目標を完成する、その喜びは代えがたいものです。

そしてボランティアには卒業はありません。ワイズも卒業はありません。忙しければ最低限の事をやればよいのではなくて、クラブのワイズ仲間に分担または一時的代役をお願いし、そのことをクラブ会長に電話連絡しておくことです。クラブ例会には出られなくても、やっていることを仲間に知って貰うことはできます。

疲れて来たら遠慮なく休ませて貰いましょう。ワイズになじんでいたら暫くしたらまた遺りたくなります。その時最初からやり直せばよいのです。「山高きが故に貴からず。樹あるをもって貴しとなす。」です。自分の樹をどのように成長させ葉を繁らせるのか、どのような人助けの実のなる樹に育てるのか。人は皆、天与のタラント（Talent）を与えられている。それを学び知るのは自分自身の問題とおもっています。

それでは実りある新しい新年をお迎えください。

（横浜とつかクラブ　1996年1月号会報）

ワイズは変革の時、EMCは？

一　瀬　齊　男
（横浜とつかクラブ）

1月20日開催の第3回南東部評議会に欠席のクラブメンバーのご参考の為に、以下、EMC事業主査としての報告事項＋アルファーをアピールさせて頂く。

1）交友関係を多くする事はメンバー増強に役立つ。

年1回でも出す年賀状の交換は役立つ。年賀状の宛先を増やす。もう余り必要がないから減らそうではなく、年配になると同窓会活動が役立つといわれる。同窓会に出席し、旧友に逢ったらその年末の年賀状準備に加えよう。友はやがて遠くへ行くから、長生きする程友人が減る。人生80年の時代に備えて交流できる友人を増やそう。仕事の付き合いが減れば旧友との交流に努めよう。これは生き甲斐としての仕事にも役立つし、ワイズの輪を広げるにも役立つ。

2）ワイズに適した人はどんな人か？

青と赤の絵の具を混ぜたらどんな色？それは紫色。黄色と青色ではどんな色？それは緑。クラブの活性化に必要なもの、それは現メンバーと異色の人かも知れない。お風呂に冷水を入れたら温度は下がる。熱湯を入れたら温度は上がる。私たちは水を挿すより熱湯を挿そう（受け入れよう）。温度の高い人、何かやりたい人をリクルートしよう。会社の取引先にこのような人はいないか？

今までのメンバーと違うタイプの人、職業バラエティのある方が活力となる。同じ職業ばかりだと面白みがない。子供の学校の先生にこのような人はいないか？

3）クラブ・メンバーとしてどんな人がよいか？

いつも文句をいう人、クラブ・カラーと合わない人、私の考えとして、これらの人をメンバー候補から除外する理由はひとつもない。カラーコーディネーションも同色系より反対色系がアクセントがあり、人目を引く。

文句を言う人は、文句を言わない人に比べて、何が分かり何が分からないか相手に分かる。コミュニケーションが持てる。文句を言わない、口数の少ない人は、考え方が分からない。間違っているかも知れないが、私は文句を言う人が増えた方がクラブは活性化すると思う。事なかれではクラブは平和かも知れないが、その平和はクラブ・ライフを沈滞に導く。

4）その意味で、今までクラブにいないキャラクターが良い。問題はクラブ・カラーを変える用意が私たちにあるかと言うこと。2）のように。私たちは変らなければならないのだ。

ワイズの国際憲法や日本区定款の示すように、女性もメネットだけでなく会員はワイズメンの呼称で規定されている。ワイズ社会は男性社会ではなく、男女共生社会となっている、属性の違いをお互いに生かす事が必要。青から紫に、黄色から緑に変色する必要がある。YMCAの現状は既に共生社会に変化しつつある。それは時代の必然であり、必至なのだ。多文化社会も、昔はメルティング・ポットと言った。現在はサラダ・ボール文化からモザイク文化と変わってきている。昔は多数決はデモクラシーと教えられてきた。今は少数意見マイノリティ、第三世界を尊重するのが、デモクラシーと言われている。ワイズ社会も多文化社会にならないと多くの友人を包容力をもって包み込む事が出来ない。これらは6000メンバー達成の必須条件と考えるが間違っているだろうか。ご教示願いたい。

おとなしい人も、騒がしい人に負けず、大きな声を出そう。一人で発言し難ければ分担しよう。例えばクラブ役員にはどんな人が適当か、どんなプログラムが出来るか皆でああでもない、こうでもないと議論してみる。それでクラブが賑やかになり、活性化にもつながる。つまり皆がクラブに強い関心を持つことが必要。

5）97年にワイズ日本区の二分割と同時に部再編成がある。ワイズは西高東低の気圧配置で、日本区予算も東日本は40％の予算に縮小する。わが横

浜とつかクラブも南東部の14クラブから湘南沖縄部の6クラブとなる。（南東部の他の8クラブは北東部、東部と一緒に各8～9クラブの部に編成される）部の予算だけを比較すると、やはり半分以下になる。湘南沖縄部の初代部長は横浜とつかの吉田ワイズが予定されているが、この困難な役もベテラン吉田ワイズは見事乗りきってさすがと言わせて下さる信ずるが、それをサポートする出身母体クラブの支援、メンバーの活力のなかにある一つの目標、新湘南沖縄部の中核となる気持ちの統一が必要となる。

今後のワイズの繁栄は個々のクラブの繁栄と新しいクラブを誕生させるバイタリティの有無に掛かると言って過言ではない。横浜とつかクラブの現会長の時期は力を蓄える時期、3代会長、4代会長の時期には力を出す時期、是非新クラブ設立スポンサーとなれる自信と実力が必要になる。他のクラブを共同スポンサーにも動員して、部の隙間を埋める作業としてのクラブ作りが必要です。これは湘南沖縄部を作る事を選択し、吉田ワイズに初代部長をお願いする事を支援した私たちの責任です。各クラブから出ている日本区、南東部などの役員はクラブ訪問の経費などすべて自弁である事、個々のクラブが負担する区負担金、部負担金は何に使われるか、関心を持って欲しい。新湘南沖縄部の初代吉田部長が広い部内をクラブ訪問に、またクラブの新設に動くとき、必要な部役員経費をクラブが負担出来るよう、各クラブはクラブファンドを作ってサポートする必要がある。

６）その面で、直接ワイズ活動に動員出来る戦力は、現在でもクラブの平均年齢は男子20名だけの平均では56才、5年先にはメンバー変化を考えなければ確実に61才となる。各自毎年嫌でも年を重ねるから。女性は生年不明につき、この統計から除外した。また途中の年月の間に平均年齢より若いメンバーを獲得すれば、平均年齢は若返る。現在は人生80年時代、年配者でも元気な人もおり心配する必要もないが肉体年齢を気にするよりも精神年齢の若い人を獲得する必要がある。

EMCの観点からすれば、プロジェクトにしても、自分たちだけでやらなければならないと考えず、現実的に実効があれば協力者を歓迎する。それはプロジェクトの受益者本位の考え方で、受益者からも歓迎されるだけでなく、それらの共同事業を通して、友好団体からワイズの予備軍ないし候補者を発見も出来る。そしてクラブ財政の健全化の為に、資金作りに何か事業を恒常的に出来ないものだろうか。

自分たちだけでなく、YMCAまた他のワイズメンズクラブ更には友好団体との連盟で実施するなど、相乗効果を狙う事が効率にもつながり、成功の確立は高くなる。収益はそれらの団体に平等に配分すれば良い。

７）クラブがチャーターより3年目、最も活力を必要とする時期であればこそ、メンバーの力と知恵で、前向きに対応し平均年齢が上がってもメンバー数が増えれば、財政も助かる。3人寄れば文殊の知恵くらいに考え、むしろプラス要因を強調して考える。デメリットとしない考え方が必要であるように思います。一例としてのタイのプロジェクトにしても、自分たちのクラブだけでやろうと考えず、他の有力友好団体でタイのプロジェクトに興味を示す団体があれば、協力を申し入れ、タイYMCAのプロジェクトに協力させる。これも日本側の横浜YMCAプロジェクトをより充実させる相乗効果と言えないだろうか。

（横浜とつかクラブ　1996年3月号会報）

生涯学習とEMC－YMCAとの関係

一　瀬　齊　男
（横浜とつかクラブ）

近年、生涯学習、生涯教育といった言葉が目につくようになり、湘南とつかYMCAも「生涯学習会館」と付けられている。生涯学習、生涯教育という言葉は日本語だから誰でも理解できる。YMCAは、文化団体か、社会教育団体か、青少年団体か、職業別電話帳でもまちまちである。どれも一面を指していうのであり、全体的に云う事は難しい。

それ程、世間の人はYMCAは学校だといい、アスレチック・ジムといい、いずれも全貌を把握していない。体育事業のように民間の会員組織の各種スポーツクラブなどがあり、YMの体育事業も公益事業か収益事業かの問題がある。一面経済的実態として採算性も無視できない。

1965年のユネスコ成人教育推進国際委員会でラングラン（P.Lengrand）により技術革新などによるライフタイムの学習活動の必要が提唱され、日本でも文部省は1988年、社会教育局を生涯教育局と改め、従来の社会教育と学校教育、職業教育を調整、自主的な生涯に亘る学習活動の環境が整備される事になった。

1844年創立のYMCAの起源は、英国で産業革命の結果、急激な変化と経済の混乱により退廃的ムードが世情を覆い、青少年が身を誤るものが多く、これを憂える若き日のジョージ・ウイリアムズ（Sir George Williams）が同志を糾合して青少年の健全な育成を計るべく活動を開始した。その当時、仲間は当然すべてボランティアであった。やがて組織化する必要が出、組織が拡大されるに及び、専従スタッフを必要とするようになり、当時の英領地域に広まり、更に世界各国にYMCAが出来、かつて英領のイスラム圏にも設立され、さらにタイ、ミャンマーなどにも出来、宿泊部門（ホテル事業）が「HOME AWAY FROM HOME」として家庭を離れた青年にその活動を通して心身と生活のケジメを作る機会を提供した。

「青年会活動」の言葉で表現されるように、YMCAはMovementなのか、或いは施設Institutionなのか。沿革からすればMovementから出発し、施設が必要となり、施設の維持・運営の為に、比重が施設運営に重きを置かざるを得ないケースもある。安定資産として施設を所有・維持する必要もあり、その時代の財政バランスとか、社会のニーズによって、比重は変わる。YMCAはホテル事業、学校事業、体育事業が会員事業と並んで主要な事業であったが、現在は派生的に広範囲な事業展開となり、会員（ボランティア＝Yではレイマンと云う）がYMCA活動の中心であって、現在もYMCA事業の意思決定に多くのレイマンが参加している。

敗戦の混乱期、YMCAボーイとして、多くの友人がYMCAの職員となる決意をし、献身して専従職員となり重要な役割を果たし、また会員では常議員となり、YMCAの意思決定に参加した。YMCAは、戦後の空虚な世界に若者達にはそれほど打ち込むのに値する組織であった。

ジョージ・ウイリアムズはその功績の故にサーの称号を与えられ、今はロンドン、セント・ポール大聖堂に葬られ、その墓碑銘に彼の有名な最後の言葉「My last legacy and it is most precious one. is Young Men's Christian Association. I leave it now to my beloved Young Men. Please extend!」（私の最後の遺産であり、最も貴重なもの、それはYMCAである。これを今、最愛の若者達に残す。どうぞ、発展されんことを！）が記されている。Y関係者で立ち寄られた方々は多い。

1922年に国際協会が成立したワイズメンズ・クラブはYMCAをサポートするための自己啓発、生涯学習、YMCAへの奉仕を動機付ける場。それがポール・アレキサンダーのイニシアティブで生まれたのであり、その意味でワイズはYMCAとは切っても切れない関係である。ワイズ以外の多くのYM会員（ワイズメンだけがYMCAの会員ではない）とも手を携え、YMCAを発展させる原動力とならなければならない理由はそこにある。

現代は150年前の産業革命の時代をはるかに越える複雑、不透明、困難な時代であり、YMCAが誕生したと同様な時期である。ワイズは力を蓄え、視野を広め、何をYMCAに貢献出来るかを考える。ワイズはYMCAの後援会ではなくて、YMCA事業を盛り上げ、ある時は先導役であり、またYMCA事業のわき役でもある。ワイズメンは何をYMCA

が用意してくれるかではなく、何をYMCAに貢献出来るかを考える。Movementならば、苦難の時期に専従職員だけにYMCAを任せておけるかとの熱き思いが会員に必要。YMCAでは会員と職員は車の両輪と言われている。どちらが遅れてもどちらが進み過ぎてもいけない。チェック・アンド・バランスが常に働く必要がある。

このような機能を持つワイズが頼りにならないなら、連絡主事はネジを巻く役割、こんな程度のワイズメンズクラブならYMCAに必要ないと発言することも許される。クラブの連絡主事はお飾りでもなければ、ワイズメンズクラブの責任者でもない。YMの意思決定に参加している会員は一握り、ワイズがYMCA内部の基幹集団を自認するなら、ワイズメンバーでもある連絡主事はもっとワイズの内懐に飛び込んで、YMCAの方針について、YMCAとワイズの間の良き橋渡しとして重要な役割を果たす事が期待されている。委員・理事の役割を分担している会員は、YMCAに対するワイズの利益代表ではなく、自身の持つYMCA認識をベースにした会員代表（一般会員、年少会員、女性会員、体育会員、学生リーダー会員など）としての意識が必要。他の会員達の期待に応えるためにも、YMCA運営のチェック・アンド・バランスの機能を果たす。これはYMCA創立1844年いらい152年間の受け継がれた道徳的責任。

生涯学習はまた生涯現役の時代でもある。文教行政の大先輩が自身の経験を話された。長年念願の盆栽を学びたくてその門をくぐった時、同時に学習した人が非常に器用でまた努力家でもあった。そして人に請われて盆栽の作り方を教えるようになり、何ヶ所かで教室を持ち、それを職業とするに至ったと。職業と趣味・奉仕との違いは、切瑳琢磨すれば質的な差はない事が解る。

このような生涯学習・生涯現役時代には、職業／奉仕の境界線が不十分になってきている、ダブル・ジョブ、トリプル・ジョブの時代のあり方は、終身雇用の会社人間時代は職業一本でも、リストラの時代は会社に忠実であるより、自分の専門に忠実であれと云われ、また転職は当然な時代。現代はフリーター（フリーアルバイター）が立派な職業としてワイズ名簿に載る若者の時代でもある。

趣味が陶芸なら売れなくても職業は陶芸家で通る。このような原稿を書く私はフリーライターか。ワイキチの人は青少年／社会教育家と言える。但しワイズ／YM評論家になってはいけない。社会福祉に関心のある人は福祉研究家となる。私たちは固定観念・既成観念にとらわれていたら何も主張出来ない。

高齢化時代に、昔の概念で云う無職の人は無職を恥じる必要は全くない。創り出せばよい。元気を出してYMCAとワイズにチャレンジしよう。子達孫達をYMCAキャンプに参加させYMCAボーイ／ガールとしてリーダーに育って貰う。長期的なワイズの種蒔き。それを夢見てEMCを頑張ろう。

「幻なき民は滅びる」

（横浜とつかクラブ　1996年6月号会報）

ビジョンを共有し、共に進もう

神戸YMCA名誉顧問　今　井　鎮　雄

私がYMCAに関わったのは、中国・大連にいた少年の頃からです。当時のYMCAには日曜学校があり、先生方は大連YMCAに集まってくる青年たちでした。独身の人たちや教会に集う人たちや若い先生方がYMCAに集まり、クリスマスなど非常に楽しいものでした。それ以来ですから、もう70年を過ぎています。

私がワイズメンズクラブに入りましたのは昭和21年でした。ちょうど戦争が終わった後で、YMCAを通して地域に奉仕しよう、もう一度新しい青年運動を復興しようとして神戸にワイズメンズクラブが誕生していました。私が入会したのはクラブができてから2か月か3か月後ですから、チャーターのメンバーではございません。その頃まだ神戸YMCAの建物は再建されておりませんので、YMCAの会館を建てる為にはどうするのか、YMCAを如何に復興させるか、みんなで力を合わせました。当時、私は昼は会員として関わり、夜だけ職員として奉仕しました。当時の神戸YMCAはスタッフレスYMCAと言えるでしょう。その後、YMCAの専任スタッ

フになった時、月給があがるのかと思ったら全然あがらない。ボランティアの時と同じ額だったということを覚えています。その頃は、スタッフであるのかボランティアであるのかはどうでもよかったわけで、私たちはYMCAの仲間としてどう生きていったらいいのか、どう働いたらいいのか、どう青年たちに交わったらいいのかということが当面最大の課題でした。

現在、YMCAとワイズメンズクラブは違う組織であり、どう協働するかという議論をしていますが、その当時はYMCAの中の一つのグループとして、お互いに影響しあってきました。ワイズメンズクラブはYMCAの中で青年運動の主体者として位置付けられていました。ワイズメンズクラブはYMCAが何を目的に向かうのかによって、そのあり方を柔軟に変化させてよいのではないでしょうか。私はワイズメンというカテゴリーの中で、YMCAに奉仕をしまたそのことによってYMCAが地域社会を変革することを考えていけばいいんではないかと思います。簡単に言えば、体育のリーダーになってもいいし、社交ダンスのリーダーになってもいいし、ワイズメンになってもいい。だから、私はワイズとYMCAというものを特別分けて考えていなかった。ここに来て驚いたことは、ワイズとYMCA、YMCAとワイズ、とそんなに意識をしなければならないものかということです。

もうひとつはスタッフとワイズメンの関係であります。度々事業体という言葉が話に出ておりました。私の今日の話の殆どは、昨日も宮崎総主事がお話をしてくれたことに尽きると思います。ですから新しいことを加えることは何もないんですが、基本的にはひとつ、事業体とは何かということです。YMCAは事業体なんでしょうか。たしかにYMCAは事業体としていろんなプログラムをしております。予備校もその一つでしょう。しかしあれは事業をしているのではない、少なくとも私たちは事業をしているのではないことを認識していなければならない。

地域に住む人の様々なニーズ、たとえば大学に行くための準備をしたい、英語を学びたい、スポーツがしたいという青年がいるなら、予備校や英語学校を開いたらいいではないか、また体育館でそのような活動を開設したらよいと考えました。必要経費は参加者が自分たちで持つ、受益者負担でやりましょうと。

ある時、私は予備校の入学式に出席し、入学生や父兄に言いました。「YMCAは予備校という学校を作るためにあるのではない。この予備校はあなたがたの為にあるのですよ」。あるお母さんが私の所に来られて言いました。「うちの子は大学入試を失敗した。1年間どうして過ごしたらいいでしょうか。あの子をどういうかたちで一年間歩ませたらいいのかわからない。なんとかYMCAであの子の一年間の面倒を見てもらえないだろうか」「そうですか。大変ですね。それではお子さんを1年間お預かりしましょう」そしてその子が次の年に学校へ行けるように準備してもらいながら、YMCAの中で人間として育つことを考えようという小さな集まりが、予備校の最初でありました。

だから私たちの予備校はチャペルで礼拝を持ちました。バスケットボール大会やクリスマス会なども行いました。YMCAの予備校は予備校でないのです。青年期にある彼ら生徒にとって一番大事なこと、彼らの人間としての成長を見守ること。昨日の話から言えば、私たちYMCAのミッション、また私たちのビジョンが予備校という働きを通して実現する。それは事業体ではないんです。予備校はYMCAに期待されたプログラムの一形態として展開されているものでありますから、予備校を通して青年の具体的ニーズに応えながら、青年たちの人間形成に寄与することが大切なのです。そして、時代が変わり、そういうニーズがなくなったらやめればいい。

ある年、予備校の入学式に集まった新入生が情けない顔をしてうつむいていた。私は怒鳴ったんです。私たちは君らのために、君らが必要とするから予備校を開くんであって、YMCAが予備校を必要として君らを集めたんではない。もしも君らの中で予備校で自分の人生を見、自分の一年間を深く考えようという決意がなくて、ここにいるんだったら帰って下さい。ご父兄の中にもこのことに同意願えないなら、どうぞお子さんを連れて帰って下さいと言いました。

予備校だろうと体育館であろうと何んであろうと、たとえ世間は事業体だと思ったとしても、事業でない、私たちの大事なプログラムを、どんな形で展開するのかというところにYMCAの存在理由があるんだということを、私たちは覚えておかねばなりまん。事業体とワイズメン、レイマン、ボランティアという区別を私たちは一度頭のなかから取り去ってみたいというふうに感じております。

さて、そういうことを前提にしながら、もうひ

とつ考えなければならないのはYMCAとワイズメンの関係についてです。今回、両者がより密接なコミュニケーションをとらなければならないという事が議論になっていました。それはその通りだと思うんですが、私も自分の経験から言いますと、YMCAの活動をワイズメンの人たちが交代で実質的に担っていました。例えばさきほどのユースプログラムなどもワイズとスタッフが協力し、連絡をしながらやりました。ちょうどスタッフのいないYMCA、あるいはスタッフの少ないYMCAと同じような状態でした。

もうひとつこれらの問題を別の角度から考えてみたいと思います。それは、なぜ今こういうようなことを私たちがいろいろ考えるようになったかということです。私たちはよく「21世紀」を話題にします。21世紀という時代は非常に大きな歴史の変化の曲がり角にあるというふうに感じております。

今日では歴史を100年を単位とし、「世紀」と言う呼称をよく用いています。考え方を変えて1000年単位で歴史を捉えると、我々の歴史は今第三・千年期に入りかけた、第二・千年期が終わろうとしていると言うことができます。そうしてみると、これから千年に亘る第三・千年期に、はたして人類が生きているかどうかわからない、地球があるのかどうかすらわからない。こういうようなことについて皆さんはどうお考えでしょうか。

京都で温暖化現象の防止のために会議が開催され、大変な議論が展開されています。二酸化炭素を減らすか、減らせないか、その事をめぐってヨーロッパ、アジア、アメリカ、それぞれの意見が食い違っている。それだけではありません。なんでもめてるかと言いますと、人間の経済生活をもっと豊かに、便利に発展させるためには、二酸化炭素等有害物質を出さざるを得ない。二酸化炭素を出せば必ず温暖化現象を促す事になる。それが進行すると、地球を滅ぼす。地球を滅ぼさないためには、豊かさ便利さを我慢しなければならない。あなた方はどっちをとりますかという問いが発せられています。言い換えたら、私たちは第二・千年期の一番最後で人類にとって非常に大きな問題をかかえたまま、第三・千年期、21世紀に入ろうとしているのです。

考えてみると近代産業社会が成立したのは、たったの200年前、たったこの200年の間に近代産業社会が始まって、機械化が進み、だんだん私たちの生活が豊かになり、資本主義社会という新しい社会ができてきた。この資本主義社会というあたらしい社会ができて120年ほどになりますが、その間に私たちは素晴らしい科学技術を手にしました。その科学技術は、その科学としてのテクノロジーが人間にとって良いか悪いか、人類にとって大事か大事でないかということに関わりく、事実は事実として、知識は知識として発達し、勝手に人間の世界から離れて独り歩きしはじめ、それが今人間を間違った方向に導こうとしているのです。

私たちの困難はここから始まります。臓器移植、遺伝子組み替えによる食品の問題など、命の根源に迫る問題が出てきております。人類の将来に対してプラスなのか、マイスなのか。プラスだから、どんなことでもできるからと言われますけれども、その遺伝子工学によってできたトマトを長期に亙って子どもたちが食べた時、何年後にどんな影響がでるか、誰も確証がもてません。安い栄養価の高いトマトが大量生産できるかもしれません。クローン牛もまたしかりです。それは便利なことであるかもしれません。しかしそれは人類にとって恐ろしい事態を招くのではないかとも考えられるのです。

ある話をしたいと思います。夕日を見て子どもが父親に訊ねました。「お父さん、どうして夕日はあんなに赤いの」。その時父親は「太陽が今日一日のことを考え、自分の行ってきた事を反省して赤くなっているんだよ」と答えたと言います。父親の答えは科学的に見ればこれは間違いでありましょう。しかし、この答えはこの親子にとって真実でありましょう。これが「真実」と「科学的に正しいこと」との違いなのであります。私たちの生きているこの時代の教育は、子供たちに太陽が赤くなっているのは、あれは恥ずかしいんだよ、ということを教えることをやめようとしているわけです。

たった一つの正解だけを積み重ねて、子供を教育していこうと考えているのが偏差値教育、輪切り教育等々と呼ばれているものであります。もう一つは産業社会が効率の社会だということです。効率の社会というのは効果があがればよしとする社会です。

今回、ビジョンという言葉が出てきました。ビジョンつて一体なんですか。これはミッションとかいろんな言葉で言い換えられています。YMCAにとってのビジョンは「私と生徒」との関係から「私と貴方」の関係に変えることです。太陽なら太陽が核融合反応で燃えるから赤いのではなくて、あ

の太陽が私たちと同じような心を持っているんだというふうな、「私と貴方」の関係に変えることです。その「貴方と私」の関係を作り出すことがYMCAのプログラムではないのか。こうして考えた時にさっきの話は大変意味があるように思うのです。

さて、私たちはミッションということを考えた時に、人間が他の人と一緒になって生きる事を目指す、愛情とか友情とかのなかに実は神様がいらっしゃるんだということを確信する事ではないでしょうか。YMCAは教会ではないから説教を通して証をするのではないのです。しかし、行動を通して証をするんです。キャンプに行った子どもが、夜中に目を覚ますと、若いリーダーが一生懸命落ちた毛布をかけてくれていた。このことをお母さんに手紙を書いた。「昨日の夜起きたらリーダーが僕たちにふとんをかけてくれていた。神様というのはああいう人のことを言うのだと思う」と書いてあった。私たちはそのリーダーがなさけないリーダーでいつも怒られてたばかりなのを知っています。お母さんに「たまには学校行きなさい」などと言われているような、どこにでもいる青年です。キャンプに参加した子のお母さんも毎日のようにその子どもに布団をかけていると思います。でも子どもは、お母さんではなく、そのリーダーをみて「神様というのはああいうリーダーのことをを言うのだ」と書いてある。それが証なんです。私がキャンプディレクターになったときにいつもカウンセラーのトレーニングで言いました。「君らが一番華なんやで」「子どもにとっては君らだけが頼りなんやで。僕は決して君らを神様とは思わん。もうちょっと頑張ってくれと思うけれど、子どもたちから見みたら君は神様のように見えるんだ。とすれば、子どもの期待を裏切らないようにしような」。リーダーはそういうことによって、リーダーとしてトレーニングされるんではないでしょうか。あの経験で子どもがリーダーに感謝し、リーダーのようになりたいと考える。あの子どもがまさにリーダーを神様と思ったように……。子どもの一生を変えるような影響を与えるリーダーは沢山いるんですよ。YMCAというのはそういうところではないでしょうか。

もう一つ大切なことはボランティアということです。スタッフとボランティアの関係ということがあります。ピータードラッカーという人が沢山の本を書いています。『ポスト資本主義社会』という本が有名です。お読みになった方があるかも知れませんが『新たなる現実』という本の中で、こう書いています。

いままで工場の中で操業していたのはいわゆる工場労働者だった。しかしこのような労働者はもういない。工場では労働者に替わってコンピューターで動かす技術者がいる。肉体労働者はいなくて、みんな頭脳を使ってコンピューターを動かしながら働いている。工場で実際仕事をしているのがロボット。労働者なんて言うけれど、実は労働「者」なんていなくなる時代になりましたよ。そして、社会とか産業の仕組みが変化している。ごく一握りの専門職と大勢のボランティアが組み合わさって仕事をしている。

老人ホームに行くと一握りのソーシャルワーカーと外部からのボランティアが働いています。私の見学した老人ホームでは、白い上っ張りとピンクの上っ張りがありました。朝皆さんが「おはよう」と言って入ってきます。よく見ると上っ張りの色が違うんです。白い方が看護婦さんで、ピンクの方がボランティアです。看護婦さんは看護仕事の専門職ですけれども、ボランティアでできる仕事は全部ボランティアでやっているんです。これが状況であります。

今やこれを第三セクターと言っています。ここでは少数の専門家に協力して、大勢のボランティアが働いている。アメリカでは7000万人の人達がボランティアとして働いているし、そのボランティアの働きを金額に換算すると1500億ドル相当になると言われています。こうして考えてみると、ボランティアを中心とする働きこそ新しい社会システムの中心になる。21世紀に向かっての一つの大きな働きをする。

ドラッカーは、1980年代以降、人間改革機関こそが最大の成長産業であるといっています。そしてその人間改革機関の根底にあるものは何だろう。目標になるものは何かというと、人間を変えるということです。YMCAは何のために存在しているのでしょうか。なんで英語学校の生徒の数が少なくなったら悲観しなければならないのでしょうか。私たちは人間を変えるということについて、今まで様々な働きを続けてきた団体です。そして今掲げている新しいビジョンは、「私とモノ」との関係から、「私と貴方」との関係、「人間と人間」の関係にしていくことをYMCAの目標としています。今こそYMCAは日の当たるところで社会のリーダーシップをとって、仕事が出来ると考えられないで

しょうか。

そしてその仕事は誰が担うのか。明らかに少数の専門のスタッフと大部分の無給のスタッフだと思います。無給のスタッフというのはボランティア。しかもそれは今話したように単なるボランティアではない。無給のスタッフです。その人たちはどこかで自分の生活費を得ながら、YMCAに来たときには無給のスタッフとして前向きに働いていただく。有給のスタッフが専門職として中心となり、ボランティアの皆さんと相談しながらやっていけば、それこそ人間を変えるという新しい21世紀の成長産業を私たちが、ワイズとスタッフが共に担うことができるんではないかということです。私たちは、ボランティアという言葉の持っている意味というものを、21世紀に向かってもう一度考えなければならないと思います。

これまでのように単なるボランティアではありません。それは無給のスタッフだ。無給のスタッフということはどういうことか。時間的にはどんなに短いかもしれないけれど、約束したその仕事、時間だけは月給を何百万円もらっているのと同じように、ちゃんと責任を持って果たせるというボランティアのことをいうのです。キャンプの受付はワイズメンがして下さる。経験をもつボランテイアの方々はお母さんと一緒になってキャンプの意味を考えてくれるでしょう。YMCAのキャンプがどんな仕事をしているかというのもワイズメンが説明して下さる。先程の報告を聞いても、プログラムに関わる立派なユースリーダーとして働いておられる。それは無給であります。無給のスタッフがどれだけ強くなるかによって、YMCAが強くなるか弱くなるかが決まってくるのではないでしょうか。先程言いましたように、今大きく人間の方向を変えるほどに科学技術が発達し、そのことによって逆に第三・千年期には人類は滅びることになるかもしれません。けれどもなお、私たちはこの21世紀を、激変の時代と苦闘しながらでも、やはりなんとか生き延びていくだろうということを言ったのは『21世紀の社会構造』という本を書いたロベール・ホセールというフランス人です。彼は、根本的には余り変わらないだろうと言っています。社会的に言うならば、アメリカは相対的に勢力が少しづつ落ちてくるだろう。いままでのようにワンマンではいかない。あるいはヨーロッパも沈滞するだろう。日本も超高度成長はもう終わりになるだろう。中国は躍進するだろう。ロシアも資本主義化を目指す意欲は低くてなかなかうまくいかないだろう。しかしながらいくらか悪くなるのはドイツだと。日本はアメリカの言うことをだんだん聞かなくなるから（まだ聞いてますけどね。）悪くなるだろう。南北朝鮮という体制もおそらく近いうちに崩壊するだろう。台湾と対立国との和解は時間がかかるだろうけれども進むだろう。その最後に、彼はこう書いております。

「21世紀にとってもっと大切なことは、経済や政治の次元ではなくて、文化の次元で期待すべき革新がおこることであろう」

文化の次元で期待すべき革新とはなにかというと、世界の変化をあるがままに緻密に分析してやってみると、現在の社会秩序でもっとも不利に扱われている人たち、弱い人たちにも光が当たるようになるだろうということです。私たちは営利団体ではありません。ただし資本主義社会の中において、ある価値を生み出すものであります。ものを生み出すものであります。私たちのYMCAというものは人間の本質的なもの、もう一度人間性を取り戻す働き、いわゆる非人間化社会に向かう21世紀に人と共に生きるという仕事を通して私たちは新しい世紀を作っていくことができる。

この基準からいっても、YMCAはあらゆる試練に耐えて、今こそ本当の人間の方向をしっかりもって働きを続けなければならない。しかも困っている、苦しんでいる人々、科学技術の進歩の中で人として進むべき方向を見失っている青少年たちに、「君大事なことはこれなんだよ」ということを確認し合えるような場所をつくることによって、私たちは人間性を回復する場となる。そのことによって、世界を変えていくことができる。そういう21世紀に日の当たる産業が、実はYMCAであります。そのように考えますと、昨日と今日この場で議論してきた、事業体の方は主事がやって運動の方は会員が担うと境界を区切って考えることは間違いではないでしょうか。みんなが力を合わせて、どれだけ人間が変えられるかということに焦点を合わせ、協働して活動を担い合う時に、YMCAのミッションを具体的に実現することになるのではないでしょうか。私たちは、スタッフとかあるいはワイズメンとかいうのではなしに、みんなが神様の思し召しのなかでYMCAのメンバーであり、YMCAを新しい方向に向けるということに努力しよう、そのことに結集しょうとして集まっているのではないでしょうか。

いろんな技術的なことについて、皆さんが今日お話しになったこと、ご意見は大切にしたいと思います。でもお互いYMCAの名のもとに集い、協働する者同志として、そのことを考えながらもう一度新しいビジョンにたってこれからの課題を克服していけるなら、私たちは希望がもてると思います。

新しい世界を作るために、私たちワイズとYMCAはビジョンを共有しながら共に進んでいくべきではないでしょうか。

（1997年11月1日　第1回ワイズメンズクラブ・YMCAフォーラム　報告書）

次の時代を担うワイズの働き

神戸YMCA名誉顧問　今　井　鎮　雄

姫路ワイズの50年のお祝いだからおまえ来て喋れ、チョコッと何か話したらいいと思って来ましたら、なんと題が凄いですね。「次の時代を担うワイズの働き」YMCAは15年以上前にリタイヤ致し、ワイズの方もご無沙汰を致しておるわけですが、この題を見て、どういうふうに私が役割を果たしたらいいのかわかりません。年寄りは昔のことを話し、若者は未来のことを話す。次の時代は若者が話をすればいいのに、私が話をするとおかしくなりますが、少し昔話をしながら、皆さんにお考え戴きたいと思うことを一つ二つ申し上げます。先ほど、山川理事長、灰谷西日本区理事のお話を伺ったら、私は何も話さなくてもいいじゃないかと思います。先ほど、奈良アジア会長がお話をされたように、戦争が終わりまして私たちは軍隊から帰ってきました。私は、少し遅れて上海から1946年に帰ってきました。帰ってきた時に、奈良伝先生が、ワイズをもう一度作れとのことでした。長い間休会していた神戸ワイズが再開しました。私は新しくリニューアルしたワイズのチャーターメンバーです。そこでYMCAのお世話をさせて戴いていました。その時の総主事であった本城さんのところに、姫路の各教会の少壮気鋭の長老さん方が来られて「姫路にYMCAを作りたい」というお話がありました。ちょうどその頃、中国YMCAで働いて居られた井口保男さんが神戸に帰ってこられ、神戸YMCAで暫くお手伝いをして下さっていました。その頃、奈良先生は、確か京都YMCAに行かれていました。奈良先生が神戸に来られるたびに井口さんと「姫路にYMCAを作るんだって」、「どうして作ったらいいだろうかな」と「これはやはりワイズメンズクラブが出来ればいいな」という話をしていたのが、大体1947年頃だったと思います。そして、本城さんが私に、お前行って少し皆さんのお話を聞くように、その頃まだ主事ではありません。私は、1948年3月から、大学で勉強したいと思い、夜だけYMCAで働かせて戴くというずるい考えで、夕方からはYMCAに行く、昼間は学校、その間に、設立を考えることになりました。その時に私が考えましたのは、姫路の教会役員の方々がYMCAを作りたいとおっしゃっている理由は、勿論戦後の大変混乱した青少年の状況を支えるためにはYMCAを作ることが大事だ。しかし、そのことが大事であると同時に、それを担っていくリーダーたちが必要だ。だからワイズというものを一つ考えてみたらどうだろうか？YMCAを作るということは、そのリーダーのワイズメンが育つということであり、この二つの中でYMCAが作られたらいいじゃないか、というのが最初のアイデアでした。私は今でも覚えております。最初に姫路YMCAが、青年達を集めようという時に私は、「姫路の町はYMCAを必要とするか？」という題で青年たちにアピールを致したと同時に、ワイズの作り方その他については、奈良先生のところで、一生懸命やっておられた大阪の松田稔さんに来て貰い、そしてワイズのお話、組織の仕方、あるいはチャーターの仕方、その他についてのお話をして戴いた事を思い出します。私はその頃の理事の皆さんを殆ど覚えています。この方々が中心になってワイズをお作りになった。ワイズメンが理事会のメンバーであったし、理事会のメンバーがワイズメンであり、いろんなクラブが出来た時、その指導をして下さった。姫路の青年のためにワイズメンの方々がリーダーをされ、今日、山川理事長のお話では常議員を皆さんがされておられる。これがYMCAの原形であります。岡山YMCAから、

どうも岡山YMCAがうまく軌道に乗らない、岡山YMCAに少し応援に来い、というふうに言われまして、参りました時にも、多くの方と一緒に、岡山YMCAの中にもワイズメンズクラブを作り、YMCAを支えました。言い換えたら、YMCAが出来る時それを支えて、青年たちの気持ちを聞き、一緒に座り込んで話をして、彼等の話を聞き出して、それをYMCAのプログラムに転換するという仕事をワイズメンズクラブがして下さいました。今日の日本のYMCAはこうして大きくなったということをひとつ覚えて戴きたい。これが、昔話についての一つのポイントであります。

50年前に姫路YMCAが、姫路ワイズが同じような経過をたどって出来たことは、ワイズの50周年誌をご覧になっても、大方の事がお分かりになると思います。その事が、いまどういう意味があるだろうか？また、将来、どういう意味を持つだろうか？あの時、どういう意味を持つだろうか？この三つのことを簡単にお話をしたいと思います。

第2次大戦が終わった後、姫路の少壮のクリスチャン達が、YMCAを作ろうとした時に、YMCAというプログラムを他所から見て作ろうとしたのではありません。姫路の町の青少年の状況を見て、この人達の為に、YMCAを作りたいとお考え戴いた。YMCAの方が後です。状況のほうが先です。これは、世界のYMCAを見ても同じでして、1844年、ロンドンにYMCAが出来た時にも、ご存知のように、丁度、資本主義社会が生まれ、大勢の人達が農村から出てきてロンドンに集まってきて、そのロンドンに集まって来た若い働き人達が、自分達の生活をどうしてやっていっていいか分からなくて苦悶していた時に、いったい神様はどのような道を青年たちに選ぼうとさせておられるか？広い道を行くのか？あるいは、険しくとも神様のご用に立つような人間に育ちたいと思うのか？ということを聞いた青年達が、狭くて険しくとも自分たちはこの道を歩もうと考えてYMCAが出来ました。

戦後の姫路では、青年達の状況を見て、戦争の後の虚脱状態になっている青年たち、あるいは少年たち、しかも、此処はご存じのように軍人の町でございました。大勢の軍人さん達が、この町の中心になって、華やかな時代がありました。その軍人さん達が、戦後になって皆居なくなってしまった後に出来たのは、闇市です。闇市がいっぱいあって大変なところでした。あの頃は、それをご覧になって、何とかしようというふうにお考えになって、どうしたらいいだろうか？じゃ、YMCAを作ろう！私たちが間違ってはいけないのが、その原点をもう一度たどるということであります。YMCAは、決して建物を作り、何かをして、大勢の青年達や少年達を集める事ではありません。山川さんは、さっき、私達は商売人ですから、プラス・マイナスとおっしゃっておりましたけれども、山川さん自身が学Yの人として先ほどヒューマン・ケア・ネットワークをあらためて作るのだとおっしゃったそこの処が、私たちの大きな課題であったということであります。私達が、そういう事から考えた時に、先ず状況と、そこにいる青少年たちの状況があって、それに応えるかということを考えた時に、二つの問題があったということにお気付きになられたことでしょう。その一つは、問題の所在は何か?ボランティアとして、自分達の時間を割き、労力を割き、ある時には財力を捧げて、そして青少年のために奉仕をしようという人達がワイズを作った事を私たちはどうしても忘れてはならないことだろうと思います。もう一つは、ワイズメンズクラブは、クラブとしてお互い同志が仲良くし、そして親睦と友情の輪を広げる、ということは勿論大事であります。しかし、何のためにクラブを作ったか、という目標から言うならば、それは、YMCAを通して青少年のために捧げようという原点があったということを、私達は過去から改めて学ばなければならないだろうと思います。

ワイズメンズクラブの特徴は何か？一つは、YMCAを通して青少年に奉仕をする団体である。その時にボランティアとしてサービスをするということであります。ボランティアの集いであることを大事に特徴として考えたい。もう一つはクラブでありますから、相互の親睦と目標について語り合う時間、交わりについて成立しているのであります。今、私は久しぶりに姫路に来ましたけれども、懐かしいお顔を拝見しながら、あの人も来ておられるな、この人も来ておられるなと、それは随分永い間お目にかかっておりませんけれども、今日、久しぶりにお目にかかった時に「仲間だなあ」という感情を持ちながら話をすることが出来る仲間であります。言い換えたら、ワイズメンはクラブであるという事は、私達の交わり、人間としての最も優れた意味において、人間が人間として信頼し合う、支え合うところの交わりの場であったということをもう一つの柱として忘れることが出来ないのであります。

それじゃ一体、現在とはどんな時代だろうか？現代の問題というのはどういうものがあるだろうか？少子高齢化ということがいわれます。少子高齢化ということがあって、いま、介護保険のことで政府の指導というのは情けないもので、今朝も、テレビを見ておりましたら、自民党の亀井さんと民主党の菅さんが介護保険のことで遣り合って居られました。介護保険という新しい福祉の構造を変えて行こうという時に、そのポリシイというものは必ずしもはっきりしていない。なんとかしてつじつまを合わせながら、何とかしてやれる方法は無いだろうかということを模索している姿が良く分かります。しかし、これはひとつの現実であります。恐らく、この少子高齢化のなかで、介護保険が生まれて、何が生まれたか？一番根底にあるものは何か？将来、社会保障を続けることが出来るかどうか？というお金のことでありましょう。私達が年金を貰うことが出来るかどうか？こういうような財政構造に問題が深く絡まっていて、この問題が取り上げられていて福祉のことよりも、違ったところからこの問題が大きく取止げていることはご存知の通りだと思います。あるいは、私達が高度経済成長に入って参りますと、そこでは、高学歴化ということが進み、あるいは、核家族化という問題が進んでいます。私達はその中で子供たちが豊かになったか？戦後の苦しい時にあった子供達の状況といまの状況を比べてみた時に、今、経済的には昔に比べた時に豊かになった。昔だったら、そこの駅のところで立ち食いのうどんでも食べて来るところです。今日は、ホテルで座ってお昼を食べました。暮しが50年前より良くなったという事を思います。でも、それだからといって若い人達が本当に幸福になっただろうかと考えますと、これには幾つかの問題があるというのはご承知の通りであります。殊に子供たちの事を考えますと、不登校であるとか、あるいは援助交際。援助交際ってご存じですか？言葉だけは知っていますが、簡単に言いますと、若者の淫売みたいなものです。それが何となく「援助交際」という名前でもてはやされています。そんなことがあっていいんでしょうか。私は今、児童愛護審議会という県の会長をさせられています。青少年問題という団体の副会長をやっています（会長は知事さんです）。児童愛護審議会というのは私にとって大変辛いのでありまして、1ヶ月に一度集まりまして、あっちこっちの自販機の本を買って来まして、これをパラパラめくって、「これは子供に読ませてはいけない」というアナウンスする役割です。それからビデオテープにこんなのがあるから、「これは子供に見せてはいけない」と実物を見せられるんですよ。私も、初めは興味ありましたけど、毎月、毎月これを繰り返しておりますと苦痛になります。それを何処で売っていると思います？高等学校の校舎のすぐ横で売っているんですよ。自動販売機で「援助交際」「ダイヤルQ2」（中学生たちが男の人に電話をかけ、面白いからといってかけて遊んでいるんです）に関する本が売られています。そのうちに、どうなっていくのでしょうか。私個人としては、50年間YMCAの主事をして来て、何をしてきたのだろうと思い、無力感を感じざるを得ないようなことが沢山あります。

今、おかあさん達は、子供たちを虐待しています。ここにも小児科のお医者さんが沢山居られるからご存知かもしれません。子供がアザを作って来たり、火傷をして来たり、あるいは耳に、マッチ棒を10本も詰められて、鼓膜が破れたといって病院に来たりします。みんな、おかあさんが子供にそういう酷いことをする。おかあさんは躾のつもりでやる。それが、どこまでが躾でどこからが虐めか限界が分からない。経験が無いから分からないという人もいます。また、ある時には、おかあさんが自分の感情をどうしても制御する事が出来ないために、子供に当たり散らして子供の骨が折れたり、いろんな事をするおかあさんが居られます。これも今までにはなかったような幾つかの現象が沢山あるという事であります。私達はこうして考えてみた時に、50年間の歩みの中に、それぞれに違った問題を持って来ましたけれども、決してYMCAの働きの中で、私達の社会が、青少年のために素晴らしい社会になったとは思えないのです。そして、その思えない中で、今、青少年達のことを顧みた時に、みんなが個性を失ってしまいました。いったい誰が悪いだろう？一つ大きな事は私達が持っている社会全体の構造がおかしいのではないか？ということであります。

今は科学技術時代といいます。科学技術時代というのはどういう時代か？中村桂子さんという方が居られまして、これが岩波の中で、「科学技術時代の子どもたち」という本を書いておられます。お読みになった方も居られるかも知れません。未だの方々は何かの時にお読み戴いたらいい。この「科学技術時代の子どもたち」、中村桂子さんとい

うご婦人の学者ですが、面白いことがあるんです。それは、科学時代になったらどうかといったら、いちばん科学技術の時代に大切なことは、正確だということです。正確ということは必ずある種の段階を正確に刻んでいかないと、正確な答えが出ない。奈良信さんに伺ったら分かると思います。線の引き方を間違って引いたら、建築の設計図は出来ないというのと一緒だろうと思います。それを正確にするためには、機械の場合には何が必要かというと、マニュアルが必要です。AとBとを組み合わせて、そのAとBを組み合わせたチップの中に、CとDとを組み合わせたものを入れるという、順序が一つ違ってもいけない。従って正確なマニュアルが必要だと。そのマニュアルと同じものを、おかあさん達は子供達にマニュアルを使ってやろうとする。何時になったらお乳を上げよう、何時になったらなにをする。どうしたら寝かせなければならない。マニュアルどおりに子供を育てようとするけれども人間というものはそうならない。それをマニュアル通りにやって、随分たくさん育児用語ができました。マニュアル教本に頼っているおかあさん達は、本当の子供を指導するっていうことが難しくなります。これが一つ。もう一つは、製品でありますから早く出来なければいけない。早く出来るためには、A＋B、Bの次にはC、Cの次はDという段階を踏んで来るんだけれども、時々は、Aの次にはBをおかずに、Aの次にC、Cの次にFというふうにとんで行くことが出来るようなやり方で早く正確に出来るということで、「迅速」ということを生産する時には求められている。それだから、おかあさんは子供になんて言うかというと、「早くしなさい」「早くしなさい」、おかあさんのたったひとつの歌い文句は、「早くしなさい」「何しているの、早くしなさい」とこういう言い方ですけども、子供の中には、ゆっくりしてる子がいるじゃないですか。私の子供が幼稚園児の時に、朝、幼稚園に出したのに幼稚園に着かないんです。幼稚園の先生から電話がかかってきて、「ヤスヒコちゃん、来ないけれどもドウカシタンですか？」「行きましたけれども」、仕方ないから私がいつも幼稚園に行く方向に歩いてみたら、なんと途中で蟻の穴を見て、蟻が一生懸命なんかを引っ込んでいく蟻の穴をじいっと見ていて、「早くしなさい。立って行きなさい」と言わなければならないところ、私は、キャンプリーダーですから「待てよ」というわけで、その子と一緒に座り込んで、「おっ、これは面白いなあ」と、「蟻が運んで来たぞ」と、「何処へもって行くんや？」と聞いたら、ウチのチビが「あそこの穴へ持って行くんや」と、巣にもっていくのを一緒に眺めていました。こんなことをしていたら幼稚園に遅れるの当り前です。大体毎日のように遅れて行っていたようであります。それを「早く、早く」「そんなこと、どうでもいいじゃないの！これをしなさい、しなさい」というのが現代の一つの問題点である。

もう一つは何か？科学技術をやるためには、材料はいつも均一化してなければならない。何処を切っても同じ製品でなくてはならない。人間も同じこと。これだけの事が出来なければ次にいけない。これが偏差値教育だという。偏差値で、同じ均一性をもった者だけが次に上がれるというやり方を科学の分野ではやるけれども人間はそうではない。ゆっくりする人もいるだろうし、あるいはトンボの観察の優れた人もいるだろうし、数学の立派な人もいるだろうし、歌の上手な人もいるだろうし、詩を作る人もいるだろうし、それで人間なんじゃないですか。それを均一化っていうことで追いかけてゆくならば、それでは人間は幸福にならない。その結果がどうなるか?それは現代社会の一つの縮図がいまの子供だということを、私達にそれは示しているわけです。

私達は、こうして考えてきた時に、ひとつひとつの現象を組み立てた時に、今の子供たち、今の青年たちがそれぞれ幾つかの問題を持って、どうにもならないところで生きている。しかも、私達の社会は今後一体どうなって来るだろうか？YMCAも同じであります。50年前を考えて見ましょう。Hi－Yがありましたよね。灰谷さんもHi－Yの話をされていました。YMCAにはHi－Yをはじめ沢山のクラブがありました。ワイズメンズクラブも勿論クラブであります。ところが、段々この科学時代に入ってくる、あるいは忙しい時代に入ってきた時に、私たちのクラブは、クラスに変わりました。ダンス教室だとか、体育教室だとか、なんとか教室だとか、予備校だとか、英語学校だとか、みんなクラブがクラスに変わった時代があったのをご存じでしょう。クラブがクラスに変わった時に、青年諸君たちは、殊にHi－Yの諸君たちは怒りました。YMCAに対して「YMCAは、なんという団体なんだ。いつのまにクラスをやってお金儲けをする、施設中心のムーブメントになったのか」といって怒られたことがあるのは皆さんもご存知。あるい

は、この中にはその時に文句を言って下さった方々が、ワイズの中心になっていらっしゃると思います。私たちはやっぱり時代の中で、よく見ておかなくてはならない。あるいは、問題の所在は何かということ。YMCAのようなものですら、この50年の間に、いつのまにかクラブよりもクラスを大事にするような、そして大きくなることがいいことだというふうに考えているのではないでしょうか?とすればこれはワイズメンとして、その事についてどう考えたらいいだろうか？ということをここで考えなければならないのです。「次の時代を担う」ということは、その意味であったらどうだろうか？ということを考えて戴きたい。

先ほども申しましたように、ワイズの特徴は何か？二つのことが出ておりました。お互いが互いに仲良くなる。人と人との信頼を持ち合う。私と貴方の関係をしっかり持つ、そういうクラブであるのがワイズメンズクラブである。しかも、そのクラブの人達がお互いに夢を持っている。幻を持っている。それは、青少年のために私達は何ができるだろうか？どういう時間を使えるだろうか？ということであります。言い換えたら、そのために私達は時間と労力と知恵とを捧げるボランティアの集いであるということです。また、YMCAそれ自身が、先ほど理事長の話のように、NGOとしての大切な役割をしているというのは、ボランティアによってであります。この二つのことを私達はもう一度、振返ってみると、21世紀はどんな時代になるだろうか？ということに考えを致すことが出来ます。

先ほどすでに、山川理事長がドラッガーの話をされまして、ヒューマン・ネットワークの話をされました。ドラッガーはご存知のように経済学者であります。経済ジャーナリストであると言った方がいいんでしょうか。もう日本語に訳された本を5冊も6冊も書いていますから、皆さんも、お読みになった方が居られると思います。最近も幾つかの本を出しておりますけれども、1982年に「新たなる現実」という本を書きました。お読みになった方が居られると思います。この「新たなる現実」という本に、何が書いてあるかというと、資本主義社会というものの性格が変わってきたということが書いてあります。その資本主義社会というものの性格が変わってきたということに、彼はこんな例を挙げています。昔は、働く人達は「労働者」でありました。今から70年程前は、働く人達「労働者」は工場で労働して居りました。ドラッガーの言うことによりますと、今日、工場に行って工場で働く労働者は居ません。工場で働いているのは何でしょうか？工場で働いているのはロボットです。そして、工場で働いている労働者は、そのロボットを操作する技術屋さんです。多くの技術屋さんが多くのロボットを操作して、そして生産しているのが現代の工場だ。工場の労働者はいないのであって、今は知的な技術者がいるに過ぎない。言い換えたならば、私達がかつて中心になった1800年の終わりから1900年はじめ、日本のように工場労働者が居って、その人達が苦労して働いている。私は時々、賀川豊彦のことを思い出します。賀川豊彦が川崎あるいは三菱の労働組合を指導して、最初の大きなデモンストレーションを神戸の相生橋のたもとで行いました。工場労働者達が食うに困っているから、その人達を救うんだといって、労働運動をしていました。あの労働者たちは今、技術者に全部代わりました。たった75年の間に、工場の有様がすっかり変わってしまいました。昔、ご婦人の仕事は何だったか？ドラッガーが書いていることによると、昔のご婦人は住み込みで家庭教師のような仕事でしたけれど、今はもうそういう仕事をしておられる方はおられない。むしろ、コンピュータの技術やなんかの仕事をしている人に代わっていると言っております。

こうしていま21世紀になる時に、私達の社会というものは、労働者の姿が消え、或は、全く違った質の異なった人達が働く時代になる。これが新たなる現実だというのです。そしてその「新たなる現実」が現実に来た。これは、ドラッガーが書いたのは1980年ですから、今からもう20年近くも前の本であります。この新しい現実にそって新しい社会を作るように動いているのは日本とアメリカであるというふうに、その時にドラッガーは書いておりました。私達はこうした変化の中で、確かに日本はよその国にもまして、沢山のロボットを使うようになりました。あの当時恐らく1980年当時に、世界の科学ロボットの内、4分の3ぐらいが日本にあったといわれております。それが、あの自動車のロボット工場であるし、あるいは小さなテレビやなんかの工場です。それでもって日本の経済は非常に立派になったというふうにいわれますが、それくらいから変わって来たわけでありますが、日本は、そういうの早いんですが、早いだけに問題があります。彼はこの「新たなる現実」

ということを言った時に、人間が一番大切なものはどうなるかというと、人間自身がみんなシステムの中に繰り入れられてしまう。宮仕えの辛さという言葉をいいます。私達は今、最近、新聞で「神戸製鋼お前もか」というのが出ておりました。本当は、「さくら銀行お前もか」、「三菱お前もか」であって殆どの大きな会社が皆なそうです。そして社長さん達が「深くお詫びを申し上げます」といってお辞儀をしてほかのポジションにお代わりになる。誰も本当にお詫びを申し上げます、なんて人いないだろうと思います。システムがこうなっているから仕方が無い、やむを得ないと考えています。そういうふうな中の、縦の関係が細かくなればなる程そうです。そのような非常に機能化している社会の中では、人間はその中の機械の一部に埋め込まれてしまう時代になって来たという事です。グローバリゼーションという事が言われます。今や経済は、もう国家の枠組を外れて大きくなっていますから、いったい儲けるというのは、国のために儲けている訳でもなければ、その企業のために儲けているという事が言えるのではないかと思います。人間のために儲けている訳でもないとなるとどうなるんだろうか。この企業のグローバリゼーションがやがては国民・国家という国家の枠組をも場合によっては危うくするような時代というのが21世紀であろうと思います。従って、グローバリゼーションというものが非常に良く気を付けなければいけない。昨日ですか、私は東京からの帰りに、新幹線車内のインフォメーションを見てたら、アジアに行った経済ミッションが第三の開国を、というのがリピートに出ておりました。私達の経済というものが一国だけではなくて、すべての国の中でやるためには、日本の国の経済をアジアに全部オープンしていく事が必要だというサジェッションがあったという事だろうと思います。

私達の世界がこのように変わってきた時に、一体そこで何が起こるんだろうか？人間それ自身が、効率とか価値とかいう基準の中で、みんなその事だけに巻き込まれて、本当の人間の意味というものを考えることが出来なくなって来た。人間の非人間化ということが起こるということであります。私達の今一番大きい問題は、社会が進むということは、いろんな意味で最も適者生存で、最も優れた者だけを取り止げて作る社会だということです。ダーウィンの進化論ではありませんけれど、強い者だけが生きるという論理が、社会の中でも同じようになってくれば、優れた者だけが生き残るんだという、そういう論理は、一人の人間、一人の貧しい人、或は一人の障害者、一人の小さな子供、一人のお年寄り、その人達をみんな見捨てる社会になって来るだろう。人間の社会が崩れてしまって、機械とか機能とかいう社会だけが生き残る社会が21世紀になって間違いなく来るかも知れない。しかしその21世紀になって間違いなくそういう社会が来る時に、それをもう一度、人間の社会に戻すということはどういうことなんだろうか。その仕事をする者、それが新しいシステムとし、新しい価値として分かるまでには、その期間の間、今までのグローバリゼーションであるとか、或は機能化という行動から新しい人間の尊重をする社会に、世界に移って来るまでの間、ドラッガーは100年位かかるだろうという。その100年位かかるものを支えるものは何か？これがボランティアということですよという。彼のいうボランティアに二つあるという。一つにはこの前の、阪神淡路大震災の時にあったように、大変だというので、東京からもどこからも大勢の方々が、ワイズメンの皆様方にも大勢のみんなが神戸に駆け付けて来て戴きました。大変有り難かったと思います。後でもって色々数字を読んだ時に、180万の人達がボランティアの仕事をして戴いたという。そして、日本の国ではこれを通して、あの1995年の地震の時に180万の人達がボランティアをしたんだから、これがボランティア元年だとこういう。成程、救済的なボランティアとして大勢の人が働き、その経験が、いまトルコ地震においても台湾の地震においても皆が出掛けていく。そういうボランティアの仕事を私達の中に火をつけてくれたという意味においては1995年をボランティア元年という言い方をする人がいても別に目くじらを立てて反対をする必要はないかも知れない。しかしながら本当は、ボランティアというのは、自分の身体と自分の時間と自分の労力と、そのうちの、私は時間だけを捧げましょう、私は知恵だけ捧げましょう、私は身体だけ捧げましょう、いろんな方法があってもいいけど、そして捧げて戴いて支えてきたものは、YMCAやワイズメンズクラブの人達は、もっとずっと昔からこれをやって来たということを覚えたい。しかもその時に、もっと大事なことは、ドラッガーはこう言うんです。救済的ボランティアというものは、ある意味においては、惻隠の情から生まれ

てくるので、割と簡単に皆がそこにジョイントすることが出来る。でも、もう一つ大事なのは救済的ボランティアではなくて、社会的ボランティアだということ。社会的ボランティアという事は、その事によって100年の間の時代を繋いで、そして、新たに人間尊重の世界が生まれてくる21世紀か23世紀か25世紀か知りませんけれども、その時代まで、それを繋いでいく時の繋ぎをする社会的なボランティアこそが、今大切だと彼は言っております。

彼はこんな言い方をしました。例えば、アメリカの状況を報告の中に書いて、「アメリカの病院は、一握りのお医者さんと、一握りの専門の看護職（看護婦）が居れば、あと残りはボランティアでいいのです。ボランティアの人、お医者さんが処方したものを薬剤師に持っていって製剤して貰い、間違いなく患者さんの所へ届けるような仕事はボランティアで十分出来る。看護婦さんがいちいち検温ですよといった時に、その人達が寂しそうにしておれば、「どうですか？今日はご飯食べられましたか？」そして、「お爺ちゃんの所には、今日もお孫さんが来てよかったね」といって、そのお爺ちゃん達を慰めて話し合うのは、看護職という専門職でなくても、ボランティアの人で、看護婦さんのアシスタントでいいんです。だから一握りのお医者さんと一握りの看護婦さんのほかは、大勢のボランティアが居れば立派に病院を運営することが出来るじゃないか。学校もそうです。学校は専門の先生が居られるけれども、例えば、日本だったら英語の先生の時に、アメリカから帰って来た、或は、アメリカで生まれた人が居ったら、その人達がその先生のお手伝いをして、今日は発音の時間ですとか、今日は会話の時間ですという時には、アメリカ帰りの奥さんが子供たちの指導をしてくれても、発音を直してくれてもそれは立派なボランティアとして、また英語の教育に立派にやっていけるじゃないか？現に、YMCA英語学校が始まって110年になりますけれども、英語教師に困った時に、ワイズメンの中で何人かの方々が無給で、この英語学校を助けてもらいました。私は未だに忘れることが出来ないワイズメンの方々が居られます。奉仕をしてくれて、その労力と時間とを捧げて、英語を教えてくれたことを思い出します。こうして日本の殊にワイズメンの人達をいうならば、社会的な救済的なボランティアでは無くて、社会的なボランティアもしてきている。この社会的なボランティアをしてくれる人達が集まらなければ、100年後に、私達が理想とするところの“人を大事にする社会”が生まれて来るまでを繋ぐことが出来ません。私達は「今こそボランティアの重要性というものを考えなさい」というのが、ドラッガーの言葉でありました。先ほどの山川理事長が、ヒューマン・ケア・ネットワークということをおっしゃったのは、こういうボランティアの仕事が大事だと言うことです。

そして最後に私が申し上げたいのは、こういう時代を迎えようとした時に、私達自身が、世界が望んでいる世界を、例えば、人と人の命が大切さという事を考えるような、非人間化の世界から人間性を回復出来るような社会を作るのは私達の役割です。私達がワイズメンズクラブというクラブは、会社の中で機械のように働いてきた者がお互い同士、人間として交わる場所だということを、最初に申し上げましたように、そういう世界は、皆に与え、感じさせるという意味においては、この「お互い同士が交わりの中で人間性を回復する」この事のためにキャンプをしたり、この事のためにいろんなプログラムをしたり、クラブを作ったりする中で皆が豊かになることを考えるならば、私達は人間性の回復が一人一人のために大事だと思います。言い換えたら未来に向かって、来年はミレニアムという言葉を使いますけれども、千年紀といいますけれども、それは、神の恵みと平和を実現する時というふうに言われております。私達は、それを繋ぐためにワイズメンはボランティアとして、またワイズメンズクラブは人と人との交わりを回復する場として大きな役割があるのではないだろうか。このことの為に、更なる50年をお互い同士が頑張っていければ有難い。有難うございました。

本稿は、姫路ワイズメンズクラブ創立50周年記念式典（1999年11月14日㈰　ホテルサンガーデン姫路）において「次の時代を担うワイズの働き」と題して講師が記念講演された骨子を取り纏めたものです

ワイズメンズクラブとワイズメンの在り方

岡　本　尚　男
（京都キャピタルクラブ）

クラブに求められるもの

①会員の研鑽を行う場所であること。

さまざまな思いや願いをもって入会された会員にたいして、クラブはそのニーズにこたえなければなりません。しかし、そのためのプログラムの基本は、会員の質的向上を考えたものでなければなりません。

YMCAや地域社会にたいする奉仕をおこなうために必要なことは、質の高いボランティアがのぞまれています。

②会員同士の親睦を深める場所であること。

暖かい人間関係を構築するためには、お互いに親しくなることが大切です。そしてよく理解しあうことが重要なことです。このことが十分でないとクラブ活動は瓦解してしまいます。

③例会は①と②が前提にある工夫がされていること。

楽しい例会、めりはりのきいた活気ある例会運営こそクラブ活動の原点です。

例会運営に、さまざまな工夫をこらさなければなりません。

④団体奉仕は慎重に、あくまでも個人で奉仕。

さまざまな人間集団であるクラブは、一つの奉仕事業を行うためには、心を一つにして取りかかる必要があります。このための十分なミーティングを抜きにして行った事業は大抵失敗し、人間関係まで悪くするケースがあります。それが原因で退会者が続出したことがあります。あくまでも、団体奉仕活動は慎重に、奉仕は自分の背丈にあったことから、無理をせずにつづけながら、奉仕についての本当の意味を理解してもらえるようになった時から始めて下さい。

気持ちのいい挨拶をすることも奉仕であることを自覚する必要があります。

⑤クラブは地域社会におおきく開放されていること。

特殊な人間、特別な人間集団であってはなりません。あらゆる職業の中から、その業界でリーダーシップのとれる質の高い人を会員にするのです。ここに一業種二会員の原則があります。同じ業種の会員だけでは、同業組合とおなじことで新しい発想が育ちにくいし、商売敵になって人間関係を悪化させる場合があります。

⑥次のリーダーが育つ仕組みがあること。

有限の命を持っている人間は、長くリーダーを勤めることはできません。しかしクラブは無限の命をもつことができます。しかし、それもよいリーダーが次々と育ってこその話です。リーダーを育てる力のあるクラブは無限に続きます。

⑦クラブの中に目標になる人がいること。

○○年もワイズにいると、あのようにすばらしい人物になれるのだといわれるような人が沢山クラブにいることは、会員にとっては誇りであり、また新しく入会された方にとっても、いい目標になります。

⑧クリスチャニティーについての説明をきちんとしておくこと。

信仰のちがいからくる違和感があります。クリスチャンの方はなんとも思わない事がらでも、そうでない人には大変な違和感があるものです。クリスチャニティーをどのように理解するかによって、会員のかかわり方がかわります。自分のアイデンティティーを確認するためにクリスチャニティーがあるのです。けっして信仰を強制されるものではありません。

ワイズメンとしての個人に求められるもの

①自己研鑽に励もうと謙虚であること。

奉仕をしようと張りきって入会したものの、少しもそのような場所がないし、いつも例会でワイズソングばかり歌っているだけと思われるときもあるかも知れません。子供がだんだんと大きくなるときには、いろいろな体験を通して一人前になるのと同じで、ワイズの世界は生涯学習の場所であるということを肝に銘じて下さい。

②例会は必ず出席すること。

出席は大切な義務であります。人と出会い友情を育み、奉仕をする心構えをつくることが求められています。そのためには、必ず出席しなければならないことはおわかりのことと思います。例会に出席することによって自己変革が起こらなければ、クラブに入会する価値がないでしょう。

③時間を守ること。

ビジネスの世界では時間を大切にしない人は失格です。ワイズメンも同じことです。良質の社会人の必須条件の一つは時間厳守があります。例会やいろいろな会合では時間を守って下さい。時間を守るということには、大切な哲学があります。

④すべての返信は速やかに行うこと。

例会の出欠やブリテンへの原稿締め切り日を守ることなど、返事をしなければならない事柄については、速やかに行うことが大切です。役員は、期日までに返事がないために、電話などで余計な時間と費用をかけています。

⑤メネットや家族の理解を得ておくこと。

自分だけの世界がワイズではありません。ご自分のパートナーにたいして、このクラブのことを十分に理解してもらえるように、例会などにも一緒に出席して下さい。食卓の上にもワイズの話題をのせて下さい。

また、職場でも胸をはってワイズメンの人達のことを話せるようになって下さい。

⑥所属するクラブ以外にも積極的に出席すること。

井の中の蛙にならないためにも、また、素晴らしい人々との出会いをもとめて、クラブ以外の会合にも積極的に出席して下さい。部会、周年記念会、日本区大会、アジア地域大会、国際大会、などなど貴方が求めれば多くの人が側にいて、友達になってくれます。

⑦会費はきちんと期日までに納めること。

例会を欠席すると会費の滞納がおこるときがあります。

自分の責任においてきちんと入金をすることが大切です。ルーズにすることは人間関係を悪くする原因の一つです。

⑧ワイズメンとしての誇りをもつこと。

すべての行動において、ワイズメンズクラブの会員であることに誇りと自信をもって、ご自分の世界で活発に働いて下さい。

⑨役員に就任要請があればことわらないこと。

ワイズのことがもっと理解できるチャンスがめぐってきたのです。そして、クラブの多くの方が貴方のリーダーシップを期待しているのです。また、自分の人生を豊かなものにするチャンスでもあります。挑戦しましょう。道はひらけます。

⑩本当のボランティアになること。

ワイズメンは常にボランティアの心（奉仕の心）をもって、あらゆる事がらに立ち向かわなければなりません。そのために必要なことは、奉仕の心をもつという心構えがなくてはなりません。すべて自己完結です。自分が選び、決めた事がらについては自分の責任においてすべての事がらを完結させるということを覚悟することが大切です。その意味で時間もお金も自分の身丈にあったことをやらないと、悲劇がおきます。

すべては自分が決心したのだということを、忘れないで下さい。ワイズメンズクラブに入会したのもいまの職業についたのも、結婚したのもすべては自分が選択したんだということの重みを自覚することが大切です。ボランティア活動はこのことを十分自覚した時からほんものになってきます。

（1995年度 次期会長研修会資料　2001年 一部訂正）

“LT（リーダーシップトレーニング）”についての一考察

抱　井　五　郎
（東京北クラブ）

ワイズメンズクラブにとって“LT”は歴史も浅く、国際協会で意図したことも、必ずしも明確ではない。そこで私の試案としてこういう方向で取組んではどうか、ということを示して皆さま方のご意見をいただきたい。

最近「生涯教育」という言葉が流行しているが、これは学業の終ったことで教育が終了するということではなく、生涯を通じて行われるという意味だと理解する。この考え方からワイズにとって望ましい人間像をLTとして開発してはどうかと考える。

1）従来、ワイズの役員研修を重要なプログラムとしてとらえている。これは日本区レベルで研修が行われ、新役員のためのマニュアルやクラブ運営の事務手続マニュアルもでき、一応成果があがっている。一年交替の役員のためにきめ細く実施すべきで、年度始めは勿論、年度の途中でも機会をとらえて実施すべきだと思う。

2）次に“LT”は新入会員のオリエンテイション、継続会員に対する成人教育（Adult education)、クラブ役員の養成に対してのプログラムを整備すべきである。

3）YMCAのめざすリーダーとしてのワイズマンの人材教育を考えるべきだと思う。YMCAにとってワイズマンとは何か、YMCAに於けるワイズマンの位置づけと、YMCAの思想を継承してゆくワイズマンの育成が考えられる。YMCAがもつリーダーシップのノウハウにワイズが学びながら考えなければならないし、同盟の研究所の利用なども方法かと思う。

4）社会に於けるリーダーとして、ワイズマンはどうあるべきか、という問題が考えられる。各企業で行われる社員研修や人材開発とは別な視点で、ボランティアとしてのワイズマンの育成と一般社会でのリーダーとなる人材育成を考えるべきである。

5）家族の中でリーダーシップとは何かを考えたい。家族という集団の中で、父親、母親として親業について考え、夫婦の関係についてもワイズマンの視点からとらえ、よい家族関係の開発と育成を大切なプログラムとして考えてはどうか。

6）最後に、ワイズマン個人として、人間の成長を考えることが大切である。ワイズの世界は質の世界であり、ワイズ運動の中で生きがい、宗教の問題も生涯教育の面から取上げたらどうかと思う。

“LT”の問題は考えてみると大きく、さまざまなプログラムの展開が考えられる。各クラブが年間を通じて“LT”を考え、たえず機会をとらえながら、反芻してゆくことが必要であるが、それには日本区で、この開発のために研究委員会を組織してプログラムの開発とカリキュラムを考えてゆくべきであろう。ただあまり先のことではなく、当面すぐにでも実施可能なプログラムとして、元ワイズの役員、YMCAの各委員の方々によって、クラブの卓話者としてご奉仕いただくことである。

ワイズの経験、YMCAの経験を通じて、ワイズメンズクラブ、ワイズマンの在り方を身近に学んではどうであろう。各クラブの年間のプログラムの中に、必ず1～2回これを取上げればクラブの為にも、ワイズマン個人にとっても、よい勉強の時となると思う。それにはまた“LT”の為のリーダー養成も必要なことになるわけである。会員諸兄のご意見をぜひうかがいたいと思う。

この「LTについての一考察」は、約10年前（1985年）、北東部主査の時に、LTを考える一つのたたき台として発表したものである。現在読みかえしてみると、稚拙さが目につくが、その後のLTプログラムの開発とあわせて、なにか参考になればと思い、そのまま掲載させていただいた。

YMCAとワイズメンズクラブを考える

抱　井　五　郎
（東京北クラブ）

1．YMCAのはじまり

YMCAが初めてできたのは1844年ロンドンであった。今から150年前のことである。日本にYMCAが創立されたのは1880年（明治13年）である。YMCAはキリスト教信仰を土台とした青少年の成長を願って諸活動をいとなむ社会教育団体である。時代が要求する様々な教育的・文化的プログラムを展開し、たえずリフレッシュされ、活動してゆくことが、この団体の使命である。YMCAは教会ではない。しかし初期の目的は青少年の間にキリストの福音を広げることが、最大の目的であった。これは何故か？

YMCAを創った人々は、ロンドンで働いていた20代の青年達であった。その中心がジョージ・ウィリアムズであった。彼は1821年10月11日、イギリス南部サマセット州アシュウエイの農村に生まれた。彼は農夫とならず、都会で働くことを選んだ。1841年10月、20才の時にロンドンのヒッチコック商会の店員となった。働きながら自分の信仰を他に及ぼす必要を自覚し、同室の青年と祈りのグループをつくった。回りから「変な奴だ」と思われたが、彼は信念を変えなかった。

当時のイギリスは産業革命の真ただ中で、貧富の差は開き若年層の労働条件は過酷であった。ジョージはこの改善にも努力した。またジョン・ウエスレイの流れをくむ信仰復興運動が背景にあった。レイマンによるレイマンの為のリバイバルがYMCA創立を備えたと言える。もう一つはピューリタニズムである。英国国教会内部のカトリックへのプロテストが教会体制批判となりリバイバル運動へとつながっていった。ジョージのグループは聖書研究と祈りを重視したが、これはピューリタニズムを継承することになったのである。このジョージの運動が職場から職場へ、青年から青年へと広がっていき、遂にThe Young Men's Christian Associationがロンドンで創立された。1844年6月6日のことであった。

2．東京YMCAの誕生

東京YMCAが設立され発会式をあげたのは1880年（明治13年）5月8日、京橋区新肴町十三番地、京橋教会であった。YMCA誕生の地は「文明開化」の中心、銀座の一隅であった。その名も「東京基督教徒青年会」である。アメリカのYMCAを知る神田乃武の帰朝報告をうけて、田村直臣、小崎弘道、植村正久など二十代の青年牧師が中心となって設立された。初代会長に小崎弘道が選ばれた。当時の「七一雑報」（1880年＜明治13年＞5月28日号）によると「今般当地の有志者に依って基督信徒青年会なる一社の開設ありしが、其目的と性質は別紙規則にて明瞭なり。此会は米国などにあるクリスチャン・アッソシエーシヨンに倣ひし者にて、追々は文庫を造り又諸新聞縦覧所となす目論見なるが、当分は奨励会（第二火曜日）と演舌会（第四土曜日）の二会のみなり、過日銀座会堂に於て演舌会の催しありたり。平岩愃保氏「良心の説」、植村正久氏「教法論」、フルベッキ氏「青年会の裨益」等にて聴者大凡六十名なりき」。このように青年会の働きは一回は会員修養の為の講演、もう一回は外部の人々の為に演説会を開いた。またYMCAの名称を日本語でどう表現するか問題になったが、“Young man”を「青年」と創案したのは小崎弘道であったという。

さてロンドンにおこったYMCAは産業革命による都市変革と信仰復興が背景にあったが、日本の場合は事情が違っていた。日本の近代化は端緒についたばかり。YMCA運動はキリスト教宣教、文化運動として始められた。その対象は進取の青年達や知識階級であった。しかし初期のYMCA運動が総て順風満帆とはいかなかった。直面する障害は日本の前近代的閉鎖社会であり、キリスト教への偏見であった。また財政的にも困難がつづいた。こういう中で先達の努力と北米YMCAの援助によって、銀座から「神田の青年会館」へと移り事業の基礎ができる。そしてYMCAが日本の社会の歩みの中で一貫して取組んできたのは「青少年の育成」であった。YMCAの旧くまた新しい課題でもある。

3．東京YMCAの組織と働き

東京YMCAが創立以来一貫して、会員による団体という理解のもとに守ってきたのが会員制度である。初期の会則は「会員」という種別だけであったが、その後「通常会員」「維持会員」「終身会員」という会費による分け方が見られる。以後YMCAの歴史は、会員とは何か、という議論がなされ、その時代の変化に適応した会則改正が今日まで行われてきた。最近の会則改正は、会員によるYMCAのアイデンティティを明らかにし、幅広く参加を求める、開かれた会員制度を目ざした。それは東京YMCAの事業・プログラムに参加する会員と東京YMCAを主体的に担ってゆく会員を明確にして「参加会員」と「維持会員」の二種を定めた。この考え方の根底には、単にプログラムに参加する会員からボランタリズムを育て、人々に仕え、YMCAを担う会員へと変って行くことを期待しているのである。それは権利よりも義務を優先させる意識変革である。

現在の東京YMCAは会員組織による任意団体として「会則」をもち、また財団法人として「寄付行為」による資産の管理運営にあたる団体という二つの面をもっている。この東京YMCAの運営の要になるのが常議員会で、常議員は「会則」に従い会員によって直接選出される。この常議員の役割は東京YMCAの目的・使命に忠実であること、特に社会の変化に対応した執権が問われている。また常議員会は東京YMCAの任意団体と財団法人とを結び合せる集団でもある。任意団体のYMCAを代表し、財団法人側から見れば理事会から委嘱されて理事・監事を選出する母体である。

東京YMCAの組織でもう一つ大事なのは委員会である。各委員会は総主事の要請によって常議員会が委嘱するもので、委員会はYMCAの運営・課題を分担し助言機能をはたす。実際の事業の管理運営は専門職のスタッフが責任をもって執行する。この為に会員とスタッフとのパートナーシップが重要であり、今後ますます緊密な連係が求められることになる。

4．赤三角マークとパリ基準

YMCAマークは略章と正章がある。略章の正三角形は、Spirit（霊性）、Mind（知性）、Body（身体）を表わしている。人間はこれら三つの面が統一されて人格が形成されると理解する。この提唱者はアメリカYMCAの体育主事ルーサー・ギュリック（Dr. Luther Gulick, 1865～1918）である。今日、多様な人間観のなかで、YMCAの考え方は大変貴重であり、調和のとれた人格形成を目ざした青少年の育成は、今もなおYMCAの重要な課題である。正章は三角形の背後にギリシャ文字のX（キー）とP（ロー）を組合せ、その中心に“JOHN17:21”が刻まれている。このX、Pはキリスト（救い主）を表わし、聖書の言葉「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください……（略）」は、イエスの祈り、願いをYMCA創立者が、自分たちの願いとして読みとったものである。この一致とは単に言葉や形ちではなく、霊的な全人格の一致をめざしたもので、YMCAのモットーとも言うべきものである。このような思いがYMCAのマークにこめられているのである。

さてYMCAは1844年にジョージ・ウィリアムズらの青年達によってロンドンに設立されたが、この運動は次第に各国へ広がって多くのYMCAが設立されていった。1855年には8カ国、38のYMCAから99人の青年達がパリに集った。この青年達はイエス・キリストへの信仰と忠誠心によって結ばれているという共通の理解をもち、そのことを土台として青年のために奉仕し努力しようという認識で一致することができた。この一致を書き記したのが、今日言われるところの「パリ基準」であり、その具体化が世界YMCA同盟の設立であった。100年後の1955年の世界YMCA同盟成立100年記念大会で「パリ基準」は再認識された。この「パリ基準」は現在、エキュメニカル運動の古典的な文献であると言われている。東京YMCA会則の前文にのせられているので一度お読みいただきたい。

5．ジョン　T. スウィフト（1861～1937）とジョン　R. モット（1865～1955）

ジョン　T. スウィフトはニュージャージ州オレンジ市YMCAの主事であったが、彼は日本に行くことを夢みていた。彼の希望はすぐには実現しなかったが、1888年（明治21年）その機会が訪れた。日本政府の英語教師派遣要請に応募したのである。スウィフトの役目は明治学院で英語を教えることであったが、彼の本来の関心事はYMCAにあった。当時の東京YMCAは発足したものの委員達の充分な協力も得られず、場所も転々とし諸活動に困難をきたしていた。ひとり木村熊二が献身的にYMCAを守りつづけていた。このような状況のなかでス

ウィフトと木村熊二の出会いがあった。スウィフトは沈滞している東京YMCAに失望しながらも木村熊二の働きに感動する。1889年の春、スウィフトは一旦帰国する。彼自身の結婚、東京YMCA会館建設資金を集めること、北米YMCA同盟に海外事業の必要性を訴えることであった。1889年10月2日彼は再び日本に向った。新婚の夫人と会館建設資金43,000ドルを携えていた。このうち25,000ドルはスウィフトが相続した遺産であった。しかしこのことは生涯、彼の口から明らかにされなかった。このようにスウィフトと北米YMCAの援助によって「神田の青年会館」が建設されたのである。そして、スウィフトが残してくれた最大のものは会館ではなかった。「YMCAは建物ではない。建物をつくり出す力にある」と。今、スウィフトは横浜の外人墓地で静かにわれわれを見守っている。

ジョン　R. モットが来日したのは1896年（明治29年）11月8日、日清戦争が終って間もない時であった。彼はその二年前から世界の学生キリスト教運動を結合しようと遠大な計画に取組んでいた。来日もその為であり三つの目的をもっていた。第一は日本の大学に学生YMCAを組織する。第二はその学生YMCAの全国組織をつくる。第三にその全国組織を「世界学生キリスト教連盟（WSCF）」に加盟させることであった。モットは88日間の滞在中、さまざまな困難と戦いながら目的を果たした。彼の努力によって38の学生YMCAが組織されたのである。モットの報告書には「日本の青年達の間に見られた強い独立心のために組織化の仕事はインドや中国の場合の二倍の時間を要した」と記されている。以来モットは10回来日し学Y、都市Yの発展に足跡を残した。モットは世界YMCA同盟終身名誉会長に推挙され、1955年90才で亡くなった。今日日本のYMCA運動があるのは、スウィフト、モットに代表される多くの協力主事の献身的な働きと北米YMCAの援助のあったことを忘れることはできない。

6．これからのYMCA

今YMCAとは、と問われた時、一言で答えることはむずかしい。YMCAに関わる多くの人々は、さまざまな側面でYMCAをとらえようとする。それはキャンプであり、学校であり、ウエルネスであり、ホテルである。会員、学生、委員、そして職員もそれぞれに関わる部門でYMCAのイメージをもっている。このように多様なイメージは組織の活性化を示すのか、或はYMCAの本来在るべき姿が失われて、このままでは、YMCAのアイデンティティ・クライシスを招くことになるのか。私は見える部分ではなく、見えない部分、YMCAの理念がどう生かされているかが重要であると思う。このYMCAの理念はいかに時代が変化しようとも、決して変るものではなく、変えてはならない。しかし時代や社会の変革のなかで、YMCAの働きの在り方、活動方法は絶えず問いなおされ、新しい課題にも取り組んでゆかなくてはならない。

かつて50年前に「YMCAはムーブメントか、インスティテューションか」という問題が提起された。YMCAは運動体か、事業体かという論議は今もいろいろな形で継続されている。東京YMCAが設立された当初、活動は低迷していた。その時、会館建設資金の援助と夜間英語学校の開設を指導してくれた、ジョン　T. スウィフトの功績は大きく、東京YMCAの基礎がつくられた。このように初期の段階から事業を起こし組織化して、YMCA運動の具体化がはかられたのである。今もなお、運動か事業かという二元論的な問いを投げかけながら二つを統合して発展してきたのがYMCAの歴史である。現在YMCAが施設をもち、専従職員をかかえ、事業を展開することは、他の企業以上に厳しい経営が問われる。「なぜ事業を展開するのか、何の為の事業なのか」たえず問いなおされなくてはならない。この自己検証と自己確認が運動体としてのYMCAの在り方を決定することになる。欧米のYMCAは政府から財政的援助を受けているが、日本のYMCAは政治的にも、財政的にも自立した組織体である。今まで幾多の困難を乗り越えてきたし、現在もその厳しさに変りはない。この自らの歴史に学びながら、運動と事業の統合をはかり、自らの責任に於て組織を運営してゆかなくてはならない。そしてこの根底にあるものは何か。聖書に示されたイエス・キリストの理念である。この理念こそYMCAの最も重要な基盤であると思う。

7．ワイズメンズクラブの始まり

今月より後半は「ワイズメンズクラブ」について少々書かせていただこうと思っている。

さてクラブという組織が、いつ頃できたのか、定かではないが、一説に17世紀のイギリスに始まったと言う。一定の日時、一定の場所で、会員を限定し、集会を開き、食事や茶菓を共にしながら共通の問題について語り親睦をはかった。そして大

事なことは会員は上下の関係ではなく平等・対等の原則によってクラブ運営がなされたということである。集って語るという人間本来の、集団的行動に根ざしたものと思われる。この一般的には社交クラブと称されるものが誕生するには三つの要因があると私は考えている。第一に提唱者（リーダー）の人格とその掲げる理念。第二はクラブが生れる時代的背景。第三はそのクラブの社会性である。ロータリークラブ、ライオンズクラブ、キワニスクラブなどはその要因を満たして発足している。わがワイズメンズクラブも、その歴史をみると例外ではなかったと思われる。

1920年、オハイオ州トレドYMCAの会員獲得キャンペーンで維持会費100ドルを納めた会員でランチョンクラブがつくられた。その名をトリムカクラブと称した。そこに参加したのが若い新進気鋭の判事ポール・アレキサンダーであった。彼のトリムカクラブ結成からトレド・ワイズメンズクラブ創立へのリーダーシップと情熱溢れる奉仕によって、私たちは彼をワイズ運動の創始者としている。ポールはクラブづくりに他の社交クラブの綱領、会則などを比較検討したようである。こうしてポールの努力によって結成3年にして会員17名から75名に増加し、Yに対する忠誠と奉仕活動が活発になっていった。このトリムカクラブの名称はトレドYMCAのクラブという意味で、他の都市のYMCAが同種のクラブを結成する際、この名称を使うことができなかった。そこでポールは新しい名称、ワイズメンズクラブを考えた。これは、YMCAの“Y”の所有格Y'sを用いたもので、ワイズメンこそYMCAの人であり、YMCAの為の人であることを表したものである。このワイズ運動は世界各国に広がりYMCAに対する奉仕は勿論のこと、YMCAと共働して地域社会に、更に国際協会のプログラムとして世界に目が向けられ活動が広がっていった。今改めてワイズの特質を考えると、YMCAと共通の基盤である精神性、YMCAに対する奉仕の明確化、メネットクラブとのパートナーシップであろう。因みに日本区は129クラブ、会員数3242名（1994年10月1日現在）である。

8．日本のワイズメンズクラブの誕生

日本に初めてワイズメンズクラブが設立されたのは大阪である。加盟認証は1928年（昭和3年）11月10日、チャーターメンバー26名、チャーターナイトは翌年1929年（昭和4年）1月8日。ここに大阪ワイズメンズクラブが誕生した。当時大阪YMCAには青年会員のグループ、“タイガークラブ”と成人会員のグループ“Yクラブ”があった。それぞれ17～8名の会員で毎月一回の例会を開いていた。1927年5月、大阪YMCA奈良伝主事がアメリカへ派遣された際、国際協会書記ヘンリー・グライムスとの出会いがあった。奈良主事はヘンリーの家の客となって数日を過ごした。ヘンリーと奈良はともに29才。お互に友情を深め、ワイズについて語り合ったことであろう。奈良主事は帰国後すぐにワイズメンズクラブ設立の準備を始める。“タイガークラブ”と“Yクラブ”を合併してワイズの母体としたのである。1929年9月例会では東京転勤になる会員、布施公平の送別会が行われた。その席上「東京ワイズメンズクラブ結成のキイマンたれ」と布施をはげまし、クラブ設立を託したという。しかし、次に設立されたのは旧朝鮮の京城クラブ。1929年であるが記録がなく不明である。三番目は神戸クラブ。1930年（昭和5年）2月17日加盟認証、チャーターメンバー23名。四番目は横浜クラブ。同年12月15日加盟認証、チャーターメンバー18名。五番目に東京クラブが設立された。加盟認証は1931年（昭和6年）2月6日、チャーターメンバーは18名。（この5クラブが戦前に設立され、あとは総て戦後に出来たクラブである）。昭和初期は日本も世界も激動の時であった。昭和2年の金融恐慌、昭和3年の治安維持法改正、昭和6年満州事変が勃発。このニュースは世界に衝撃を与えた。以後日本は15年にわたる戦争への道をひたばしることになる。この年、国際書記ヘンリー・グライムスから10月5日付で電報が大阪YMCAに入った。「中国及び日本のワイズメン諸君、国際協会は満州事変を憂慮する。世界同胞主義を実現するため、諸君が平和的世論を喚起するように協力あらんことを切に望む」。これを受けて大阪でワイズメンが緊急会議を開いたがすでにワイズの力ではどうすることもできなかった。そういう時代背景の中で1939年（昭和14年）京阪神ワイズ連合例会が大阪で開かれた。参加者23名、内東京から4名が出席した。これは事実上、第一回日本区大会と見なされている。1940年（昭和15年）、ついに国際協会から離脱、各クラブは自然休会となった。そして、戦後、1947年（昭和22年）の国際協会復帰まで7年の歳月を要した。再加盟の大阪、神戸、東京に加えて新たに6クラブが加盟申請し9クラブ、会員数212名。ここに改めて日本のワイズは再出発したのである。

9．ワイズの働きについて（I）

まずIBCとは、International Brother Clubの略である。ワイズ用語では“国際兄弟クラブ”という。これは海外のクラブと国境を越えて兄弟クラブとして締結し交流を深めてゆくプログラムである。この起りは1947年トレド国際大会で日本、韓国などのワイズメンズクラブを訪問して帰ったカール・バーグストローム（世界展望サービスデレクター）の報告にはじまる。戦後間もない頃、日本を含め東南アジアでは、物資の不足や外貨事情のため、ワイズのバッヂを手に入れることができなかった。この報告を受けてアメリカのクラブは世界展望委員会を通じて海外のクラブにバッヂを送る事業がはじまった。このように初期の段階では物質的な援助に力がおかれていたが、この交流を通じて次第にクラブ間の理解と友好関係をたもつブラザークラブという考え方に発展していったのである。その結果、IBCはWOL（World Outlook 世界展望）の中の一つの事業であったが、1979年には、WOLを廃してIBCとYEEPの二つに分けられて、以後それぞれ独立したプログラムとして今日に至っている。このプログラムはクラブ間の友好的関係を永続させることがまず基本である。そのためにも相手クラブを慎重に選ばなくてはならない。まず、クラブにIBC委員会を設けて充分検討・協議されることが望ましい。また、最近では三つのクラブが友好的な関係をもつ、IBCトライアングルという考え方もでてきている。

次にYEEPとは、Youth Educational Exchange Program青少年教育交換プログラムである。これはワイズメンの子弟（高校生）を一カ年、海外のワイズメンの家庭に送り、外国の学校教育、異文化体験をさせるプログラムである。1966年、ハワイ国際大会でスエーデンのインゲマール・ワールストロームとアメリカのジョージ・グスタフソンの出会いに始まる。この国際的交換プログラムの構想はこの二人の間で数年協議されて、1972年に試験的にスカンジナビアとアメリカとの間で実行に移されたものである。その後、1974年、ワシントンDC国際大会に於て、国際会長ハリー・カミングスはワイズの公式プログラムとしてYEEPを承認し、初代事業主任にインゲマール・ワールストロームを任命した。将来のワイズダムをになう青少年、特に高校生の教育交換はインゲマールに負うこと大であり、ワイズのプログラムとして高く評価されている。日本からの参加者は海外の学校制度との違いもあって困難ではあるが、すでに20名を越えている。

10．ワイズの働きについて（II）

CSとは、Community Serviceの略。地域社会への奉仕、広く隣人に対する奉仕の意である。このCSは1969～71年に国際的な研究課題となった“Human Crisis”（人類の危機）が基礎になっている。この「人類の危機」の先見性は高く評価されたものの、1972～73年国際会長ハインツ・グラビアはCommunity Serviceと名称を変更した。次の1973～74年国際会長シャーマン・ハーモンも更に“Time of Fast”と変更したのである。国際会長が変るたびにプログラムの名称を変えることは事業遂行上、大変マイナスとなるため、日本区は国際会長の承認を得てCommunity Serviceとしてプログラムを進め今日に至っている。CSの発想の根底は“Human Crisis”であり、具体的には“Time of Fast”（断食の時）である。世界的な飢餓の問題を追体験し少しでも苦しさを分かち合うという考え方である。現在日本区では例会の食事代を節約して難民事業に捧げている。この外、CS資金として、お年玉年賀ハガキを集めて事業費にあてている。

次にEMC。ＥはExtension（クラブ拡張）、ＭはMembership（会員増強）、ＣはConservation（クラブ維持・育成）の略である。このEMCはクラブを成長発展させるための基本的なプログラムである。1960年代は、MembershipとConservationの二つのプログラムが強調されていたが、1968～69年国際会長アーブ・ジョンソンは“目標120クラブ設立”をかかげて増強に力を注いだ。1969～70年国際会長ハロルド・ウエスターバークはM. C. にExtensionを加えて新しい事業部門として設置した。その為に彼は①まず各クラブの会員増強。 ②弱小クラブの会員増強。 ③新クラブ設立のための会員の発掘と育成の三項目をかかげた。しかし、国際的にクラブと会員増強は成果をあげることができず、アメリカのワイズは創立50年を境に衰退の一途を辿りはじめた。逆にヨーロッパ、アジアにワイズの運動が拡がりはじめた時でもあった。

次にBF。Brotherhood Fundの略。使用済の切手を集め換金して国際的な交流資金をつくる事業である。BF代表と呼ばれるワイズメンの国際大会出席、クラブ訪問の旅費、滞在費として使われるものである。1930年ウィルキバール国際大会で「世界大会補助基金」(World Conference Subsidy Fund)

として創設された。これは世界YMCA大会に出席する海外代表への旅費補助として世界YMCA同盟からの要請にワイズが応えたものであった。1933年にアメリカ、マサチューセッツのクィンズィクラブが初めて古切手を集めて売った資金と、切手蒐集家でもあったアーニー・ベルが切手売上金を寄付したのが始まりといわれている。当時の資金運営がキリスト教会のビショップ制（監督制）によく似ていることからBishop's Fundと呼ばれるようになり、1968年にBrotherhood Fundと改められた。現在、日本区では使用済切手と現金の二つの方法で資金が集められ、国際協会に占める割合は33％（'94年度）である。

11. ワイズの働きについて（III）

YMCAサービス（YMCA Service）について。ワイズメンズクラブは定款に自らをYMCAに対する忠誠心とYMCAの活動を支援する団体であると規定している。ワイズ70有余年の歴史はYMCAへの奉仕と共働の歴史であったということができよう。このYMCAサービスの働きを要約すると三つにまとめることができる。第一に、社会の変化の中でYMCAの目的達成の為に方策を共に考え実現に努力したこと。第二は、YMCAの財政、会員増強、PRを側面から支援してきたこと。第三に、YMCA指導者の発見と育成に努力してきたことであろう。ではワイズの初期にはどう取組んできたのか。1949年ミネアポリス大会で初めて副区の設置が決まり、事業主任（Service Directors）が設けられた。またこの時期プログラムの開発が進み、YMCAに対して次の事業が進められた。即ち、青年事業（Youth Work）、世界展望（Would Outlook）、青成事業（Young Adult Work）、YMCA会員事業（YMCA Membbership Ser-vice）、アレキサンダー奨学資金（PWASF）であった。後1960年の初に国際協会の組織の変更、事業の見直しが行われ、1970年代にはYMCAサービスとASFにまとめられることになった。

ASFとはアレキサンダー奨学資金（Paul William Alexander Scholarship Fund）のこと。ワイズ創立者P. Wm. Alexander判事を記念して名づけられたもので、今はフルネームを用いずASFと略称されている。現在メンバーが年間千円を日本区に拠出し区の事業として管理、運営されている。その目的は将来YMCAの指導者を志す学生に奨学金を支給することにあるが、最近はボランティアリーダーや若い主事を対象に奨学金としての役割もになっている。

メネットクラブ。メネットクラブが最初にできたのは1924年3月、カナダのバンクーバであった。Y's Menetteという名称はこの時に始まったという。4年後の1928年4月には、ニューヨークのコートランド、マサチューセッツのローレンス、オンタリオのオタワに発足して4クラブとなった。1931年クリーブランド国際大会の理事会でワイズメネット運動が正式に認められメネットクラブ設立を奨励することが決定された。メネットとは「少し小さくて、かわいい人たち」の意といわれているが、フランス語のnette（きれいな、純粋な）との合成語かと思う。日本では神戸クラブの富尾ご夫妻が1961年シカゴ国際大会へ日本代表として出席され各国のメネット活動を見聞したことに始まる。帰国後、富尾夫人を中心として神戸にメネット会が誕生した。1965年には国際メネット会に登録され、当時の「メネットクラブ設立宣言証」が今も残っているという。1970年に国際協会からの要請で日本区にメネット事業主任をおくことになって、初代メネット事業主任に笈川文子メネットが選ばれた。さて、メネット活動とは何か。初代笈川メネット事業主任の言葉をお借りすると、「まったく何も無いところから創りだした」という。すべて手造りで始まった活動であったが、歴代の事業主任の努力とワイズメンの理解、協力によって活動はのび、独自の事業を展開できるまでになったのである。現在のメネットは「少し小さくて、かわいい人たち」から「強くたくましい人たち」に成長した。今後、ワイズメンズクラブとメネットクラブはお互いの立場を尊重し、よきパートナーシップが課題となろう。

12. ワイズの歴史の中に何を学ぶか

ワイズメンズ運動はアメリカに興り、北米中心に展開された運動である。いうなればアメリカの文化とピューリタニズムが背景にあった。第二次大戦後、アメリカのYMCAは世界青年復興資金を集めそのうちワイズメンズクラブから30万ドルを集めたという。アメリカ社会の経済的繁栄と国際社会でのリーダーシップが発揮された時代であった。しかし1960年代後半からアメリカの地位が次第に低下しはじめた。1966年ホノルル大会はワイズ44年の歴史の中で初めて北米大陸を離れて開かれた。この大会で国際協会の立法と機構について検討が加えられ改革案が出されたが意見の一致は

見られなかった。1968年は5年間の準備の後、シカゴ郊外オークブルックに国際本部ビルが完成し、この年“ゴールド・プロジェクト”（Golden Opportuny for Leadership Development）が採択された。1972年ワイズ誕生の地オハイオ州のアセンズで創立50周年の大会が開かれたが、翌1973年の新興国ジャマイカでは苦渋に満ちた大会となった。ワイズ国際協会の再生のために新しくできた国際本部ビルから撤退し、スイス・ジュネーブの世界YMCA同盟への移転の決断と、新しい国際憲法を制定し、機構・制度の抜本的改革であった。つい一年前、“50年、さあ前進だ！”の標語は、あまりにも、あっけなく崩れてしまった。国際本部ビルはワイズの活性化にはつながらず北米ワイズの衰退と国際会費の地域格差など多くの問題を残すことになったのである。国際協会の報告には「事務局のみが肥大して運動が浮きあがり、メンバーにとって負担がふえる一方、本来の運動の主体であるメンバーも、またその本来の目標を見失ってしまった」と報告されている。こういう中で1973年ジャマイカの理事会は連日連夜の審議の中で新憲法を採択し、自己のアイデンティティと国際性を明確にしたのである。

さて、このコラムを終えるにあたって最後に私見を述べさせていただきたい。私たちはワイズの歴史から何を学んだか。今、日本区がめざしているのは、日本区の組織の強化、奉仕プログラムの充実、財政の健全化、そのために会員の増強である。私はまったく逆の発想をする。日本区組織のシンプルファイである。クラブであるなら親睦と奉仕の原点はクラブにある。日本区の活動プログラムを整理して各クラブに返すべきである。日本区の役割は情報の伝達、調整、ワイズ思想の開発（クラブ増強）にとどめるべきであると思う。そして各クラブの日本区分担金を軽減し、各クラブは人間関係を大切にし、親睦に力を入れるべきである。奉仕あってのクラブではなく親睦あってのクラブの本来の姿にかえるべきである。その親睦のエネルギーがより奉仕の力となることを理解すべきであると思う。

最後にこの一年、多くのYMCA・ワイズ関係の文献、資料を参考、引用させていただいた。紙幅の都合でここに紹介できないが感謝を申し上げたい。またこの小文がメンバーの何かのお役に立てば幸である。

この「YMCAとワイズメンズクラブを考える」は、東京北クラブの要請でクラブブリティンに12回（1994年7月～1995年6月）にわたって書いたものである。限られたスペースで言葉の足りないところが多々あるが、ご意見や間違いなどご教示いただければ幸である。

ワイズメンズクラブにおける宗教の扱いについて

加　藤　寅　尾
（大阪茨木クラブ）

ここで、私は多くの会員を躓かせている宗教問題について、私の考え方を申し上げます。始めにお断りしますが、誤解を恐れず述べますので、信仰深いクリスチャンの方々からのお叱りがあるかも知れません。

日本区定款の第2条第2項には、「イエスキリストの教えに基づき」とある一方「あらゆる信仰の人が宗教信条の相違を超えて」と定められています。一見矛盾する定めですがここで言うキリストの教えに従いとは、どんな事かを考えて見たいと思います。ここで日本YMCAの基本原則が一つの鍵となります。そこには、「YMCAにつらなるわれわれは」の１．に「キリストに示された愛と奉仕の生き方」とあります。

キリスト教は愛の宗教だと言われています。ワイズとYMCAで言うキリストの教えとは、キリストが教えられた隣人に対する愛のことを指しています。隣人に対する愛について、聖書ルカ伝（10章25～37）において、律法の専門家の質問に対してイエスは永遠の命を得るためには、「自分と同じようにあなたの隣人を愛せよ」と答え、よいサマリア人の譬えを説いています。この譬えの中で、強盗に襲われた怪我人を見捨てた祭司ではなく、それを救ったサマリア人の商人（イエスを受け入れていない）を学ぶよう勧めています。

YMCAとワイズで言うキリストの教えとはこの

事です。若し仏教徒であれば、「仏の慈悲」とでも言うのでしょうか。ワイズもYMCAも宗教団体ではありません。キリストの隣人愛の実践団体です。その実践において一致できるならば、仏の慈悲の実践者とも協力できる筈です。従って第2条の規定は決して矛盾を含むものではありません。

確かにワイズの根底にはキリスト教精神があります。しかしそれは、宗教に関係なくすべてに通ずる人の道です。宇宙の大いなる神は、人間界の小さな違いを遥に超えて、もっと高い所から見て居られます。従って、ワイズ、YMCAにおいて、キリスト教徒、仏教徒、あるいは神道者の会員も、むしろ全てがお互い同士学び会いつつ、隣人を愛するというこの教えを実践して行きたいものと思います。

（1994年6月号　茨木クラブ会報）

ワイズメンズクラブは人を変える

菅　　正　康
（熊本ジェーンズクラブ）

ワイズメンズクラブに入会し間もない会員の皆様にとってジェーンズのワイズメンズクラブの印象は如何なものでしょうか。

①何か自分のためになることでもあればと期待して
②あるいは友人から“しつこく”誘われて、断れずつい入会してしまって後悔？
③また社会正義やボランティアなどに目覚め、何かしら役に立てばと意気込んで入会した方々と動機は様々でしょう。

かく言う私は15年前に①と②の狭間でいつ退会しようかと機会？を伺っていた。結局、根が優柔不断なたちでぐずぐずしている内に、ジェーンズクラブ設立の片棒を担ぐ羽目になり、熊本クラブからキーマンとして移籍し、たまたまチャーター会長として新クラブ創りにメネットともども関わることになった。

それまでワイズメンズクラブとかYMCAなど真剣に学んだことはなかったので、文献を読んだりして随分と勉強もし、クラブライフでは、人間関係の機微やこつなどを体験を通じて学ばせていただいた。その中でも特に強調しておきたいことは、頻繁なコミュニケーションによる信頼関係の重要性であった。

人間は、他人の存在を無くしては生きていけないし、家族、友人、組織や集団と無縁では生きていけないことぐらいは頭では分かっていても、意外と信頼出来る、あるいは信頼してくれる人間には出会わないものであると思いがちである。しかしよく考えてみると出会わないのではなく、自分からその原因を作っていることが多い。

即ち、他人に対して支配的であったり（思いやりのなさ）、競争的であったり（嫉妬深くすぐ足を引っ張る）、傲慢であったり（他人にも自尊心がある）、無関心であったり（自分によくしてくれる者以外には興味なし）、卑屈であったり（自己防衛本能が強すぎる）などが原因で、実際はそのために他人から嫌われていることが多いのである。本人はそのことに気づいておらず、すぐ人のせいにしたがるので、益々“いい人”は遠のくことになる。

日本では古来先人の知恵として、“和をもって貴しと為す”と言う価値観を共有し、何事も争いを好まない民族とされて来たが、どうも最近は、それも裏目に出て、まず自分の自己保全、自己防衛意識ばかりが目立ち、人との違いを素直に認めず、結果的に、いじめ、足の引っ張り合い、責任転嫁や不毛の争いばかりが目立つようになっている。

ワイズのメンバーになったからには、上記の否定的な関係のあり方ではなく、メンバー同士間での、積極的かつ頻繁なコミュニケーションを通じて、自ら自覚し、改善し、信頼関係を築き、他人を生かしながら自らも生き栄えるあり方を学んで欲しいものである。そうすればいつの間にか今まで1点しかなかった自分の価値が、仲間の点数も加算され5点にも、10点にもなって行く。裟婆では下手するとマイナス点になって行く人でも心がけ次第では、ワイズの仲間はプラス点に変えて行ってくれる。それがワイズメンズクラブの不思議な魅力であり、最大の存在価値と思う。

（1998年10月号ブリテン　№135熊本ジェーンズ会報）

組み合わせが秘訣

『塔組みは木組み、木組みは木のくせ組み、木のくせ組みは人組み、人組みは人の心組み』

日本キリスト教団早稲田教会牧師　上　林　順一郎
（東京山手クラブ）

奈良にある法隆寺の修復や薬師寺金堂の再建にあたり、最後の宮大工と称されている西岡常一さんが、「法隆寺を支えた木」（NHKブックス）という本の中で、代々宮大工の間で伝えられている口伝として書いておられる言葉です。

世界最古の木造建築といわれている法隆寺を、千年以上の長きにわたって支えてきた秘密は、「いかに木を組むか」ということであり、そしてつきつめて言えば「いかに人の心を組むか」ということにあったということでしょう。

この口伝では、「木を組む」ということは、「木のくせを組む」ことであると言っていますが、木には一本一本、いろいろなくせがあるそうです。右に曲がったり、左にねじれたり、上に反ったり、下の方にたれたりするそれぞれのくせをうまく組み合わせることが、建物を建てるのに一番重要なことだと言うのです。

そして、その「木のくせ」をうまく組み合わせるためには、結局は「人の心」をうまく組み合わせることが大切なことになってくるのです。

ワイズメンズクラブを支えていくのも、この「組み合わせ」、特に「人の心組み」ではないかと思います。

メンバーのなかには、いろいろな「くせ」を持っている人がいます。曲がったり、ねじれたり、反ったりという「くせ」の持主がいます。キリスト教やYMCAに関しても、いろいろ違った考えや関心を持っている人がいるはずです。

そうした「くせ」が、時に対立や不和を生じさせる原因にもなるのですが、しかしそうした「くせ」を「マイナス」と見なさないで、むしろ大切な個性、賜物として大切にしていったらどうでしょうか。

それぞれの「くせ」を認めあい、受け入れあい、そして、それをうまく組み合わせていくのです。その時、ワイズメンズクラブは多様なメンバーを有しつつも、豊かなハーモニーを生み出すことができるはずです。

この「組み合わせ」の秘訣を先の口伝は教えます。「人の心組みは、棟梁の工人への思いやり」であると。

（京都キャピタルクラブ　1993年2月号会報）

YMCAのミッションとワイズメン

日本キリスト教団早稲田教会牧師　上　林　順一郎
（東京山手クラブ）

今日お話をするにあたって、自分とYMCAとのかかわりを思い起こしながら話を始めたいと思っております。私がYMCAを一番初めに知りましたのは高校生の頃で、大阪の中津にあった予備校に、夏の間一か月ほど友達と一緒に通った時です。私とYMCAとの最初の出会いはYMCAの予備校だったわけです。

それは、わずか一か月ばかりのことでありましたが、その次にYMCAに触れたのは、実はこの三条の会館なんです。同志社大学神学部の学生の時に、何を思ってか英会話を勉強しようと思い、それにはYMCAが一番いいだろうと私なりに思い、英会話のクラスに入りました。初級クラスか入門クラスか忘れましたけれど、とにかく一番初歩のクラスに入ったのであります。その時の先生は、烏丸通りのところにあるナザレン教会の牧師さんで、名前は忘れましたがその方が英会話を教えてくださいました。

ですから予備校が最初、二回目が英会話のクラス。その後牧師になりまして、教会から一番近くにありました山手YMCAの山手学舎の学生たちの聖書研究を担当することになりました。そのことを通しまして学生YMCAとつながるようになりました。

それから東京Yの山手センターの活動にかかわるようになりまして、それ以後YMCAとのつながりは深いものになっていきました。しかしその時でも、私はワイズメンズだけには入るまい、この団体だけにはどんなことがあっても入るまいと固く心に決めておったのです。事実、長い間私はワイズメンズには入りませんでした。クリスマスにお話にいく機会はありましたけれども、メンバーになることはいたしませんでした。

それというのも、どうしても馴染めないことがありまして、その一つがさっき歌いました歌、歌はいいんですけれど、歌の途中で手を挙げる、あれがどうしても馴染めないことでした。それにとにかくワイズには横文字が多過ぎる。しかも略語が多い。わかっている人はわかっているでしょうけれど、わからない人間はまったくわからない。CSなんて言われましても、私たちキリスト教の牧師はCSというのは、教会学校（Church School）をCSと略称するものですから、これはなんだというようなことになりますし、「Yサ」なんて言ったって、掛け声か踊りのエンヤサかなんかわからない。そういうようなわけのわからない略語を頻繁に使うもんですから、どうも馴染めないのでした。

それに、山手クラブでは会のあるごとに、ニコニコといって袋が回って参りまして、なんやかんやと理由をつけて献金といいますか、募金といいますか、ニコニコと名はついておりますが、必ずしもニコニコと入れてるわけではありませんで、しかし回ってくるもんですから、お金を入れなければならない。そんなことやあんなことでワイズだけはどうしても入らんぞと思っとったんですけれども、それがどうしてかワイズに入るようになり、こうしてワイズの皆さん方の前でワイズの話をするというのも、不思議な気がいたしました。

考えてみますと私は予備校や英語学校という、YMCAの看板事業といいましょうか、一番沢山の人が触れる窓口を経て、そして行き着いたところがワイズメンズであったということです。ですから自分なりに考えてみますとワイズメンというのは、YMCAのゴールかなと考えることがあるわけです。そういうこともあり、今日は少しワイズのことを含めて、YMCAのことをお話を申し上げたいと思って参りました。

先般ある本を読んでおりましたら、最近日本のサル山に異変がおこりつつあるということが書いてありました。どういう異変かと申しますと、サルの集団というのは必ずボスがおります。このボスザルはある時期になりますと交代をいたしますが、あるサル山でこの交代の時に新しいボスの座についたのがメスザルだったというのです。

こんなことは今までなかったそうであります。ボスというのは必ずオスザルがあとを継ぐ。普通二番手あるいは三番手のサルが、次のボスの座につくわけでありますけれども、なんとメスザルがボスの座についたというのです。

専門家に言わせますとこれは一時的なことで、あとを継ぐ有力なオスザルがたまたまいなかったので、一時的にボスの座にメスザルがついたのではないかと推測しているのですが、とにもかくにも一時的にしろ、メスザルがボスの座についたということで、これは大きな異変だというのです。

これは大変興味深いことで、いま日本の社会も女性の進出の時代でありますから、女性がそういう役割や働きをするというのは当然のことといえば当然でありますし、よいことだろうと思います。ワイズメンズクラブも女性のワイズが多くなりましたし、部長さんをされたり会長さんをされたりするような女性もどんどん進出しておりますから、それは結構なことだと思います。

ところでサル山のボスになるのは三つの条件があるそうです。

その三つの条件とは、まず第一にバイタリティがあるということ。活力ですね。バイタリティがなければ指導者にはなれないわけです。しかし、元気なことは大切な条件ではありますが、バイタリティだけでは駄目です。ビジョンを持っていなければならない。ボスとしてどういうようなビジョン、方向性、皆をどうリードしていこうかという、しっかりとしたビジョンを持っていなければ、リーダーにはなれない。特に危機が起こった場合、あるいは群れが混乱した場合、ボスが一つの方向へと皆を指し示していく、このビジョンを持っていることが第一の条件です。

二番目はアイデンティティがしっかりしているということだそうです。アイデンティティというのは、なかなか日本語には訳しにくい言葉なんで

すが、要するに主体性といいますか、自己確立といいましょうか、自分が自分であることの確認ですね。自分が何に立っているのか、何を基盤としているのか、そういうことがはっきりしていることが必要で、それがなければリーダーシップはとれないというわけです。

これは人間の社会でもきっと同じことだと思います。日本はいま、政治的にも経済的にも混乱の極みにあることはご承知の通りであります。橋本龍太郎さんから小渕さんに首相が変わりましたけれど、小渕さんという人は何を考えているのか、何を言いたいのか、どういう考えを持っているのかということが、なかなか分からない人ですね。いってみればアイデンティティがよくわからない。持ってるんだろうけれども、それが人に伝わらないというような問題があろうかと思いますね。

ところでVision、Vitalityですが、頭文字はVです。このVがリーダーシップの条件というわけです。二番目にIdentityですが、頭文字はIです。このVとIを上下にひっつけますとYという字になります。YMCAのYです。Yというのは昔から元気のいい団体で、元気なだけが売り物みたいなところがありますが、しかしバイタリティだけでなくビジョンがこれから必要とされている。それは日本の社会が混沌としていく中で、どんなビジョンを打ち出すのか、どんなビジョンを持っているのか、どんなビジョンがいまの社会にアピールするのかという、そういう意味でのビジョンというものが必要です。

そしてそういうビジョンを担っていく、またそれを生み出していく一人ひとりは、自分自身がなんであるのか、どこに立ってるのか、どういう基盤を持っているのかというアイデンティティがしっかりしてなければ、ビジョンを推進していくことが出来ない。ですからこのVとIが大切で、YMCAは既にそれらをYという字の中に持っていると言えるわけですね。

三つ目ですけれども、三つ目のポイントはパーソナリティです。人柄ということです。猿柄といった方が正しいんでしょうけれども、要するに人柄が良くなければ駄目だというんです。ボスというのはバイタリティとビジョンがあって、アイデンティティが確立していて、そして人柄が良くなければ駄目なんです。要するに人間としての幅の広さ、豊かさ、優しさ、そういうものがボスとしての三つ目の条件だと。小渕さんは人柄の小渕といわれるくらいパーソナリティはいいそうですが……。

ところでこの猿柄ですが、まず女性に人気のないサルは絶対にボスザルになれないそうです。ワイズの会長さんもメネットに人気のない人はよいリーダーになれないかもわかりません。それから弱いものにたいする配慮、弱いサル、子ザル、こうしたサルに配慮の出来ないサルはボスになれないそうです。どれだけバイタリティがあってもアイデンティティーが確立していても、猿柄の悪いサルはボスになれないというわけです。

YMCAにはバイタリティもアイデンティティもあります。ところでYの字をひっくり返しますと人という漢字になります。これはパーソナリティのことです。考えてみればYはVもIもPもあるのです。さて、YMCA、特にワイズメンズのビジョンとは何か。ワイズメンズのアイデンティティとは何か。そしてワイズメンズとしてのパーソナリティというのはどういうことなのかということを少しお話を申し上げたいと思います。

ところで、立って両手を挙げますとYという字になります。この姿をご覧になって、何か連想されるようなことありますでしょうか。バンザーイをしているという人もいるかもわかりません。首を下に垂れますと、十字架にぶら下がっているキリストの姿にも見えなくはありません。しかし、キリスト教的に言いますと、これは祈りの姿をあらわしていると考えるのです。

聖書の時代の人々はどういう祈りの姿をしていたかというと、手を天に挙げて祈っていたのです。神様は上にいると考えていたわけですから。ところで聖書の中に面白い話がでてまいります。

それはモーセという人に関してですが、このモーセというのはイスラエルの歴史のなかでは最も偉大な人物の一人とされている人でありますが、彼はエジプトに奴隷状態におかれていた自分の同胞を解放した人であります。それが出エジプトと呼ばれる話になるわけであります。

その出エジプト記に、こういうことが書いてあります。モーセはイスラエルの人々を引き連れて、エジプトからシナイ半島を抜けて、そして今のイスラエル、パレスチナまで導いていくわけであります。ところがその途中には他の民族が住み、生活をしているわけです。その間を何千、何万人の人が通り抜けていくわけですから、容易なことではありません。途中宿営しなければなりません。水もいります。食べ物もいります。家畜を連れていますから青草もいります。

そうすると、そこに住んでいる民族は侵略されるんではないかという不安を感じるわけですから「通さないぞ。ここを通らないで、もっと別のところを通っていけ」というようなことになるわけで、当然争いごとがそこで起こってまいります。そのようなわけで、モーセたちもしばしば戦争をしながら、旅を続けていったわけです。

ある時、アマレク人という民族と出会い、戦争になってしまったんですね。ところがアマレク人というのはものすごく強い民族だったらしく、イスラエルの人たちと激しい戦いになるのです。戦いに負けたら、またエジプトへ戻らなければなりません。なんとしてでも勝たなければなりません。そこで、このモーセは高い山の上に登り、両手を挙げて神に祈るのです。

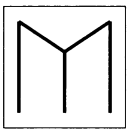
モーセが手を挙げてお祈りをしている時には、イスラエルの人々は勇気を得て、アマレク人を追い散らすわけです。ところがモーセも祈っている間に手が疲れて、手がずーっと下ってくるわけです。そして手が下ってくると、今度はアマレク人の方が勢いをつけて攻めてくる。イスラエル人は敗退していくのです。

モーセはこれはいかんと、一生懸命手を挙げてお祈りをするとイスラエル人が元気になって、うわーっと攻めていくんです。しかし疲れて手が下ってくるとアマレク人がまた攻めてくるというわけです。

そこでモーセの二人の弟子が、モーセの手が下りないように両側から手を支えたのです。支えられているもんですから、手はさがらない。ついにイスラエルの民はアマレク人を打ち倒してそこを通り抜けて旅を進めることができた、という話であります。

Yはお祈りの姿を現しているわけです。もっとも、お祈りだけで世の中、全てうまくいくわけのものでもありません。

YMCAもいま全国的に大変な時期を迎えていると聞いております。ですからお祈りしましょうと言うことになるのですけれども、それでうまくいったという話は余り聞かないんです。やはり手が疲れて下りてるんでしょうか。モーセの場合は両側から手を支える人が出てきたんですね。ところでこれをYの字を両側から支えるとこういう字になるんです。



お祈りも必要でありますけれども、お祈りばっかりではなく、両側からちゃんと支えるものが必要なんです。これがなければお祈りも疲れてくるということになります。

さて、両側から支えるものは一体なんなんだろうかと考えますと、私はその一つはミッション（M）ということだと思います。私たちが何を成そうとしているのか、自分たちの使命、ミッションを持っていなければならないということです。

先程ビジョンと言いましたけれども、明確なミッションがないところでは祈りもただの空虚な言葉になりかねない。なんのために祈るのか、なにを求めて祈るのか、どのようなものを目指しているのか、そのミッションが支え棒の一つにならなければ、YMCAの祈り（Y）も萎えてしまう。

もう一つは非常に現実的な話になりますがマネー（M）であります。私たちが活動や運動をするときに支えの一つはお金です。単刀直入に言えば財政ををしっかりとしていくということがなければ、活動というものは続かないわけです。Yを支えるこの二本の棒、ミッションとマネーがあって始めてYMCAは立つことができる。

ところで、このYの支えるタテの棒二本をヨコにつけてみましょう。すると¥という字になります。この二つの横棒が大切なんです。これがありますとしっかりしているんです。

先程申し上げましたがパーソナリティの問題、ワイズメンのパーソナリティが大切です。しかし「メネットもいるよ」という言葉も出て参りましょうから、先程のYと¥の字をひっくり返しますと、夫人となります。メネットになりますね。ワイズメネットも支える人の一人でもあるということです。

さて、これからが本論ですけれども、私は先般日本YMCA基本原則の意図するものという小さなパンフレットを書きました。日本のYMCAがこれから基本原則としているものを現したものであります。基本原則は4ページにでてまいりますが、実に簡素な、しかしよく練られた表現でYMCAがなにを目指し、なにをやろうとしているのか、そして自分たちはなんであるのかということが書かれています。この中にはいまいいました三つの点というものが含まれていると思います。

まず、日本YMCA基本原則は「私たちは」という言葉から始まります。一番最初は「私たち日本のYMCAは」という表現になっていますが、あとは全部「私たちは」という言葉で始まってまいります。この基本原則の大切なポイントは、「私たちは」という言葉で始まることだと私は考えるのです。

日本YMCA基本原則

私たち日本のYMCAは、
イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の生き方に学びつつ、
世界のYMCAとのつながりのなかで、次の使命を担います。

私たちは、
すべての人びとが生涯をとおして全人的に成長することを願い、
すべてのいのちをかけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、
一人ひとりの人権を守り、正義と公正を求め、
喜びを共にし痛みを分かちあう社会をめざします。

私たちは、
アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、
世界の人びとと共に平和の実現に努めます。

1996.6.15　第106回日本YMCA理事会採択

THE JAPAN YMCA
STATEMENT OF BASIC PRINCIPLES

We, the YMCAs in Japan, learning from the life of love and service manifested in Jesus Christ, shall carry on the following mission in collaboration with other YMCAs throughout the world.

We shall promote holistic growth of all people throughout their lives, and shall preserve and foster all life, respecting the value and integrity of Creation.

We shall strive to preserve human rights, seeking justice and fairness, and shall work to develop a society where people volunteer to share in the pain and joy of others.

Recognizing our historical responsibility to the people of the Asia-Pacific region, we shall walk forward hand in hand with the people of the world to build a world of peace.

adopted by The National Board June 1996

YMCAというのは組織として、団体として、さらには活動として存在しているものです。そのYMCAを「私たち」と呼び得るかどうか、あるいは「私たちYMCAは」という形で表現することができるかどうかということ、このことがまず大切なことではないかと思うのです。

よく知られているお話ですが、ある町にあった教会が次第にさびれはじめました。教会にくる人も少なく、教会の活動も殆どしなくなり、財政的にも成り立っていかなくなったので、牧師さんを雇うことができなくなり、ついに牧師も去っていきました。牧師が去っていきますと教会の活動はますます不活発になり建物は荒れていき、日曜日の礼拝ごとに集まってくる人も少なくなってくる。町の人々からは「もう教会は死んでしまった」と悪口をいわれるまで落ちぶれてしまったのです。僅かに残った教会の何人かの人たちも「教会は死んだ。我々の手で教会の葬儀をしよう」という話になって残った数人の人が教会の葬儀をしたというのです。

大きな棺桶を作りその中に教会のいろんなものを入れて、最後のお別れのため棺桶の蓋を開けて、その中を覗いた時、そこには自分たちの顔が映っていた、という話です。

死んだのは教会ではなくて、実は「自分たちなのだ」ということを教会の人たちは悟ったのです。そして「我々が死んでいたのだ。だから我々が生きかえらなければならない」と、彼らは自分たちこそが教会なのだという意識に目覚め、活動を始めたところ教会は力を取り戻し、多くの人が集まり、活動が活発になり財政的にも豊かに支えられるものとなっていったということであります。

「私たちYMCAは」という言葉はYMCAは私たちであり、私たちがYMCAであるということなのです。私がYMCAにかかわって、すでにながい間になりますけれども、最初の頃はお客さんでありました。予備校の時には予備校の学生でお金払ってるだけ。英会話の時は英会話を勉強するだけ。YMCAにかかわるようになっても、すぐに溶け込むわけでもありませんから、なんとなく周辺をぐるぐる回っていました。ワイズメンズの間は特にその期間が長くて、なかなか馴染めきれなかったということは、先程お話をいたしました。

やっぱり、YMCAと私との間には距離がある。ワイズメンと私との間にもなにか違和感がある。そういう時にはYMCAとかワイズメンズは、「私のこと」ではなくて、いわば他人事になるわけです。YMCAのあれこれが、いろいろ気になったり、問題を感じたり、時には批判をしたりすることになります。勿論YMCAを批判したり問題を感じたりすることは必要なことでありますが、それを「私のこと」として感ずるのと、それは所詮YMCAのことだとするのとでは、同じ批判をし文句を言う場合でも、天と地ほどの違いがあるだろうと思うのです。

「自分のこと」として受け止める時の批判や問題の指摘というのは、必ず自分自身に返ってきます。自分自身がそれに対してどのように応えていくのか、どのように責任をとっていくのかとして返ってきますけれども、しかし他人ごととして批判をし、他人ごととして捉える時にはそれは相手の責任でしかないのです。その時にアイデンティティは、YMCAの中にはないということになります。

「私たちは」という言葉で始まる日本YMCAの基本原則は、まず私のアイデンティティがYMCAに立っている。YMCAが立っている精神、キリスト教の精神というものに私も立っているということ、そのことが大切な第一点であるということであります。ワイズメンズのアイデンティティとは、「私

たちがYMCAである」と言い得るかどうか。私たちワイズメンズがYMCAの主人公であると言い得るかどうかということ、これがアイデンティティの一番のポイントになってくると思います。

このことが、いまワイズの中で大きな議論になっていることですが、今日は時間がありませんからあまりお話をする余裕はないんでありますが、結論から申しますと、「私たちワイズメンズがYMCAである」という、そういうアイデンティティを持ち得るかどうかということを、まず皆さんに伺いたいと思います。

それではそのアイデンティティというのは、どのようにして確立されていくのか。そしてYMCAの精神とは何であるのかということについては、この小冊子の中で書かれていますので、ご参考にしていただければと思います。この問題は議論の多い点でありますし、またこれからも論議されていくべきポイントでありますので、今後も取り上げて行くことが大切だと思います。

質問 1

基本理念と実際のワイズの活動を結びつけるにはどう考えたらいいのか。

質問 2

小説の聖書を読まれたかどうかと、読まれたのであれば感想を。

ホリスティック、全人的ということについて教えてほしい。

質問 3

ビジョンを生み出すヒント。

質問 4

都市型のYMCAに一人称では入りにくい。東京地区も同じく組織もしっかりしていると思うが、どうかかわっていけるのか参考になることを聞かせて。

質問 5

「愛と奉仕の生き方」を学ぶ方法をワイズの中で知ろうとすれば、どういうようなものがあるか。

回　答

「小説聖書」が評判になっておるようですが、私はとてもいい本だと思います。小説という表題ですので勝手に書いてるのかというと、そうじゃなくて非常にしっかりとした筋道を立てて書かれてる本ですから、お読みになって参考になるだろうと思います。

特に、旧約編のほうが優れておると思います。聖書はなんとなく読んでみたいと思うけれども、あんな大きな旧約聖書を頭から読むのも大変だとお思いになるでしょうから、小説聖書の旧約編をお読みになりますと大体旧約聖書、あるいはユダヤ教はどういうものなのかというものの概要がつかむことができると思います。

ホリスティックという言葉のご質問がありました。最近この言葉がよく使われて、特に医学の分野ではホリスティック医療ということであちらこちらで進められているようです。

ホリスティックというのはホロス、全体という意味のギリシャ語から来ておりまして、この言葉はいろんな意味に広がり、身近な言葉でいいますとホテルなんて言葉もホロスから来ております。

YMCAは元々このホロスということを、テーマとして持っていたわけであります。Yのマークにあります、ボディー、マインド、スピリットという三角のデザインがありますが、あそこに書かれております三つの言葉、あれはキリスト教的、YMCA的な人間観というものを非常に良く表しているものであります。

近代以降人間とはマインドとボディーが非常に強調されてきたんです。そういう人間観を持ってきたわけです。現代は特にそうであります。お母さんが子供さん方の教育のことを考えます時に、一番最初に考えますのはマインドとボディーです。塾に行かす、学習教室に行かすというのはマインドの方ですね。水泳、プール、体操教室に行かすというのはボディーの方です。とにかくマインドとボデイーということについては、非常に熱心であります。たしかに健全な肉体に健全な精神が宿るという意味では、ボディーとマインドの育成は、重要視されてかまわないわけですが、そのことばかりが強調されて、スピリットという面が失われてきたという反省が、いまおこっているわけであります。

スピリットとは何かというのは非常にむつかしい。日本人には特にわかりにくいものです。霊と訳したらいいんですけれど、霊というとなんとなくどろどろとした感じのイメージになりますので、ちょっとわかりにくいんです。霊性という日本語

を使ったりもするんですが、これも良くありません。スピリットとは人間が神から与えられたもので、人間の生命性を支える見えないものです。一方マインドとかボディとかはある程度数量化できるものです。

例えば学校の成績なんていうのはそうです。IQなんていうのはまさに数量化して表しているわけで「あの子はIQが高い」「この子はIQが低い」というような形で人間のマインドの部分を数量化していく。これはボディーも同じことです。「運動能力がどれくらいある」とか「どれくらい早く走れる」とか「跳べる」とかいうような、そういう形で数量化できるのがボディーです。

教育の現場ではこの数量化できるものが、一番重要とされているわけです。それは今の教育が持っている一つの限界だと思います。学校では数量化されることしか評価できませんから、この数量化されるものだけが強調されていくわけです。スピリットというのは数量化できないもんですから、次第にそういうものが評価されなくなる、あるいは重要視されなくなっていくというようなことが、現代の問題だと思います。

最近、岩波書店から「科学時代を生きる子供たち」という本がでました。ある女性の科学者が書いてるんですが、この方がそのことを鋭く指摘しておりまして、「科学時代と呼ばれるけれども、単にものを数量化して、効率化し、答を早く出すという、そういうことが科学と理解されてしまっているが、それは正しい意味での科学ではない」と、いってます。

スピリットというと科学とは全然別の世界といいますか、霊的なものと科学は相反するものだというように、考えてしまいます。例えば宗教と科学とか、信仰と文化とかはお互いに一番遠いところにあるもんだというように思ってしまうんですけれど、そうじゃないというのが、いま科学者も宗教者も考え始めています。

キリスト教的にスピリットというと、これはもともと神の霊という意味なんです。霊という言葉は、実は「息」という意味もあるんです。ですから、人間が生きている一番の根源的なもの、人間を成り立たしめているもの、それを霊と呼んでるんです。ですからスピリットというのは、人間としての一番根源的なもの、人間を人間として生かしめるものです。それをYMCAは正三角形で表しているわけです。正三角形はバランスがとれています。その一つが短かったり長かったりするいびつな形でなくて、バランスがとれていることによって、人間の全体性というものを表しているのです。

ミッションといっても、なかなか難しいというご質問がありました。その通りだと思います。そのミッションというのは、日本語では使命と訳していますが、日本語でも返り点を打てば「命を使う」ということになるのですが、本来は自分の命をかける事のできるもの、自分の命を使うことができるようなもの、それがいってみれば使命ということだと思うんです。おそらく皆さんがたも何らかの形で持ってらっしゃるんじゃないかと思うんです。自分の命をかけてもいいようなもの、そのために自分の命を使い尽くしてもいいようなもの。ある人はそれを仕事に見いだしておられるかもわかりません。ある人は家族や家庭に見いだしておられるかもわかりませんが……。

このミッションとい言葉は、もともとは投げるという言葉でありまして、そこから派遣するという意味になってきたわけであります。このミッションということを日本YMCA同盟基本原則の中では、三つの点で書いてあります。

一つは「私たちが全人的に成長する」ということ、先程のマインド、ボディー、スピリットという、ホリスティックな人間の回復、あるいは成長ということが、YMCAの持っているミッションなんだということです。だから知識だけが増えていったり、体だけが丈夫になったりするのではなくて、スピリットも生かされていくような、そういう人間がYMCAの目指す人間観であり、さらに社会や家庭というところにおいても、そのことは非常に大切なことではないでしょうか。

最近、NHKが「荒れる学級」という放送をいたしました。これはものすごく反響が多かった番組ですが、「荒れる学級」なんていうと、私など中学校のことかと思うのですが、今では小学校三四年の学級の授業が成り立たないんです。そのテレビを見て愕然としましたけれども、昔の中学生の問題が、いま小学校におこっているのかというような思いと、幼稚園がそのまま小学校三四年のクラスになってるんじゃないかという両方の思いがしたんです。

幼稚園というのは好き勝手なことをしております。その幼稚園児がそのまま小学校の三四年の子供になってるって感じを受けました。なにが問題なのかということを、簡単にはいえないことなん

だろうと思いますけれども、私は一人ひとりの子供をどのように見、どのように受け入れ、どのように指導していくのかという、基本的な人間観に問題があるんではないかと思わされています。全人的な成長ということをもっともっと考えなくては、特にスピリチャルな部分、スピリットの部分をどう大切にしていくのかということは、YMCAが持っている一番大きな使命だと思います。

二つ目は正義と公平であります。今の世界には本当に正義と公平があるんだろうか、ということです。本の中で私はそれを三つの言葉であらわしました。一つはフェアー（Fair）ということです。それからケアー（Care）、三つ目がシェアー（Share）です。

私たちの社会は本当にフェアーなのか、そして公正な社会であるのか、またお互いにケアー、相手のことに配慮をし、相手に対する心づかいを持っているのか。そしてシェアーです。皆で分かち合おうとしているのかどうか、こういう三つのことがやっぱり重要なことではないかと思います。

とりわけ、私はこれからはシェアーが非常に重要だと思っています。世界の国々がお互いに分かち合おうとする心が大切ではないかと思います。そういうものがミッションの中味としてあるんじゃないかと思います。

三つ目が平和の問題です。これは政治にからんでしまうような面がありますから、いろんな議論やいろんな立場の違いというものは当然でてまいります。政治の問題になりますと意見の違いが明確になって、そんなこと取り上げるとYMCAが分裂してしまう。ワイズメンズは仲良しのグループだからそんな議論はもうしないでおこう、触れないでおこうというのがいままでありました。

私はなにも対立することや分裂することがいいといってるわけではありません。ただ私たちは歴史の中で生きてきたし、これからも歴史を生きていかなければならないのです。その意味で私たちは歴史から離れて生きることはできませんし、歴史に背を向けて生きることはできません。やっぱり歴史と向き合っていかなければならないのです。

向き合う時には、態度や立場が違うことがでてきます。しかしそれも向き合う姿です。ただ一番いけないのは背をむけたり無視したり、無関心であるということです。歴史に向き合っていくことが大切です。そして向き合うことは、必ず私たちの責任が問われることになります。

このことは避けるわけにはいかないと思います。と同時に、向き合うことの一番重要なことは未来に向き合うことです。私たちの責任は過去に対する責任も、勿論大切ですけれども、未来に対する責任がさらに大きな課題だと思います。

未来とは私の未来であると同時に、私たちの子供の未来ですし、また孫たちの未来でありますし、人類の未来です。この未来に対する責任をとるためにどう私たちは歴史に向き合っていくのか。

地球環境の問題とか、私たちの世界の平和の問題とか、未来に対して私たちの視線を向けた時、私たちが考えなければならないこと、そしては果たしていかなければならないこと、責任を示していかなければならないこと、そういうことがでてくると思うんです。

それが、ミッションの内容ということです。それを私たちがどう担っていくのか、ワイズメンとしてそれをどう考えていくのかということが、大切なこととしてあるのではないかと思います。

ワイズメンズのよいところは仲のよいこと、人と人との出会いが豊かに行われていること、これはワイズメンズあるいはYMCAの一番の宝です。ですから私は仲のよいこと、仲良しグループであることは大賛成であります。いつも喧嘩しているような団体には誰もきゃしません。楽しいこと、そして皆で仲良くしていこうということは、これはワイズであれ、YMCAであれ、教会であれ、これは基本であり大切なことだと思います。

しかし、仲良くするということは、突き詰めて言えばお互いが本当に向き合って責任を取っていこうとする、責任的に生きていこうということにもなるはずなんです。

あの人が大きな問題で困っている、あるいは悲しんでいる、苦しんでいる。そういうことを全然気がつかないで、ただ「やーやー」と言いあっているだけの仲良しが、仲良しなんだろうかと思うわけです。この人がなんかの事で泣いていることがあって、「やーやー」とお互いに肩たたき合って「じゃーさいならー」というだけで、本当に仲の良いということなんだろうかということを考えたら、私はそうではないだろうと思います。

ですから仲がよいこと、楽しいこと、出会いの豊かさがあるということはお互いをもっと分かち合うことができる、先程言いましたシェアーという言葉になりますけれども、そういうことを通して生まれてくるのが仲良しということであり、楽

しいグループということであり、そしてそれが、私を支える力ということだと思っております。

最後になりますが、私は「友」という漢字が好きなんです。アメリカ人の宣教師たちは漢字を覚えるのに、自分なりのイメージをつくるんです。ある宣教師はこの「友」という字を見て、これは人が十字架を負っている姿だとイメージしたというんです。ちょっと我々では考えもつかないことですが、そういわれてみれば確かに十字架があって、人がそれを背負っているように見えなくはないんです。これが「友」ということだと学んだというのです。私はそれは正解だと思います。

「友」というのは、漢字の成り立ちから言いますとこういう字からきているんですね。「ﾐ」これは手と手で支え合うという字です。その「友」という字がさらに発展すると「共」という字になるんです。両手でもってお互いに支え合うという、「友」と「共」は同じ語源です。ですから「友」であるということは、手と手で支え合うこと、更にお互いに支え合って「共」ということになっていくわけです。私はワイズメンズのグループ、仲間というのはこういう姿であり、これがワイズメンズの使命ということになると思います。

使命とは、「やらなければならない義務」と考えると、そんな使命はつらいことになりますから長続きはしません。やっぱり、楽しくて、そしてそこに喜びを感じ、自分の命をそのために使ってもいいということを見いだすことができるようなもの、それがワイズの使命であるといっていいんではないかと思います。それをみんなで見いだしましょう。

（参考資料）　YMCAスタディシリーズ16
「私たちの使命　日本YMCA基本原則の意図するもの」日本YMCA同盟編

（1998年9月15日　ワイズメンズクラブ京都部　YMCA・ASF研修会　京都三条YMCA）

奉仕クラブとしてのワイズのあり方

中央大学法学部教授　小　堀　憲　助

キリスト教・YMCAとの関連

キリスト教の理解を義務としてワイズの中に持ち込むのはよいが、キリスト教の伝道の場所としてワイズを見るのは偏狭である。キリスト教の伝道ということだけなら、教会で行なえばよい。

キリスト者がどうしてYMCAを作り、その延長上にワイズを作ったかを明確にしなければワイズ運動の展開は広がらないし、クラブの発展はない。このことはキリスト者の側からだけの考えを持つのではなく、キリスト教が教会中心だけでは解決のつかない問題を、キリスト者の問題意識の中に、20世紀になって自覚させられたということを整理しておかないとワイズダムは本当の意味でのワイズダムにならない。

奉仕クラブは世俗性の強いものだけに、奉仕クラブの側からの考え方を尊重しなければならない。このことがキリスト教を否定するものとなり、奉仕クラブ論をとればキリスト教をとれず、キリスト教をとれば奉仕クラブ論をとれないとするならば、見方、考え方が狭すぎる。むしろ、両者は両々相まってお互いが影響し合いながら運動を展開していくのが理想であろう。

20世紀初頭から起こった奉仕クラブの延長上に、ポール・アレキサンダーによる、YMCAに奉仕するクラブとして作られたワイズも、他の奉仕クラブと同じく非常に世俗性がたかいが故に、キチッとした奉仕クラブの原理的な意味を自覚しておかなければならない。

奉仕クラブとは、地域社会に存在する一握りの職業人の親睦のエネルギーを何等かの形で社会改良のエネルギーとして、放出出来る親睦団体であり、それなりの社会的存在の基盤をもっている。

その中で、メンバーは自己修練を積み、心の良質化を計るわけである。これをもっと純度の高いものに、たかめられたら宗教の世界に入ってしま

うわけだが、それ程迄、純度が高くない世俗性の強い親睦団体が奉仕クラブと定義づけられる。だから、偏狭な宗教論を持込むのはクラブ崩壊の危機につながると言わなければならない。

奉仕の対象がYMCAであるから、一般社会に対する活動が出来ないと言うことはない。社会のニーズをつかむ活動を行なっているのは、まぎれもなくYMCAである。このニーズをつかまずしてYMCAの存在意義も薄れてくる。ワイズにあってもYMCAとともに、そのニーズのおもむくところ世の為、人の為にエネルギーを放出するなら、それこそ立派なYMCA奉仕につながるのである。

親睦は奉仕の根幹であり、そこから出たエネルギーがYMCAに向けられ、社会に向けられ、しかも個人の業としてそれが自然になされて行けばよいのである。YMCAとワイズとの関係も、それぞれが独立した働きの中で対等のパートナーシップとして国際に於いて認識され、関連づけられているのは非常に大切な事柄である。それは哲学的にも管理論的にも異った領域を持っているから、必然的によいパートナーシップであるべきであろう。この対等のパートナーシップということは極めて大切なことである。

親睦の意味するもの

親睦の本質は、自分たちも豊かになって行くが、豊かになる反射的な効果で、その親睦によって培ったエネルギーを世の為、人の為につくし昇華させて行くことである。まして、誠実で人に対して思いやりのあるメンバーが、その恩恵をメンバー同志の中で温存するのでなく、社会改良のエネルギーとして放出するのは必然的なことである。

一人一人がワイズダムに対する社会からの要請を自覚して、「親睦のエネルギーを他の団体では果たすことの出来ない様な形で、社会改良のために放出する」ことを、個人の働きとして出来るところから、実践して行かなければならない。

そして、クラブに集る親睦は日常生活の職業において規律する原則と同一でなければ世の為、人の為にはならないことは明らかであろう。親睦に集まったものが、それぞれの場所に心を持って帰り、その心で社会生活を過すところから奉仕の種がまかれるからである。

クラブ内にあって、メンバーは親睦のうちに自己改善の努力を計らなければならないが、そのためには人数が多くなければ親睦のエネルギーを活用することは出来ない。最低20名以上のメンバーがなければ有効なクラブとは言えないのではないか。

メンバーの質的要素

親睦の輪に加わる人の資格の一つに、ワイズにあっては一業種二会員制がある。これの社会学的な意味をはっきり認識しておかなければならない。その理論的根拠は、20世紀における一般的奉仕クラブというものが、地域社会に於て、一握の職業人による親睦のエネルギーをもって、他の団体では果すことの出来ないような社会改良のエネルギーを出すことを期待されているからである。

「一握の職業人」の原理的な解決は、良質の職業人をメンバーにすると言うことである。量的なものをはかる場合は数の多い方がいいが、質的なものをはかる場合は、数の多いのがいいとは限らない。良質の人は多い方がいいが質の悪い人は奉仕クラブには存在しない方がいい。では一人の良質の人で世の中にどう役立つかと思われるかもしれないが、それではイエスの修業が2000年にわたって、何十億の人々にはかり知れない影響を与えているのを、どう解決するのか――。この問題を考えていただきたい。

ところで、良質の職業人とはどの様な人を言うのか？　自分と他人とを峻別しないで、目に見えない因縁で結ばれていることを自覚できる人――自分をとりまくすべての人達との相関関係で自分がなり立っている因縁を自覚するために生涯教育があり、まわりの人達によって教えられていることを認められる人でなければならない。自分とは他人にとっての必要条件であり、他人とは自分にとっての必要条件である。他人に己を投影し、己に他人を投影する――それが自己研鑽につながるのである。

メンバーになるための条件としては、少なくとも以上のような事柄が、多少なりとも自覚出来る人で、すでに良質な要素を持った職業人を選び、この人達による教育的親睦――精神的教育によって――を高め、自分の業界では体験出来ない次元の高い知的交流によって、新しい発想が生まれ、自他を峻別しない心の絆を大切にした連帯感ともいうべき「ソリダリティ」の認識とその質的向上をはかって行くことが大切である。

奉仕の実践の方法

奉仕クラブに於けるメンバーは、メンバー各人のマイナス面をあげつらうようなことをするので

はなく、自分を磨くためだけに集まるのであり、こゝで啓発された純粋な心で奉仕の実践活動を行なうべきである。しかもそれは原則として一人で行なう。一人で行なうのは恒久管理が出来るが、団体で行なうことには限界性がある。良質の職業人のそれぞれのメンバーが仮に一つづつ異った事柄に対して自分の責任に於て、因縁の熟したものから出来る範囲で行動した時、社会がそれを求めていれば大きな力となり、奉仕クラブに所属しない多くの社会人に与える影響が大きいし、それこそ奉仕クラブのメンバーに求められているものである。

団体奉仕の絶対性を信じてはいけない。

ワイズメンとして自覚すべきこと

奉仕をするためにメンバーがまず行なわなければならないのは、自分が奉仕哲学にもとづいて、企業人ならば企業の管理を実行して、それで余ったエネルギーを他にむける所からはじめるということであろう。即ち、自分の職業、企業の中に奉仕の理論を組み立てる必要があるということである。

奉仕クラブのメンバーは、クラブ内に於いては世俗の論理を持ち込んではならないし、常に対等の関係である。

良質な人のエネルギーは多数の人に尊敬と信頼をもって信奉され、慕われるのは社会哲学の根幹であるが故に、ワイズにかかわる全てのリーダーたる立場の人は、少なくともワイズの理論を原理的、体系的に理解して強いリーダーシップを発揮する必要がある。

例 会 の 重 要 性

奉仕クラブに於ける例会のあり方は非常に大きな要素である。

定期的に良質の職業人が目的意識をもって出席し、自己研鑽の場として自覚し、多くの異業種のメンバーと接触する。このことが家庭に、社会に良い影響を及ぼすところに奉仕クラブの存在の意義と価値があり、そのことを自覚したメンバーのエネルギーが更に次の実践となって実を結ぶのである。

強調したいのは、倫理性の裏打ちのある人の和は自由競争の世界においても、最も強く勝利するということである。ワイズメンズクラブのメンバーは人生の第一義を自分の力によって開拓して行くのであり、思想のセールスマンでなければならない。自己の限界性を知ったものが他者と会う例会を、あるいはクラブを生涯教育の場としてとらえ、心の啓発をし合うためには少なくとも一週間に一回は会うのが理想である。親睦の内に相和する生活態度と、相和した後の生活態度とが同一の哲学理論で結ばれた精神的親睦の効果的な演出の場としての例会を、より楽しいものにするのはメンバーの義務でもある。

奉仕クラブの存在根拠

奉仕クラブのメンバーはすべての思想信条の自由を保障され、その対等性とすべての思想に発展の契機を認めなければならない。異なった思想信条の交流によって次の良質な思想が生れてくるものである。そしてメンバーが地域社会に出た時には、奉仕クラブのメンバー以外の他の人達と上下の思考の差別を認めてはならない。

社会制度をとりまく受皿である地域社会の人達が、みな幸せを求める権利を持っている以上、この地球上のどこかに不幸な人がある間は、我々は決して幸せにはなれないんだと言う、暖い純度の高いソリダリティによって結ばれ、有限である我々の生命が有限である質のいい次の社会の担い手である生命に、無限につなげて行き心のかよった地球社会を作ると言うところに、直接的にかかわりあっているのであり、またそう言ったことの指導的な社会機関たり得るのが、奉仕クラブの存在根拠でなければならない。

ワイズメンズクラブはその思想性と倫理性に於て、他の社会奉仕クラブ以上の素晴らしいものをもっており、それだけにもっと発展すべきだし発展させることが出来ると思う。どうかそのことに自信をもって、これからのワイズダムにご精進いただきたい。

（1981年8月　日本区EMCシンポジウムより）

ワイズメンの賢い話

澤　　正　弘
（名古屋クラブ）

『ワイズメンズ』とは賢い人と言う意味であり、賢い人の定義づけとして次の「五訓」と「五練」がある。

〔五　訓〕

1．賢い人とはあらゆることから何かを学びとる人
2．幸福な人とは心身の健康な人
3．剛い（つよい）人とは自分自身に克つ人
4．富んだ人とは足るを知る人
5．立派な人とは精進努力の人

〔五　練〕

1．あせるな
2．いばるな
3．おこるな
4．くさるな
5．おこたるな

社会造りは、結局、人づくり。これからは、「財テク」ではなく「人テク」をやっていこうではないか。

（名古屋クラブ　1994年4月号会報）

クラブ強化への歩み　ワイキチを育てよう

宍　戸　良　美
（奈良クラブ）

国際憲法にある綱領を改めて読み直した時に、今迄歩んできたワイズメンとして、今更ながら反省するものである。

故、鳥居一郎氏（名古屋クラブ）に数年前お会いした時「最近は本当のワイキチはいない。経済的に恵まれているため、金品を中心にしている。体を張っての奉仕の心がないように思われる」と語られたことが思い出される。

「ワイキチ」の用語の始まりは、地域社会への奉仕、YMCAへのサービスを目標に体を張って働く人、又毎月の例会皆出席、部会・区大会への出席、新クラブのチャーターナイトへの出席等、何時、何処でも顔を合わせるメンバーを指しているのだと思います。

私事ですが、小生がクラブに入会した当時は奈良にYMCAを設立するとの大きな夢を持ち、メンバー各人が献身的に努力し、奉仕をして目的を達成し、その後はYMCA活動にも各人がそれぞれの職種を生かして、Yの事業に身体を張って奉仕したものである。今日の各クラブの現況を見ると、入会時の誓約が守られているか、例会の皆出席、その他の事業に率先して参加しているだろうか。ともすれば議論を重ねることに重点を置き、又経済援助をすれば事たれりと考えているのではないか。

故、奈良伝氏は小生に「入会した以上は、例会その他の会合に皆出席の義務を果すことを忘れないよう」注意され、今日迄42年間皆出席出来たことに喜びを感じます。

故、鳥居氏の「ワイキチ百草」134のコメントの中の一つに、「Yに魅せられて」Yへ来ると、

①みんなの気持ちがよくわかる。
②きっと何かを考える。
③きのうのことを省みる。
④明日への力が湧いてくる。と言った人がある。

「卒業のないワイズメン」高浜虚子は「一を知り、二を知らずなり、卒業す」と歌った。学生は卒業するが、ワイズには卒業の2字はない。一を知り、二を知り、三も知りたし、ワイズメン。若さの秘訣ここにあり。鳥居氏はワイズメン40年歴、誰言うとなく「ワイキチ」と呼ばれる人であった。

単なるワイズメンではなく、多くの仲間から「ワイキチ」と呼ばれるように、議論を重ねるだけ

でなく、如何に多くの人々のために尽くすかであることを、今一度、考える時期に来ていると思われる。

（滋賀蒲生野クラブブリテン　1994年4月号　ワイズの〇　№36）

LEADERSHIP IN Y'SDOM

鈴　木　功　男
（東京クラブ）

1．コミュニケーションでワイズは生きる

日本では、学校を卒業して会社に入ると、一番はじめに教えられることは「あいさつ」です。

この挨拶の上手下手で新入社員の評価はまず決まってしまいます。次に教えられることは「ホウ・レン・ソウ」です。日本語で、野菜のホウレン草と同じ発音のところがおもしろいのですが、これは食べるホウレン草ではありません。

日本語で、「ホウ」は「報告」、「レン」は「連絡」、「ソウ」は「相談」、それぞれの言葉の初めの音だけを順位関係なく3つ並べたものです。

これらは、会社の日常の仕事をする上で、大切なこととして教えられます。つまり、コミュニケーションの善し悪しが会社の業務にそのまま影響する訳ですから、効率を追求し、信用を大切にする企業にあっては一番基本的なことなのです。この報告、連絡、相談、は部下から上司へ向かってなされるべき義務として徹底的にしごかれます。

「報告」は仕事のプロセスや結末をはっきりさせ、責任を明確にさせるために必要なことです。「連絡」は小さな連絡ミス、連絡漏れでも重大事故を引き起こしかねませんから、おろそかにできません。「相談」は一人の考えよりも、3人の知恵のほうがより確実さを増します。

私が、3カ月の新入社員教育が終わって配属されたばかりの頃、大きな声で、しかも頻繁にこれをやったものですから、上司からしかられてしまいました。「こまごましたことを一々言うな」「ポイントを要領よくまとめて簡潔に言え」などとやられました。なかに、意地の悪い先輩がいて「相談」に行ったがために、かえって問題が複雑になり、逆にお荷物を背負わされてしまったようなこともありました。これは、良く解釈すれば教育的な配慮があったのかも知れませんが、その先輩には二度と相談しようと言う気にはなれませんでした。

このような経験から、コミュニケーションはワイズにおいても全く同様、或いはそれ以上に大切であると思っています。中でも指導者に頻繁に寄せられる「相談」については特別な思いをもっています。

マタイ11章30節に「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽い。」とあります。このような聖句の持ち出し方をして気が引けますが、相談にくる人の心理をよく考えることがあります。それは、なんとか問題を解決したい、自分の肩の荷を軽くしてもらいたい、と思って来るのですから、誰でも肩の荷を軽くしてあげることが出来たらいいなあと思います。誰からでも気軽に相談を持ちかけられる人はきっと立派な指導者に違いないと思っています。

そしてまた、「ホウ・レン・ソウ」は、何も下の者から上司に向かってだけのことではなく、特にワイズの中にあっては、指導者にとってもメンバーにとっても同様に大切なことであると思っています。

ワイズダムの発展は良いコミュニケーションがあって初めて可能になります。

2．自発、自律はワイズの命

私がこれから述べようとしている事柄は、一般的な事もありますが、多くの部分は先輩から示された、あるいは体験したことを整理してみたものであって、理論や体系づけられた学問と言ったものではありません。また、日本のワイズダムの中にあって影響を受けていますから、他の地域や国では違うという面があるかも知れません。しかし、ワイズダム発展の根幹に関わるリーダーシップと活発なクラブ活動のあり方と言う面では共通しており、充分皆さんの参考にしていただけると思います。

私たちのモットー“To ackonowledge the duty that accompanies every right”の根元には自発性

の存在を見逃せません。ワイズ運動は自発性、自律性が出発点となっています。

また、国際憲法の「綱領と目的」第1項は、ワイズ運動のよって立つ基盤を明確にするもので、世界27,000人の同志共通の願いとして、言わば「精神共同体」を形成していることを宣言しています。したがって、そこには一般社会や企業に見られるような身分の上下関係や命令、服従の関係は存在しません。

しかし、一人一人は独立したボランティアではありながら、組織を作り、民主的な手続きの上にさまざまな役割をもうけ、それぞれのレベルでのリーダーシップを立て、望ましい過程を追求しながら世界大の運動体を形成しています。この成り立ちの意味を聖書からはっきりと学ぶことができます。

ローマ人への手紙12章4節～9節

「一つの身体には、いくつもの肢体があるが、すべての肢体は同じ働きをしていない」これはクラブの単位においても、部においても地区、地域、国際、いずれのレベルにおいても全く同じことが言えます。

ここに、ただのボランティア団体とは違う、ワイズ独特のリーダーシップの在り方、つまりメンバーの自発性を重んじる伝統が培われて来ていると思うのです。

3．指導者のタイプ

まず、一般的なことを簡単に触れてみましょう。

指導者のタイプを見るときにいろいろな観点から分類することが出来ます。これらは経営の How to ものの本に出ていることですが、列挙してみます。

A．ある分類では

①管 理 者 型：権威的、指示発令的

②役　割　型：強い義務感

③同　志　型：民主的、援助的、

B．別の分類では

①専　制　型

②放　任　型

③民　主　型

C．また別の分類では

①甘やかし型

②強　制　型

③敬　愛　型

これらは皆さんよく承知の事ですから、細かく説明することは省きます。そこで、私はあなたのことを「理想クラブ仕掛け人」と思って話を進めます。

4．理想のクラブ像を考える（求心力を高める為に）

ワイズには独特の活動があります。BF、Extension、IBC、TOFなどさまざまなプロジェクトを展開しています。これらの活動が活発に行われることがワイズの発展につながるのですが、ここでは一歩踏み込んで、それらの活動を展開するベースになっているクラブの基本的な体質そのものに目を向けてみようと思います。「理想的なクラブ」とはどんなクラブか考えてみたいと思います。その目的は以下のとおりです。

①皆さんが区理事として地区の運営に当たる訳ですが、実際には各個クラブの活動があってこそ地区の運営が成り立っています。そしてクラブ一つ一つの質の高いことが結果的には全体を引き上げることにつながるからです。つまり、求心力を高めることによって、外へ向かって働く遠心力も同時に高められる事になるからです。

②したがって、あなたがどう言うタイプの指導者であるにせよ、「理想的なクラブ」とはどう言うものかをはっきりとイメージしておくことが必要です。何処に向かって歩こうとしているのか、解らないまま歩きだすような事のないようにするためです。

③そして、理想的なクラブの姿をはっきりと描いて見る時に、逆にリーダーシップはどうあったらよいか、輪郭がはっきりと浮かび上がってくるのではないかと思うからです。

《A．良いクラブの規模》

①各年齢層のバランスが良い。

（若い人、女性も入りやすい、発展性、永続性）

②職業層に偏りがない。

（同質性と異質性のバランスが良い）

③クラブ、地域の状況に見合った人数がいる。

（20人は意志疎通、まとまりから見て一つの活動単位）

《B．良いリーダーがクラブ運営を始めるまでのプロセス》

①歴史の貴重な一時期を、責任をもって預かると言う意識が明確。

（定款、国際憲法、ポリシー、歴史など良く知る）

②クラブの目的、方針、ビジョンをはっきりともつ。
③前任者、先輩の考え方などの特徴をよく捕らえ、クラブのイメージを明かにする。
④自分がリーダーとなって達成すべき課題は何かを把握する。
⑤達成すべき課題の優先順位を明かにする。
⑥メンバーについて、良く知りつくす。
⑦前任者から資料、記録、申し送りを確実に受ける。
⑧自分の考えをクラブ会員に述べ、方針を明かにして了解を求める。

《C. 良いクラブの特徴》

①クラブライフを楽しんでいる。善意が生きている。
②会員相互の理解度が高く、良い交わりがある。
③全員が共通の目的意識をもち、クラブのイメージがはっきりしている。
④個人としてもクラブとしても、成長し続けている実感がある。
⑤積極的な協力関係がある。(リーダー等の呼びかけにすぐ応える)
⑥自己中心的でない。(クラブ内だけでなく他とのつながりにおいても)
⑦支配関係がない。
⑧主導権争いがない。
⑨クラブ内グループがない。(特定会員だけ固まらない。オープンマインド)
⑩会員が相互にリーダーシップを発揮できる。
⑪活動が充実し、停滞感がない。
⑫プログラムのバランスが良く、頻度が過剰でない。
⑬費用の支出のバランスが良い。(飲食費、活動費、クラブ維持費、など極端な偏りがない)
⑭楽しんで目標達成に協力している。
⑮クラブ運営の役割の任期は1年。終わったらまた普通の一会員にもどる。(人事の固定化がない)
⑯予算管理など妥当性があり、メンバーに過度な負担を強いることがない。
⑰開放的である。YMCA、他クラブ、他の外部との積極的な交流・活動がある。

《D. 良いクラブの会議》

会議の品質がクラブの体質に反映する。
①相互啓発されている。
②だれでも参加したくなる。
③民主主義が根付いている。
④相手の話を終わりまで良く聞く。
⑤意見は率直に充分に述べられる。
⑥堂々巡りでなく効率の良いディスカッションをする。
⑦議論は激しく闘わせても、人格攻撃的でない。議論を楽しくする。
⑧少数意見も大切にする。
⑨少数派も気兼ねをしたり、摩擦を避けるために安易に問題を処理しない。
⑩広い視野で考える。(或いは本質中心主義)
⑪各種人選には、会員に了解されたポリシーと基準がある。
⑫発言の質が高い。
建設的、論理的、実際的、洞察的、創造的、啓発的、協調的、共感的、積極的、責任的、誠意的、率直、冷静、謙虚、勤勉、傾聴的。

《E. 良いクラブのコミュニケーション》

①内容の良い、スピリットの効いたブリテンをタイムリーに発行している。
②全員の連絡が密である。
③情報が早く確実に伝わる。(Region, Districtなど外部からなど)
④クラブの主張、活動状況など外部へよく発信される。

《F. 良いクラブの活動評価》

クラブの目的に沿って目標が立てられ、計画が立てられ、実施された後、なにもしないで次の行動を起こすのは良くありません。その理由は……
①目標通りに計画が進められたか確認がなければ、目標の意味がない。
②次の目標設定、計画立案にあたって、有力な示唆、改善の資料となる。
③評価の作業そのものも楽しいクラブライフである。

☆評価の目的
①「目標→計画→実施→達成度確認」を通して、目標の数字だけでなく、会員の欲求がどれだけ満たされたかを把握する。
②一つの目標に向かって行動するプロセスそのものを大切にする。
「結果良ければすべて良」ではなく、プロセスそのものがクラブ活動であるから、ワイズリー

な進め方を尊重する為に率直な評価をする。

☆評価の内容

①長期の展望

②現時点でのクラブの質と量（人、財、時間）

③役割分担の適性

④活動の内容について

活動そのものが一つ一つクラブの目的に向かい、それがクラブのイメージを作り上げていく。

- 目標が現在の実力に見合っているか、高望みしていないか。
- 目標が抽象的すぎたり、漠然として手掛かりがつかめないか。
- 間口が広すぎたり、欲張りすぎたりしていないか。
- どの会員にも手の届く範囲で、共通理解として受け入れられているか。
- マンネリ化していないか。
- 参加率はどうか。（プログラム頻度、所要時間、との関連）
- プログラムの傾向に偏りはないか。
- 会員の満足度はどうか。
- 親密度、相互啓発度の向上はどうか。（リーダー養成の土壌）

⑤クラブ運営について

- 特定の人が実権を握っていてグループを思いのままに動かしていないか。
- 人間関係が固定化していないか。
- 形式化し過ぎていないか。
- 会員の自発性は助長されているか。
- 委員、役員の選出方法は適切か。
- リーダー、委員、会員の間に壁や、距離はないか。
- 委員や役員の役割はきちんと果たされているか。
- 会員の総意が生かされているか。
- 企画力、判断力、実行力、とりまとめ能力はどうか。
- 伝達、記録、報告は生きているか。
- 広報力はどうか。

以上のような評価がきちっとなされれば、問題点を発見し、次への課題として生かす能力が高いはずです。このような良い体質をもったクラブはBF、E、MC、TOF、その他いかなる事業でも自発的に自律的に活発に進められるはずです。そして向上心、自己改善意欲の旺盛なクラブは、イメージも良く認められ、その地域でのリーダーシップが備わって行きます。

ここにこそ、「管理なき管理」の理想像を見ることができます。

今あなたに託されているクラブを、限りなく「理想クラブ」に近づけて行く仕掛け人は、まさにRD、あなたです。その仕掛けを工夫するのもあなたです。

5．期待される指導者像は？

以上のような理想的なクラブに対して、現実にはギャップがあることは確かです。しかし、この理想像をはっきりと脳裏に焼き付けることによって、あなたはリーダーとしてどうあるべきか、イメージしやすくなります。

また、現実とのギャップはマイナス要因として考えるのではなく、クラブ活性、発展の重要な手掛かりとして生かすことができます。あなたはそうしたクラブへのサポーターとして、或いはナビゲーターとして重要な任務につこうとしています。そこから先はあなたの開拓者精神が、あなた自身の問題として立派な成果へと導くでしょう。

クリエイティブなリーダーの資質を列挙しておきます。

1．問題発見力・洞察力

事実、或いは変化の状況から的確に問題を発見する。ビジョンを明確にもつ。

2．情報収集・伝達力

ワイズダムの歴史、国際憲法、国際情報、その他文献を良く知り、各種データなど変化情報を収集、評価、整理し、タイムリーに適切に伝達する。

3．企画創造力

問題を解決するための企画、創造の発想能力。

4．意志決定・実行力

創造的なプランを具体的タイムリーに実現できるよう決断、実行する。

5．統率力

本質を良くわきまえ、ともに歩く一体感をもって会員が楽しく参画し、目標達成に喜んで努力する動機付と取りまとめる能力。

☆　あなたをリーダーとして選出した皆さんの願いがあなたを支えています。

「理想クラブ仕掛け人」の出番です。成功を祈ります。　以　上

（1993年10月14日　アジア地区次期理事トレーニング）

THE INDUCTION CHARTERは語りつづけています

鈴　木　功　男
（東京クラブ）

Ⅰ．まえがき

①THE INDUCTION CHARTERは、新会員個々の入会式に用いる「入会式文」と、新クラブ国際加盟の際の式辞「国際加盟認証状伝達式式文」とを共用にしています。

これは、新会員一人が入会するのか、新クラブ誕生により集団で入会加盟するのかの違いだけで、伝えようとしている事柄は変える必要がないからです。

②では、伝えようとしている内容は何でしょうか。一言で今流に云えば「遺伝子情報」そのものであると云えましょう。つまり入会によって、今までとは異なる「ワイズマン」と云う新たな人種に生まれ変わる為に必要な「何か」。それがワイズスピリットと云う遺伝子であって、それが組み込まれなければ何事も起こらないからです。この遺伝子こそが国際憲法第2条「綱領」に示されているものであり、その際立った特徴を発揮する遺伝子情報はこれであると教えているのがこの式文です。

また別な表現をすればこの遺伝子情報は価値判断の基準ともなるべきものを示唆し、私達の進むべき方向と道程を示すものとして重要な働きをするものでもあります。

③入会・加盟したいと望む者は、このワイズ・スピリットを欲し、その日から遺伝子情報が我がものとなっていく過程に加えられることを喜びとし、それを希望したのです。もしこの遺伝子情報が正しく伝えられなかったり、欠陥が生じた場合には、個人としても集団としても異ることを信じる結果、ワイズ運動そのものの発展に問題が生じます。

④歴代の理事、先輩諸兄が苦心し、意を注いだのも実にこの点にありました。そして、常に彼らが発した「原点に還ろう」と云う掛け声は、単なる誘導の表現に過ぎない、何を指しているのか分からないと云った漠然としたものではなく、「綱領」に立ち、「入会式文」に戻り、吟味・点検し、ワイズ・スピリットを再確認しようとする、立ち返る場所をはっきりと示した掛け声であったのです。

リーダーは正しい情報を伝える義務と責任があります。正しい情報をどのように伝えるか、それが彼らの重要な任務だったのです。

⑤人の世は変わります。しかし、変わってはならないものは何か、それを見分け、見通す洞察力をもたなければなりません。

私たちは、個人の問題と共にワイズと云う組織そのものの健全発展の両面（実は一体の表裏）を大切にするが故に、ワイズ運動の原点が示されているこの入会式文について、今一度吟味してみたいと思います。

Ⅱ．式辞文について

1．式辞文そのものについて概観してみましょう

(1)「式辞」は国際からどのようにして伝えられ、どのように使われるのでしょうか

☆加盟式について

①「式辞」は新たに理事が就任する前に、他のマニュアルと一緒に必ず国際から届けられます。常に正しい情報が間違いなく理事を通じて伝えられることが期待されているからです。

②「加盟認証状伝達式」に於いて、「認証状を手渡す際の式辞」として理事によって朗読されます。国際の権威ある行為として行われます。

☆個々の入会式について

③日本区から配布されている日本語訳式辞によって、クラブ会長が朗読し、国際の権威ある行為として行います。

(2)「式辞」の構成はどのようになっているのでしょうか

①導入

②国際憲法第2条綱領・ガイドライン201
③ワイズメンズクラブの目的
④ワイズメンズクラブ会員としての心構え
以上を受け入れる意思表示をして後、会員となることが公に宣言されます

(3) 式辞はどういう役割を果たしているか列挙してみましょう

①国際協会への加入であることを明確にしています。
②入会者の決意表明です。
③協会の会員になったことを宣言します。
④全世界の会員が全て同じ式辞によって入会します。
⑤この事によって全世界のメンバーの連帯が期待されています。
⑥然も、この連帯は歴史を貫いて実現されます。
⑦クラブとしても一会員としても生涯の指針となります。

(4) では、入会することによって何が与えられるのでしょうか

①全世界27,000名の仲間が一挙に与えられます。
②YMCAマンとして、YMCAの歴史も、機構組織も、奉仕の場も機会も一挙に与えられます。先輩の築いて来た無限の財産が一挙にあなたのものになります。

2．式辞は何を伝えようとしているのでしょうか

通読するだけで分かりますが、式辞の中に述べられている特徴ある5つの言葉からその意味を探ることによって、全体像理解の一助としたいと思います。

①「意味を確認する」
②「モットー」
③「イエスキリストの教えに基づき」
④「主事」
⑤「理想主義」

(1)「意味を確認する」と云うこと

なぜ、意味を確認するのでしょうか。
「意味を確認する」と言う言葉の中に既に価値観が含まれています。

ある価値観をもつと云うことは、ある立場に立つということです。どの立場にも与しないということはアイデンティティをもたないことと同義的です。

ワイズが或る価値観の下に結び合わされているからこそ意義があります。そして、その結び合わせているものが何であるかを明確にするために、式文は以下縷々述べる訳です。もし、私たちの考えや行動が無意味なものであったとしたら、何も大仰な儀式も、組織も、存在の意味がなくなってしまいます。あるいはその意味が別物であるならば何もワイズメンズクラブでなくて良いのです。

別な捉え方をすれば、今まで自覚されず、何の脈絡も無く、自然発生的と言っても良いような考え方や行動があったとすると、一見同じ現れ方をしていても、意味を自覚したときのものとは本質的に異なるものであることを気づかせようとしています。

例えばBFを見てみましょう。このプロジェクトがスタートした1931年、ビショップ・ファンドと呼ばれていたことは、ご承知の通りです。教会団体のビショップ資金になぞらえて命名され、その後、古切手の収集売上げが加わるようになりました。これは、北米のワイズが自分たちの為にではなく、海外から多くのワイズを招くための働きに大きな意義を見つけ、盛んに行ったのです。これが国際的に広がり、ポイントを競うゲームのように定着しました。

ここにまた別の意味、つまり価値の無い古切手が価値あるものに変えられて行くところに意味を見いだしたのです。

そして、そればかりか、その意味になぞらえるように、ワイズダムに関わることによって、価値の無い自分がいつしか或るものに変えられていっているのではないかと、ふと、かすめるものがあることに気づく。その過程がワイズ運動なのではないか、言わば限りない「問いかけ」と「意味の発見」の過程そのものがワイズ運動であると。

こうした意味のある所にこそ私達のアイデンティティーがあるのではないでしょうか。

(2) モットー「強い義務感をもとう。義務は凡ての権利に伴う」

ワイズマンなら誰でも知っているモットーです。ポール・アレキサンダーは1922年初の国際憲法草案の段階から入れていました。いかにも

判事らしい言い回しです。

現在も、このモットーは言葉としては頻繁に発せられ聞かされてはいるのですが、実際にはこの意味がどのように私たちの中に受け継がれ、生きているのでしょうか。正直のところはっきりしません。単なる言葉だけのことで終わってしまわないようにしたいものです。

では、私たちはこのモットーを具体的にはどのように受け止めたら良いのでしょうか。

第1に、民主主義の根幹をなす事柄です。

第2に、組織を確実に維持発展させるための必須要件です。

第3に、常に具体的です。結果的にですが、言行一致へと導かれます。

「権利」と云う言葉は「自由」と云う言葉と置き換えられます。私たちは自分の自由を限りなく拡張して行けば隣の人の自由とぶつかったり、犯したりする事になることを良く承知しています。ここに自分の自由を大切にするのと同様に、隣の人の自由を認め守る。それと同時に、自分の自由を自分が自発的にコントロールする「権利と義務」の関係が発生する。私たちは、これを自明のこととして受け止めています。

この関係は多人数を擁する組織となると、益々曖昧なものでは済まされなくなります。ここに民主主義と云う、みんなの話し合いで事を決め、進めて行く形が成立します。

ワイズダムにおいては、権利・義務は難しい事の代名詞ではなく、体の中に染み込んだマナーとして生き生きとしているのが相応しいと言えます。

では、ワイズの活動に於いて、この権利・義務が或いは自由が先ず最初に、そして頻繁に出くわすのはどこででしょうか。それは「話し合い、会議、協議」の場です。

このようなことをポール・アレキサンダーの指摘として佐藤邦明さん(東京むかでクラブ第23代理事）から聞いたことがあります。ある時、BF代表を決める際に、或るメンバーが自分の主張を通そうとしましたが、では、その主張の根拠は何かと問われたとき、はっきりと応答出来ませんでした。つまり、彼はBF代表に推薦されるべき実績が無かったのです。即ち義務を果たしていなかったのです。ポール・アレキサンダー存命の頃の実話です。

私たちの間でも良くあることですが、自己中心的な主張や根拠不明の発言があります。この場合、その主張や発言が集団の中で価値をもつためには何が必要でしょうか。それはその主張を裏付けるはっきりした根拠、もしくはその主張の元となった事実を明らかにする必要があります。それが義務と呼ばれるものです（これが実は、「協働思考」を成り立たせる必須の要件で、しかも参加意識の向上にも寄与し、より質の高い考察・意志決定へと導くキーポイントです)。

「民主主義は面倒なものよ！」それは何かと言えば、手続きの問題であるとさえ言われる所以です。これに関してならば、我が国は民主主義後進国と言われるかも知れません。役員会、代議員会などの議案の扱い方一つ取っても、正しい取り扱いが要求されるのは、集団を正しく導くための権利でもあり義務でもあるのです。

このように、このモットーは単なる飾り物ではなく、私たちの中に生きて働く活動原理となっていることが望まれています。

(3)「イエスキリストの教えに基づき」とはどういうことでしょうか

「イエスキリストの教え」ということを端的に言いますと「聖書を通して示されたキリストの愛」と言えます。別な云い方をすれば、「神と人との関係」そしてそれに導かれて「人と人の関係」はどうあったら良いかを聖書は教えてくれているとも言えます。これは、既に信仰を与えられたものにも、未だ信仰に入っていない人々にも別け隔て無く、恵みの言葉として与えられているものです。

私たちは正に人と人との関係のうえに成り立っている集団に属しています。その集団の中に在る個々人が外に向かって関わりを持つとき、何を基盤として関係が成立するのでしょうか。自己中心的では無いと云うこと、本質中心主義であると云うこと。つまりゴールデンルール「隣人を自分のように愛しなさい」(マルコ12・31)に示された人間関係の本質的な基盤が意識・無意識を問わず在るからです。

日常、実際の場面を垣間見ただけでもこのことがすぐ分かります。ワイズマンらしい関わりの仕方が自然になされています。会員歴が古い、新しいは問題ではなく、ワイズスピリットに満ちた新人、先輩は先輩で勿論いぶし銀のような味な輝きを見せてくれます。それは何だ、説明

しろ云われても言いにくいのですが、「薫りのようなもの」とでも云いましょうか、ほんのりと漂ってくるものが在るからです。

或いは、「握手一つでも違う」と云えばほとんどの人が納得出来るのではないでしょうか。だれもが実感として手の感覚の中に記憶しているはずですから。この手の中に自分の心も相手の心も包み込んで交わす握手。日本区大会の時、国際大会の時……ワイズマンは誰でも「この感覚を」ワイズ以外の人達にも伝えたいと思っています。これは極く自然の心の働きです。「分かち合える確かな何か」がある……

ワイズマンが他とは違う秘密の中身、それは「人の自己実現の為にチャンスを提供し、支える事によって自らの自己実現がなされて行く、共に歩く世界」実はここにあるのです。これが兄弟愛に結ばれた世界を築き上げる決め手でもあるのです。

もしも、ワイズと云う集団がクリスチャン人口100%ならば「綱領」のこの文章は無かったでしょう。信者・未信者ごちゃまぜになっていることを前提として、全く新しいワイズマンと云う人種がここに在ると云う、その存立基盤を明確に示しているのがこの綱領です。

しかもYMCAの結合の基準「パリ基準」と同じベースに立っていることを明らかにすることによって、YMCAとのパートナーシップの、云わば決意表明の裏付けとしています。これを憲法の最重要部分に位置付けているのは私達の誇りでなくて何でしょうか。これが、栄光あるバック・ボーンとして私達を限りない発展へと導いてくれる原動力となっています。そしていつの時代にあっても変わりない私達の進むべき方向をはっきりと指し示してくれています。

この方向に進もうとする私達の努力そのものが「イエスキリストの教えに基づき」と云うことではないでしょうか。

(4)「主事」とは何をする人のことでしょうか《パートナーシップの要》

①原文では主事さんのことに触れています。

“The secretaries are professionals, trained specialists whom we employ to supervise our work……”

先ず第一に気づくことは“We employ”です。何か奇異に感じる向きがあるかも知れません。つまり、今の私達には、私達が直かに主事さんを雇っていると云う感覚が無いからです。しかし私達がワイズ入会と同時にYMCAの会員になっていますから、結果的にはそうなっているのだと云うことが頷けます。

次に気づくことは“to supervise our work”です。「主事はわれわれの事業を管理するために……」とあります。日本語で「管理」と云いますと、ただ座っていて帳面でも付けると云うような、お役人的なイメージを受けるかも知れません。しかし、スーパーヴァイズするその中身は何か、機能的な面を考えてみますと、「指導、助言」をすることによってその方向性を整える働きがあります。

ちょうど、教育分野で「指導主事」が、カリキュラム等教育方針に指導助言を与えるような働きを考えると、この場合は良くマッチした理解が得られます。

②我が国では、1980年代半ばを過ぎると、主事さんとワイズとの関係が急速に変化して来ました。それに追い打ちをかけるようにそれまでの「担当主事」の名称は「連絡主事」へと変わりました。

どう云う変化が起こったかと云いますと、スーパーヴァイズする主事さんは姿を消し、ただYMCAの行事の予告をしたり、募金集めのお願いをしたりする連絡係へと移行して行きました。これは、日本語の持つ意味「連絡」を正しく反映した、それ以上の何物でもない結果によるもので、ネイミングの威力をはっきりと見せつけた一件でした。

この「スーパーヴァイズ」を中心に、私の体験の周辺から考えてみます。

③私が直接関わりを得ることの出来た主事さんの中で、真のスーパーヴァイズを実行した方々の代表的な方だけ、お名前を揚げるのをお許しいただくならば……（敬称略、年代順）

東京関係では、永井三郎、木本茂三郎、齊藤総衛、齊藤實、小林道彦、本間立夫、羽鳥直之、井口延。同盟関係では、宮崎幸雄、本行孝司、後藤邦夫、吉永宏。他Y関係では、吉村恭二、高谷泰市等、まだ他にもたくさんお名前を揚げることが出来ます。

木本茂三郎は威厳を以てワイズを叱る事の

出来た気骨のある人でした。中でも齊藤総衛、齊藤實、本行孝司の三人は「産婆術」の上手な使い手として筆頭に揚げることが出来ます。両齊藤に共通するのは一度捕まると話が長くなることです。

これは、一旦「産婆術」をかけると完結するまでの応答が一巡しないと意味をなさないからです。「産婆術」と云うのはソクラテスが応答のステップを通して「気付き」のチャンスを与えることにより青年達を育てた、あの仕方のことです。

④先輩ワイズ鈴木謙介、坂村友三等が身直な指導を受け、その先輩から私が影響を受けた、云わば「孫影響」として考えれば、奈良傳の名を揚げない訳にはいきません。奈良傳は日本ワイズ運動の50年を、熱誠をもって指導し育て上げた主事でした。

奈良傳が最初に抄訳として入会式辞をまとめたのには或る意味を汲み取ることができます。それは、奈良傳が日常的に指導し喋る内容は、ことごとく入会式辞の中身を奈良傳流にして伝えていたからです（奈良傳の子息、奈良信はユーモラスな語り口で名を馳せたのですが、彼のネタもほとんどがこの「入会式辞」と“History of Y'sdom”からのものです。あの「奈良信ブシ」がもっと聞かれてもいいのですが……）。

また奈良傳ばかりでなく、当時の主事さん達はワイズとの関係を本質的に提え、それを彼らの体質としていましたから、例え入会式辞の一言一句を、字面として知っていなくても、結果としてその内容が実態化されていました。

その上に、「ワイズの心得」とか「メンバーシップサービス手引書」「ワイズフーヅ」等が、抄訳の不足を上回ってかなり補っていたことも見逃せません。したがってこれらのバックグラウンドを考え合わせると、抄訳でも充分にその役目を果たしていたと見ることが可能になります。

⑤YMCAのカンパラ原則に歩調を合わせるかのように、1974年に新国際憲法、75年に新定款が発効しますと時代は新たな展開を見せ始めます。79年に奈良傳を天に送り、日本のワイズは中心的指導者であった主事を失います。

1981年「YMCAワイズ・パートナーシップの原則」が締結されました。その頃佐藤邦明、奈良信を始め多くの先輩方は、日本では全く必要のないことと思われ、これによって逆に変な事にならなければ良いがと懸念されたくらいでした。（当時、小生はこのことについて余りよく分からなかった。）確かにその頃の日本では、YMCAとワイズは間柄を確認すると云うことすら思いつかないくらい、一体感がありました。

一方、75年にいったん日の目を見た「完全訳・入会式辞」は、いつの間にか別の「抄訳・入会式辞」となり、しかも奈良傳からは孤児のように取り残され、一人歩きを余儀なくされます。

そこへ来て、スーパーヴァイズする担当主事さんがだんだん姿を消して行きます。マニュアル類も移り変わり「抄訳」を補うことから後退して行きます。

そうなるとどうでしょうか。「抄訳」はその存在のバックグラウンドを失ってしまいます。それでも尚十分にその働きを続けることができるのでしょうか。

⑥ところで、昨今「もっとYMCAと緊密になろう」と理事が訴えていますが、これはどう受け止めたら良いでしょうか。そう叫ばなければならないほどの関係になっていることの現れなのでしょうか。少なくとも、先輩方の懸念が的中したとは考えたくありません。確かに、日本区と呼ばれるワイズ上部機構とYMCA同盟とは、さまざまなファンドや働きを通して連携をもっています。ローカルのクラブも所属YMCAへのファンドや活動を通して連携をもっています。

では「もっと緊密になろう」という中身は何でしょうか。単なる向上心的な表現ならばともかく、そう云わせてしまう実態があるのかも知れません。

たしかに、ファンドの金額は年々上昇していますから、数字の上では問題は無さそうですが、もっともっと金額を増やそうと云う意味だけで「もっと緊密になろう」と云っているのでも無さそうです。

幾つかある見方のうち一つに絞って結論を

試みてみますと、「一体感」に達しないもどかしさがあるのではないか、と云うことです。YMCAには今やワイズ以外のクラブ活動が消滅し、ワイズしか頼りにできるものがないと思っている現在、わずかながらも、とにかく資金を出してくれる所と云う認識も一つの要因となって、YMCAと云うより主事さんの意識の中に変化を起こさせた結果だと見ることは出来ないでしょうか。

一方ワイズの側を見れば、YMCAを支えるのはワイズだけであると云う錯覚が視界に変調を来し、ワイズ中心の見方をしてしまう結果、判断基準の乱れが生じ、一体感を構成仕切れない何かがあると感じさせてしまうのかも知れません。

⑦YMCAとワイズのパートナーシップとは一体何なんでしょうか。

「パートナー」と云うからにはAとBは対等であるはずです。この対等がくずれたところにはべつの名称がつけられなければなりません。

具体的に、パートナーシップが行われる場面を思い描いてみましょう。

ア．ワイズがYMCAにお金を出す。

イ．YMCAがワイズに奉仕の場を提供する。

ウ．ワイズがYMCAに人材を送る。（とはいってもYMCAの会員ですが）

この他にもまだあるかも知れませんが、貿易収支のインバランスにも似た状況がYMCAとワイズの関係にもあるのではないか点検してみる必要があります。

「YMCAとワイズとは別個の団体である」とする「パートナーシップの原則」の表面的な表現に引きずられて、要らぬ遠慮か、あるいは自己規制かはともかく、YMCAはワイズに対してスーパーヴァイズすることを忘れてしまったかのように見受けられます。

いや、そうではなくて、ワイズがYMCAのスーパーヴァイズを遠のけてしまう要因を無意識のうちに積み重ねてしまって来ているのかも知れません。

そしてその結果、ワイズの多様化、判断基準を構成仕切れないまま結論を急ごうとするあせり、それに対するYMCAの対応の戸惑い、それが一体感に達し得ない状況を生み出していると見るのはどうでしょうか。（とは云え、どんな断面をとっても「YMCA＝ワイズ」であってはいけません。）

⑧真のパートナーシップを模索しているとしたら、原点にもどってみましょう。

「原文・入会式辞」で変わらない方向を示している「スーパーヴァイズする主事」にヒントを得てはいかがでしょうか。まず手初めに、単なる「連絡主事」ではなく、グループダイナミクスなど専門的な訓練を得ているノウハウを、日常的にどこのワイズにも提供することから始めてみてはいかがでしょう。

ボランティア活動の隆盛が、さまざまな思いをもったメンバーを作り出します。それをワイズ運動として一つにまとめ上げて行く基盤作りは、「ワイズと主事さんの重要な協同作業」となっていくことでしょう。

「パートナーシップの要」は身直な「主事さん」にあることを銘記しましょう。このように、幸いにもこの入会式文は、日本のワイズに「良いスーパーヴァイザー」の必要を気づかせてくれています。

⑸「理想主義」とはどういうものなんでしょうか

1）ポールアレキサンダーは頻繁に「理想主義」ということを云っています。

私達はそれを漠然のままか、あるいは右から左へ聞き流してしまう傾向があります。この入会式辞の他に役員就任式辞にも、役員に期待される特質として「I」で始まる4つの言葉の第1番目にIDEALISM「理想主義」を上げています。

この「理想主義」とは一体どう言うものなのか、まず百科事典で見てみましょう。

①「道徳的、社会的理想の実現をひたすらに追求する立場。理想だけを真の実在とし、現実と妥協することなく、自分の犠牲を顧みないで、理想の実現を追求する主義。」↔ 現実主義

別の事典では

②「ある究極目的或いは価値の実現を目指し、どこまでも努力していく精神的態度。また、人間性の限りない完成可能性を信じ、最高の人格的価値を実現しようとする道徳的志向。」

2）ポールアレキサンダー達に影響を与えたと思われる理想主義を訪ねてみましょう。

①彼らに影響をもたらしたと見られる時期を特定すれば、19世紀末期～20世紀初頭にかけてです。いちばん影響を受けやすい彼らの青年期がこの辺に当たります。

②その思想は、誰による、どういうものか推理を働かせるといくらでも広がって行きますが、そこそこにして的を絞ってみます。
当時の倫理的思想傾向からたどって行きますと、日本で言うドイツ観念論とも言われる理想主義ではなく、イギリス理想主義運動（T. グリーン、E. ケアド、G. S. モリス）と、その影響を受けたJ. デューイ（1859～1952）の名が浮かび上がって来ます。

③そこで行安茂著「デューイ倫理学の形成と展開」を開いてみますと、不思議にもポールアレキサンダーが言ったり考えたりしたことと、ぴったり符合してしまいます。そして、これが現在のYMCAの基本的な考え方とも共通し、それどころか、アメリカのビジネス、政界、あるいは現実的だと言われるクリントン大統領にすら、この考え方の影響があることに気づきます。

3）では、これをテキストとして斜め読みしてみます。

《理想主義者が思考する時、彼の中ではどういうことが起こっているのでしょうか》

理想実現に向かう過程そのものが理想的であること。

これは、「結果よければすべて善し」ではなくて、結果に至る過程そのものが理想的なステップを踏んで行く。

①理想は、我々が環境に適応して行くのに必要ないくつかの可能性を前もって示してくれます。

②理想によって目的が明確化されていますから、それに至る取るべき手段として、多くの可能性の中から一つを採用し、他を排除する価値判断の尺度ができます。
これは同時に評価の尺度ともなっています。

③価値判断は、どんな場合においても比較なしには行われません。したがって、選択した理由の説明と同じく、拒絶した理由も明確です。

④価値判断において大切なことは、現在の行動を、将来において達成されるべき目的や満足との関係において評価することです。
つまり、常に、ある目的の展望の下になされます。

⑤目的はまだ実現されていませんから、イメージするしかありません。しかし、それが一つの重要な価値として自分を動かし、思考、欲求、努力の対象となります。
このような目的は自己を統一することができます。

⑥最も充実した活動と言うのは、自己と行為とが統一された活動を行っている時です。
どんな行為も本人の注意を吸収するのでなければ、完全にはなされないことは明らかです。注意が集中している状態においてこそ自己実現の理想が可能になります。
現在の行為の他に、ある目的を立てることは自己分裂を起こさせる結果になります。

⑦共通の目的をもつ自己と他者は共同体を作ります。そして共同体を満足させる行為によって自分自身を満足させることが出来ます。言わば一心同体的といっていい関係が出来ます。
このような過程において共同体の中で個性を実現することが出来ます。

⑧目的に向かって完成されつつある現在の過程は、絶えず完成し、成熟し、洗練する永続的過程の中にあります。その永続的過程そのものが理想主義者ワイズにとって重要な意味をもち、その永続的過程こそがワイズ運動と言えます。

《理想主義者は「連続性と相互作用」で考えます》

①何がワイズを成長させるのでしょうか
→理想的自我は未来の視点から見ています。ここに可能性としての自我が、現在までの習慣的にある自我に働きかけ、これを修正し、新しい自我へと発展させる動機となります。より低いレベルから、より高いレベルへ、しかも、もとの要素を全く排除してしまうことなく、これを生かす方向において発展させます。

②何がいったいワイズと言う共同体を形成させるのでしょうか
→自我が自己中心的状態から関心を拡大す

る時、自我を拡大させることになります。これによって他人の要求や期待を、自我の視野の中に入れることができる自発的感覚が備わって来ます。ここにワイズ運動と言う目的を共有することが可能な状態ができます。つまり共感的態度が生まれ、共同体を形成していくことが出来るようになります。

③何が分かちあいを成り立たせることが出来るのでしょうか
→ある個人のある行為を判断する基準と、他の個人の行為を判断する基準が一つであれば、それが客観的基準となり、共に分かち合うことができるようになります。

④何が価値判断を確かなものとさせるのでしょうか
→目的がその尺度となりますが、多くの可能性（選択肢）の中から、さまざまな分析、比較、シュミレーションを通して熟慮の機会をつくります。この過程を通して価値判断を確かなものとさせます。

⑤何が私たちを動かすのでしょうか
→理想や目標は、想像を通して生まれます。それが思考と行動に転換されて、もろもろの可能をつかむ連続作用を起こさせます。自己も環境との関連において理想的目的に合わせて絶えず再形成される過程に取り込まれます。ここに、常に前進する人間達に特有の開拓者精神となって働く習慣が根付きます。

この開拓者精神がワイズを動かし、ワイズ運動を発展させます。

☆以上「理想主義」を宇宙ロケット並の速さでみて来ました。私たちのさまざまな体験とオーバーラップするものがここにあることに気づきます。こうしてみますと、理想主義はなにもポールアレキサンダー達だけのものでなく、私たち自身の中にもう既に、無意識のうちに入り込んでいたものであることに気づかされます。そして、理想主義は時代の遺物のように、あるいは私は理想主義者だなんて恥ずかしくてとても言えないと思っていたことが、実はそうではなくて、時代を貫いて、つねに新しい資質を生み出し続ける態度なんだと知らされます。

ポールアレキサンダーは、ワイズ運動の絶えざる発展の秘密をここにみていたのかも知れません。ジョン・デューイはこの展開を経て、やがてキリスト教信仰とかみ合わなくなって行くのですが、わがワイズ運動はその一番の根本に信仰があることを、誇りに思わないではいられません。

Ⅲ．むすび

加盟入会式辞も役員就任式辞もポールアレキサンダーの手になるものと伝えられています。読めば読むほど思いが広がって、興味あるものをいっぱい含んでいるのが分かります。

ポールアレキサンダーは、ワイズ運動が自分たちのひざ元を離れて世界に広がって行くさまを思い描きながら、この式辞に精一杯心の丈を注ぎ込んだのでしょう。しかし、この運動が彼自身に所属するものではなく、見知らぬ所へ離れて行くべき、一つの命をもった客体として見ることが出来た故に、十分な配慮を、云わば持参金のように持たせたとさえ感じさせます。

やはり、ここにワイズスピリットの原点が凝縮されてあることを改めて知らされます。常に原点に帰ろうと云う叫びのあるときには、必ずその後に来る跳躍のためのスプリングボードのことを意味しています。日本のワイズダムが爽やかにより豊に成長を続けるためにはどうしてもYMCAのスーパーヴァイズが必要です。YMCAとワイズの発展の秘密をこの式辞は静かに教えてくれています。

先輩たちと、まみえることのないであろう後輩たちとの間にあって、いま私達は何をしなければならないか、自らの問が発せられていることを知ります。これが新たな意味の発見へとつながることを念じつつ……

（1994年9月2日）

（参考文献）
RDマニュアル
日本ワイズ運動史
History of Y'sdom
ワイズメンズクラブの心得書（訳・森田薫　1969）
Club officers manual
メンバーシップサービス手引書
ワイズフーズ
デューイ倫理学の形成と展開（行安茂著 以文社刊）
聖書　［以　上］

バ ラ ン ス 感 覚

鈴 木 功 男
（東京クラブ）

ワイズのする事を煎じ詰めると、「しゃべる」「たべる」「うごかす」の3つの動詞になります。このバランスが良いクラブはクラブ運営が上手だと言っていいでしょう。そう云うクラブはきまって感受性が豊かです。

これらの動詞を派生的に見ていくと、「聞く」「歌う」「飲む」「考える」などがあります。みんな当てはまりますね。

では、これらの行為から生まれるものは何でしょう。楽しい、満足、心を打つ、まじめ、ユーモア、優しい、思いやり、共感、やる気、一体感、などいろいろあります。まだまだ上げることはできますが、そのどれもが感受性に関わることばかりなのは面白いですね。

具体的、TOFを見てみましょう。これは「たべる」から派生した「たべない」です。この「たべない」から生まれるのは何でしょうか。直接的には一食を割いた結果生じるお金です。しかしお金だけでしょうか？自分を他に置き換えて生じる気持ち、共感、連帯感、等です。

では、このお金は何だったのでしょうか。もともとは、この一食によって自分の体を作り、自分の血となるべきものであったのです。それを、他の人の体となり血となるべくして捧げたのです。つまり自分を捧げたのです。そして、持てる者がもたざる者に慈悲を垂れると云う単なる一方通行の行為ではなく、「捧げる」という行為によって「連帯」という双方向の世界の中に送り込まれるのです。ここに、このプロジェクトが多くの共鳴を得る秘密があります。

「たべる」―「たべない」から日常のクラブライフを見ると、我々のバランス感覚はどういう答えを出してくるでしょうか。

これに続くバランス談議は皆さんでどうぞ。「インプット」と「アウトプット」の視点はいかが？

［了］

（滋賀蒲生野クラブブリテン　1993年8月号　ワイズの〇　№28）

新しい年、1989年の初めに強く感ずる事ども

名誉理事　鈴 木 謙 介
（大阪センテニアルクラブ）

「国際」はもう古い。人間（人類）からの思考や発信の時が初まったとしたら、国際ではもう通用しない。我々はもう地球時代にあるから、その視点から価値判断や価値の追求が主体的に行われねばならない。何故か？

この地球は一つという意識と核の戦争がおきると世界が滅亡するということを誰もが感じている。それが昨年あたりから米国とソ連とが互いに、和解、イラン、イラク戦の終結、アフガニスタンからのソ連の撤退、キューバ軍のナミビヤ撤兵、大国（米、ソ、中国、EC、日本）がそれぞれ持つ問題を相互の意図的接触や交流をいやおうなく行って自存を計ろうとするが、それは相手方の、或は他の状況から影響されずには解決しない。もうこういう時代に入ったのであると見て良い。

こういう背景と方向に向かっているとき、一国一国の政治というものは人を絶望させる。これは日本だけでもない。政治というものはこういうものだと思ってしまえばそれまでだが、こと対外的（外交、経済政策）問題はますます困難さを皮肉にも増大させる。日本の例を見ると、この未曽有の豊かさに到達して、国際的に経済大国といわれて、国際的援助、贈与が要請され世界の舞台で最大に近い働きをしているが、受ける側からは必ずしもこれが喜ばれていない。東アジアの範囲に限っても、その傾向が著しいのは我々日本人にとって絶

えざる違和感の連続である。今頃になってこの様な代償を払い続ける不運は如何にその原因の根が深く激しかったかの証明だと思ったらよい。古い日本というものに、この機会にもう一度思いを致してみたい。勿論もはや戦後ではない。第二次大戦が終わってから、もう45年近くにもなって、その間の我々の歩みも併せて省みるのは、これ又大事なことであろう。

さて、ワイズメンは、今どうなっているのか！私見によれば、クラブにこもって、むかしの古いものから脱することに遅く、ひとりよがりで、YMCAからも、社会からも余り問題にされないで、いたずらに時間を空費しているのではないか。ランチョンクラブというカラにこもってしまって運動体としての新鮮、インパクトが欠けて行きつゝあるのではないか。いまワイズメン内部の真剣な討議が辛抱強く行われていかなければならないのではないか。そして短い時間の、一部の雄弁力に偏った結論に急ぐことなく、納得性のある結果を生み出さねばならない。

我がセンテニアルを厳しい眼で見ると、決して優等生とはいえない。古い言葉だが、原点を見つめること。そして世界の情勢に眼を開いてこの新しい時代の価値観に即してクラブの立て直しを計っていかないと自滅するおそれが無いとはいえない。それではこれからどうすればよいか？

1. 入会した時の感激や誓約を思い出そう。それはむつかしいことではない。月1回の例会は早くから自明の事。予定をうまく組んでおく。メネットさんの協力を得ておく。できるかぎり夫婦で参加する。
2. やむなく欠席のときは代例会か、近隣のクラブでメークアップを計る。第2例会にはなるべく全員が出席して、全体の計画や歩みを知っておく。
3. YMCA（社会奉仕センター）との良い関係の維持に努める。YMCAの側からも、もっと手や足を出してほしい時がある。互いにやっていることを知らせ合うことが上手でない。
4. 世界の、アジアの、日本区の中西区の、他のクラブで起きていることを面白く知らせ合うこと、そして特にクラブのメンバーの家族（メネット、コメット）と他の国の、他クラブの家族ベースの交わりを促進すること。IBC－YEEPを追求し実行する。トライアングルを生かしているか。
5. EMCは形式的、数字的、みせかけのことに必ずしもこだわる必要もない。一人一人がよいワイズならばそれで自らEMCは好くなる。

以上は自由な、いや、一人よがりの言説です。クラブ内の討議が進むことを熱望する余りとゆるして下さい。　（元国際会長　1989年1月号会報）

新しい年、1989年の初めに強く感ずる事ども

名誉理事　鈴　木　謙　介
（大阪センテニアルクラブ）

この標題で「つゞき」を投稿します。責任は私に在ります。

今日はワイズにとって重要なことにふれさせてもらいます。

「イエス・キリストの教えにもとづいて」ということばはワイズなら誰もが一番注意を払い、承知している言葉です。われわれの運動はこれを基本として創立以来行はれてきたことは当然です。さて、この基本と共に、あらゆる信仰の人々が宗教信條の相違をこえて――全人類の為のよりよい世界を築くべく尽力するものであると言う言葉が続いていることを忘れてはならない。日本は宗教信仰の状況は一風変っていて世論調査などで無宗教と答える人が非常に高い率を占めているのは一つの特徴である。このことの善し悪しは評者にまかせるとして、ワイズの会員の中にこの種の人々が多数あり、その数はクラブの増加につれてふえて行きつゝあると見てよい。それではこれらの人以外にはどんな人々があるかと言うと、クリスチャンである。この中には、教会に所属し主日礼拝を忠実に守っている熱心といわれるキリスト教信者と教会には今は行っていない、いつか教会に行くかどうか別に決めてはいない、しかしイエスキリ

ストの教えは或程度知っていてそれは良いと思っている。先祖からのお寺や神社などの関わりがあって敢えて中間的態度を続けている。又他の種の人は数は少ないけれども仏教、神道、イスラム教、ユダヤ教、或は新興の宗教をはっきり自らの宗教としている人々である。

日本のクリスチャンの中には他の信仰者をノンクリスチャンと呼び、クリスチャンが本もので他のものは本ものではないと思い違いをしているのではないかと思はれる人があるのは否定できない。ワイズの中にこの種のクリスチャンが無いとは言えない。この種の人はイエス・キリストの教えに遠い人々だと思います。私の体験ではこの様なゴーマンさから離れて、イエス・キリストの教えられた、謙虚な生活態度に徹することに努めたつもりでも、随分、友人を傷つけたであろうことを反省して悲しい思いをしています。

ワイズは教会ではない。YMCAでもない。それこそあらゆる種類の人々一老若男女、貧富、国籍、宗教、職業の差を越えて人間としてこの地球時代に、自由に、自主的に、家族をひき入れて、一時のつき合いでなく、長い行程で、良き友を見出す旅行のようなものだと思います。

（元国際会長　1989年2月号会報）

ワ イ ズ あ れ こ れ

― ワイズっぷりがいいワイズメンを願って ―

名誉理事　鈴 木 謙 介
（大阪センテニアルクラブ）

今日は、気持ちは大変意気込んでお伺いしてるんです。ですけれども、題を勝手に作られたりしまして、まぁそれでいいでしょう。「ワイズあれこれ」となっておりますね。それで私はレジュメを、もうちょっと詳しいレジュメを書こうと思ったんですが、もう、時間も十分でないしちょっといま、組織的なきちっとしたものを、論文のようなものを書いてお話しするというのは、まぁ、いっぱい、私の前後に、頂いたものを見ても毎回知ってますけど、これ以上書く余地がないようなテキストブックが出来てるわけです。

私はむしろ88歳の記念日に、なんか心の中に長く秘めておったというようなことを多少でもお話させて頂いたらと、こう思って、あれこれとお書きになったがそれはそれで悪くはないと思います。

今日、こうやって新会長さんのお顔をずっと拝見致しまして、お目にかかっておりますと、半分ぐらいの方はワイズの色々の会合でお目にかかったように存じますが、案外、お歳を召した方だけれども、初めてお目にかかる顔も大分あるのに、実はちょっと驚いております。それほど私がちょっと老けるといいますか、忘れておったりして失礼をしたこともあったのじゃないかと思っとります。ここにいらっしゃるある程度の方は、こういう機会はめったに、私がちゃんとしてお話をするというような機会を、お持ちにならなかったんじゃないかと思います。

大体、こういうところへ出て参るときは、私はベレー帽を着用いたすんです。一番大事な、オフィシャルなときは赤いベレー帽。世界中の各地を訪問したときにメダルを交換して、それは数百ぐらいになっておりますが、それを赤いベレー帽の上に貼り付けて、それは公式なときだけ、私のひとつのイメージアップをはかっておるんです。もうひとつの場合は黒いベレー帽で、やはりワイズの、ワイズメンのピンを一箇所に着けて、それも、また大変、私のトレードマークとして誇り高く着用しております。

本日、ここに無帽で皆さんの前に立っておるのは、少しぐらいのことですから、いくらでも持って参れるんですが、無帽になりましたのは頭にちょっと毛が生えかけたからでございます。私の病気が申し上げませんけれども、頭の毛もちょっと増えるような注射や投薬を受けておりまして2年ぐらいになりますけれども、大分ちょっとご覧になって、大分昔よりもちょっと毛が増えていると、ご覧になった方は。上からですから見えにくいかも。まあ、うしろからご覧ください。最近の増毛薬、あれは使っておりません。

そんな前言を暫く楽しませて頂いたんですけれ

ども、私はもう、いま三井老を除いて一番、日本のワイズダムの中の最古参の人間になったと思っております。あるいは二三ご存命の方があるかもしれません。ただワイズメンの、正確にワイズメンになったということにおいては、明らかに三井さんの二の次であります。

それは1940年でございまして、当時、私は中国に行っておりました。北京のYMCAを奈良伝先生が、日本のYMCAから派遣されて中国と日本との、あるいは世界各国との平和を益々増やすようにという、YMCAの目的を果たすために北京に来ておられまして、北京にYMCAを作りました。 中国のYMCAはもともとございましたけれども、 日本のYMCAを作りました。日本人がかれこれ数万いるところでありますし、日本人の教会が七つも八つもあるところでございます。

そこにワイズメンを作ったのです。それは戦争中外国で出来た日本の、日系のワイズメンズクラブの、唯一の最初のものでございます。人数は12、3人の人でございましたが、日本人ばかりでございました。

私、奈良さんから是非色々世話をするようにといわれまして、北京におる間、少しお手伝いをしました。そういうことで歳も歳ですがワイズの年功においては誰よりも、三井さんの前にはちょっとよけて通りますけれども、一番古株になりました。

そして、戦後大阪に帰ってりまして、ちょうど奈良さんが、当時、神戸のYMCAの総主事を兼ねて北京のYMCAの総主事をやっておられたんですけれど、帰ってこられて数年して大阪YMCAの総主事を命ぜられて、ただちにワイズメンの復興をお始めになりました。

その当時の人というのは、これまた、本当にいま数えるほどしかいません。私は大阪クラブの会長をやったのがその頃でした。一番古い大阪クラブの会長の一人が今残っておる次第です。岩越君がこの間亡くなって、彼は私より一期か二期あとに大阪クラブの会長をやりました。

大変古さを自慢するようなことを申し上げてばっかりおりますが、実は、大阪では私はあまり長くおりませんでして、東京に転勤を致しまして、私、百貨店の大丸にずっと勤めておりました。今から20年ほど前に退職致すまで勤続。昭和7年からですから、数えたら60何年、ワイズ歴もちょっとそれより少ないですが、大丸の生活とワイズの生活が年数的にもほぼ一致、同じようなときに同じようなことをしておった。

初めは走り使いのようなことでワイズはスタート致しましたが、やがて大阪クラブの会長をやれなんていわれて、奈良さんからいわれて2年間。それから東京に参りまして、そこでひとつの議論のようなことをちょっと始まりまして、決してお書きになるようなことではございませんけれども、私は元来、関西育ちでありまして、東京の八重洲口に大丸を新たに作るという任務で昭和28年に参りまして、29年に開店をして約20何年おって、そして大阪へ帰ってきたのでございます。その後また東京に行ったり、いろいろ出入りがありました。

東京に初めて参りまして、勿論それまでに何回も行っておりますけれど、ワイズのかなり責任を持った人間になって東京に行きまして、東京YMCAにすぐに入って東京YMCAの中にある東京ワイズメンズクラブというところに、ただちに入会を申し込んだら、快く受け入れて頂き、会員が55名ぐらいで大阪クラブに匹敵するほど東京では大きなクラブでございました。いまは40何人といっておりますが、大阪クラブも同様に30何人になっております。

そこで体験を致しましたことは、 ひとつ東京のYMCA、ワイズメンの主だった人達がいうことに、私はすぐに日本区理事に、東京で頼みにこられて引受けましたが、「ワイズメンというものは奈良君がアメリカから背負って帰って、勉強して帰って、そして奈良伝君が専門みたいになってやってる、ひとつのサービスクラブのタイプであって、あれは関西のものだ」。

東京の方は、いままでは二つ三つクラブがあったんですけれども、あんまりはかばかしく、大きく拡張していくような様子もないし、ワイズメンがYMCAの従属物のような感を呈して、またYMCAの主事も総主事も「ワイズってものは我々が勝手に動かして、自由に利用したらいい」というふうに思っているようなところがあったんです。

それは、関西育ちの、またワイズ歴の古い私から見ると誠におかしい。非常に意見が違いまして、心ある人が奈良君は、極端な言い方をいうと「ワイズばっかりやっている」というような意味のことさえ、漏らされた人があります。かなりなYMCAの重要な人であります。

そういう全体的な雰囲気の中で、私はこれはいかんぞと。本当に日本の中でこのように誤解が、一方であるというようなことはよくない、という

ふうに思いまして、ただひとつ非常に私は関西におって商売をやっておった人間なもんですから、東京のYMCAの会員なんかを見ますと、非常に関西では非常に、こう関西では実利的であると。現実主義的であるということに対して関東の、特に東京のYMCAの会員の中には大臣をやったような人が何名かおったり東大の教授が何人もおったりして、それから芸術家も非常に多い。国際的に認められたような立派な人が多い。

そういう部面で文化性と、簡単な言葉ですけども文化性というような文化の香りというようなものにおいては、関西は古い文化を維持して誇りに思っておりますけれど、彼等は生き生きとした国際関係における文化性のようなものを、やっぱり、しっかり持っておられる人が多くて、そういうことが色々な発言の中に出て、また関西と、関西とはいわず大阪という言葉がよく出ましたが、関西というと京都や神戸やらなんかいっぱい、姫路やらも入るんですけれど、そういうところは一般的には似ておるとお考え頂いて。よく東京と大阪ということで比較をされ、そういう言葉がよくあったものであります。

私も文化性というのはちょっと苦手で、よく文化性的な議論をすると負けるといいますか、しかしワイズの運動、YMCAの運動という観点でいきますと、これはそう違ってはならない。基本は、やっぱり一貫してもいいのではないかというふうに思って、今まで申し上げたことは多少覚えてた話ですけれど、しかし東と西のひとつの体質の差というようなものは動かすことは出来ないものがあると存じます。

同様にこちらの方でも、近い大阪と京都、あるいは大阪と広島、九州の各地、やっぱり顔が違うように、言葉の訛りが違うように同じYMCAに奉仕する我々として、あい似た方向に向わないで、ちょっと違った方向に行こうとするような動きというのは、結構出る場所におりまして、そのようにこちらでも結構違うところは違うと。しかし大きいところでさっき申し上げましたように、東西ワイズ比較論というものをちょっと一言触れさして頂きます。ちょっと無駄なことを色々いうようですが。

そこで僕はレジュメじゃないんですけど、そこに書いたもん一番初めに、ワイズがもう老朽化したという声がある。それは、そういう人がどういうところからいいますかといいますと、アメリカにおけるワイズメンの運動が、非常に衰えていっているという事実を知るにつれて、ひょっとするとワイズメンそのものの運動が瓦解して、おもわん状態になっていくんじゃないか。

それは最近、ここ数年前に韓国がそれより前には驚異的な会員の増加、クラブ増加があったのが、この間の、ここ2、3年前から経済の衰えといいますか、我々日本も同様な体験をしておりますけれども、クラブの数が100もなくなる。そして会員の数が数千名減ったんですね。韓国で。

ちょっと我々日本では考えられないような異常な減り方を致しました。そのとき私は本当にアジアにおけるワイズメンの運動というものは、かなり韓国は重要な部分だと思うところが、非常にクラブが潰れる、会員が減るということなどが伝わって参ります。

アメリカのはかばかしくないといいますか、例を挙げるときりがございませんが、いつか谷川寛君が組織だってこのことを皆さんにご報告したようですけれども、あれを悲観的なまなこで見ると、確かにそうかもしれんというふうに思うかもしれません。

そして、極端ないい方をされておるのは制度が、組織が疲労しておる。よくちょっと洒落た経済論者がよくいう「なんかが疲労している。組織そのものが劣る。腐ってきている」というようなことがあるんじゃないかという。それと同時に似たような他のサービスクラブ、ロータリーにしろライオンズにしろキワニスにしろ、色々の100いくつある、特にアメリカにあるサービスクラブは一様に会員がずーっと減っておる。クラブの数が減っておる。それはひとつの疫病、流行の悪い時代に入ったんじゃないかというような見方を、数字だけ見ると、見方をするんであります。

私は、それは非常に誤った考えだと思います。ワイズは、私は自分の年齢と対比して90歳にもなってないということを書いたわけです。私自身もまだもう2年ほど90まで時間がある。ワイズの年齢はご承知のように、組織としてのワイズは76歳。まだ76歳ぐらいのこのような優れた団体は、そう組織崩れをするような恐れはまだありません。もう少し自信を持たないと、我々の団体に参加した意味が全くない。

ワイズの運動というのは、YMCAも同様ですけれど希望ということによって成り立っている。聖書の言葉を引用すればきりがございませんけど、

我々は希望を持つ。希望ということは明日における前進、将来にわたって大きな変化、革新が得られるという確信にたってワイズに入っておる。そこによその国で数がどうとか、組織が衰退にきているからとかいうような、軽い経済理論でいうような言葉は使わない方がいいと思います。

従って、90ぐらいで若いなんてとんでもない。私は自分の年齢を、さっき一番年長であることを自慢するように申し上げましたけれども、若造でございます。ワイズもYMCAも教会の生活も総て若造でございます。本当に歳の数の計算ではございません。私は皆さんが、平均年齢が50歳ぐらい、ここにいらっしゃる方は45歳から50歳ぐらいの方でありますが、私はその二つ三つ上の52、3歳だと思っております。

従って、私がどうのこうのということはございませんけれども、ワイズの運動、YMCAそのもの、YMCAは130年ぐらいですかね。YMCAの歳までいくのにはまだ大分あります。

皆さん、クラブ会長さんは、どうぞ谷川君の悲観的な報告に災いされんように。今日は谷川君は来てないと思いますけれども、読み方によっては非常に悲観的です。その他韓国からの報道は非常に悲観的でしたね。その韓国がですね、最近非常に好転しつつあるんです。潰れたクラブが復活するし辞めた会員が戻ってき始めたそうです。

そのことで、ちょっと。日本では、あるいは韓国の皆さんよりも、もっとひどい不況に出くわしておるんですが、どういうわけかそういう不況というような、経済不況ということが日本のワイズを、クラブを減らしたり会員を減らしたりはしてないんですね。

これは、私は日本の経済的底力といいますか、労働運動で今年も前年よりも100円減らされたとか賞与はなくなったとかなんか、いっぱい新聞を煩わして、家計というもの大変。前年よりも少なくなっていってるんですが、結構ワイズの会費高いんですけど皆さん、日本のワイズはちゃんと払って、しかも少しづつ退会された方のちょっと上回るぐらいの増加を示してるんじゃないかと思うんですけど、僕は実感でいってるんですけど。あるいはこのご報告がどうなってるか知りませんけれど、相均衡していれば韓国のようなことはない。

日本の景気の動向というのは、不況だ不況だ金が貰えないといって実は女房、奥さん達の実家から補助を受けるとか、あるいは箪笥の中に忘れとったようなものが残ってるとか、子どもの貯金だとか、そういうものまで引っ張り出して応用する余力が、日本はあったんじゃないかと思ってます。

私は消費産業に関わる人間でして、ちょっとその点を、そういう見解を持っております。女性の方、ここにいらっしゃいますが、特に女性の方のこの数ヶ月におけるファッショングッズの買い上げは非常に、毎月増えているそうです。

お話しを転じます。ようするに第1項にいいました、皆さんワイズが歳とってる、また私のような老いぼれがこんなとこに来て昔の話なんかをするようなことでは駄目だと。若々しい熊本の有力な、この前日本区大会をおやりになった、貴方のクラブでしたね。そうですね。ああいう人だけでやったらいいんだと、こう思ってた。

事実、もうそのときがかなり近くになっていることは事実だと思います。ただ、ちょっとご存知ないようなことがなかにあったら、それはいろいろ書いたものでも残こっとりますが日本ワイズメン70年運動史、あの分厚いのできましたね。私あの序文を書いたんですけど、これまた聖書の詩篇90篇に60や70なんていうのは、まだ駄目だという、これからだっというようなことが書いてある。わが身にちょうどあったもんだからこの詩篇90篇を応用したんです。

我々日本のワイズダムは僅かに73歳ぐらいですか、正確には。私の歳よりはまだ若い。せめてもう25年やって、日本のワイズ100年というときに、いっぺんここに集まって鈴木がまだ生きていて、もう100歳の人なんか必要がないなんてことをいうか、それともこの3倍ぐらいの人が来て、庭でいっぱいになってやるのか、そのどっちかを決めるのはその頃の人ではなくて、今の我々なんです。

我々がそれをお膳立てをするんです。ワイズというのはそういうものなんです。今の、現状よりも希望を持って先の方に夢を持って、夢を抱いてそれに向って皆が力を合わせるということにおいて、その本質がある。そういうことで年数計算は止めましょう。

特に、今年1月は、大晦日31日の晩皆さん大騒ぎされたでしょう。屁のようなもんだったんじゃないんですか、あれは。電気は止まる、ガスは止まる、電車は動かんなんていってわあわあ、どこであんなことを。多少のことは出ることは機械の解るものは全部解ってたっていうか、コンピューターがゼロゼロ、9、9がゼロゼロになるなんて当り前

じゃないですか。あんなもんあたり前です。また、仮に違った数字が出ても直したらいい。大騒ぎ。

それは、我々この頃の日本人はジャーナリズムに影響されすぎる。コミュニケーションが非常に進んで隅から隅まで見ないと気が済まん。それは私もちょっと似たようなところがありますけれど、朝刊がくるとまず第1面の政治面が気になる。それからめくると国際政治がそれから財界のことが同じように、最後にスポーツ欄を必ず見ないと応援しているあるベースボールチームがまずいといわれるとがっかりする。まぁそんなことは余興ですけど新聞以外に雑誌、テレビ、ラジオそれからコンピューター。

コンピューターは私もやっと始めて、今日はアドレス番号を藤原さんに、藤原さんというのは私のクラブからきておられて、国際交流を担当される人。アドレス番号を早く出すようにといっておられ、今日持ってきて藤原さんに渡そうと思ってます。Eメールをどんどんください。もうやっとるんです。

そしてインターネットを色々やってみると、実に奇想天外なとんでもない、「貴方、今夜女が抱きたいですか」、そんなのが出てくるんですね。これはあまり教育的じゃないんですけど、本当に今の世界はひょっとするとああいうものだけの人間になる、ああいうものに使われる人間になってしまう。人間が人間を失っていく。それが個性の弱い人は駄目で、妥協するような人は駄目で、むしろ強い個性を持ってああいうものを排撃するくらいの、文明の利益、便利のよくなるようなものはどんどんやらなくちゃいけない。

あんなものがどんどんきますと、アメリカのように若者が麻薬に浸るし、それから銃器、鉄砲ですね。鉄砲やピストルをどんどんそこらで、学校の教室で6歳の男の子が4歳の女の子を教室で撃った。考えられないじゃないですか。しかしひょっとするとそういうところに近寄るかもしれませんよ。日本は。

私は日本人の本当に持っておる根本的な資質というようなものが、真によく働いてくれることを願い、確信致しますけれど何が起こるかわからないというのがこの頃の状況でございます。

そういう中においてワイズはただ傍観しておってよいのか。ワイズは「えらいことになりますなー、困ったもんですなー」というのがワイズであってはならないし、ましてYMCAも大きな建物を建てて高い月給を払ってストをされて、しかも養っている若者に満足させないで財政はもう非常に逼迫しているという状況が、いろんなYMCAにいたるところ、そうです。

YMCAとワイズが共倒れになったら駄目です。ワイズは私、YMCAの一番の、昔はそうではなかったんだけど、一番のお客さんだったと思う。支え手だと思う。そういう働きがワイズの側は、「もうちょっとYMCAの連中、あんなんと一緒にやるのはいやだ」とかいうようなことをいったり、YMCAの若いリーダーなんかは、ワイズの個々の人を見て、「あんな人に私将来なりたくない」だとか、「なりたくないわ」だとか女のリーダーがなんかがいっている。それは、もう煙草をしょっちゅうのんだらいかんところで吸ったり、ちょっと酒臭かったりすると、そういう小父さんなんかを見るとがっかりする。

一人一人がYMCAなんですから、YMCAの会員というのはその人がワイズなんです。YMCAなんです。やっぱり見劣りしないように本当に確りして頂かないといけない。ワイズは、ましてそうです。ワイズ、ワイズといってなんか色々のことがありますよ。本にいっぱい書いてあるでしょう。読みきれんほど書いてあります。ここの岡本さんの主催する、この岡本さんが今まで書いたりなんかした、あんなもの、全部読む人なかなかおらんと思います。もういっぱいある。読みきれん。あればっかりやっていると、その月のクラブの働きはなんにも出来ない。あれ持っていって「これ全部やるのや」いって読む間がない、というのはいい過ぎですけども。

やはり、あの奈良さんがですね、奈良先生が81歳で亡くなられました。今から21年前です。その千里の国立循環器センターに最終的に入っておられました。私その一番、最後の面会人でした。面会を非常に嫌がっておられました。というのは声がもう、ものが言えなくなっておられた。それは癌です。癌は方々にあって結局喉頭癌で、手術もされたんです。

その奈良さんがですね、亡くなられる2、3年前からご病気に苦しまれて体全体に発疹が出たり、それから高熱が出たりして非常に病気に苦しまれた。それで、愛子さんというお嬢さんの書いたものをみてました。私もお会いしに行ったんですが、私に「ものが言えんからなー、ものがいいたいけれど言えんからなー」と手をとられた。僕が最後

の人間で翌日亡くなられました。

その奈良さんが、その病気の間、その愛子さんに「自分は一体なんだったんだろう。皆から大阪YMCAを復興の最大貢献者だとか、あるいは中国華北に8年間も行って世界各国の融和、国民の融和を計るような働きをした。若者の友となって新しい、色々と方法でもってYMCAの経営に当たり、家庭においても良き父であった」と思っておった。

けれども、亡くなられる3年ぐらい前には愛子さんに「みんな駄目だった。私のしたことは大変不十分だった」ということを言い出されたという。これは普通ではなかなか言えない。病気のせいもあるが奈良さんの性格もあったんじゃないかと思います。

私、人が死ぬ前に、まあ、奈良さんは最後のところでは皆さんに「ありがとう、ありがとう」といって、神様にも勿論感謝していわれたんですが、2年ほどの間はぶつぶついって、「私はなんにも役に立つことをしなかった。神様の前に恥ずかしい。長い間生きてきたけれど神様は、よく私をお使いになったけれども、私自身はすることがもっとあったはずだ。それが出来なかった」ということを非常に苦しんで、悩んで、それを家族の人に言い出しておられたと。

人の死ぬときのさまは色々ですけれども、私も昨年妻を亡くしまして人の死というものに初めて直面しました。彼女の場合のことは、いまここでお話することはしませんが、ただ私のベッドルームにベッドが二つありまして、私がひとつ、もうひとつのベッドは開けてありまして、時々娘が来て寝たりしますけれどもいつも錯覚を起こしまして、朝目が覚めるといつも一緒に、ふっと起きるものがおらんので、ずっと見て、その都度ちょっと悲しい思いをして、「なーんだ、なーんだ」。

毎日同じようなことですけれども、時々、夏、暑いときに廊下を歩いてきて私が蒲団を蹴ってると蒲団を掛けるんですね。彼女は。「あっ、知らん間に蒲団が掛かってる」。これ、また錯覚ですね。そんなようなことをね、足音があったり。

この間カウンセラーの専門の先生がみえて、その話をしたら「それはいくらでもあることですよ。貴方が奥さんを愛すれば愛するほど、最後までそれはずっと続いていくでしょう」「それじゃ僕は非常に愛したんですな」といったら、「そうです」といわれたりしました。

そこで、いま、奈良さんという方の人となりなんかを、これはある程度ご存知の方は多いと思うので、あまり申し上げませんけれど、皆さん奈良伝さんをあまりご存知ない方は、どうぞ皆さんワイズメンなんですから、ワイズメンの日本の創立者ですから、奈良さんのことは「千里の道」という、この本、3,000冊ぐらい昔出した本ですけれどご自分が書かれた随筆ですけれど、ご覧になると、いまお求めになろうと思うと、いまこれから出版しないとないんです。

版は奈良信君のところにあるんです。出版すればまだ出るんですが、まあ、そういうレベルのことは、これは図書館にもあるんですが、私は2、3冊持っておりますが、これの中にご自分の経歴を非常に、生まれたときから死ぬ最後のところは触れておりません。大分前のことで終わっておりますから。

珍しい日本のYMCAの総主事でこれくらいワイズメンズ運動を、身も心もワイズに総てを用いたという人は他にございません。他のYMCAの総主事、当時のYMCAの総主事方見てご覧なさい。さっきも私が申し上げました、関東の方では「ワイズメン運動は、あれは奈良君がはいっとるんやから」というような声が行ったり来たり。

奈良さんはYMCAにおいては、大変な実力者であり貢献者です。YMCAそのものです。ワイズはあの人が好きだったんです。仕事じゃなくて好きだったんです。これは何故かというと、彼が29歳のときにアメリカのマサチューセッツ州のYMCAカレッジに学んでいるときに、アメリカにワイズメンズクラブというものがあるのを聞いて、自分が大阪でやっておるタイガースクラブというものに似ておる、と思ってヘンリーグライムスという29歳、どっちも29歳、どちらもエンジニア出身です。

奈良さんは大阪工大、大阪高等工業の舶用機械科を出られたエンジニアです。世が世ならば海軍の方の機関少将か大将でもなったかもしれん。というのはお兄さんが陸軍中将になりました。ですけどもYMCAに捕らわれた。恩人が色々おられたんですから、 YMCAの恩人がおられたんですからYMCAに捕らわれた。

そうしているうちにアメリカに数回出張したんですけれど、当時アメリカの各地を回り、またYMCAカレッジに2年ほど学んで、そこで聞いて、雪深い、たしか12月と聞いておりますが、マサチューセッツの12月というのは結構雪が深いところです。わざわざヘンリーグライムスを訪問して相語ったと

ころが、お互いがエンジニアであること、彼はアメリカンウールンという会社の染色技師です。ヘンリーグライムス。こちらはYMCAの主事ではあるが、もとは舶用機関のエンジニア、その方がもっと出来る。専門は。

エンジニアという人はちょっと、エンジニアでない人とはちょっと違うんです。こんなかにもエンジニアご出身の方が、また現にエンジニアである方もいらっしゃるかもしれませんが、区理事は土木工学。エンジニアというのは非常にものの正確さを尊ぶ。数字を扱う上において非常に数字を大事にする。それから器用、手先が器用、体の動かし方も器用、その反対が商売人ですね。ビジネスマン。ビジネスマンというのはなにもそういうものが、そう優れんでもやれる。

それでヘンリーグライムスはもう結婚しておりました。そのときは。彼はヒストリー　オブ　ワイズダムで読むと第2回の世界大会というのがロングビーチ、ニュージャージー州のロングビーチで行われている。そこへ結婚ハネムーンとしてアグネスという奥さんと一緒に行ったんですね。

100人かそこらが集まって、第2回の国際大会があった。国際大会といっても当時はアメリカとカナダだけだった。カナダが入って国際と呼び出した。そこへ、ヘンリーグライムス夫妻は行って、これは私の一生かけてやる仕事だなと思って帰ってきて、そしたら追いかけてきて国際会長のジャッジ　ポール　ウイリアム　アレクザンダーから依頼が来て、事務総長をやってくれと。たった29歳で。

しかも会社は染色、毛織物を染める仕事です。それで彼の家を世界のワイズの事務所にした。アグネスが大部分の事務をやる。これの半分ぐらいの事務所を使って世界中からくる手紙だとかなんかを、一切整理をして印刷をしたり、当時は連絡の方法といったらタイプライターです。あのご承知の5枚ぐらいカーボンを入れて叩いてやっていた。あれを何回も打っては。コピー機なんてものはなかったから。世界中にアグネスが打った。当時は組織も非常に簡単だったから、とにかく国際会長向けの手紙のようなものは、みんなSecretary Treasurerだとかいって、同時に会計もやる。

そうしてるうちに、彼は応召というか染色技師としてドイツに行き、ドイツと戦争が始まって、行ってしまってその留守中をアグネスという奥さん、40ぐらいの奥さん、子どもがない。一人で世界中の事務を全部やっとった。これは奇跡のようなものでしたね。

私は、一度その頃、そのちょっと後ですけれども行って、行ったら「これちょっとミスター鈴木頼む」という。殆ど仕分けです。それから綴じ込み。くる者くる者みんな仕事を頼まれて。アルバイトのような人を2人ほど雇っていましたけれど、そういう人物と奈良さんは29歳同士、エンジニア同士。

「よーし、私は日本に帰ったらこの連中のやっていること以上のことをやろう」と、おおいにこの気を強くして日本に帰ってきてすぐに、五つのクラブを作った。そのクラブは全部いまはないそうです。主に九州でしたね。

それで、この奈良さんという人は、ちょっとワイズの父と呼んだりして、またワイズメンの最初の紹介者だとか父と呼んだり、いろいろ呼び方がありますが、ジャッジ　ポール　アレキザンダーに相当する。日本だけですけれど。

この人が戦争中北京にYMCAを作って、その働いたことは日本の利益というような非常に低次元のことではなく、将来の平和。北京という所は非常に国際都市であらゆる人が住んでおりました。私もおったんです。その中において非常な、どこにも期待しない、どこにも味方しない、時々横暴な軍ですね、軍との間における中国人、日本人、あるいは宣教師などとのトラブルを引受けて、それの解決を図った。

最後、日本が負けて宣教師が引き揚げていくときに、一定のところへ全部集結をされました。お祖父さんの代から宣教師だったというような、古い有名な宣教師がたくさんおりました。そういう人なんかも、憲兵隊のようなところが逮捕して、山東省の維縣という所へ集められて、そして母国へ送還されていきました。

奈良さんはその人々を色々世話をして、あと自分の、ようしなかったことをこうしてくれとか中には日本刀を託して「これは大事だから、いつか将来会ったら返してくれ」と日本刀をぶら下げて、あるいは「北支の方の全部のところにある蝶を、バタフライの標本を集めたり、寄贈しとったんで預かってくれ」とか、いろいろのこと、お世話をして、単なるお世話というよりも心と心を通わせた人で、それでその功労をもってアジアで最初のワイズメンの最高賞であるところの、ハリーバランタイン賞をハワイの大会で受け取りました。そういう方です。

ですから、「先輩4人を挙げよ」といわれると、一人は奈良さん、日本はないんで、いまちょっと考えてるんですが、あるんですよ。さっきアメリカのほうの人を、ヘンリーグライムスを申し上げました。それから創立者であるジャッジ　ポール　アレキザンダーという人、私は1965年にカナダのワイズメンの国際大会でお会いしました。

私の家内は着物で行ったもんだから、おじいちゃんの寵愛物になって「一緒に写真、写そう、写そう」と。実に、もう少年のような、風采は村の人のような、大会で最高の国際会長のような人は、ちゃんとネクタイでもしてくるのかと思ったら、ぜんぜん。ひょっこり来て、どっかにおった。生涯、生涯の会長でありどこへ行っても「VOTE（投票）」出来る、そういう特権をおもらいになっておられましたけれども、ちっともそれは使わなかった。

彼は法務官です。法律が専門です。アメリカで最初の少年法、少年が非常に問題を起こすことが、おおいに始まった頃で、Juvenile Delinquency（若者の不法行為）を法律の立場ではどう扱うかということを、最初にとりあげておる本を書かれました。それから法律雑誌にたくさん書かれました。

それから発展してFamily Courtの専門家でして、それでJudge Alex（ジャッジ　アレックス）に私が会ったときに日本から来たということを見て、「よく来てくれました。貴方の国の天皇（エンペラー　ヒロヒト）は、あんな立派な人はおらん。僕は非常に尊敬しておる」。こう、いわれるんですよ。

これはひょっとすると、終戦直後日本のワイズダムが活動してないようなときに、Bar Association（法律家協会）、法律問題の大会でもあって東京に来てマッカーサーの顧問みたいな人ですから、なってもいい人ですから、日本の天皇なんかに会ったことがあるんだろうなと、から想像しましてね。

帰ってきて最高裁やら大審院の記録を見てもらうようにしましたら、アレクサンダー判事の名前は方々に出てくる。有名なファミリーコートの、日本では家庭裁判所というのはずっとのちに機能しましたけれども、最初のところはジャッジ　アレックスのファミリーコートの真似を、真似でもなかったかもしれませんが、おおいに取り入れたということは分かっています。

そしたら、東京クラブの或人で「僕はアレックスさんを最高裁の玄関で見た」という。そして「YMCAはあっちの方向ですから、どうぞ後程来てください」といったら、「ありがとう」といった、という。これはまた、もし日本に来ておられたら、当然YMCAなりワイズメンに連絡があるはずだから、どこにもその記録はない。それで間違いじゃないかと思うんですが、彼は思い込んでいて「どうしても会った」という。

それで、ますます不思議になって、私は各所にいっぱい手紙を書きました。そしたらアメリカから最後に私が問い合わせたのは、やはり、アレックスの弟子みたいなことをやってた人ですけれど、今も私どものような元国際会長クラブというようなのがあって、それの会長をしておる人から、アレキザンダー判事のお嬢さんがリタイアして、カリフォルニアのどっかのホームにおって、誰かがその間にYMCAやワイズの人が話しをしたときに「父はハワイの国際大会にも、よう行かなかった」。だから、「カリフォルニアから東へ行けなかったのは非常に、自分は一生の苦しみだ」といってたという一通の証言が出て、私は2年ほどかかって調べた怖さ。

そういう親日的というか、本当にこの人は本当にワイズのシンボルのような人であります。そして、それを30年ぐらい補佐した、無給で補佐した事務総長の、さっき申し上げましたヘンリー　グライムスというお二人を挙げときます。

さて、もう一人の親友、佐藤邦明（1913～1993）のことをご紹介して、このたびの私のtalkを結ばせて頂こう。

佐藤邦明は第23代日本区理事をつとめた。更に国際議員、そして国際会長をつとめた。国内的には東京YMCA理事、同常議員議長、日本YMCA同盟委員長などを歴任した。東京YMCA少年部出身、青山学院に学び、汽船会社に就職、ワイズメンに加入、後年、むかでクラブの会長から国際関係に働いた。日之出汽船という会社の社長になったりした。

戦時中、船にも乗り、難破したときは英語力が命を助けたといっていた。

私とは東京YMCA理事時代、そして私がワイズの国際会長（I. P. ）をした頃、互いにいくつかの国際大会には同行して親交を結び、稀に見る紳士、礼儀正しく、仕事熱心、引受けたことは頑固なほどに責任を感じてやり遂げるタイプの人だった。

テキサス州のアマリロという牧畜の中心の町でアメリカワイズのエリヤ大会があって、私どもは、カウボーイやインデアンの歴史の古いところとして興味があって参加したら、なんと彼も来ておっ

て国際議会が開かれてもいて、そこで彼の持論であるBF優秀区への褒賞制度を提案してスピーチをやっているではないか。彼の理路整然たる英語の発言は満場一致の賛成となって、いまなおワイズでBFが力強い発展をつづけていることにつながっていることは喜ばしい。

YMCAの世界大会にソウルやロッキーに同行したり、ノルウエー、オスロのワイズ国際大会にお互いに妻と孫を伴って出席、イングランド、スコットランドの旅も行った。ジョージ　ウイリアムス生誕の地を訪ねたり、ロンドンYMCA関係のゆかりの地なども一緒した。彼はこの頃、もはや会社をretireし、少し健康が損なわれ始めていて、旅行中、余りものをいわなくなっていたが、海の男の風格が出ておった。彼はもう少し早い機会に国際ワイズメンの国際会長（IP）に日本から出るとよいと思い、adviceを計ったがチャンスが廻ってこなかった。

彼はmusicの世界に趣味がおよび、日本区理事就任のとき（1977～78）の標語に「ひたすらこの道を行く」（Only this way）とし、その題の歌詞を自作し、鈴木功元理事が作曲してみんなが歌った。横浜の日本区大会で、神奈川シンフォニーのタクトを振ったときは満場がたまげた。彼が今はこの世にないのは、私には、つきせぬ悲しみのひとつである。

以上で私の愛し、親しみ、尊敬した、内外のワイズメンについてのtalkを終わらせて頂く。ご静聴感謝。

最後に一言、そこに妙なものがあるでしょう？「ワイズどっぷり」と書いてある。これは間違いで、「ワイズっぷり」というのが僕の新語です。今まであんまりないんです。「あ、ワイズっぷりがいいなぁ」と、こういうんです。僕もそういわれる人間でありたい。それはワイズに忠実、YMCAに忠実、市民としても立派、すべてみんなに親しまれてる。払うべき金は払う。会費は払う。みんなに好かれる。影に隠れて何をやってるかわからんがいいことをしとる。そういうのを「ワイズっぷり」と呼んだら。「ワイズっぷりのいい男」というのになりたいと思います。僕の新語です。新発明です。

時間の都合で、これをもって終わらせて頂きます。

（第8代理事・元国際会長）

（2001年3月26日　次期会長研修会2日目講演）

21世紀に向けてのYMCAミッション

―キリスト教使命とその働き―

東京大学名誉教授　隅　谷　三喜男

キリスト教が活力を失っているのはなぜか

言うまでもなく、YMCAはクリスチャン・アソシエーションですからキリスト教を基盤にしています。しかし、YMCAのキリスト教はどこへ行ってしまったのかという批判がしばしばなされます。そこで、もう一度このことから考えてみる必要があるだろうということですが、その前に、戦後の日本のキリスト教は戦争直後の10年ぐらいは活気がありましたが、この40年近く振るわない。なぜかというと、我々の責任もありますが、社会的に考えると「知性の発展」ということがあると思います。

19世紀以来、歴史的に知性の時代というものが形成されてきました。とくに第2次大戦後、自然科学ばかりでなく社会科学の分野でも大変な勢いで「知性」が発展してきました。経済学の世界でも統計とか基礎データをコンピューターで処理することによって、従来とは格段に違う精緻な「情報」が得られるようになっています。この「情報化」ということが知性の世界の現代的な姿であり、それがまた知性の世界というものを極めてよく示していると思います。

現代人は「それ」の世界に吸収されている

私はここで、知性の世界というものを“it”の世界と概括させていただきます。すべてのものを客観の世界として我々の知性をもって「それ」と受けとめ、判断し、「それ」に対応していく。このようになっていくことが現代世界の非常に大きな特徴といってよいでしょう。

そして、こういう知性の世界が支配するように

なるにつれ、キリスト教の居場所がだんだん狭くなってきたということであります。信仰の世界が何か怪しげな世界、コンピューターに乗らない世界とされ、それだけ貧困に見えてくる。そればかりか、キリスト教についての学問も情報化社会の一環に入れられ、客観的な一つの世界として（キリスト教を）把握してきている。青年層は、情報社会の中で育っていますから、やはり科学的な知識をとおしてキリスト教に接近する。そうすると、キリスト教など信じる必要がないとし、関心を持たなくなって、教会がいくらアピールしても青年は惹きつけられなくなっていると思うのです。キリスト教世界が現代文化、知性の文化に圧倒されてしまっているというのが現在の姿だと私は理解しています。現代人の関心が“it”の世界に吸収されてしまっているのです。

YMCAはこの事態に取り残された

YMCAはこうした事態にどう取り組んできたのでしょうか。結論的には、そういう事態の中で取り残されてしまったのではないかと思います。確かに戦後YMCAはかなり活況を呈しました。青年たちもキリスト教に大きな関心を持ち、学生YMCAという場などで活発な活動を展開しました。その時はまだ“it”の世界ではなく、「私とあなた」の世界、“I and you”の世界でした。

戦前、マルチン・ブーバーというユダヤ系の学者が“Ich und du（我と汝）”という本を書きました。私はそれを読んで感激したわけですが、私が大学で学んだ経済学はいつの時代も“I and it”の世界です。それに対して“I and you”の世界がありますよ、というのがブーバーの強調した点でした。結局それは、信仰による“I and you”であり、神・キリストが我々に語り、我々がそれにこたえていくという世界が根底的なことであるという思いに行きつきました。さらにこの社会の中でも「私とあなた」が「私とそれ」の世界とは違った大きな意味をもっているということを我々は学んだわけです。

YMCAは「私とあなた」の世界

ところが学生運動についてみると、大変大きな大学闘争があり、その中で学生YMCA運動もだんだん衰退していき、若い世代は学生YMCAから離れ、やがて関心を持たなくなりました。こうした中でYMCAも含め、社会全体が“it”の世界に吸収されていったのです。そこで今日、我々はもう一度“I and you”の世界をしっかりととらえ直す必要があると思うのです。

YMCAのA（アソシエーション）とは何かを考えますと、日本語で「同盟」と訳しています。良い訳だと思いますが、これは同じ信仰に立ち、志を同じくする者の集まりという意味です。かつてYMCAで知り合うと言えば、本当に心と心を開いて打ち解けて語り合うということでした。“I and you”の世界でした。その世界が長い間YMCAの支えになっていたと思うのです。そのことの意味をもう一度考えてみる必要があると思います。人と人との結びつきの問題をどう考えているのか、それをどう運動の中に取り入れていくかということです。

「個」の発見が共同体を解体した

現代社会、とりわけ戦後の日本は、個の発見とその基底化が基本的特色と言えます。以前は、戦時中が典型ですが、個人は集団の一員、家族の一員という意味しかなく、集団や共同体が我々の存在の根底にある時代でした。

ところが戦後になると、「個の発見」が大きな問題として展開し始め、根底にあった共同体、その典型である家族共同体がしだいに解体し始めました。家族は核家族になり、しかも夫婦はそれぞれ独立した人格になり、子どもも独立的になってきました。このこと自体は決してマイナスではなく、人間として当然の展開です。

しかし日本での問題は、個が出てきたとき共同体が解体してしまったということです。極端に言えば、個がすべてです。近ごろの少年・少女たちの生活様式がそれを示しています。これは欧米とは非常に異なるところです。欧米では共同体が残っています。その典型は教会です。共同体や家族が解体すると、子どもの躾がなされなくなります。日本では他人の子どもを注意することをしない。自分の子どももあまり注意しなくなった。個が訓練される場がなくなってきているということです。これに情報化ということが加わるので、いろいろな問題が起こってしまうのです。

現代社会から「思想」が消滅していく

共同体がなくなると、思想が消滅します。現代の学生は知識はたくさん詰め込まれていますが、「読まず、書かず、考えず」だと言われます。私はその先を考えますと、そのうち「読めず、書けず、

考えられず」になっていくと思います。読めなくなれば、大体書けなくなりますから、したがって思考能力も非常に後退します。日本の政治を見渡してみても、同じことが言えます。政策として物価や金利をどうするということは言いますが、思想がないのです。思想らしい思想がない。政治家ばかりか学者にも思想がない。学者の知性がだんだん技術化して、思想がなくなっているのです。いろいろなテクニックを組み合わせて計算しても、そこからは何の思想も出てこないのです。

YMCAの課題は「出会いの場」の構築

それならばＹＭＣＡは思想を持っているのか。YMCAを一つにしているものは何か。こういうことについて我々はきちんと考えなければなりません。先ほど共同体が崩れたと申しました。そうした中で、新しい出会いの場というものをどのように構築していくのか。そこに私はYMCAの課題があるのではないかと思います。

新しい共同体といっても、これはおいそれとできるものではありません。しかし我々は既に、このことについての問題提起を受けています。我々はオウム真理教や統一教会を批判しますが、なぜ彼らは学生たちをひきつけるのか。それはやはり、彼らが持っている共同体性というものではないか。それをもっと基本的に正しい、個を基盤とした共同体性というものに価値をおいて、それをYMCA運動の中核にしていかなければならないのではないかと思います。

「人を育てる」NGOとしてのYMCA

ここで具体的に一つの動きを考えてみたいと思います。

私は日本でも21世紀にはNGOがかなり発展すると思っていますが、日本の場合、ボランティアを受け入れ、組織化し、訓練する組織体が極めて少ない。YMCAは阪神・淡路大震災に際し、現実的にある働きをしてきました。そういう意味では21世紀に向かって新しい共同体を構築していく中で、NGOの精神をしっかりもって、ボランティアの抱える問題に組織的に対応していくことがYMCAに与えられている一つの大きな課題だと考えるわけです。

21世紀に向けて、青少年が「人として育つ」ことが難しい時代にあって、人として育つ「訓練の場」とそれを支える「理念」を構築していくところに、YMCAの役割があるのではないか。YMCAは世界的なつながりを持っています。その視点を念頭において、日本のNGOにはないNGOというところに21世紀に向けてのYMCAの新しい働きの場があるということで私の話を終わりたいと思います。

〈隅　谷　三喜男氏〉
1941年東京帝国大学経済学部卒業。東京大学教授、信州大学教授、東京女子大学学長を歴任。東京大学名誉教授。日本学士院会員。恵泉女学園、NCCキリスト教アジア資料センター各理事長。
（YMCA同盟発行　THE YMCA 1998 №575 9月号より転載
文責　YMCA同盟編集部）

八十五歳のウエルネス

鳥　居　一　良
（名古屋クラブ）

爽やかな　朝の目覚めに　感謝する
床の中　手足伸ばして　ストレッチ
顔洗い　眼鼻耳喉　指圧する
澄みわたる　生気いっぱい　深呼吸
十五分　杖の助けで　軽散歩
食前に　飲む一杯の　水旨し
果物に　パンとミルクで　朝餉（あさげ）よし
よく噛んで　食事ゆっくり　腹七分
教会で　賛美歌うたう　日曜日

出先から　帰ってきたら　嗽（うがい）する
雨止みて　落葉の積る　庭掃除
青い空　芝生の上で　四股を踏む
転ぶなよ　風邪引くなよと　友は言う
日に一度　静思黙想　五分間
どっこいしょ　立居振舞　あせらずに
ぬるま湯に　ゆっくりつかり　床につく
生活の　リズム崩さぬ　老青春（ラオチンチュン）

（1993年1月　年賀状）

YMCAとワイズをもっと知るために

―YMCAとワイズ設立の精神をいま一度再確認する―

長　井　　潤
（名古屋クラブ）

はじめに

全国的に苦難（低迷）の時代をむかえるYMCAにとって、ワイズとの共働は大きなキーポイントであります。では『なぜ共働することが大切なのか、そもそもYMCAとワイズはどうして生まれ、どんな関係にあったのか』このことを今、ワイズとYMCAは互いに、設立の精神にさかのぼって再確認する必要があると思います。

特にYMCAが創立された当時のイギリスの産業革命という特別な時代を少し知っていただければ、YMCAのもっとも大切な精神がわかるのではないでしょうか。

18～19世紀イギリスの産業革命

創設者ジョージ・ウイリアムズは、産業革命下にあって荒廃した青年の心を救済するべくYMCAを創設したことは、皆さんご存じのことだと思います。

このイギリスでの1760年代から1830年代にわたる、工業の技術的過程に端を発する社会・経済的大変革は、今の私達の想像をはるかに越えた大変革でした。

産業革命によって「イギリスや世界がどう変わったか」についての詳しいことや分析は別の機会に譲るといたしまして、とにかく生産における自由競争が、農業制度・土地制度の変革をもたらし、同時にそれまで人力や、精々水力に頼っていた動力が、蒸気エンジンと関連する機械の発明という、当時の感覚として現代の原子力以上の動力を得ることによって工場制度を生み出し、そしてこれらのことが交通制度や商業、人口などあらゆる面での社会変革をもたらしたという、凄い時代でありました。

私は産業革命の功罪とは、産業革命によって社会は物質的に「豊か」になった反面、「労働」ということそのものが、人が生産の手段、つまり機械と同等に扱われるようになったという事実だと思っています。

当時の労働や生活の実際

当時（YMCAが設立された頃のイギリス）どれほど社会や人々が、産業革命による生産ということに振り回されていたかを語る、いくつかの例があります。

児童の大量雇用

12才以下の児童は、成人労働者の5分の1ほどの給料ですみ、しかも従順だったため早ければ4～5才から使われ、成人になるまで、実質工場の中に監禁状態で働かされました。紡績工場では機械に背が届かないので、下駄を履かせて作業をさせることは日常的に行われていました。

＊労働時間は14～18時間にも及び、過労による居眠りを防止するため、鞭が日常的に使用され、機械の上に吊されて機械運動に合わせる折檻や豚と飼料をあさりあったことまで記録にあります。宿舎は孤立、鎖のあしかせまで使用されました。しかもその子供たちの供給源は、貧民法適用により教会に集められた児童達であり、その子達は「教区の子弟」と呼ばれ、給料は教会に取り上げられました。

労働者の一日

当時の労働者の典型的な一日の生活を1833年にギャスケルという人が書いたものによると、「夜明けかそれ以前に目を覚ます。一年を通じて4時から5時の間であり、睡眠によって前日の疲れが取れることはない。大急ぎで工場へ出かけてゆき、作業して8時になると40分の食事が許される。その間も機械は動き続けているので食事をしながら仕事を続けることも多い。ずっと働き続けて12時に機械が止まって1時間の昼食を家で取る。大抵はゆでたポテトだけ。再び1時から8時か9時まで途中20分間のお茶の時間を除いてずっと人が一杯の蒸し暑い部屋の中でせっせと辛抱強く働く」と記録されています。

1833年の工場委員会の報告では、大人も児童も食事と休憩を除いて実働12時間が普通で、16時間労働も珍しくありませんでした。これは工場ばかりでなく、ジョージ・ウイリアムズのいたロンドンの呉服商でも平均14時間、17時間の人もいたそうです。

YMCAの誕生

このように人が人しとて扱われず、産業を遂行する上での「物」「手段」として使われ、物質優先、人間性疎外の中ですさんでゆく中では、当然の結果として、働く人々のストレス解消の手段は酒・女・バクチということになっていました。

そんな状況下で、真面目に人間らしく生きたいと思う青年達の「心」を救済するためにYMCAは生まれるべくして生まれたと言えます。

ジョージ・ウイリアムズは青年を取り巻く当時の社会環境の中で、霊的な交わりの「祈り」の会を始め、これが広がっていったのです。

ジョージ・ウイリアムズは地方の農家に生まれましたが、農家の青年にしては非力であったため、自分の乗る馬車の暴走をきっかけとして、商人の道を選びました。

そんな肉体的には非力な彼が、日曜学校を休む子供の家に乗り込み、博打の真っ最中であった父親と荒くれ男たちの仲間に、毅然とした態度で対し、博打を止めさせて説教し、うなだれさせてしまったという逸話に、彼の意思と信仰があらわれています。

YMCAの発展

このイギリス産業革命という時代の光と陰は、他のヨーロッパの国々やアメリカでも社会的に同様の問題を共有していました。

そんな折り、ロンドン・ハイドパークでの万国博覧会でYMCAが紹介されたことが契機となって、YMCAが世界に広まってゆくことになります。

また、急速に広まった要因の別の一つとして、YMCAが会員による運営という「レイ・ムーブメント」であったことがあります。

産業革命下でのイギリス国教会の退廃は、結果として、ジョンウエスレーに代表されるキリスト教会の改革運動の「信仰復興運動」をもたらしました。この運動の特徴は、信仰や信仰生活が、教会や牧師が中心ではなく、平信徒による「レイ・ムーブメント」であったことです。この考えは特に新大陸アメリカで、大いに受け入れられました。

職員とレイマンとの両輪関係

設立者ジョージ・ウイリアムズは、一度も職員や主事であったことはなく、なろうと思ったこともありませんでした。

彼は常に一会員に留まり、レイマンとしてYMCAを担いました。彼は早くも創立一年後には自分たちレイマンだけでは運営が難しいことに気付き、委員として最初の主事タールトンを招へいし、彼を大切にしました。YMCAはその最初から職員とレイマンとの間の両輪関係があったのです。

アメリカでのYMCAの発展

1851年にアメリカに伝わったYMCAは飛躍的に発展しました。

当時のアメリカでは都市共同体が形成されると、そこにYMCAの設立が望まれ、新しいYMCAを組織し、委員と役員が選任され、有能な専門教育のスキルを持った人を招いて、公的教育では行き届かない、青少年の知・徳・体の教育をめざしました。

その中心となったのは、ビジネスマンや教育者、医師などのレイマンでした。

同時期にロータリー・ライオンズに代表される類似のサービスクラブも出現しました。ただ、これらのクラブは、奉仕よりも、会員間の友好とランチョンに重きを置いていました。

ランチョンクラブ→ビジネスが高く評価されているアメリカでは、実業人やホワイトカラーが中心となり、週一回決まった時間、場所で昼食をともにしながら会合を持ち、各界の権威を招いてスピーチを聞き、相互の交わりと情報交換をしてビジネスに役立てた。

ワイズメンズクラブ誕生

1920年、オハイオ州トレドYMCAでは当時盛んになっていたランチョンクラブをYMCAにも利用しようと、まずYの維持会費100ドル以上を集めた会員でランチョンクラブをつくり、トレドYのクラブであるとの意味の「トリムカクラブ」を設立し、YMCAの資金と会員獲得のために頑張りました。この動きが賛同を得て、全米のYMCAに広まり、2年後の1922年名称をワイズメンズクラブとし、初代会長にポール・アレキサンダー氏が就任いたしました。

しかし日本ワイズの父、奈良伝氏もおっしゃっていますが、最初のワイズメンとは、ジョージ・ウイリアムズがYMCAを始めた時に、ラッドレホテルの一室を借りるために援助をし、活動を助け支援した、ヒチコック・ロジャーズ商会の社長と、その仲間の人々です。

YMCAはその最初からワイズと共にあったのです。

YMCAのこと

YMCAにとって何が大切かと申しますと「心」と「交わり」だと思っています。ではYMCAのその「心」を支えるものは何かと申しますと、創立者ジョージ・ウイリアムズがなぜYMCAを作ったかの「思い」であると信じています。

私は今ここで「YMCA創設に戻れ」とか「今の現状に目をつぶってお祈りをしろ」とか「青年の心を救済するプログラムにすぐにとりかかれ」といった、極端な事を言おうとしている訳ではありません。

ただ、YMCA創立時のイギリスの社会状況を考えますと「物」と「人」といったところに、現代社会との共通点を感じてなりません。

もしも今、YMCAが存在していなく、ジョージ・ウイリアムズが現代に生きていたとすれば、彼はきっとYMCAをつくったのではないでしょうか。

YMCAが思っている以上に、今、社会はYMCAを必要としているのではないのでしょうか。それどころかジョージ・ウイリアムズの「心」を考えると、今のYMCAこそYMCAを必要としているのではないか、というパラドクスに陥ってしまいます。

そのジョージ・ウイリアムズの「心」とは、キリストが、弱く・貧しく・しいたげられれている人々にこそ神様の福音があることを強調し、当時の人々をがんじがらめにしていた「律法」という社会制度の中で「律法を守ることと人の命を救うこととどちらが大切か」と問い続け続けられた一生を通し、その後に続きたいという「思い」に他ならないと思います。

この「思い」がYMCAを生み出しました。

最後に

資料の統計を見ますと、1995年までYMCAと同じように増加をしていたワイズの会員数は、1997年のYMCAのどん底の会員数の後を追うように、99年にかけて激減いたします。

このことはYMCAとワイズの会員数が互いに影響し合っていることを如実に語っています。

私が西日本区EMC事業主任として、色々なクラブを訪問させていただきました経験から、そこでの印象を一口で申しますと「ワイズの元気なところはYMCAも元気である」ということでした。

結局、前述いたしましたように、YMCAの設立からワイズ（YMCAの理解支援者）が共にあったように、ワイズとYMCAはいつも「共にある」のです。よく言われるように「両輪」です。

このことをワイズとYMCAが共に真剣に捉え、次代につながる「担い手」としての新しい会員を共に育てることが、いま最も大切なこととして求められているのではないでしょうか。

ＹＭＣＡとワイズの略年表

1821　YMCA創立者ジョージ・ウイリアムズ誕生（英国ソマセット県ダルバートン村）
1836　ジョージ・ウイリアムズ、ブリッジウォーターのホームズ呉服店に奉公
1841　ジョージ、ロンドン・ヒチコックロジャース商会に雇われる
　　祈祷会を始める
1842　祈祷会定例化される
1843　祈祷会、27人のグループに広がる
1844　ジョージ・ウイリアムズ、同志12名とYMCA創立　ラッドレホテル、最初の集会所（施設）となる
1845　青年会員であったタールトン、最初の主事となる
1851　ロンドン万国博覧会（ハイドパーク）でYMCA世界に紹介される
1851　モントリオール・ボストン・アムステルダムにYMCA創立
1852　パリ・ニューヨーク・ワシントン・ジュネーブにYMCA創立
1855　第一回世界YMCA大会開催・世界YMCA同盟結成・パリ基準制定
1880　東京YMCA創立
1882　大阪YMCA創立
1905　ロータリークラブ創立（シカゴ）
1917　ライオンズクラブ創立（ダラス）
1920　オハイオトレドYMCAでランチョンクラブ盛んになりトリムカクラブと称する
1922　名称をワイズメンズクラブとする
　　ワイズメンズクラブ、オハイオ第1回大会開催（初代会長　P. アレキサンダー）
1929　大阪クラブ設立
1930　神戸クラブ設立
　　第1回協議会開催（大阪甲子園ホテル）
1931　東京クラブ設立
1947　初代日本区理事に奈良伝選任される

＊ワイズメンズクラブの名前の由来

第一次大戦に北米YMCAから前線の兵士の慰問に派遣されたボードビリアンのクレッシイが、当時のYMCAの広報誌の寄稿に「東方のワイズメンの一人クレッシイ（Will M. Cressy, one of the Y's Men of the East)」と署名したことによる

（2001年8月）

心当たりはありませんか？ワイズ自滅の10カ条

長　島　精　吉
（埼玉クラブ）

＊皆様お変わりなくお過ごしのこと存じます。ワイズ・ライフをご堪能のことと思いますが、次のような一文に接しましたのでご参考までにご紹介いたします。つまり、この逆をいけばよいということです。

＊心当たりはありませんか？ワイズ自滅の十カ条

①例会に出席しないこと
②もし出席する場合には、なるべく遅刻すること
③会議中には隣の人と世間話に花を咲かせること
④役員として、委嘱を受けたら辞退すること
⑤会議中は発言を求められても発言しないで、終わってから文句を何やかや言うこと
⑥会費などの支払いを滞納し、会長のことなどまったく心配しないこと
⑦クラブの財政について、いろいろケチをつけること
⑧会報作成に際して協力を求められても無視して、できあがっても読まないこと
⑨新会員獲得にはまったく無関心で、他人に一切おまかせすること―とにかく自分より暇な人がクラブにはたくさんいるんだから―
⑩要するに、行動は消極的に、しかしグチは積極的に（自らは率先してやらなくても、クラブがいかに特定の数人によって勝手に運営されていると大いにグチること）

いかがでしょうか。大いに反省したり、思い当たることがあって苦笑いしたり、自信をもったりしたのではないでしょうか。大いに「我が身を三省」したいものです。

（1993年度　東部部長通信）

今、ワイズダムとは

―そのアイデンティティを問う―

奈　良　　信
（東京山手クラブ）

(1)Y'sman Y'sdomとは何か？　Y'sman－wiseman―知者・知恵ある者　Y'sdom－wisdom―知恵

ワイズのエンブレムは極めて象徴的、且つ直截に、そのアイデンティティを示しています。それは、

①そのメンバー一人一人が、個人としても組織としても、YMCAの赤三角の中に入り、これを内から支えるサービスクラブである事を示しており、
②その頭上には、キリスト誕生の夜、三人のワイズメン（博士）を幼児イエスのもとえと導いたバツレヘムの星が輝いています。この星はまた、イエス・キリストの教えを象徴しており、これに導かれたワイズメンは、その持てる宝を捧げて、幼子イエスに礼拝（サービス）を致しました。
③YMCAの三角マークの上弦には、Internationalの文字もあります。

(2)Y'smenのIdentityは、以上に示されている様に、「イエス・キリストの教え」に基づくが故に（世間では兎角問題の原因になる）人種、国籍、性差、宗教等の差異を、避けたり、伏せたり、超越するよりは、寧ろそれらの差異を敬愛の念を以て受け入れ学び合う者達の、世界大の交わりであると規定しています。その証拠に、ワイズメンズクラブは、その出発の始めから国際クラブであり、他のクラブには思いもよらぬメネットクラブが存在し、1973年の憲法改正以来は、他に先駆けて両性をそのメンバーとしています。

(3)以上に述べ来たった事共は、凡て国際憲法の目的綱領並びに会員規定に明らかに示されていますが、本日の主題である「今、ワイズダムは」の「今」に即しますと、三年にわたる国際議会の議を経て昨年決裁追記された、ガイドライン201に注目せざるを得ません。
そこでは、憲法の掲げる「イエス・キリストの教えに基づく」とは如何なる意味なのかが詳述されており、先ず、ワイズメンたる者はイエス・キリストの教えをac-knowledge（承知し納得）する者でなければならない事。
そして、その教えを受け入れる事（acceptance）こそが働いて、ワイズメンを導き、イエスのみ言葉を実行に移す心構えに至らせるのだ、と申しております。
更に、かくて、イエス・キリストの教えなる主のみ言葉は、ワイズメンのクラブや国際協会の運営にとどまらず、ワイズメン個々人の生き方の指針ともなるのだ、としています。
ここでは、凡て主語は「イエス・キリストの教え」であり、「主のみ言葉」であって、導かれてその業に備えしめられる客体がワイズメンなのです。

(4)これらの事は、他のサービスクラブに見られない、まことにユニークな、ワイズメンのアイデンティティの、大胆明快なる表明と言わねばなりません。そして、その故に、クリスチャンでない者を排除する偏狭さの表明と誤解される恐れはありますが、「キリスト教」とか「キリスト教信仰」と言わず、敢えて「イエス・キリストの教え」と表現している精神をこそ、深く読むべきであり、他宗教を凡て「異教」とする十字軍的キリスト教とは全く無縁です。

(5)福音書には、イエスの教えを身近で毎日聞いていたであろうイエスの弟子達について、「然し彼らはイエスの教えの意味する所を理解せず」と言う言葉が、どれだけししばしば出て来る事でしょう。彼らの最大の関心事が、「誰が一番偉いか」と言う事であった事があらわになった時、イエスは「食卓につく者より、これに仕える者」「道で人々から敬礼を受ける学者や宗教家よりも、今ここに遊ぶ幼子達の方が、神の国ではずっと偉大なのだ」と教えられましたが、そのように、世の常識的な価値観から開放された自由の中にこそユーモアがあり、このユーモアこそはワイズの宝です。ワイズはサービスクラブであると申しておりますが、寧ろサーバントクラブと言った方が、イエスの教えにより近いのではないでしょうか。

(6)私達ワイズメンが基づくべき、その「イエス・キリストの教え」とは、このようにパラドックスそのものであるところの、福音書に示さるるイエスの教えに他なりません。
ですから、クリスチャンと言われる人々が、ワイズの世界に於いて、仮にも己を優位に立つ者との思いを抱くとすれば「汝等、われに向いて主よ主よ、と言いつつ、何ぞわが言う事を行わぬか」と叱責しつつ謙虚へと導いて下さるタイプの教えであり、「主よ主よ、と唱える事もない者」が、渇けるいと小さき者の一人に、冷ややかなる水一杯でもを与うる、これに熱い目を留め、これに天国を約束し給うタイプの教えでもあります。

(7)そこで見出す事は、ワイズメンたる者は、宗教も又しばしばその変形でしかない様な、常識的世俗的価値観に従うよりは、イエスの教えにある価値観へと導かれようと志向する者達の運動であります。私達がワイズになる時に誓約する「一人の理想主義者になります」との誓いは、この事を示しています。ワイズメンは星に導かれて旅する、人生の旅人です。

(8)ワイズメンの国際意識の根っ子には、この旅人同志の連帯感があります。ホームステイ等の伝統も、単に理解を深め合う為と言うより、旅人を懇ろにもてなそうと言う、運動の本質に関わるものです。この点はYMCAの誕生以来の本質的伝統にもつながっているのです。

(9)こう言う風に申して参りますと、ワイズメンは確かに変わったクラブでありまして、この「変わった」所の、殆ど全部がワイズのアイデンティティだと確信します。創立者ポール、アレキサンダーも、こう言う変わったクラブに、大勢の人が集まらなくても、それは当然で、そんなに気にする事はない。寧ろワイズならではの変わった点を失わない様に、と終生励まし続けています。

⑽今日の文化の諸相は、その現象面に於ける多様を装いつつも、その本質面に於いては余りにも画一的な世俗的価値観に支配されております。その成熟は同時に人間にとり本来的に大切なものを失わせつつある事に目を注ぐ時、この「変わった」クラブが担うべき使命の先駆性を思わずにはおれません。イエス・キリストの教えにその基を置き、そのしるしなるベツレヘムの星を見て喜び、それに導かれて持てる宝を捧げ、その教えの現実的力をワイズ活動の中に体感して、その喜びを増幅しつつ、これぞ冷たい現実を暖かい現実へと創り変え行く新しき現実、と信じてこれに生き、少なくともこれにあやからんもの、とその想いを星に繋ぎつつ行動し生きる事、をおのがアイデンティティとするワイズメン仲間こそは、人生の旅人、理想主義者、ロマンチスト、ワイキチの群れであります。

（1983年11月23日　第38回中西部会）

今、ワイズダムとは

― そのアイデンティティを問う ―

西　崎　照　一
（京都めいぷるクラブ）

ワイズの基本理念

ワイズメンズクラブは世界27団体ある奉仕クラブの中でロータリークラブに次いで設立が2番目という歴史と伝統を持った奉仕クラブであります。クラブの特色は一業種二会員制であり、メネット、コメットをも包含してあり、他の奉仕クラブとはひときわきわだったものであり、又YMCAに忠誠を誓っている事を我々は自覚しなければなりません。この事はすでに100余年にわたって地域社会における青少年育成の先達であるYMCAの根源的な働きに共鳴し、共に働く事を誓ったわけであります。そして対等の立場で連動出来る事が、ワイズのステイタスであり我々はそこまで意識を高めねばなりません。

良質なリーダーシップを取っている人達をメンバーとして、キリストの教えの理解者をふやし、YMCAの青少年活動を支援し、クラブ独自としても地域社会に役立っていなければならないわけであります。異業種の人達の集合体であるクラブは良質な社会人であればある程、創造的な発想や行動が出来、メンバー同士の自己研鑽によって自己の変革が行われるわけであります。クラブに在籍するメンバーはワイズダムの持つ目的意識に目覚め個人としてワイズダム確立に信念と情熱を燃やす人間集団の出会いであってほしいし、キリスト教の愛の精神を基本に社会人としての存在感のあるメンバーを目指して行かなければならないと考えます。

将来に向ってのクラブ作り

クラブという組織で運営される以上、定める規定に添って運営される事が大切です。現状維持はある意味では衰退です。先輩の御苦労を受け継ぐ時、今我々がなすべき事は人材の発掘と質の向上を伴った拡大であります。その力をYMCAに地域に行動する事によって、得られるのが市民権であります。個人の能力を尊重し、考え方は違っても同じ方向で前向きに行動する事によって、すばらしい発想と信頼の人間関係が生じるはずです。クラブの伝統と現状に自己満足する事なく、伝承として受け継ぎ時代に対応したクラブ作りをお互いの共通の価値感の中で体験すべきです。

先輩の築かれた成果、結果に満足する事なく目的方針を明確にして行動から得た結果に満足感と喜びを味わう人間集団を作ろうではありませんか。一人一人がリーダーとなってクラブに奉仕する事も大事ですが、リーダーを育てる事もりっぱなリーダーシップであります。従来の固定観念から脱皮して積極的なクラブ作りを目ざすべきです。伝統は革新です。良質なフェローシップと良質な思考の出会いの人間関係の中でクラブを愛し、YMCAに連なる人間として創造力のあるトレーニングを、積重ねの中で体験しようではありませんか。このエネルギーがクラブに反映された時にクラブは活性化し、個々の動きが目的綱領に沿ったものになります。

メンバーとしての考え方

他の奉仕クラブに比べてワイズ程純粋な出会いはありません。精神性を重んじ奉仕という事を本当に実践しているクラブは他の奉仕クラブより高いと確信致します。

メンバーはクラブに席を置いて自己改善を図りそれぞれが良質の社会人、職業人になることが目的であり、その心は良質であり良質な指導性を得るわけであります。そのエネルギーを作る為に例会に集まってくるのでありこの奉仕の輪がクラブであると考えます。

①メンバーとしての役割

メンバーとしての価値感はクラブに於ける存在感の有無であります。YMCAに個人的な資格でかかわり、奉仕しているから立派なワイズメンであるという考え方は大きな錯覚であります。YMCAとワイズはそれぞれが独立した組織体であり、クラブとしてワイズとしての関係を明確にすることが、クラブの機能を活性化しメンバーの共鳴が得られると思います。

②国際クラブであるという自覚

どの分野でも国際化は大きく進み、自国だけでなく地球人としてのとらえ方、考え方が必要になってきました。その国の経済力は我々ワイズにもYMCAにも大きな影響があります。我々日本のワイズはその位置づけとそれに伴う義務を果たす事が、国際クラブの一員としての責任であります。その発言力と行動力の伴ったリーダーを養成し、人材の発掘が大事であり国際感覚を身につけたリーダーの養成が急務で有ります。

③YMCAの本質を理解しその精神を守るのがワイズである

会員制度の中でYMCAの維持継続が困難な中で、経営基盤と財政の確立が最重要視される今日、会員とYMCAの接点の担い手はワイズであると考えます。時代の流れの中で組織の硬直化をフォローしサポートする時代が必ずやってきます。その為、我々はエネルギーの蓄積とクラブパワーをつけるべきです。それにはクラブの体質改善に伴った若返りが必要であり、メンバーの自覚と意識が最も大切であり、クラブがその受皿としての機能を果しているかであります。

以上を要約してみますと、りっぱなワイズメンとなる為にはワイズの市民権が大切になってきます。私達はまず職業、家庭のバランスの中で、クラブ活動の満足感を求めるべきであります。YMCAや地域に奉仕活動をする前に良質な社会人としての自覚の中で人との出会い、交わりを積重ねて良い人間関係を作り出さねばなりません。クラブ例会はこのエネルギーを生み出す為にあります。緊張感、満足感を得られない例会では本当の意味での人との出会いはありません。少なくとも共通の接点、価値感を同質のレベルで共有出来るプログラムが展開され、その結果がクラブに還元され評価されるならばメンバーとして共通の喜びが体験でき、市民権を得る為の第一歩と言えるでしょう。

今一度皆さんの素晴らしい能力をクラブに捧げて下さい。クラブの発展は例会の充実と組織の拡充とメンバーの自己研鑽しか有りません。例会で磨かれたメンバーとしての姿勢が地域の人達に、YMCAの方々に、その能力と人格が高く評価された時始めて市民権が得られたと言えましょう。

その為にこそ私達は豊かな愛情と感性を持った、良き家庭人であり職業人であると言う自覚が、メンバーとしての最低の条件ではないでしょうか！

（1983年11月23日　第38回中西部会）

Y'sとYMCAとキリスト教

中部部長　西　村　　清
（名古屋クラブ）

家の重さ

芥川龍之介の短編に『トロッコ』というのがあります。「小田原熱海間に軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の8つの年だった」で始まる小説です。

この良平はトロッコに乗りたくてしかたなかったのですが、こわそうな背の高い土工からしかられ、どうにも近づけなかった。それから10日ほど過ぎた頃、工事場にたたずんで、トロッコの来るのを見ていると、土や枕木を積んだトロッコを押してくる、親しみやすそうな二人の若い男に、「おじさん、押してやろうか？」と声をかけると、「おお、押してくれ」というので、良平は力いっぱい押し始める。急勾配の所はしんどいが、下りになって、急にトロッコに飛び乗るとスピードをあげて走るので、とても気持ち良かった。そしてまた上りになった所で押し始める。しかしずいぶんきてしまって、と良平は次第に不安になってくる。

そんな時茶店があり、休憩するために土工たちが店に入っていきます。そして一人の土工から新聞紙にくるんだ菓子をもらいます。その菓子を食べながら、いつ帰るというのか、そのことばかり気にしていると、二人の土工はまた、トロッコを押し始め、坂を登って、どんどん進み、そして坂を下りた所に茶店があって、二人はまた入っていったのです。日が暮れかかり、良平は帰ることばかり考えていました。いつ帰るというんだろうと！

しかし土工たちは茶店から出てきたと思うと、「おまえ、もう帰れや、おれたちは向こうで泊まるから」と言ったのです。良平は瞬間、目の前が真っ暗になる思いになります。この遠い道のりを、しかも暗くなりかかっている時、来たこともない、あまり知らない所を帰らなければならない。しかも1人で帰らなければならないと思うと、泣きたい気持ちで、しかし泣いている場合ではないと思い、線路づたいに走りだします。もう無我夢中です。途中、さっきもらった菓子包みも走るのに邪魔になり捨ててしまいます。今は菓子どころではありません。頭にあるのは家に帰る事だけです。板ぞうりも脱ぎ捨て、ついには汗をかいて、羽織も道端に脱ぎ捨てて走ります。

来た時とは景色が反対で、本当に家に帰れるのか不安になったり、またすべったり、つまずいたり、泣きたくなり、不安になり、生きた心地がしないが、ただ走り続けるのです。

やっと遠くの夕闇の中に、村はずれの工事場のあかりが見えた時、わっと泣きたくなります。それでも耐えて走り続け、村の家々にはもう電灯がつけられていて、そこを通り、やがて自分の家の門口に駆け込んだ時、良平は大声でわっと泣き出さずにはいられなかった。そして母に抱きついて泣き続け、近所の人が何事かと聞きにくる程であった。

これは良平が26才で、東京に出てきて、雑誌社の校正の仕事につくのですが、何の理由もないのに、ふとその小さい時のことを思い出すという形で書かれている。

⇒帰ってくる所がある。……その思いが不安やつらさ、悲しみ、うちひしがれそうな気持ちを克服する事ができたんだ。そんな事をこの青年は考えていたのです。

生きる意味

犬飼道子さんの『人間の大地』という本の中に一つのエピソードが紹介されている。7万人もいる難民キャンプの一つのテントの中で、一人の子供が一言も口をきかず、空（くう）を見つめ、衰弱しきって、薬も食べ物も全く受け付けない。親も兄弟も死んだか、殺されたか、あるいははぐれてしまったか一人ぼっち。多分いくつかの病気にもかかっていたのでしょう。

医者はついに匙を投げます。「衰弱して死んでいくしかない。可哀想に……」。そう医者は思ったようです。この子も、幼な心に「これ以上生きていて何になる」と絶望を深く感じていたのではないかと思われるほどでした。→帰っていく家がない。これはつらく、悲しく、不安ですし、打ちひしがれた気持ちが絶望に変わり、気力が失せ、死につながっていくのです。

そんな時、ピーターと呼ばれるアメリカの青年が、このテントで働いていたのですが、医者が匙

を投げたその時から、ピーターはこの子を抱いて座ったのです。夜も抱き続けます。子のほほをなぜ、接吻し、耳元で子守唄を歌い、2日2晩、ピーターは用に立つ間も惜しみ、全身蚊にさされながら、子を抱き続けます。

8日目に反応が出たのです。ピーターの目をじっと見て、その子は笑ったのです。「自分を愛してくれる人がいる。自分を大事に思ってくれる人がいた。自分はどうでもよい存在ではなかった」……この意識と認識が無表情な石のように閉ざされていた子の顔と心を開かせたのです。⇒無条件で、自分を愛し、自分を受け止めてくれる。

ピーターは喜びと感激のあまり、泣きました。そして勇気づけられ、食べ物と薬をその子の口に持っていったのです。そしてその子はそれを受け入れたのです。絶望が希望に変えられた時、その子は食べたのです。薬も飲みました。そしてその子は生きたのです。愛は食事に優り、愛は薬に優るのです。

私たちは抱き付いて、泣き崩れる所がある、どんな状態でも、ただ黙って受け止めてくれる所がある。こう確信する時、どんなに苦しくても、悲しくても、不安や絶望があっても、それを乗り越えられるという事ではないでしょうか。逆に、私たちが帰るべき所、安心して受け止めてくれる所がない者は絶望に陥り、それは心だけでなく、肉体も滅んでいくのです。

この二つの話からわかりますように、私たちの一番安心出来るところは我が家、家庭です。そこは私たちが最もくつろげる所だからです。そして無条件で受け入れてくれる所だからです。

YMCAのはじめ

YMCAを始めましたジョージ・ウイリアムズは、18世紀後半から19世紀にかけて、産業革命によって小さな子どもたちが、過酷な労働条件で働かされ、人間としての人格や尊厳さえも認められないような姿を見て、その人間性の回復のために立ちあがりました。まさに人間復興です。それがbody, mind, spiritであったのです。

この子どもたちのふるさと、家庭であり、また自分を無条件で受け止めてくれる存在であり、自分は生きるに値する、という生きる意味が与えられる所、そんな所としてのYMCAの出発であったのです。

そしてこのYMCAもアメリカに伝わって飛躍的な発展をみることになるのですが、その最初から、まずレイマンがいて、YMCAを発展させ、運動を展開するために専門職のスタッフを置いたというのがその出発点です。そのようにして、ワイズはYMCAと共にあったと言えます。

たしかにロータリーやライオンズクラブもYMCAと同じ頃サービスクラブとして出発していますが、これらはどちらかというと、奉仕より会員の友好をはかるランチオンクラブとしての出現です。ワイズメンズクラブも友好を大変大切なこととして重視していますが、しかしさらに大切なこととして、YMCAと共に青少年の健全な育成を、ということがその願いの根底にあることを忘れてはなりません。

人間としての尊厳

愛知県の犬山市に京都大学の霊長類研究所があって、その研究では霊長類も人間と等しく身体的、精神的、社会的存在であるという。まさに生物としての体を持ち、その心の働きは精神的であり、また社会を構成します。しかし決定的に違うところは、人間と違って彼らは霊的でないということだそうです。つまり彼らは宗教を持たないし、したがって祈りもしない、というわけです。つまり人間であると言うのは、霊的であり、また祈る存在であるということです。もし私は無宗教だと言われる方があるようなら、残念ながらその方は人間としての証を放棄されているのかもしれないと思ってしまいます。

人間としてのあり方

聖書の中で最も大切な教えは何かと聞かれた時、主イエス・キリストは、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」そして「隣人を自分のように愛しなさい。」も同じように大切である、と答えられています。つまり神を愛し、神に仕えることは、すなわち隣人を愛することだというのです。そしてこれが聖書のすべてだという意味でもあります。聖書の中に、「神を崇める」ことを、原語でメガリュノーというギリシャ語が使われています。このもとの意味は「拡大する」「大きくする」ということです。メガノザウルス、メガフォーン、メガトンも同じ語源の言葉で、「メガ」というのは大きくする、という意味で、例えばメガフォーンは音（フォーン）を大きくするものという意味になります。ですか

ら神を崇めるというのは、自分を小さくして、神を大きな存在とすることであるのです。同時にそのことは自分を小さくし、自分の隣人を大きくする、これが神を崇めることにつながっているのです。つまり謙虚であることも、また隣人をたてる事も神を崇めることにつながることでもあるのです。ワイズメンのありかたを示している一つの姿ではないでしょうか。 (2001年8月)

ウ エ ル ネ ス 10 則

堀 内 浩 二
(東京西クラブ)

①少肉多菜

昔から自分の生活行動に合った食べものを食べ、自分の目で見える範囲のものを食べろ、と言われますが、最近の都市化の中では無理ですが、牛が獲れる体力なら牛肉も結構、鶏もつかまえられなくなったら自分でとれる野菜となるわけです。しかし肉は重要なタンパク源ですから、で節度をもって脂肪の少ないところを植物油で調理する心がけが大切です。

若い人でも、コレステロールを防ぐ野菜や海草を肉と一緒に食べること。ガンの予防も食生活でできるようです。

②少塩多酢

塩を摂りすぎますと血管を傷めます。それは塩分に含まれるナトリウムが血液中の水分を増やし、血圧が上がり、血管に余計な負担をかけ、結果的に血管の老化を早めるからです。日本人は昔から塩をたくさん摂る習慣があります。減塩のポイントは、塩の代わりにカレーとかコショウなどの香辛料や酢での味付けです。

味覚障害を伴う成人病が増えているとか。スパイスで食事をおいしくすることがコツ。このスパイスは体の諸器官の働きを調節する機能があり、香辛料は大腸からほとんど吸収されないので、血圧や心臓に悪影響が少ないと言われます。外食は、油で揚げたものが多く、味も濃いめです。ラーメンの汁は全部飲まない、トンカツのソースはつけて食べるように心がけて下さい。

③少糖多果

糖分はエネルギーの構成要素として大切なものですが、摂りすぎはいけません。糖分を摂ると血中糖分量を抑えようとして、すい臓からインシュリンというホルモンが出ますが、このホルモンは血液中の脂肪を体の脂肪組織内へとり入れる働きを活発化させます。そのため肥ります。糖分と脂肪を一緒に食べると最悪のケースで、とくに洋菓子はその典型です。和菓子の方は植物性なのでダイエット効果があるという説もあります。

食べものは十年後に影響が現れるといい、今病気をしている人は十年前の食生活を調べてみると原因がわかるかも知れません。

果糖もよくないと言われますが、果物は疲れやストレスの解消に役立つし、ビタミンCの補給になります。

④少食多咀

人間の生涯の吉凶は、食によって左右される、と書いた水野南北の「相法極意修身録」は慎食による開運法を説いています。

過食により味に対する感覚も薄れます。大体、栄養素には栄養効果がなく、運動によって栄養効果がありますが、噛むことが運動です。

噛むことは顎の筋肉を使い、首のマッサージとなり、血行をよくし、酸素を供給して疲労物質を除き、ストレスの解消と同時に脳を発達させ、自律神経やホルモンを高め、「嫌なことを乗り越える耐久力」をつけます。また、唾液はホルモンの役割の他消毒剤となり、食中毒の予防をしてくれます。

⑤少衣多浴

ちょっと寒いからといって厚着をすると、活動をにぶらせ、血液の流れを悪くします。山用のアミシャツでわかるように、空気を着ること

が冬を暖かく過ごすコツです。人間が本来もっている体の調節機能が冷暖房のため、ひ弱になり、外気と室内との温度差が大きすぎて自律神経の働きも充分いかないようです。したがって薄着で上衣の脱着でコントロールすることが大切。

多浴の浴の一つは入浴。最近の温泉ブームも、風呂で清潔を保つことの他、ストレス解消と活力源になるからです。また、体を洗うことは効果の高いマッサージになります。

二つ目は、森林浴で知られるリフレッシュ効果のある芳香物質のフィトンチッドの浴や赤ちゃんには欠かせない大気浴。そのための散歩は手軽な健康法でもあります。若い人に人気の日光浴、海水浴も風邪の予防によいが、皮膚を傷めることがあるので、中高年は要注意。

⑥少煩多眠

煩わしいことは、避けて通れませんが、積極的に立ち向かう気持ちが大切です。

精神的疲労は寝ても直りません。ストレスはなるべくその日のうちに取り除くことが必要で、それには運動がよいのです。精神と肉体の疲労のバランスが快眠につながり、快働に結びつきます。昔は縁台将棋がみられました。肉体労働した人が頭を使うゲームで疲労のバランスを自然にとっていたのです。休養にも二通りあります。カレンダーを「日月火と読み」、明日からの働く力を養うために、日曜を過ごす積極的休養と、働いて疲れたから休む「月火水……型」とがあります。

夜更かしは血圧を上げ血管を傷めます。今日中に寝る習慣をつけましょう。

⑦少煙多気

前文に書いたように、気持ちの持ち方が大切になります。年をとらない秘訣でもあるようです。大事なのは気力です。また、気は空気、酸素を意味し、人間が生きていく上に欠くことのできないものですが、それが環境破壊で汚されています。

煙は排気ガス、工場の煤煙などの公害と人害の煙草のこと。ことに、小児ゼンソク、小児アレルギーは父親のタバコからといわれ、母親が喫うと、無脳症や多指症の子供が生れる事実があります。空気の汚れは天井、窓ガラスをみればわかると思いますし、自分より他人に害を与えることを知ってください。

⑧少怒多笑

怒るたびに一歳寿命を縮めるといわれます。怒るのと叱るのとはちがいます。怒りの原因は他人のせいにすることが多いようです。

「ブス」という漢字は「毒」と書きます。昔弓矢を使っていた頃、矢の先に毒をぬり、相手にささり毒が全身にまわり、最後顔にきて顔の筋肉が硬直し、無表情になる、これをブスといっていました。従ってブスとは顔かたちでなく、人に嫌われる毒に当てられたような無表情の愛相のないことをいい、そのような人は気の毒な人となります。

ほんとうの笑顔は、楽しい心、嬉しい心に親や社会に感謝の心があって身につくもの。

⑨少欲多施

教えることは習うこと、出さないと得られません。ことに深呼吸をみてもわかるように、まず吐くことによって深く吸うことができるのです。いい評価をうけようという欲が、不満を募らせ、過度の緊張に縛られやすい。結果は求めるものでなく与えられるものです。純粋な心で取り組んでいるうち、潜在している能力が開発されることになります。

諺に「駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋をつくる人」とあるように、世の中はさまざまな陰の働きによって支えられ、成り立っています。ともすれば喜べない状況におかれたとき、物事を自分中心に考えてしまいがちですが、苦しいときでも周囲に心くばりのできる人になりたいものです。

⑩少車多歩

4つ足動物であった人間が2本足で立って歩くようになって脳が発達し、手が使えるようになって知恵が生まれ、万物の霊長になりました。

歩くことは、血液の循環をよくして神経の働きを活発にして、骨や筋肉を強くします。ことに足にたまりがちな血液を心臓に押し上げ、心臓の負担を軽くしてくれます。さらにストレスの軽減に役立つ効果もあります。前にも書きましたが、「悩んだら歩け」です。是非試して下さい。

最近の人は運動錯覚をしている人が多い。大阪は勿論、九州まで日帰りで行ってこられる今

日、1日の行動距離が1,000キロをこえるようになりましたが、忙しいほどタクシーなどの利用で1日の歩数が1,000歩前後などということが多いようです。体重60キログラムの人は1日300キロカロリーの身体活動があれば健康が保てるといわれています。それより少ない運動ですと、体内に残って蓄積されます。お金ならいくら蓄積されても結構ですが、栄養分は下腹からたまりだします。

運動による消費量は、ジョギングで20歩で1キロカロリー、歩きで30歩で1キロカロリーです。

1分間百歩として、（1分80メートルは不動産屋さんの広告基準）90分で9,000歩でちょうど300キロカロリーの消費となります。10,000歩運動が推められるゆえんです。

歩くことは最も簡単で効果的な運動ですが、9,000歩は無理としても、今日から少しずつ歩く時間を増やしてはどうですか。筋肉と脳は使えば使うほど発達します。

おへそを高く上げた姿勢で歩くことがコツ。街を知り路傍の花に目をとめ季節の移り変わりを楽しむこともウォーキングのコツ。人との出会いもまた楽しみの1つでもあります。

クラブとコーヒー

堀江　宏
（草津クラブ）

クラブとコーヒー！これは歴史物語である。東アフリカで栽培されたコーヒー豆が、イスラームの宗教的な雰囲気を背景に「コーヒーの家」で飲まれるようになり、次いで海を渡りイギリスはロンドンの「コーヒーハウス」で嗜まれ、その結果クラブは誕生したという。即ちコーヒーの媒介なしにクラブの結実はなかったのであるが、我々はその間の消息を検証し、懐古趣味に堕することなく、クラブの未来を探ってみたいのである。

1．コーヒーは「コーヒーの家」で広く飲まれるようになった。

コーヒーがイスラーム地域で飲まれるようになったのは、15世紀の頃からだと言われている。それから一世紀、16世紀の中頃には最初の「コーヒーの家」がトルコのコンスタンチノープルに出来た。その雰囲気はアルコール抜きでコーヒーを飲ませ、大臣から庶民まで、平等な立場で自由に会話が弾むといったものだった。

当時コーヒーはスーフィーと呼ばれる宗教家によって愛好されていた。最初彼らは、徹夜の祈りを睡魔から逃れるために、これを飲んでいたが、当時風紀の乱れが社会的に問題であった「公衆浴場」に代わって民間が「コーヒーの家」を建てると、賛否両論はあったものの、結局この施設を支えるようになった。

広大な土地・すばらしい眺望・清潔な環境は老若男女が群がり、家庭を離れ、公の立場を忘れて、社交を楽しんだという。

2．クラブはコーヒーハウスという人間のるつぼの中で誕生した。

その群れの中にイギリスからの或る貿易商人も混っていた。この雰囲気が母国にもなじむと直感した彼は、17世紀の中頃（詳しくは西暦1652年）ロンドン市民の前に初めて「コーヒーハウス」を誕生させた。その宣伝文には

"The virtue of coffee - drink first publiquely made and sold in England by Pasqua Rosse."
（本邦初、公に入れて売られるパスカ・ロゼのコーヒー・ドリンクの効能）

と書かれている。publiquely（公に）と断わったのは、それ以前にも、オックスフォード近辺で大学の学生を相手に、個人的にコーヒーが売られたからであるが、公にオープンしたのは、パスカ・ロゼがマスターをつとめるダニエル・エドワーズの「コーヒーハウス」が最初であった。その建物は粗末なものであったが、文献によれば、イエス・キリストが生まれた馬小屋ほどの意義があったとオーバーに書かれている。またその書は続けて、そこで出された黒々とした液体は、イエメンの片隅で15世紀に生まれたにも拘らず、ヨーロッパ全土に広

がり、オリエンタリズムをかきたてる未知の飲物として、また歓待のシンボルとして、そして社交を引き伸ばす口実として使われた、と述べている。「コーヒーハウス」はそれ以後ロンドンの街に、イギリス全土に、そして欧州に、急速にその数を増やしていったのである。

さてここで皆様を、或る標準的な「コーヒーハウス」に案内するとしよう！　先ず建物に入ると一階のクロークを通らねばならない。ここにはバー・メイドと呼ばれる、若くて美しいお嬢さんが、我々をにこやかに出迎えてくれる。そこで我々は1ペニーを払って、一言二言、言葉を交わすのであるが、出来ればそこで笑いが起こることが望ましい。しかし住所を聞いたり（現代なら差し当たり電話番号を聞き出すところであるが、残念ながら電話がなかったので）長くそこに留っていることは、女人禁制の建前上、出来ないことになっていた。（ここのところは男女とも入場出来るトルコの「コーヒーの家」と違う）当時イギリスでも男性優位の社会であったが、女性にとってみれば、男性がヨーロッパの飲物の代表であるワインやビールを痛飲し、商談や討論、学問や芸術に、いい加減な生活を送っているよりは、アルコール抜きで元気に日暮らししてくれる方がよいと考えたのかもしれない。

次に二階に上がってみると、広い部屋の中央に比較的大きなテーブルがあり、大売り出し・開店のチラシ、休日診療当番表・業界新聞などが置かれており、周囲に配置されたテーブル席では、商談中の人、相談を受けている人、学問・芸術で討論中のグループ、トバクにスリと、わいわいがやがや皆等しく1ペニーを払って、身分・教養の別なく、結構粘ってコーヒーを楽しんでいるという光景に出会うのある。かくしてクラブ誕生の萌芽は、このような「人間のるつぼの中」コーヒーを飲みながら形成されて行った。

当時書かれた「コーヒーハウス点描」というパンフレットには次のようにある。

「コーヒーハウスは第一に値段が安い。友人との待ち合わせも、パブへ行けば財布はすぐ空になる。ここなら、1～2ペニー払って2～3時間、誰にも文句を言われずに居られる。第二に酒がないので一応真面目な雰囲気である。アルコールが入ると、すぐに眠くなって目的が完遂出来ない。第三に楽しめるということ。自由に歓談し、誰でもつつましやかに話したり、話し掛けたり、答えたり、誰とでも討論出来る。男たちにとって、職場からも、家庭からも離れたかくれ場所であったのである」といった具合であった。しかし一部「コーヒーハウス」には、無意味な雑居（利己主義者・ニヒリスト）やスリのなれ合いなどが浸透しだしたため、紳士と非紳士といった分別が次第になされて行ったのである。即ち「コーヒーハウス」でコーヒーを飲んでいた人達が皆クラブの結成に動いたわけではない。コーヒーを飲ませるだけなら、トルコの「コーヒーの家」でも広く飲まれていたが、クラブは誕生しなかった。クラブが生まれるためには、或る文化的な背景を持った紳士と呼ばれる人達の組織化があったことを見逃してはならない。

3．クラブは文化のるつぼの中で誕生した。

元来人間は社会的な動物であるといわれる。我々はあらゆる機会を通じて、色々な口実を設けて集まって来る。その意味からクラブ的な会合は、古今東西を問わず古くからも存在した。歴史的にみて、紀元前800年頃、古代ギリシャにポリス（都市国家）が誕生した時、多くの自由市民がアゴラと呼ばれる中心広場で談笑したり、商取引をしたりしたとか、紀元前400年頃アリストテレスが、それを哲学にまで高めていったとか、種々の発展段階をへて、色々な集団が世界各地に群生するのである。とりわけクラブ誕生のオリジナル集団と目されたのは、17世紀初頭、イギリスはヘンリー4世の治世に現われた「心の良き友」と約される“Le Court de Bonne Companie”というフランス語を冠する団体であるといわれている。以後これらの集団は、政治・経済・文学・宗教から趣味・娯楽・ホビーに至るまで、広い意味での文化活動を展開したが、会合はあくまでも会食中心であり、コーヒーが演出に一役買うといったことはなかった。

このような集団が、「コーヒーハウス」の誕生を契機として、その雰囲気に目をつけない筈がない。当時ロンドンに遊学していた夏目漱石は、サムエル・ジョンソンの出入りする「コーヒーハウス」の模様を伝えて、次のように書いている「例のジョンソンは倶楽部向きの男（Clubbable man）であって、生涯中いろいろな倶楽部に関係した。彼が作った辞書を見ると倶楽部の定義の下に｛ある条件の下に会合する善良なる伴侶の集会｝とあるのをみても彼が倶楽部をいかに解釈したかが分る。云々」ここに倶楽部向きの男（Clubbable man）という言葉が出て来るが、これこそロンドンの「コーヒーハウス」で始めて使われた言葉である。従ってClub

（クラブ）という言葉も、ロンドンの「コーヒーハウス」において出来上がった。話は少しそれるが、我々が乱発するClub（クラブ）という言葉の語源であるが、Cleave［kleiv］（団結する）から出ている。蛇足ながら付け加えると、同じスペルでCleave［kli:v］という言葉があり、これは（分裂する）という意味になる。一寸考えるとこの二つは相反する意味にもとれるが、次に述べるクラブの離合集散の様相を考え合わせると、この語源もまた了解されて来るのである。

要するに**ある条件の下に**「コーヒーハウス」に集まる**善良なる伴侶**（紳士）によってクラブは結成された。当初雑然としていた人間のるつぼは、「友は類を呼び」色々な目的を持った文化諸団体へと色分けされて行く。例えば政治的なクラブとしては、当時の二大政党であったトーリー党系のオクトーバー・クラブ、ホイッグ党系のキット・キャット・クラブとか、経済的なクラブとしては、現在も保険業界のエリートと目されるロイズ保険会社の前身であるロイズクラブ、その他ジャーナリズム・ファッション・文学などの分野とともに、宗教界からも我々の奉仕クラブの芽生えが、清教徒としてのクリスチャリティをバックボーンに誕生するのである。

4.「コーヒーハウス」でのクラブの消長とその教訓

「コーヒーハウス」の方は、半世紀の繁栄の後、急速に衰退してゆく。最盛期8,000軒あったものが500軒にも減少するのである。その中にあってクラブは種々変貌をとげながらも生き続けるのであるが、イギリスの「コーヒーハウス」で暖められたクラブライフClubbingは、脈々としてイギリスの植民地であるアメリカへ移植される。入植当時は親類・縁者・隣人に恵まれない社会環境であったので、各地の開拓者は集って団結した。20世紀に入ると、産業革命により失われた人間性を回復しようとする自由と平等の理念が、清教徒精神と共に奉仕クラブを続々と誕生させるのである。1905年のロータリークラブ、1917年のライオンズクラブ、1922年のワイズメンズクラブなどがそれである。

結語としてクラブは、「コーヒーハウス」でコーヒーを飲んでいた、善良な伴侶を求める人達により、その持てる伝統的な文化的背景により触発されて結成された。その流れの中、奉仕クラブはその文化的な伝統としての、クリスチャニティに育まれた人達によって結成された。いよいよ世紀末になり、我々がこの歴史的な経緯をクラブ運営にどう生かすかは、結局各々の自己研鑽と組織のたえざる点検とにかかっていると言わねばなるまい。

（1994年）

（参考文献）
コーヒーが廻り世界史が廻る（臼井隆一郎　中公新書1095）／クラブの人類学（綾部恒雄　アカデミア出版）／コーヒーハウス（小林章夫　駸々堂）／クラブ（小林章夫　駸々堂）／古典期アテネの政治と社会（伊藤貞夫　東京大学出版会）

クリスチャン・エンファシス

堀　江　　宏
（草津クラブ）

私は本年頭書のお役目をさせていただくことになりました。これはワイズダム・YMCAの異文化的な事柄を、日本区に反映させてゆく使い走り役でしょうが、キリスト教徒のお先棒を担ぐのではないことに安堵し、このテーマで一年間よい夢でもみたいと思っております。

ワイズには、クリスチャン・エンファシスにしろ、YMCAのCにしろ、クリスチャンという言葉が目につきます。東大の隅谷教授（当時）のお説によりますと、これを文法上「キリスト教徒」という名詞に解釈するのではなく、「キリスト教文化の」という形容詞に解釈することが妥当であると述べて居られますが、至言であると考えます。クリスチャン・エンファシスもキリスト教信仰を押しつけることなく、ワイズダムのキリスト教文化としての側面を、我々のライフ・スタイルに合わせて是々非々主義的に採り入れてゆくことを強調すべきであると思います。

我が国におけるキリスト教界の大先輩内村鑑三は、仏教国日本においてキリスト教を布教する外人宣教師を評して「外国より我が国に来り、父祖の宗教を捨てよとわれらに迫る。もし誤謬ならんにはわれらこれを捨つるに躊躇せざるべからず。しかれどもそのいかに辛酸の業なるか、かれら宣教師の知らざるところなるがごとし。旧来の習慣と絶たざるべからず、父母親戚と争わざるべからず。宗教を変うるは霊魂を変うるごと難し」と喝破しておられますが、時代の差を感じさせない言葉です。

ワイズメンズクラブは、所詮自己のライフ・スタイルにこだわる集団であります。キリスト教に限らず、特にその宗教性は、奉仕クラブのなかでも特異な存在で、老人問題や終末医療など、人生の終焉についての論議が盛んに行われる昨今、老いや死を含んだライフ・スタイルを考える我々は、もっとその渦中にあってもいいと思われます。我々は他の奉仕クラブでは果たし得ない、その宗教性を含めた、総合的な生活規範について、我が国固有の文化に迫ることが必要であると思います。主張と譲歩の間において、ワイズの宗教条項も定款通りの運営を期待したいものです。

（1992～1993　日本区報第1号　通巻176号）

ワイズ温泉どっぷり論

森　田　惠　三
（京都ウエストクラブ）

其の１　Mの原点はCにあり

私達のクラブ京都ウエストは、去る4月26日に採決した『日本区6000宣言』に引き続き、7月14日の新年度Kick-off例会において「京都ウエスト55宣言」を採択して、宣言書にメンバー一人ひとりが心を込めて署名し、クラブ創立以来の念願である会員数55名達成を内外に力強く宣言いたしました。

何事によらず物事を成功させるには、先ず具体的なイメージとしてとらえる事の出来る目標を設定し、それを強く認識し念ずれば必ず成功に導く事が出来ます。クラブの目標が全てのメンバー共有の夢と成ることが大切なのであります。

私達はクラブ創立後14年余、優秀クラブの自負に奢る事なく、つねに謙虚な姿勢でワイズ活動に取組んできました。

蓄えた奉仕エネルギーの自然的発露として、京都洛中、京都みやびのExtension（クラブ拡張）も果たし、親子クラブ共々、力強く質の高い奉仕活動をつづけています。この働きの中核と成っているものは何でしょうか？云うまでもなく“人材”であります。人材には質と量が求められるのです。《良質×多量＝大きさ＋強さ》の公式実現こそ『日本区6000』「京都ウエスト55」の目標達成にほかなりません。

Membership（会員増強）の原点はConservation（会員の維持教育＝会員意識の高揚）にあります。クラブ創立15周年を迎えて今一度、新旧会員を問わず皆で“ワイズとは何か？”を考えて見る必要があると思っていたところ、この度ブリテン委員会から貴重な紙面を与えて頂くこととなりました。次号より9回にわたって【ワイズ温泉どっぷり論】をワイズを考える話題に提供してみようと思っています。

「京都ウエスト55宣言」達成はメンバー一人一人の会員意識の高さによって定まるのです、拙い私見ではありますが話の種と思って活用して見て下さい。忌憚ない意見や質問をどしどしお寄せ下さる事を願っております。　（1994年9月号会報）

其の２　やるなら決めよ。決めたら迷うな！

万国旗をはさんで会長の前に立ち、「入会します」と右手を上げての力強い宣誓。誰もが一度は体験している緊張の一瞬です。メンバー一人ひとりから友情の握手をもって歓迎の礼を受けている新会員は、感激とともに一方では期待と不安が交錯した複雑な心境にあったと云えるでしょう。自らが決断した入会とは云え、未知の世界への第一歩なのですから当然のこととは思うのです。そこで私はこう考えるのです。

縁あってワイズメンズクラブに入会したからには、まず自分自身がワイズの理解を深めるために、ワイズやYMCAに関わる全ての行事に積極的に参

加してみる。そこに何ら自己の人間的成長への糧や喜びが得られないと判断すれば、堂々とクラブを去ればよいのだと。しかし、何処のクラブでも見られることですが、万やむを得ない理由は別として、ダラダラしたクラブライフを過し、不十分な理解のままに他を批判して去って行く友を知るとき、その友にとって在籍中のワイズは彼の人生にとって、どんな意義があったのかと、いつも淋しく残念に思われてならないのです。

たしかに経済的、時間的に余裕がないと全ての行事に参加できるとは云えないものの、何が大切かと云っても気力と熱意に支えられたチャレンジ精神ほど大切なものはないと思うのです。“やるなら決めよ。決めたら迷うな！”これこそワイズ温泉どっぷり論の決め手だと考えます。

例会を柱とする諸行事の親睦を通して培うエネルギーこそ奉仕の心の源泉であり、そこから自然的発露として生れる奉仕の実践の継続が、愛にもとずく自己研鑽の場となる広がりをみせ、自他共に温かく包まれた人間性豊かな実りと「奉仕をしているのではなくて、むしろ奉仕されているのは自分である」ということに誰もが気付かされるのです。

これこそどっぷり浸かるワイズ温泉の高い効能なのです。　（1994年10月号会報）

其の３　新会員と先輩ワイズの基本的義務のワンポイント

「ワイズメンズクラブって知ってる？」「うん、知ってるよ、ジャガイモ売ってるでしょう」との嬉しい返事を聞くこともありますが、まず殆どの人が「いや、それ何のこと？」と聞き返される事が多いのではないでしょうか。それならこの時とばかりワイズの宣伝をしてみて下さい。しかし、奉仕、奉仕と真正面に唱える愚かさは避けて下さい。中途半端は駄目。ゆっくりと話せる時間のある時にタイミングよく誘ってみることです。ワイズの理解が、まだ充分でない時は、その点を断った上で、自分自身の体験談と、これまで見聞してきた先輩ワイズの行動や思考を折りまぜながら、良き友人が出来て自己の人間的向上につながりつつあることを、熱意をもって語ってみて下さい。誰しも、興味ある話であり、誘ってくれる人の生き生きとした喜びの表情がうかがわれ、自分のことを真剣に思って誘ってくれているのだなーと感じられた時にこそ、初めて好奇心をそそられるものなのです。

「友人知人を得、自己研修に役立つところは別にワイズに限らないでしょう。」との反問があった時には「ワイズは決して宗教団体ではないけれど、人間として最も大切な愛に（私はこれを単純に感謝と喜びと理解していますが……）満たされ、奉仕の心が自然と生まれ出る感じをうける。そして結局は奉仕されているのは自分の方だと気づかしめられる。そのような楽しく不思議な人生道場なんですよ。」と答えてみて下さい。

それから紹介者にとって大事な点は、基本的には真面目な人を誘うことです、何故なら入会後に求められる例会等の出欠返事、時間厳守など、ほんの小さな基本的義務さえ果たせぬ人では困ることになるからです。新会員がワイズ温泉にどっぷり浸かる第一歩は、この所を確実に履行することから始まります。

一方紹介者たる先輩ワイズにとって入会者へのアフタケアーを十二分に努めることは基本的義務なのです、ワイズ温泉の湯加減を良くするワンポイントではないでしょうか。　（1994年11月号会報）

其の４　例会に出席しやすい環境整備を

ワイズの諸活動の原点は毎月欠かさず開かれる例会への出席に有ると断言したいのです。待ち遠しい思いの例会、思わず足を速めたくなるような楽しい例会こそ理想的であることは申すまでもないことです。

楽しい例会の企画運営にはドライバー委員が頭を痛めるところですが、役員会や他委員会の協力を受けての例会内容はワイズを通しての人格向上への学びと、友情を深めるふれ合いとの硬軟相俟ったプログラムが選定されています。

しかしここで一考して頂きたい事があります。それは与えられた場としての例会でなく、たとえ形はそうであっても実際に例会を楽しいものとし、奉仕の心を育てる親睦の場として自他共に有効な例会と為しうるかどうかは、一に出席者各自の心構えと積極的な行動にかかっているということであります。

その為には会員個人に対してどのようなことが求められるでしょうか。それは先ず例会に出席しやすい身辺の環境整備をすることです。

①家族（メネット、コメット、親）のワイズへの理解を深めること。特にメネットにはブリテン、区報、部報、ワイズメンワールドなどを見せ、

反対にメネットニュースはメンの方が必読すること。メネットと共に参加できるプログラムには出来るだけ夫婦が揃って楽しんでいただき、喜びを分かち合ってほしいのです。喜びや楽しさは分け合う事で倍加します。ワイズ温泉混浴の効果で夫婦愛を高めて下さい。

②職場でのワイズへの理解と協力を依頼すること。会員のワイズでの働きが、社会に貢献し、奉仕の心で培う人格向上や成長の効果が、企業にも、社員にもプラスの影響を与えてくれる事を自信をもって言い切れるように努力して欲しいのです。「今日はクラブの例会日ではないですか」と送り出して貰えるほどの理解と協力を得たいものです。ワイズ温泉の効能はあなた一人のものではないのですから……。　（1994年12月号会報）

其の5　ワイズの特性を理解しよう　(1)
―Christianity―

身辺の環境整備に引きつづいて、メンバー個人に求められる最も大切なことがあります。それはロータリーやライオンズなど他の奉仕クラブには見られない大きな三つの特性を十二分に理解するということであります。

今回はその一つ、ワイズに存在するChristianityの問題です。これは入会時のオリエンテーションを受けただけでは到底理解の及ばぬことかも知れません。かつてウエストの三役や委員長を経験した有望な会員であり乍ら、どうしてもこの点だけは自分の信条に適しないと、心ある仲間たちとの討論や説得の甲斐なく、クラブを離れていったメンバーもあったのです。

ノンクリスチャンの多い日本区、特に京滋部では、この論議はよく耳にすることですし、ワイズメンとしての奉仕の心の拠り所とも云えるこの特性は、あまり深く追求しすぎると良い面が消えて悪い特性となるばかりか、会員増強にあたってのデメリットとさえなるものなのです。

われわれの奉仕の対象として、或はパートナーとして存在するYMCAと同様に、ワイズメンズクラブでもクリスチャンのグループとして発祥したことは自然なことであり、その存在の基盤がキリスト教にあるとしても当然のことと云えるのです。

またクラブ例会や各種行事において賛美歌や祈祷などが行われていますが、むしろ昨今では、こうしたことを宗教行事としてとらえず、ワイズの長い伝統の中での慣習として受け継がれているものと云ってよいでしょう。ノンクリスチャンを受け入れる幅広い門戸が開かれているからこそ、昨今のワイズダムの発展興隆が見られるのです。

国際憲法第2条の「イエスキリストの教えにもとづき…あらゆる信仰の人々が…」に止まらず、日本区定款第2条では「宗教信条の相違を越えて」の一文が加えられているところにその意義と理想を見出してほしいのです。

誰もが見落としがちな、この小さな特徴を知るとき、ワイズ温泉にどっぷり浸かれる心のゆとりが生まれることでしょう。　（1995年1月号会報）

其の6　ワイズの特性を理解しよう　(2)
―イエスキリストの教え―

前号で述べたワイズの最大特性である“C”の問題をもう少し深めてみましょう。日本区定款第2条に「あらゆる信仰の人々が宗教信条の相違を超えて」と規定しながらも、前提として「イエスキリストの教えに基づき」とあることは、一見矛盾するように感じます。しかし、そうではないのです。

「イエスキリストの教え」の端的な表現としては、「自分を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」が用いられています。これは崇高な人類共通の愛、隣人愛であり、何もキリスト者だけが理解し実践すべきことではないのです。

曹洞宗信者である私も、朝夕の読経の中で、人間として生きるうえで愛は欠くべからざるものと教えられてもいますし、また私の人生訓“他の中にこそ生きてあれ”の実践理念であると理解しています。単に宗教上だけの理論でもなく、最近云われるところの「共生の時代」だから必要だというものでもなく、人類誕生以来悠久に尊重されてきた精神だと思います。

したがってキリスト者であるなしを問わず誰にでも共通する教えであり、「イエスキリストの“愛”の教え」と読めば、ぐっと理解しやすくなると思うのですが如何でしょうか？

では愛とは何でしょうか？これまた漠然として表現のむずかしいことですが、私は一つの意味として、今は亡き元京都YMCA理事長湯浅八郎先生の詩「生きることは愛すること、愛することは理解すること、理解することは赦すこと、赦すことは赦されること、赦されることは救われること」と、そして聖書の言葉「愛は寛容であり、愛は情け深い」を思い浮かべます。時あたかも本年は“国際寛容年”でありますが、寛容とは心が寛く

人をよく受け入れること、とがめたてをせず、あやまちを許すこと、と云われます。

湯浅八郎先生の説かれる“愛”こそ私達が最もよく理解できるものであり、義務やルールを守る厳しさと、理解し赦し合う優しさとが均衡する“寛厳よろしきを得るクラブ運営”こそ、ワイズ温泉の効能を高める薬種だと信じています。

（1995年2月号会報）

其の7　ワイズの特性を理解しよう　(3)
―YMCAの本体は何か―

さて、ワイズの第2の特性はYMCAのサービスクラブであることです。ワイズを紹介するときオーム返しに「なぜYMCAなんかを奉仕するの？」と聞かれた経験をお持ちの方も多いのではないでしょうか。私はこれはYMCAの社会におけるイメージ・認識がなせるわざであると思うのです。

YMCAはワイズ同様に、その存在基盤をイエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神においています。YMCAのマークが示すSPIRIT（精神）・MIND（知性）・BODY（身体）のバランスある健全な青少年育成運動を推進し、望ましい地球環境の実現と、生命あるものすべてが共に生きる平和な社会実現に努力する世界最大の国際奉仕団体であります。

そして、一般企業とは異なって、その目的や理想を理解し協力しあうことを強く意識した会員組織によって運営される「運動体」なのです。

しかし、世界のYMCAが創立されてより151年、京都YMCAも創立以来106年目という超ロングな歴史を築いてきたYMCAは、時代の変遷・組織の発展にしたがって、ボランティア組織や施設を自立・維持させるために、次第に事業化への道を歩まざるを得なくなってきたのでした。

とくに日本のYMCAでは最近の約20年間は、教育事業の拡大によって「英語、進学、フィットネスのYMCA」のイメージが大きくふくらんだために、YMCAは「事業体」であるという認識が一般的となって「なぜYMCAなんかを？」という疑問を生じさせているのだと云えるのです。

日本YMCA同盟において、21世紀を間近に迎えた今、YMCAの基本に立ち戻って、事業と運動の統合と方向づけ、ボランティア組織の役割、ワイズとの連帯、YMCAのアイデンティティの再構築などを再検討して、自らの使命を明らかにしようとする動きがあります。

私たちワイズメンが、先ずYMCAへの正しい理解と、思いやりの心あふれる愛のボランティア精神を抱くことこそ、ワイズ温泉に浸かる前の「かかり湯」だと申せましょう。　（1995年3月号会報）

其の8　ワイズの特性を理解しよう　(4)
―YMCAへの忠誠心とは？―

1月17日早暁の兵庫県南部地震は、京阪神のみならず我が国全土を震撼させましたが、この阪神大震災の救援に誰よりも逸早く立ち上がったのは他ならぬYMCAでした。自らの施設やスタッフの多くが被災されたにも拘らず、震災後2ケ月半を経た今もなお神戸市や西宮市などの行政機関のボランティア窓口の大任を背負い乍ら、復興状況に即応した献身的なボランティア活動を続けられています。

これこそ自己犠牲に立つ愛の精神なくして果たせるものではなく、現地で聞くお話には言い知れぬ感動を覚えずにはおられません。

もとよりワイズ日本区もYMCA同盟と協調し乍ら、独自の募金活動や被災地への炊き出しワークなどに取り組み、YMCAを支援する奉仕クラブとしての使命をいかんなく発揮しています。

私達ワイズメンは近年苦境にある全国YMCAへの支援を深めることに加え、大震災で巨額の物的被害をうけただけでなく、長期にわたる経済的損失が予測される神戸YMCAの復旧に力を出さねばなりません。これはワイズとYMCAの具体的な協働の例として、広く社会に理解していただける機会とも言えるのではないでしょうか。

さて、ワイズが理解されにくい第一点の「イエス・キリストの教えに基づき……」については、すでに1、2月号に記したところですが、もう一つ難点「YMCAに対する忠誠心をともにしつつ……」について考えてみましょう。よく聞く話では、ワイズはYMCAの一クラブではないのに従属的で、悪く言えば服従的にさえとれるという発言や、忠誠という古めかしい表現が気に入らないといったことです。

しかし、もっと素直になれないでしょうか。広辞苑によれば「忠誠とはまごころ、まこと」とあります。正にその通り。何もYMCAに限らず物事に当たるに誠心誠意をつくすことの大切さは誰もが知るところではないでしょうか。考えすぎや言葉の情感にとらわれた誤解は早く解消していただきたいものです。

YMCAを正しく理解するには、単に維持会員と

なっていることに止まらず「京都YMCA」や「The YMCA」を読んだり、プログラムに積極的に参加するなど「YMCA温泉」にも一度は浸かってほしいのです。きっと「ワイズ温泉」との成分の違いや薬効の違いが確りと体感できることでしょう。

（1995年4月号会報）

其の9　ワイズの特性を理解しよう　(5)
―メンと共にあるメネットの働き―

Y's Menette―なんとなく心地よく響く言葉ではないでしょうか。「少し小さくて可愛い人」という意味だそうです。

さて、ワイズの三大特性の三ツ目はこのメネットの存在です。1922年ワイズ誕生の翌年には、早くもワイズメン夫人達による支援活動が最初の記録として残っており、1950年メキシコ大会にて「ワイズメネットクラブの設立宣言」が採択され、1965年には世界で25番目、日本区で初めての神戸メネットクラブが生れたのです。

1973年からは、それまでワイズメンの夫人だけで構成されていたメネットクラブに、ご主人がワイズメンでない夫人の参加も認められ、今ではメネットの域を超える奉仕活動を望む女性には、ワイズメンとなる門戸が開かれています。

身近なところの京都ウエストメネットクラブは、森田直子メネットの1986年度日本区メネット事業主任就任を契機に、川戸重乃メネットを初代会長として誕生し、はや10年を数えます。この間、力強い京都ウエストクラブの活動を、良き助け手として優しく支え、また、平安徳義会への毎月初の誕生ケーキ奉仕をはじめとするいろいろのメネットクラブ独自の活動を続けています。

もとよりメンがクラブに入会したと同時に、その夫人はメネットとなりますが、このことについて「メンはワイズに入会したけれど自分は入会したわけでない」という言葉を聞くことがあります。

メンの入会に当って夫婦揃っての理解が得られるように、スポンサーやクラブが努力することが理想なのですが、例えそうでなかったとしても、家庭環境の許すかぎり、ワイズ行事に参加されることをお勧めしたいのです。何故なら他のメネットさん達との親しい交わりを通して得られる愛と奉仕の喜びが、すべて自分自身の人間的成長への糧となることを知るとき、それは何ものにも代えがたい価値あるものと思うからです。

メンとメネットの共通の話題や行動がスムーズに運ばれるためには、クラブブリテン・メネットニュース・日本区報・YMCA会報など関連する情報を共に分かち合うこと、そして例会をはじめ諸行事にメネットをエスコートするメンのあたたかい気配りが、最も大切なことでしょう。他の奉仕クラブにない夫婦揃ってのワイズの共働らきは、まさに夫婦愛を育くむワイズ温泉混浴の素晴らしさと言えるのです。

（1995年5月号会報）

其の10　クラブ運営の舵を取る三役会・役員会

今月1994年度の最終号となるため「ワイズ温泉どっぷり論」も一先ず最終のまとめをと思っておりましたが、次年度も引続き連載を望まれるところとなりました。私にとっては光栄なこと乍ら、一方では、果たして皆さんのお役に立っているのかどうか、続けてよいのかと不安な思いにかられている始末です。

しかし折角の機会でもありますので恥を忍んで愚論を開陳してまいります。どうかこの一年、メン・メネットさんともどもお目とうし下さって、忌憚ないご意見をお寄せ下さり、意見交換や討論の種として、クラブ活性化に結びつけていただければ、私にとって望外の喜びとなることでしょう。

さて、ここ暫らくはクラブの組織・運営面について語ってみることといたします。先ず本号は三役会・役員会です。いずれもクラブ運営の舵を取る重要な執行機関であり、三役会は正副会長・書記・会計で構成され、通常は役員会への提案事項を整理し、事前準備に当たるという言わば「役員会の下ごしらえ」の機関と申せましょう。

会員や委員会をはじめ、部・区・国際などから会長に集中して入ってくる情報資料を整理し、役員会での審議・協議・報告事項に仕訳しておき、求められた場合は三役会としての原案を確かりと提示出来ることが大切です。

役員会では副会長が議長となって議事が進行されますが、出席役員は堂々と遠慮なく意見を延べ合うべきで、独自の意見がないときは、せめて「〇〇さんの意見に賛成です」と発言すれば、これは立派な意見となります。ただ反対の場合は、単に反対とだけでなく、自分自身の意見を発することが必要でしょう。

少数意見をも大切にしながら、また、会長決裁によらねばならぬ時にはこれに従うなど、役員会として最良の結論を得る努力を重ねることは、そ

れをまとめる議長のみならず、役員一人々の人間形成への願ってもない自己研鑽の道場と言えるのではないでしょうか。

何故なら、そこには相手の立場を尊重し、思いやる心“愛”が溢れているからです。その一年間、役員に選ばれたことを重荷と考えるより、むしろ自分が育てられる場を与えられたとの感謝の念を強く持ってほしいのです。この感謝の思いがあればワイズ温泉の薬効が特段に高まることを知るからなのです。

（1995年6月号会報）

其の11　会員増強意欲につながる事業委員会の働き

さて今回はクラブ活動の実動部隊である委員会について考えてみましょう。クラブでは6月定時総会において、次年度事業計画案が決定承認されます。それには次年度の新会長方針や委員会計画案が盛り込まれ、新しい一年間の活動の源泉である“やる気”が漲っています。その計画が路線通りに走れるかどうかは、委員長をリーダーとする委員会のチームワークの良し悪しにかかっています。

委員会は毎月定例会議を開きますが、必ず定時に始められるように、出席義務者である委員や担当三役たちの協力が、まず何よりも大切と思います。

委員長は会議に先立って役員会議案書のコピーなどを利用して、役員会での報告・協議・審議事項の結果を、ともすれば情報不足になりがちな委員たちにワイズ情報として正しく伝達することから始めます。

時には会長や三役の助けを借りて、ワイズやYMCAに関わる歴史や今後の方向、或いは種々の疑問に応えるなど、とくに新しい会員を育てるための気配りが求められます。委員会はまさに温故知新の学習の場であるとも言えるのです。

次いで委員長はあらかじめ準備されている事案を会議に諮ります。年初の計画の具体的行動への策を練りますが、止むを得ない変更事項や委員会判断の枠を超える事項が生じた場合は、時間的余裕を考慮しながら役員会か三役会、または会長のアドバイスを求めることが正しい判断と申せましょう。また事業の遂行には全会員で取り組むことが多いので、会員への協力依頼や連絡事項は確実に伝達されるよう遺漏なきを期さねばなりません。

ところで委員会の会場ですが、少人数のことでもありますので、出来うれば委員の自宅か、それに代る場所での廻りもちをさせていただければこれに勝るものはないと思います。

これは私自身、京都地区ワイズの驚異的な発展の原動力は活力ある委員会の働きにあると、今なお信じているからなのです。ご家庭には少々ご迷惑をおかけはしますが、夕食などは割勘負担や持ち寄り制にしてでも実施できれば、たまにはメネットさんも交えた楽しいコミュニケーションによって、会員の相互理解や素晴らしい人間形成の場となるワイズへの理解が一段と深まり、会員増強意識をも湧かせるという一つのワイズ温泉効果が得られることになると私は信じるのです。

（1995年7月号会報）

其の12　ワイズの国際性を体感させるIBC（International Brother Club）

さて、事業委員会のトップを切っての登場はIBC委員会です。IBC事業は海外クラブとBrother Clubを締結して、国際交流を図ることを目的としていますが、ウエストは既に韓国ソウルの鍾路クラブ（1982年7月・ソウル）と台湾の台北ダウンタウンクラブ（1991年6月・下田）とのIBC締結を終え、更には1991年9月、台湾高雄でのアジア大会席上においてTriangleを締結しました。

ブリテンやクリスマスカードの交換、周年記念例会や区大会への表敬訪問、クラブ間のメンバー往来などで一段と交流を深めてきていますが、中でも特筆すべきは鍾路との間で1983年1月から1993年1月まで、実に11回に及んで実施してきたワイズリングホームステイ交換プログラムであります。

しかし、このプログラムは両クラブのコメットが成長して対象者がなくなり、1993年8月鍾路のホストによって行なわれた、メン・メネットをとり込んだTriangle Campへと移行されたのです。

第2回は昨年8月盆休を利用してウエストがホストをつとめ、年度内最大イベントとして取り組み、92名の大人数が参加した“Triangle Camp in Hakuba”でした。実行委員会の積極的にしてユニークな企画は、三クラブ挙げての熱意と協力によって見事に花を咲かせました。言葉には表現し難い大きな感動を呼び、国際奉仕クラブとしての国際性理解と親善交流の重要性を肌身をもって体感できたのでした。

今年もその時がやって来ました。今月13～16日台北にて第3回Triangle Campが開かれ、ウエストからも17名が参加する予定です。今年は台北ダウンタウンの創立20周年記念例会も併せて挙行されることとなっており、昨年にもまして大いに盛り

上ることが予想され、今から兄弟たちとの再会を楽しみにしています。

ところでウエストにはもう一クラブのIBCが締結されているのです。それは1983年3月に公式には立派に締結が完了しているハワイ・マウイクラブなのです。ただその際の締結式には日本区IBC事業主任や国際議員が立会って下さったのですが、一方の当事者マウイが同席できなかったのです。そのためか意志疎通が不十分でお互いの交流が途絶えて一時はマウイはつぶれたとの情報もありましたが、最近情報では小クラブ乍らも活動中とのニュースが入っていますし、日本区IBC事業主任の方針にも休眠中のIBC交流復活が盛られていることでもあり、ぜひとも今期中にはIBC継続交流意志を確認後、親交を深める策を図りたいものと願っています。

IBC事業はやはり形ではなく心の問題です。言葉も大切ながらスキンシップを通した体験交流こそ真の国際奉仕クラブのIBCと云えるのではないかと自省しております。

ウエストのみなさん！IBC交流のあらゆる機会をとらえ、海外ワイズメンとの相互理解を深め国際性を体得するために、ぜひ与えられたチャンスにはどんどん積極的に参加して下さい。世界に広がるワイズ友情温泉の喜びは、やはりどっぷり浸かってみないと掴みとることはできないと思うのです。

（1995年8月号会報）

其の13　日本区最初のYEEPホストクラブはウエストの誇り（Youth Educational Exchange Program）

今や地球国家との言葉が聞かれるほどに世界は狭く自由にとび廻れる時代となっています。中でも現代の物怖じしない積極的な青年たちの海外留学や体験旅行の増加には目を見張るものがあります。健全な青少年育成を目的とするワイズにあって、その具体的事業が、1974年ワシントン国際大会にて採用されたYEEP（青少年教育交換プログラム）なのです。

YEEPはワイズメンの子弟（高校生）を1ヵ年間海外のワイズメン家庭に送って外国の学校教育を体験させるプログラムであり、学生の交換にあたっては、送り出すクラブと受入れるクラブが責任をもちます。（最近ではプログラムの関連事業として、短期間のSTEPが始まっています。）日本区では1975年から16名の高校生が留学しています。

'84年までの10年間は送り出すばかりだった日本区YEEP事業に大きな転機が訪れたのです。日本へ留学を希望するカナダのサウスカルガリーからの女子学生ヘザー・アン・フォークナーの申込みがあったのでした。それが何としたことか私たち京都ウエストがその受入れクラブとなったのです。

紙面の都合で経過のほどは割愛せねばならず残念ですが、個人的な問題として気軽に森田メン・メネットが先に引受ける意志を示したばっかりに、クラブが日本区からの強い要請で引受けることとなったのでした。

今でこそ8名の受入れがされているものの、何分ともYEEP第1号のこととて、日本区での支援策も具体的なルールもなく、手さぐりの状態でのスタートでした。

受入れ高校探し、滞在に当っての法的手続の苦労（ワイズの一日も早い公益法人化を期待しています。）など、いろいろ大変でしたが、幸いクラブ挙げての大事業として取組んで下さることとなり、歓迎や送別例会はもとより、ワイズリング訪韓や夏祭りなど数多くの行事参加、森田ファミリーへの激励支援などクラブのみんなで異国からの可愛いい親善大使をあたたかく親切にしていただきました。

日本区としても青木理事、坂本事業主任をはじめ、この事業を成功させるために、各地のワイズメンが彼女の国内旅行のホームステイを積極的に引受けるなど協力をいただいたのです。

こうして日本区最初のYEEP事業は、森田ファミリーやクラブ、日本区だけでなく、京都府立洛西高校の先生方や学生たちにも、またホームシックを克服して頑張った留学生アン（私たちはヘザーと呼ばなかった）に対しても、価値ある大きな体験と喜びを与えてくれたのです。

YEEP引受け第1号を京都ウエストクラブの誇りとして、勇気と愛情をもって挑戦して体得したYEEPの湯は、ワイズ温泉の一種の湯として10年を経た今もなお尽きることなく湧きつづけているのです。いつの日か再度の挑戦の機会にはきっとYEEP湯の薬効が発揮されることと信じています。

（1995年9月号会報）

其の14　喜びと感謝を味わう奉仕の連続わざ（Brotherhood Fund）

毎日帰宅後、書斎に座りこむと、自然に鋏を取りあげ来信封書の切手を3ミリ四方の余白を残して

切り取り、壁かけの大封筒にほうり込みます。永年の習慣とはおそろしいもので、ワイズのメンバーが切手を貼ったままの封筒を持ち歩いているのを目にするとき、「あゝ勿体ないナァ」と思ってしまうのです。

事務所では関与先への郵送には必ず記念切手を使用、お願いしてある先からは、年に何回かは切り取った切手が届けられますし、事務所への来信は受付の方で切り取ってくれています。

このように私の場合は、使用済み切手は自動的と云ってよいほど自然に溜ってしまいます。京都ウエスト誕生以来、切手ポイントでは常にトップを続けているわけもお判りいただけるのではないでしょうか。

使用済み切手はクラブを通して日本区BF事業主任の集計を経て、アジア地域BFフィラテリー(東京目黒・福尾昇一ワイズ)のもとに収集され換金されます。換金された現金はIHQ（国際書記局)に送られ、別途送金された現金ポイントとともにBrotherhood Fundとして積立てられ、国際役員、BFデリゲート（代表)、YEEP学生、地域裁量による代表などの国際プログラム参加旅費補助に充てられるほか、一定基準により各区に対しリファンドとして資金が還元され、BFの目的に沿う事業に使用されています。

国際では事業の奨励策として種々の表彰制度を設けていますし、毎年度に国際大会や地域大会に出席したり、海外クラブの訪問などを義務づけたBF代表を募集します。フルグラント（旅費全額補助）かパーシャルグラント（一部補助）のいずれかに応募できますが、ワイズダムの使者となるにはクラブも会員自身もBF事業に参加の実績が必須条件となっています。

さて資金となる切手ですが、かつては水に浸し、糊を取って乾燥させ、同種切手を揃えてセロハン包装するという、実に手間ひまかけた整理切手のみという時代もありましたが、現在は台付切手で良しとなっています。

また最近、切手の換金率の地域間格差が大きいことから評価見直しが行なわれ、本年度からはBFコンテスト基準をポイントやキログラムに関係なく、現金による貢献のUSドル額と使用済み切手による換金USドル額の合計額で競うこととなりましたので、今後はいくらに換金されたかに関心が寄せられることとなりましょう。

いずれにしてもBF事業は使い捨てられれば、ただの屑物にすぎない古切手をワイズメンの手によって、価値ある物へと甦らせ、国際交流を通してワイズダム発展に役立つ資金作りをするという誠に尊い奉仕事業なのです。

無から有を生み出す毎日の細やかな行為は、喜びと感謝を味わわせてくれる奉仕の連続わざであり、これが無意識のうちに行なえるように自らを高めていくことこそ、ワイズ温泉BF湯の効能だと思います。どっぷり浸かってみませんか？

（1995年10月号会報）

其の15　あなたが作る善意温泉（Endowment Fund & Japan Y's Men's Fund）

人は誰でも只一度の人生にあって数えきれないほどの慶事や弔事に出会います。中でも特に嬉しいこと、慶びごとはもとより、悲しいこと、悼みごと等との出会いは、祝賀記念日(Anniversary Day)や追悼記念日（Memorial Day）として心深く永久の思い出となって残るものでありますし、また何かの形にして残したいとも思うものではないでしょうか。

こうした時にワイズに関わる個人・クラブ・部・区・大会・その他の団体等、誰もが献金という形で記念事を永久に残すことができる制度が、国際におけるEndowment Fund（EF）であり、日本区における Japan Y's Mens Fund（JF）なのです。

1950年代から始まったEFは、US100ドル以上の献金を日本区BF事業主任を通して国際協会に送金しますが、基金については基金評議会が管理し、その果実を運用します。100ドル以上献金するとPaul William Alexander Fellowとして証明書と特別ピンが、また1,000ドル献金者にはHonor RollとしてIceberg(クリスタルガラス製）と特別ピンが贈られ、献金者名と記念事項は国際が永久保存する「Golden Book」に記帖登録されます。

基金として支出できるようになったのは1993年からで、ソ連の崩壊とともに東欧諸国でワイズメン活動復活の胎動が始まり、エストニア・ポーランド・ロシアに向けて初めて支援資金が支出され、昨年度には中国に向けたアジア地域にも支出されました。

1994年6月末現在の基金残高は82万ドルで、ワイズ75周年を迎える1997年には100万ドルを達成したいとアピールしています。

一方、JFは1975年成功裡に終ったアジアで初の

熱海国際大会を永久に記念するため「アタミ記念基金」が設置されたのが始まりで、1970年代後半に日本区でもファンド造りの気運が高まり、1982年に「日本ワイズ基金」と改称され、BF事業主任の所管のもとにあり、日本ワイズ基金運営委員会が運営規定に基づいて管理運営しています。

1995年6月現在の基金は3,300万円に達していますが、日本区ワイズの法人化推進が決定され基金の充実を図らねばならぬ状況下にあって、1億円を当面の目標として募金が進められています。なお、献金は一口5,000円以上となっており、献金者名と記念事項は日本版ゴールドブック「奉仕帳」に記載され永久保存されます。

世界のワイズダム発展を願っての資金づくりに協力できることは、愛と奉仕に生きる私たちワイズメン一人ひとりの喜びであり、誇りと申せましょう。周年行事・慶事・顕彰・追悼・遺贈等いろいろの機会をとらえて、クラブでのスマイルやニコニコとは一味違った大切な資金づくりであるEF・JFにあなたの善意を献金として表わしてみては如何でしょうか。あなたが作るEF・JF湯の善意温泉の効果によって、ワイズダムの体質を強化し発展させるために役立つことを知るとき、きっと新たな喜びが体感できることでしょう。(1995年11月号会報)

其の16　生かされている地域社会へ喜びの還元を（Community Service & Time of Fast）

“コミュニティ”とは共同生活が行なわれる一定の地域・地域社会という意味ですが、この言葉ほど語意通りに地域社会において浸透し定着している外来語はないと思うのです。

したがってCommunity Serviceの概念は誰もが理解しやすいことかと思いますが、ワイズにおけるCS事業とは、ワイズメンズクラブによる国内外の地域社会奉仕事業を云い、国際協会の場では、1969年のHuman Crisis（人類危機）運動に端を発しており、現在ではCommunity Service（CS）とTime of Fast（TOF）の2つの委員会によって事業活動がなされています。日本区では国際のTOF事業の国内推進と区独自のCS資金の募金・運用活動を合わせて、CS・TOF事業主任の所管において事業の啓発促進に当っています。

“トフ”と呼ばれるTime of Fastは断食の時として、世界の飢餓に苦しむ人々を覚えるため、（毎年2月がTOF強調月間）クラブ例会の食事を摂らずに、その節約金を国際に送金して、その事業に定めた支援目標に捧げており、主として発展途上国で民生向上のため苦闘しているYMCAが目標に選ばれています。

最近、国際ではこのTOF運動をワイズ独自の事業枠を超えて、一般社会での奉仕運動に拡大しようとしています。まさに一つの運動が新しい運動へと発展するCS事業の好例になるのではないかと思います。

一方、国内的には日本区独自の運動として、お年玉年賀葉書の当選年賀切手シートによるCS資金（従来はアジア資金と呼称）を集め、CS資金運用規定に基づいてアジア地域のワイズメン交流協力やCS活動のために役立てられるほか、日本区クラブ向けとしては、資金援助申請の許可を得たクラブのCS活動の一部の援助資金として活用されており、わがクラブも設立以来数々のCS活動を積極的に展開するため、しばしばこのCS資金援助をうけてきました。

私たち京都ウエストは、もともと京都YMCA長岡ブランチ（現在は京都西YMCA）を拠点とする京都西山地域をテリトリーとした地域密着型のクラブ造りを目指して1980年（昭和55年）5月5日に誕生したのでした。

設立以来、YMCAへの支援Yサ事業はもとより、今なお継続中の平安徳義会夏祭りへの参加や奨学金の贈呈、9年間も続行したバンブーチャリティーワイズ祭のほか、高齢者向けのワイズ杯ゲートボール大会、若者対象のミュージックフェスティバル等々、55・5・5（ゴー・ゴー・ゴー）の熱情の全く衰えない地域社会への数々の働きは、まことに力強く、それでいて決して奢りが見られないCommunity Serviceでありました。

そして、京都ウエストがもっている「YサとCSはクラブ発展への両輪となるものである」という基本認識に誤りがなく、更に自信が深まったと申せましょう。クラブ15周年を終えた今、「親睦を通して養う奉仕の心をエネルギーとする奉仕の実践の場CS」を改めて再確認したいものと思います。

地域社会の恩恵によって生かされている一人ひとりの会員が、その感謝に裏打ちされた喜びの一端を、身近な近隣社会に、また大きくは地球社会に向けて愛ある行動として還元する奉仕の姿こそワイズメンズ運動の最たるものではないでしょうか。

もとよりそこには「施しては慎みて念うことな

かれ、施しを受けて慎みて忘るることなかれ」の奉仕の真髄が在ることを決して忘れてはならないと思います。心と行動が相俟った奉仕の汗を、どっぷり浸かったワイズCS湯の上り湯でさっぱりと流そうではありませんか。　（1995年12月号会報）

其の17　ワイズ温泉の源泉の一つは財源（Club Activity Fund）

1979年11月25日、親クラブ京都パレスの文字通り親身なホストによって、ホリデーイン京都で行われた京都ウエストの設立総会を無事終えたキイメンバー10名とフレッシュメンバーの16名は、来るべき55・5・5のチャーターナイトに向かっての準備と、さらなる会員増強への活動を開始し、設立総会で共有のクラブ標語とした「苦中味楽でクラブ造りを」の実践に激しい情熱を傾けていました。

古切手整理・お年玉切手集め・献血・YMCAのキャロリング参加・手作りクリスマス例会などの親睦行事等々、生れたばかりの赤ちゃんクラブとは思えない元気なスタートぶりを発揮していましたが、中でも長岡京市産業文化会館の例会場へは必ず全員が古新聞や雑誌・ダンボール紙等を車に積んでの出席でした。勿論ファンド造りであることは言うまでもありません。

古紙回収のほかにも新年向けのミカン販売等、ファンド委員会の工夫による設立資金の確保への努力は、心を一つにした協力心も盛り上げる中核の事業でもありました。

私達15年の歴史をいつも例会場正面から見守り続けているあのクラブバナーも、その貴重なファンドから捻出されたものでした。BAMBOOのもつ絶えることのない根強さと成長力をもって、京都西山地域に根ざしたクラブ造りをと願った設立趣意を表わすにふさわしい力感溢れるあのデザインには、さすが専門家の力作だと全員が感激したものでした。

クラブファンドのうちでも最も重要なのが、クラブ創立以来継続している秋のポテトファンドであることは誰もがよく知っているところですが、このポテトファンドは京都ウエスト誕生の1979年に、日本区CS事業として採りあげられた北海道農村青年の花嫁紹介プログラムの資金造りとして企画されたのが発端となったのでしたが、昨今では京滋部はもとより全国各地の約60％のクラブが、活動資金調達のためのファンド事業として取組んでいます。

京都ウエストでもポテトファンドを核としたファンド造りの実績は、クラブ15周年記念誌資料でも見られるように、新クラブ設立による会員数減少後にあっても、平均一人当り5万4千円の高額を維持しています。

そして、このメンバーの汗の結晶とも云うべき貴重なファンドは、これまで本欄で紹介してきた京都ウエストの活発にして質の高いYサ・CS・IBC・YEEP・BF・EF事業や、二つの子クラブを設立するEMC事業等に充てられ、潤沢とまでは云えないまでもその資金から生れた成果は計り知れないものがありました。このことは連年のファンド委員会の努力はもとより、メンバー全員の強い参加意識に支えられているものと云えましょう。

強力なファンド事業への熱意ある姿勢は、愛と奉仕の喜びとなってワイズライフを楽しくさせ、延いてはクラブを強化させてくれます。ワイズ温泉の源泉の一つはまさにこの財源にあると思うのですが、如何でしょうか。　（1996年1月号会報）

其の18　地球規模のY・Y's（ワイ・ワイ）運動発展に貢献を（YMCA Service & Alexander Scholarship Fund）

数ある事業委員会の中でも、YMCA Service・ASF委員会は“Yサ”の略称で呼ばれていますが、何となく愛称じみて親しみを覚えます。私はこの短い“Yサ”の愛称にこそワイズメンズクラブ本来の目的が凝縮されていることに注目したいと思うのです。

ワイズメンズクラブは自らをYMCAのサービスクラブと規定し、YMCAに対する忠誠心とYMCAへの支援を第一の目的としています。もとよりワイズにふさわしい他団体を支援することも第二の目的として併せ持っていますが、完全な独立主体であるワイズが、パートナーとしてワイズと共通の精神基盤に立つYMCAと協働し、その中核となってYMCAのボランティア活動、会員援助を支えていくことこそ、他の社会奉仕団体に見られない大きな特性なのです。

この点については1995年3月と4月号の本欄で「YMCAの本体とは？」「YMCAへの忠誠心とは？」をテーマとして既述していますので、再度読み返していただけると有難いのです。

Yサ委員会はこのYMCAサービス活動の中心的役割を担っているほか、ASF事業の重要な任務も併せ

て課されています。

ASFとはワイズ創始者の名を冠したPaul William Alexander Scholarship Fundの略称で、将来YMCAの指導者を志望する青年への奨学金を支給する事業として1955年にスタート、日本区では1963年から開始されていますが、現在ではボランティアリーダーや若年層主事等を対象とした奨学金の支給も行っています。その奨学金の源泉は会員一人当り年間1,000円の負担金と特別寄付によっています。

各クラブには所属のYMCA総主事から任命された連絡主事が派遣されています。クラブでの一会員でもある連絡主事は、YMCAとワイズのパートナー関係を正しく維持発展させることを基本的な職務として与えられていますので、Yサ・ASF委員会は、連絡主事とは特に親密な協調関係を保ちながらクラブのYサ事業の展開を図ってゆかねばなりません。

これまで70有余年の歴史を築いてきたワイズメンズクラブは、YMCAの活動に対し、人的・財政的・精神的に強力な支援を送り、諸活動への率先参加や、YMCA運動のPRにも努めてきました。その働きには計り知れないものがあっただろうと思う一方で、私達はこのYMCAとワイズの協働の社会奉仕を通して自己研鑽の場が与えられ、緩やかながらも人間的成長を図ることが出来ていることを心から感謝せねばならないと思います。

激変の時代にあってYMCAが抱えている諸問題、中でも膨張した事業体イメージの変革、新しいボランティアアソシエーションとしてのYMCAの使命の確立など、解決してゆかねばならない多くの諸問題について、クラブ会員一人ひとりが温かい理解を示し、身近な地元YMCAに対する惜しみない協力を送りつづけるというワイズ温泉「Yサ湯」の効能を最大に発揮して、地球規模のY・Y's（ワイ・ワイ）運動の発展に貢献することが、私達に与えられている大切な使命であると思うのです。

（1996年2月号会報）

其の19　ワイズの良さを味わい学ぶ飲み湯（Club Bulletin）

私の手許にあるクラブ5周年誌をひもといてみると、55・5・5のチャーターナイトを目指していた昭和55年の新年早々、1月14日の夜に我家にて第1回ブリテン委員会が開かれたとあります。親クラブ京都パレスで鍛えられたエネルギッシュなメンバーが集まり、チャーター前2ケ月の3月にブリテンを創刊しようとの意気込みで、ワイワイガヤガヤとアイディアを出し合っていたあの時の熱気溢れる雰囲気は、今なお私の心に残る楽しかった思い出の一齣なのです。

編集方針、誌名、紙型、紙色、シンボルマーク、創刊号の記事内容と次々に決定していったのでしたが、中でもブリテン名を単に“Kyoto West Bulletin”とせずに、クラブバナーのデザインで象徴される竹を採用し“BAMBOO”という誌名を決定したことは、クラブメンバーにとって今なお変らぬ愛着を感じさせるものとなったのでした。

3月に入って世に出た“BAMBOO”創刊号は、私たちクラブメンバーだけの感激に止まらず、当時のワイズでは前例のないチャーター前のブリテン発行は画期的な出来事として、日本区関係者をも驚ろかせることとなったのでしょうかチャーター後初参加となった横浜での第35回日本区大会において、何とブリテン努力賞を受賞するに至ったのです。思いがけないこの受賞によって、誕生間もないひ弱い京都ウエストのメンバー一同は大いに勇気づけられ、その後の活発なクラブ活動への原動力となったのです。

クラブブリテンは会員の機関誌であるとともに、日本区他クラブ、YMCA、地域社会、はたまた入会候補者など外部への広報・情報紙としての目的をもっています。ブリテンは毎月発行されるべきもので、日本区で定める必要記載事項のほか、正確な内容や読みやすさ、区への情報の完備など、優れたブリテンを発行したクラブは区大会において表彰されることになっており、京都ウエストも15年の歴史の上で、すでに5回の表彰をうけています。

ブリテンは先に述べたように内向きと外向きの二面の顔をもっています。全国各地から送られてくる多くのブリテンには、会員と家族のニュース、諸行事の報告、活動の時系列記録、部・区・国際・YMCAなどの情報のほか、ワイズ知識を学ぶ意見記事など、限られた紙面の随所に個性ある創意工夫がこらされ、感動したり感心させられたり、喜んだり悲しまされたりと、紙面一杯に躍動する文字や文章と写真を通してワイズメンとしての連帯感を覚えながら、夫々のクラブアイデンティティをうかがい知ることができることは本当に嬉しいことだと思います。

そうしたブリテン発行の裏には編集担当者の大変なご苦労が偲ばれます。記事集めや校正の苦労もさりながら、最も困らされるのは、原稿内容を

吟味して、このまま掲載しては問題があると感じた時ではないでしょうか。折角書いて下さった執筆者とその記事によって影響をうける他者への配慮に苦しむといった経験は、ブリテン発行にたづさわったことのある人なら誰もが味わったことと思います。

発行責任者であるクラブ会長に比する重責のブリテン委員長を助けうることと云えば、記事を送るメン・メネット一同のあたたかい協力心と、「いつもご苦労さまです」という感謝の念を贈ることだと思うのです。

みんなの協力ででき上る一月ひとつき毎のブリテンには、クラブライフを楽しくさせ、活力を湧かせ維持させる特効が秘められているのです。ブリテン湯は湯船にどっぷり浸かるだけでなく、ワイズの良さを味わい学ぶ飲み湯としても抜群の効能をもっています。もとより混浴中のメネットさんの美容効果にも素晴らしい効き目があることを忘れないで下さい。　（1996年3月号会報）

其の20　ワイズ温泉の湯加減はドライバーの気配りで（Driver）

“Driver”という言葉を聞いた時、ゴルフ好きの人は美しい広々としたゴルフコースを、また車愛好家は野山を疾駆する今はやりのRVを目に浮かべられることでしょう。しかしワイズメンは必ずあの馴染み深い例会風景を思い出されることと思います。

例会についてはこのどっぷり論その4（1994年12月号）において「例会に出席しやすい環境整備を」をテーマとして書いておりますので読み返していただければ幸いです。

定期的に開かれる例会は、良質の職業人が自己研鑽の場という自覚に立って異業種会員と接触し、奉仕の心の源泉たる親睦を深めるコミュニケーションホールであり、人間性を高めるトレーニングルームでもあるのです。

もとより例会が充実したものとなるか否かは役員会の決定を通したプログラム内容もさり乍ら、出席者全員の何かを掴んで帰ろうと思う積極的な心構えと協調的な行動にかかっていると申せます。しかしなんと云っても、ドライバー委員会の存在とその気配りが大きなキイポイントとなるように思います。

ドライバーとは運転手という意味をもっています。快適なドライブが楽しめるかどうかだけでなく、時によってはその運転の良否によっては大事故に巻きこまれないとも限らないように、例会の良否もドライバー委員会の責にかかっているだけに委員会の役務は大変重いものと云えるでしょう。

わがウエストの例会時のハード面では、正面中央に歴史を刻む力感溢れるクラブバナーと、二枚のIBCフラッグ、ワイズとYMCAソングが掲げられ、会長標語幕も張られ、食卓には沢山の他クラブバナレットが飾られるといったように申分ない設営ですが、中でも演台に並ぶ万国旗とギヤベル前に据えられる木製置時計は他クラブには見られぬウエストの特色だと思います。時間厳守はメリハリのきいた例会進行には欠くべからざる要素であり、今や京都ウエストのシンボルとなっているような愛着を感ぜずには居られません。

ソフト面では、毎回指名制で行なわれる司会やニコニコマンの担当、メンバー三分スピーチなどは会員一人ひとりの自己成長を助ける絶好の訓練の機会となっています。

全員が起立し拍手で迎えるゲストスピーカーへの温かい気配り、クラブへの関心とともに一種の緊張感を覚えておられるだろう入会候補者やビジターの座席決定や迎え方は来訪者をリラックスさせるだけでなく、入会候補者がクラブの初印象の良否をもって入会決断のキイポイントとされるかも知れないことを察するとき、ドライバーとしては決して忘れてはならない大切な配慮だと思うのです。

ここで会員のみなさんにお願いがあるのですが、クラブ例会への出席はワイズのモットー“強い義務感を持とう、義務はすべての権利に伴う”から照して最も大切な義務とは云うものの、止むなく欠席の場合はぜひとも他クラブ例会へのメイクアップ出席を活用していただきたいのです。

何故ならそこにはホームクラブとは一味違った例会の特色が味わえるだけでなく、ウエストの例会のもち方に参考となるものが得られ大いに勉強となるからなのです。そしてドライバー委員会に役立つ情報としてどんどん提供してほしいのです。この事はいつも例会場で小人数で設営や片付けに取り組んでいるドライバーのみなさんを手助けして下さる友情にも勝る何よりのプレゼントとなるものと思います。

楽しい例会、意義ある例会、来て良かった例会は、すべてメン・メネットの混浴さながら会員一人ひとりの参加意識の高さと楽しみ方にあるので

すが、ドライバー委員会もみなさんからの温かい協力があれば、きっとワイズ温泉の湯加減を見たり肩流し？まで三助委員会（失礼！）に徹して、みなさんのご来浴を待たれることと思うのですが、如何でしょうか。　（1996年4月号会報）

其の21　学びとふれ合い、そして奉仕の世界に浸れる感謝と喜び

京都ウエスト創立15周年を迎えるに当って新旧会員を問わず、今一度ワイズを考えるための話の種にと「ワイズ温泉どっぷり論」を提供させていただいてから何と21ヶ月。恥かしげもなく駄文を連ね、誠に汗顔の至りです。

しかし、私は何事によらず「温故知新」の言葉は学びの基本であり、知ることの大切さを教える箴言だと理解していますので、連載に当っては、クラブの歴史の重要ポイントを交えることで、古参メンバーには一種の郷愁と反省に立って新しい奉仕クラブへの成長の糧としていただけるように、また新しいメンバーには数多いワイズメンズクラブの中でも栄えあるウエストの一員であることの存在感と誇りをもっていただけるように、更にメネットさん方にはメンとの協働の喜びを感じていただけるようにと心に念じ乍ら執筆をつづけたつもりですが、果して皆さん方のお役に立てたものかどうかと案じております。

一方、私にとっては26年のワイズ活動を振り返り、自己を見つめ直す好機となったことを心から感謝せずには居られません。1971年3月に不安と興味が交錯した複雑な思いを抱き乍ら「京都パレスクラブ」というワイズ温泉につま先から浸かりこんだあの時から、26年後の昨今ではメネットとともに混浴よろしく肩までどっぷりと浸かりこんでいる有様なのです。

「人に迷惑をかけない自分であってこそ、他に奉仕することが出来る。まず己れを作ることこそ先決」との思いは、会合出欠返事の即答や時間厳守など、ワイズメンならずとも守るべき最小にして最重要な義務の履行に努力することがスタートでありました。

◎自分を愛するように隣人を愛しなさい。
◎奉仕とは己れを無にした打算のない偉大な浪費、即ち愛なくしては果せないもの。
◎奉仕の実践は奉仕の心にあらねばならない。
◎親睦こそ奉仕の心を育てるエネルギー。
◎奉仕のエネルギーは家庭、職場、そして社会へと発散されて、奉仕の実践となる。
◎親睦の中心となる場は例会である。
◎心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る。
◎例会とは良質の職業人が目的意識をもって自己研鑽の場として自覚し、多くの異業種のメンバーが接触する場。
◎例会こそ自己を啓発し、精神的親睦の効果的な演出の場であり、より楽しい例会にするのはメンバーの義務である。……等々、ワイズが与えてくれた数多くの貴重な学びと体験は、心のやすらぎと自己啓発に効くワイズ温泉の薬効に他ならないと思うのです。

そして私の日常生活における愛と奉仕を旨とするワイズ運動との係わりは、まさに愛に基づく自己研鑽の場として、私の人生訓“われ他の中にこそ生きてあれ”と、経営理念とする“自利とは利他を云う”の精神基盤を更に一段と強めてくれるものとなっているのです。

私は時折り「ワイズ温泉にどっぷり浸かることで時間的・経済的な消費は大変なものでしょう」という言葉を聞くのですが、私は「それは消費ではなく自らへの投資であって、はね返り戻る恩恵には計り知れないものがあり、奉仕されているのは自分の方であると感謝せずには居られません。今後とも、きっとワイズ温泉にどっぷりと浸かっていることでしょう」と答えています。

「人生とは只一度なるもの」という人生一回性の哲理を知るとき、素直な生き方に努め、学びとふれ合い、そして奉仕の世界に浸れる感謝と喜びを他に分かち合うという運動を広く社会に展開していくことこそ、ワイズメンの使命であり生き甲斐であると云えるのではないでしょうか。

最後に私が日常よく口にする愛すべき古歌を皆さんに贈らせていただきます。

「喜べば　喜び神が　喜んで　喜び集めて　喜びに来る」

喜び神とは果して誰でしょうか？私はもう一人の自分（理性を働らかせるもう一人の自分）を含めた“他”を指すものと解しているのですが、如何でしょうか？　（1996年5月号会報）

ワイズを学ぼう ― その歴史と活動分野

山　川　一　郎
（姫路グローバルクラブ）

はじめに

みんなで、わかっているようで、わかっていない点が多い、ワイズメンズクラブの歴史やその活動分野について、この研修を機にもう一度確認を新たにしてはどうかと云う委員長のお考えに基づき、この文章を書かせていただきました。出来るだけ客観的に、しかも楽にお読みになれるようにという願いを持って書かせていただいた積もりですが、多少の独断と偏見が入ることはお許しください。日本のワイズダムの歴史については、その50年史を是非お読み下さい。私は、ジョージ・カイテルという人が書イテル“History of Y'sdom”（ワイズダムの歴史）を基に、連綿とワイズダムに伝わっている精神を、ワイズダム誕生の経緯や、皆さんに是非知っていただきたいエピソードを通してご紹介致しましょう。

では、まず「ワイズメンズクラブの誕生」から始めましょう。

1．ワイズメンズクラブの誕生

ワイズメンズクラブはいわゆるランチョンクラブ（昼食を共にしながら例会を行うクラブ）が次から次に誕生した時期に生まれました。例えば、最初のロータリークラブがシカゴに誕生したのは1908年でした。1914年には日本では余り知られていませんが、キワニスクラブが出来、ライオンズクラブ等が続きます。これらのクラブは第一次世界大戦後に凄い勢いで伸びてゆきます。

1919年オハイオ州ダヴェンポートYMCA総主事のEd.Healdはジャイロクラブというランチョンクラブを結成し、YMCAと関係付けようとしました。しかし、YMCAに対する奉仕を中心的なプログラムにせず、むしろ単なるランチョンクラブという色彩が強かったようです。このクラブは短期間の間に、国際ジャイロクラブに加盟し、YMCAとの関係を絶ってしまいました。

さて、オハイオ州にあるトレドYMCAは毎年会員増強キャンペーンをやっており、＄100以上の入会金を集めた会員は名前だけですが、“Booster Club”（後援者クラブ）の会員になれました（現在国際協会では年間3人以上の新会員にブースター賞が授与されますが、その名前の由来はここにあります）。これが、ワイズメンズクラブの先駆的な存在であったと言えましょう。

1920年時のトレドYMCAの会員担当主事T. C. Evansは、上記のランチョンクラブの人気に目をつけ、17人のブースターを集めて、ランチョンクラブの結成を討議しました。このクラブは、ジャイロクラブの轍を踏まないようにと、会員を熱心なYMCAのボランティア会員のみに絞り、YMCAサービスを中心的な目的とし、基本的に青年のクラブを目指して発足しました。その名前は、Toledo YMCAのTolとymcaをくっつけて、Tolymca Clubとしました。先年ワイズ誕生75周年記念大会がトレドで行われたのはこの為でした。この調子でクラブの名前が付けられていったとすれば、例えば奈良なら、Narymca Club、神戸ならKobymca Club等と、全国にムカムカクラブが一杯出来た事でしょう。

さて、このTolymca Clubの創始者の中にワイズの創始者として我々の尊敬を一身にめているワイズの生みの親Paul W. Alexander判事がいました。当時アレグザンダー判事は、ハーバード法律大学院を卒業して7年目の検事補でした。アレグザンダー判事は他のクラブの会則を色々比較研究した結果、ワイズの会則と細則を作り上げたのでした。

こうしてつくられたワイズメンズクラブは、他のランチョンクラブと多くの点で似てはいましたが、独自のユニークさを持っていました。まずそのメンバーは入会する前から、YMCAや地域に対する、熱心な奉仕者でした。他のクラブでは、組織の動機は圧倒的に取引上や社交上のコンタクトであり、奉仕は二次的な重要性しか持っていませんでした。

一方、創設以来、ワイズは他の団体と比べてどうしても、その数が少なくならざるを得ませんでした。その理由について、1941年、ポール・アレグザンダーは次のように言っています。

(a)会員は厳しくYMCAの会員に限っている事。

(b)ワイズは青年の運動であるだけに、財政的な問題は初めからあったし、今後もあり続けるだろうということ。

(c)ワイズの中心的な目的はYMCAサービスであり、メンバーは積極的な奉仕によってYMCAに献身することを宣言する者に限られている点。

(d)ワイズメンは先ず奉仕者であり、ランチョンクラブ会員であることは二次的であること。
"Y's Men are servants first, luncheon club members afterwards."

(e)会員の勧誘に当っては、まず入会候補者にYに対して奉仕でき、Yを通して地域に奉仕できることを目的に勧誘すべきである。これによって、当初から自己中心者を排除することが出来る。
"We challenge him to join for the good he can do the Y, and through Y to the community. This serves to weep out the self-seekers at the outset."

こう見て来ると、ワイズの目的は当初から何であったかがよく判ります。

（姫路グローバルクラブ　2001年8月号会報）

2．ワイズメンの名前の由来

さて、例のムカムカクラブは世界中に蔓延するようなことはありませんでした。名前がワイズメンズクラブに変わったからです。ではどのようにして、この名前に変わったのでしょうか。

キース・ボードビル巡回劇団に属していたウイル・M・クレッシーというボードビリアンは、その舞台を降りて、YMCAから派遣されて、第一次世界大戦でアメリカから遥か東の欧州の戦場に駆り出されている陸軍の兵営を慰問に回りました。そして、当時YMCAの定期刊行物であった、"Association Men"にウィルからの報告が幾つか掲載されました。寄稿者としての彼のサインは、"Will M. Cressy, one of **the Y's Men** of the East"としてなされていました。「東方のYMCA人、ビル・クレッシー」という訳です。

一方、トリムカクラブのポール・アレグザンダー判事は、ウィルの報告を読んだ時、このY's Menという署名に一目惚れし、早速ウィルに出会って、この名前を譲ってもらうように交渉しました。Y's Men's Clubという名前こそ、このクラブのとって最適の名前だと思ったのです。Y'sこそ、YMCAのYの所有格を表しています。Y's Menは従って、Yに属する人"Men of the Y"であり、又Yの為に尽くす人"Men for the Y"ということになります。この名前の素晴らしい点は、まさにそこに、集団として、又個人としての個々のYMCAに対する奉仕、それを通しての地域に対する奉仕、又世界同盟に対する奉仕という理念が宿っていることです。又Y's Men's Clubという名前は人目を引く魅力に溢れていました。ポールが一目ぼれしたのも無理はありません。そしてウィルは一も二もなく、この名前の譲渡にOKを与えました。こうして、ワイズメンズクラブの名前が生まれたのです。

又、このワイズメンという言葉は、聖書の中に出てくる、幼子イエスに会おうと道を星に尋ねながら、はるばるエルサレムにやってきた東方の博士（wise men）という響きをも持っています。

ワイズメンズクラブの入会式文には次のように書いてあります。『1900年前に、ベツレヘムの星が東方の博士達を幼子のもとに導いたように、ワイズメンズクラブのロゴに記されている我々のモットーと目標の象徴である金色の星が我々を今日のワイズメンに、そしてその奉仕の高貴さの実現に導いてくれるように』

しかしこのワイズメンズクラブという名前を変えようではないかという意見が過去何回も出されました。その最大の理由は次の通りです。

①YMCAは英語国で通用しますが、例えばドイツやフランス、スペイン語国等に行けば、キリスト教青年会のイニシャルはYMCAとは全く違います。
だから英語を話す国以外ではY's Menは意味をなさないと言う意見です。

②フェミニズムの観点からいえば、Y's MenのMenは男性を意味し、女性を受け入れない言葉である。

こういった議論に対して、今のところは、Y's Men's Clubという名前を変えようと言う決定はなされていません。しかし、次のように、少し選択の幅を広げようという動きが具体化してきていることは事実です。

国際憲法ガイドライン101

「ワイズメンインターナショナル」（Y's Men International）という名称と共に「ワイズダム・

インターナショナル」（Y'sdom International）という名称を使用してもよい。

国際憲法第3条　構成会員　第1項

この協会はこれに加盟するワイズメンズクラブ、ワイズウィメンズクラブ、ワイズメンアンドウィメンズクラブまたはワイサービスクラブをもって構成される。

上記のように、フェミニストの観点からの問題は解消される方向と言えますが、非英語国におけるYMCAの呼称という観点からの問題には未だ明確な答えが出ていないようです。というよりは、Y或はYMCAという名前は、それぞれの国の言葉のイニシャルとは考えずに、全体でYMCAを表すという考え方に立っているかも知れません。

今後とも、ワイズメン運動の本質を表しながらも、時代の要請に応える名称をその時々に追求して行く事が必要ではないでしょうか。

（姫路グローバルクラブ　2001年9月号会報）

3．他の奉仕団体との比較 ― その1 ―

さて、ワイズメンズクラブは奉仕団体ですが、他にも色々な奉仕団体があります。ここでは、ロータリークラブとライオンズクラブを採り上げて、同じ奉仕クラブといっても同じなのか、どう違うのか考えてみましょう。

まず、ワイズメンズクラブの目的を国際憲法第2条「綱領と目的」から見てみますと、「ワイズメンズクラブ国際協会は、**イエス・キリストの教え**に基づき、相互理解と敬愛の思いに結ばれて、**あらゆる信仰の人々**が共に働く、世界的友好団体であり、**YMCAに対する忠誠心**を共にしつつ、**活発な奉仕活動**を通じて、リーダーシップを開発、助長、供給して、全人類のためよりよき世界を築くべく尽力するものである。」とあります。

そして、同第3項に、加盟クラブの目的として

A：**まず第一にYMCAの為のサービスクラブ**として活動する。

B：その他ワイズメンに相応しい団体を支援する。

C：市民的、国際的諸問題の只中で、一統一派に偏しない正義を追求する。

D：宗教的、市民的、経済的、社会的、国際的諸問題につき、会員たちを啓発し、積極的にこれに参加連帯させる。

E：健全な交友関係を作り出す。

F：この協会の国際、地域、区の事業を支援する。

が挙げられてます。

以上から、ワイズメンズクラブを表すキーワードは次の通りと言うことが出来るでしょう。

①YMCAに対する忠誠心、サービス。

②キリスト教基盤に立つが、宗教等による障壁を超えた協働活動。

③奉仕活動を通しての相互啓発、指導性開発。

④人類の為の社会改善。

⑤健全な交友関係。

この内、③、④、⑤については、他のクラブと共通するところが多いと思われますので、上記の①と②に絞って考えてみましょう。

まず上記①の「YMCAに対する忠誠心、サービス」を採り上げて見ましょう。綱領と目的Aでは、邦訳では「先ず第一に」とありますが、これは原文の“Primarily”の訳です。Primarilyとは、色々あるなかで、一番目に来るという順序を表すものではなく、（それなら、“Firstly”という言葉が用いられるでしょう）むしろ、「本来」とか、「元来」とか、「最も重要なものとして」とか「根本的に」という意味を表す言葉です。Primary を American College Dictionary で引いて見ますと、“first or highest in rank or importance, chief, principal, original, fundamental等とあります。この点が何と言っても、他クラブとはそれこそ「根本的に」異なる色です。

こういった、忠誠心やサービスが大切であるという前提として、我々はYMCAのことがよく理解できていることが必要です。勿論我々はYMCAの施設や事業に対して、支援する事は必要ですが、本来のYMCAの目的や理念、 考え方や問題意識をYMCAと共にしていることが必要です。それに基づいて、施設があり、事業があるのですから。多くのYMCAの会議や委員会に参画して、積極的な貢献をすると共に、YMCAの考え方を理解しようではありませんか。この点においては、YMCAの方も、もっともっと沢山の情報や機会をワイズに提供することが必要です。

又、我々はYMCAの伝統や構造をも理解しなければなりません。YMCAは、我々のような「クラブ」ではありません。社会的存在として、しっかりと地域に根を張り、法律的にも社会に根をはった組織体です。その構造を支えるのは、勿論基本的にはボランティアですが、そのボランティアの運動を支える為に、事業体と言う形を持った存在

です。ですから、あたかも我々がクラブで自由に物事を決め、直ちに活動に結び付けられるような、身軽さや直接性は、或はないかも知れません。しかし、だからこそ、朝に生まれ、夕べに滅するような、世の多くの「クラブ」と違って、150年以上も生き続けている存在であることが出来るのです。YMCAという運動体はその設立後、新しい時から、事業体という形をとりました。つまり、主事が生まれた時からです。主事はボランティアのエネルギーや意欲を活動に結びつける役目を持った、ボランティアの「秘書（Secretary)」なのです。ですから、我々ボランティアと総主事を筆頭にする事業体或は組織体としてのYMCAは車の両輪であります。我々は主事の雇用者ではありません。共にYMCAという運動を支えて行く、車の両輪であります。一部の地域では、或はYMCAでは、主事さん達は、或はスタッフの皆さんはワイズをお客様扱いしておられる有様を目にし、耳にします。そうではなくて、もっと主事さん達にはワイズに対して、堂々とその考えるところを言って欲しいし、ワイズは又奉仕をしてあげているという考えではなく、お互いに手に手を取って、YMCAの理念の追求をやってゆく、対等の、平等なパートナーであることをしっかり心の中に入れて活動したいものです。

又、YMCAを支えるとは、YMCAを動かす、支配する、思うが侭に動かすことではありません。お互いにお互いの考え方を理解しあい、又その考え方の形成に参画しあい、そのために、大いに虚心坦懐に、謙虚な心をもって、議論し合うことが大切です。ワイズメンは又、YMCAの会員ですから、こういったことが当然出来るのです。多くのYMCAの意思決定機関にワイズメンが、Policy Volunteerとして関わっておられます。これもまた、ワイズメンとしてのYMCAに対する貴重なご奉仕です。ボランティアとは、基本的に、権利を得るためのものではなく、喜んで義務を果すだけのものです。それに我々は嬉々として携わるのです。なんのためにでしょうか。それは我々がYMCAの理念が素晴らしいと思い、その実現を自らの生き方の上における課題として追及していけるからではないでしょうか。それが我々の生甲斐に結びつくからではないでしょうか。自らの思いの実現や、自らの力を発揮する為にYMCAに関わるのであってはなりません。

ワイズメンズクラブの最も重要な特色である、「YMCAへの奉仕」こそ、他のクラブと我々のクラブの最も大きな違いである事をこのような意味において理解しましょう。

（姫路グローバルクラブ　2001年10月号会報）

4．他の奉仕団体との比較 ― その2 ―

今回は、ワイズメンズクラブの2番目のキーワードである**「キリスト教基盤に立つが、宗教等による障壁を超えた協働活動」**という面を考えて見ましょう。

この点についても、我々の大先輩ポール・アレグザンダーの言葉に聴いて見ましょう。

以下は1951年11月28日オハイオ州トレド、裁判所ビル発、ポール・W・アレグザンダーから、ヘンリー・グライムズ、ブーツ・フォービオン、ジャック・フロスト、ゴードン・マックレン、ジャック・マッコリー宛ての、「ノンクリスチャンのYMCAメンバー及びワイズメンに関する件」と題する手紙の抜粋です。

『過日トレドワイズメンズクラブの部会長アーヴィング・レイノルズ氏他を夕食にお招きした際、同氏からこんな話を聞きました。先週ある優秀なヒンヅー教徒の学生をもてなした時、「何故インドの人々をクリスチャンにしようと貴方がたは努力しているのですか。インドには貴方がたの宗教より数千年前に生まれた宗教があって、人々は其の宗教に満足しています。貴方がたの宗教はどんな点でそれより優れているとおっしゃるのですか」という質問を受けました。』

『もし我々がインドに生まれていたら、我々はヒンドゥー教徒か、仏教徒か、回教徒であったかも知れません。……例外もあるかも知れませんが、我々の宗教や信条は、偶然によるところが多いのです。キリスト教以外の説教を聴いた事がなかった我々がキリスト教が最もよい宗教だと思うのは当然ではないでしょうか』

『もしYMCAが、その門戸を開き、自分の宗教としてイエス・キリストを受入れなくても、その教えを実践しようとする人が会員になることを認めないとすれば、自らを傷つけ、この世界で大切な役割を果たしてゆくことが出来なくなってしまうでしょう。YMCAの会員制は、正しい考え方を持ったユダヤ教徒、ヒンドゥー教徒、回教徒、神道者等に開かれるべきです。しかし、勿論正しい考え方を持つ限りにおいてであり、又、宗教として信

じるかどうかはともかくとして、イエス・キリストの教えに従う限りにおいてであります。』

『イエス・キリストの教えとは、キリストの倫理的な教えという事を意味し、自分の救い主として受入れるという神学的な信条を意味するものではありません。……ワイズメンであることは、人々が何を信じるかによるのではなく、何をなすかによるのであります。』

『YMCAが、キリスト教内部での超教派的な役割を担うだけではなく、今日の世界で、信条を超え、宗教を超えた運動としての役割を担うように、我々は勇気を持って訴えて行くべきであります。YMCAはこの役割を果す事が出来る唯一の組織であり、運動であります。』

このアレグザンダー判事の言については、何ら解説は不要、非常に明快だと思います。

さて、この宗教と言う点について、他の奉仕団体はどのように言っているのでしょうか。

ライオンズクラブ国際協会の目的の中では、「一般に関心のある、全ての問題を自由に討論できる場を設ける。ただし、政党、宗派の問題をクラブ会員は討論してはならない。」と規定しています。

ロータリークラブの場合は、その「ロータリアンの手引き」第3章に、「ロータリアンの宗教的、政治的信念は、個人の問題とみなされる。」とあります。又、その標準クラブ定款第5条9節で「二つ以上の宗派の各代表者は……正会員となる資格を有するものとする。」とあります。つまり各職業によって、一人しか会員が認められないにも関わらず、宗教の場合は二人以上の会員が認められていると考えられます。これによって、色々な宗教に平等の位置を与えていると言えるのではないでしょうか。

という風に、ライオンズ、ロータリーとも宗教については関わらない、或は中立の立場を取っている事が判ります。

この点で、キリスト教を宗教ととるか、イエス・キリストの倫理的な教えを取るかは別として、イエス・キリストの教えに基づく事を明らかにするワイズメンズクラブは他の奉仕団体とは違う特性を持っていることが判ります。

このような精神的、倫理的基盤を持つ我々は、運動や活動に明確な指針が与えられ、又会員相互の間に深い連帯性が維持出来、自己啓発・成長が出来る素晴らしいクラブと言えるのではないでしょうか。しかし、これによって、他のクラブに対する優位性を持っていることにはなりません。YMCAに忠誠を誓う我々の特性として認識すべきだと思います。　（姫路グローバルクラブ　2001年11月号会報）

5．戦時中のワイズダム

ワイズダム歴史の最後の項として、第二次世界大戦中に、特にアメリカのワイズダムが日本のワイズダムにどのような態度、姿勢を取ったかについて、幾つかの手紙からご紹介して見たいと思います。両国が対戦している不幸が、ワイズダムという友情の中でどのように包み込まれていたのか、心温まる、それだけに心痛む思いが伺われるでしょう。ワイズダムの素晴らしさをここで感じとって頂きたいと思います。そして、その心を又我々も今後とも学んで持ち続けていきたいと思います。

1933年3月1日付け、時の国際書記長兼会計ヘンリー・グライムズ氏から奈良伝氏宛の手紙の抜粋－

『次の如き貴電（奈良伝氏よりの電報）拝誦。「ワイズにおける友人諸氏、国際関係は今や断裂せんとす。世界平和への鍵は貴国に存す。我又東亜における平和への責任を有す。貴殿のご努力により、平和と相互の善意に於ける問題解決への衆意が醸成されん事を懇願す。」我々は貴電の思いを十分に受止め、直ちに次の如き電報を拝送しました。「ワイズメンズクラブ国際協会は我が目的第4項の精神に基づき、東亜の平和に尽力せんとす。貴殿の助力及びご示唆を懇願す。委細文。」』

『奈良さん。日中両国に友人と会員を有するワイズメンとして、当然のことながら、ここ数ヶ月、特に数週間の間に起こった、東亜における出来事に対して、深い関心と少なからざる憂慮を抱いておりました。日米両国間の距離は遠く、正確な情勢を掴む事は極めて困難であり、断片的なニュースしか得られない状況です。実際の状況の近くにいる友人から、日中両国の基督者のこの問題に対する態度等を含めた正確な情報を何とか得たいものと望んでおります。事実、約1年前、電信の交換や我々がそのメンバーであり、同時に我々の奉仕の対象でもあるYMCAを通しての情報により、両国の基督者や求道者の間に友愛が増進し、相互理解が深まりました。

エド・フィッシャー国際会長は、貴電に応えて、合衆国の新大統領フランクリン・ルーズベルトに

然るべきメッセージを送り、大統領の全身全霊を込めた満州における平和への努力を懇請しようという意見でした。そして、全ての国のワイズメンが日本におけるワイズメンの平和への努力を共にするように伝えることを指示されました。それによって、平和と善意が究極的に東亜の地に広がり、日中両国にとっての正義が実現される事を強く望んでおられます。我々の組織は大きくはありませんが、大統領への手紙を出すべく取りはからいました。……

我が世界展望委員会のフレッド・リンクス委員長は又、「ワイズダムは世界中の全ゆる国におけるワイズメンやその国民の立場に立たなければならない。国際協会や委員会はつねにこの考えを推し進めてきたし、今後もそうしなくてはならない」と言っておられます。この努力こそが貴電の要求される協力になると考えます。』

これについで、同年4月5日付けで、前述のフレッド・リンクス世界展望委員会委員長から奈良伝氏に手紙が送られました。その手紙では、上記の趣旨のワイズダムとしてなすべき協力や日本に対する感情を再度確認しながら、次のように述べられています。

『満州における日本政府の行動に対して、世界の世論は、世界大戦に導く可能性のあるこの国際紛争を平和的手段によって解決する事にあります。確かに、この世界に、大小を問わず、過去その領土を武力を用いずに拡張した国は殆どなかったことは認めねばなりません。かく申す合衆国も、メキシコからテキサス州を奪い、スペインからその属国を奪いました。日本は今、まさに過去我々がやってきたことを、中国から満州を獲得する為になそうとしているのです。しかしながら、日本に対しては申し訳ないのですが、このような武力を用いた侵略にいつか終止符を打つために、何かがなされねばなりません。日本は今まさに、この根本的な考え方の変化の中にあると言えます。日本は、その人口の増加のはけ口を求めねばならないことも理解出来るのですが、世界の世論はこれを武力によってなしてはならないという点にあります。……』そして、この手紙は国際連盟の決議に従うことが世界の世論である事を訴えています。

この文書の後段で、『ワイズメンズクラブは非常に小さい団体であり、このような大問題に影響を与える事は出来ないでしょうが、よりよき国際理解と世界同胞意識を広める事に先鞭をつけることは出来るでしょう。YMCAの中にあるこのワイズダムと同様にこの役割を果す国際団体もあるでしょう。例えばロータリークラブやフリーメイスン等は我々より大きな仕事が出来るかも知れません。こうした団体との協働によって、われわれのささやかな働きが最終的にイエス・キリストの教えに基づいた幸福と友愛と永続する世界平和に貢献できることを望みながら、働きましょう。』

我々は、このような日中両国の危機を懸念され、率直に国際協会に援助を求められた奈良伝氏の英断に大きな感動を覚えると同時に、それに対して、直ちに衷心よりの憂慮を持ち、敵国同士にあるワイズメン同士の友愛を保ち、それを通じて世界平和に貢献しようとするワイズの目的に立って、行動に移された国際協会の姿勢に深い感動を覚えざるを得ません。ワイズの友愛関係と平和への思いは、決して口先だけのお題目ではなく、実際に実行されたのだということを我々は是非知っておきたいと思います。

フレッド・リンクス委員長の手紙には、当時の日本に対する国際世論がキチンと書いてあり、それをキチンと伝えて下さった勇気と本当の親切さを我々は感じたいと思います。この点は今日も我々が反省すべき点ではないでしょうか。又、自国の過去の歴史についても恥じることなく述べておられることにフェアープレイの精神を感じます。

又、このような格調の高い精神を持ち、働きをされたワイズの大先輩を持ったことに大きな誇りと喜びを感じながら日頃の活動に参画してゆきたいと思うのです。

最後に私だけの考え方かも知れませんが、上の文章に出てくる“World Outlook”（世界展望）委員会について思うところを述べたいと思います。

この委員会は私がワイズに入って間もなく、IBC事業に取って代わられました。世界の色々な出来事、国際的な問題を展望するという、真にワイズらしい事業だと思っておりましたが、これが何故なくなってIBCに取って代わられたのでしょうか。確かにIBCは、大切な事業ですが、この本義は国際交流だと思います。今世界の動きは、国際交流から、国際理解、国際協力、国際共働へと動いてい

ます。最終的には、国際という言葉から、「世界」という言葉に重点が移ってゆき、世界市民、世界国家更には地球という言葉へと移っていくことでしょう。こういった動きを展望する時、逆に今こそ“World Outlook”が、「世界展望」が必要なのではないでしょうか。私はこの意味で、是非この事業の復活を期待したいのです。そして、YMCA世界同盟や地域同盟と共に世界を展望し、共に何が出来るのかを考えていくことが出来れば、更にYMCAとワイズとの連帯が深まると思います。

6．Brotherhood Fund（BF）

ここまで書いた時、ワイズ75周年誌が我が家に着きました。したがって、この後は、75周年誌の記事をも参考に色々な活動分野の、事業分野の歴史に触れてゆきたいと思います。が、その前に、私のひがみ根性を一寸。

表紙に何故アジア人の写真が載ってないのでしょうかねぇ。世界大会でアジア人がフラッグセレモニーで壇上に上がっている写真は沢山あると思うのに（ここは、一寸小さい活字で書きたいところです。島国根性と言われそうですから。でもネェ、今最もactiveなエリアで、一生懸命やっているのにと思うのは私だけでしょうか。最近風は東から吹いているのですよね）。

さて、今日は最もワイズらしい事業分野Brotherhood Fund（BF）から始めましょう。1930年ペンシルヴァニア州、ウィルクス・バーレ国際大会において、国際的な会議への旅費や参加費を援助する目的で基金を創設することが決まりました。そして1931年クリーブランド国際大会で得られた余剰金800ドルをこの基金に当てました。後にこの基金はワイズメンの然るべき役員が海外の区やクラブ訪問の為の補助として用いられる事になりました。

Bishop Fundと言う名前は、Bishop（牧師や司教と考えて下さい）がその担当する教会の会員のために行う支出を補助する為にBishop Fundという名前の基金を作ったという当時一般的な慣例に従ってつけられました。それが、1967年ウィスコンシン州グリーンレイクでの国際大会で、より相応しい名前として、現在のBrotherhood Fundに変られたのです。

（フェミニズムの潮流が高まっている現在では、Brotherhoodという名は一寸問題かも知れません。将来アメリカやヨーロッパから改名の要求が出てくるかもしれません。）

この基金への醵金の方法は、当初は古切手を集めてそれを販売して行われました。これは、1933年マサチュセッツのクインシークラブが始めたものです。しかし、最近は、この上に、現金での拠出も加えられ、大きな額の基金が毎年寄せられています。確かに現金での拠出の方が能率が良く、容易かもしれませんが、当初の、「無」から、ワイズメンの手を加えて「有」を生み出すという精神は忘れてはならないと思います。（我が家では切手の周りを封筒から切り離して、奇麗な水に浸して、封筒の紙から切手をはがし、それを新聞紙何枚もの間に挟んで、その上に座布団を敷いて子供を座らせ、圧力をかけて水分を吸い取り、取れたところで、百科事典の頁の間にはさみこんで、何日もほおって置いて、最終的にはアイロンを掛けたように、ピンと真っ直ぐに張った切手に仕上げていました。楽しい作業でした。これを又クラブに持ち寄って、皆でワイワイ言いながら整理するのが楽しみでした。時代錯誤かも知れませんが、こういう作業があることもワイズにとっては大切なことではないでしょうか。）

（姫路グローバルクラブ）

世界YMCA同盟について

Q１．世界YMCA同盟はいつごろ、どこでできたのですか？誰によって構成されているのですか？

1844年イギリス・ロンドンで誕生したYMCAはその後、野火の勢いでヨーロッパそしてアメリカ大陸へとその運動が広まっていきました。そして、1855年スイスのアンリ・デュナンの呼びかけによってフランス・パリで最初の世界YMCA大会が開かれました。

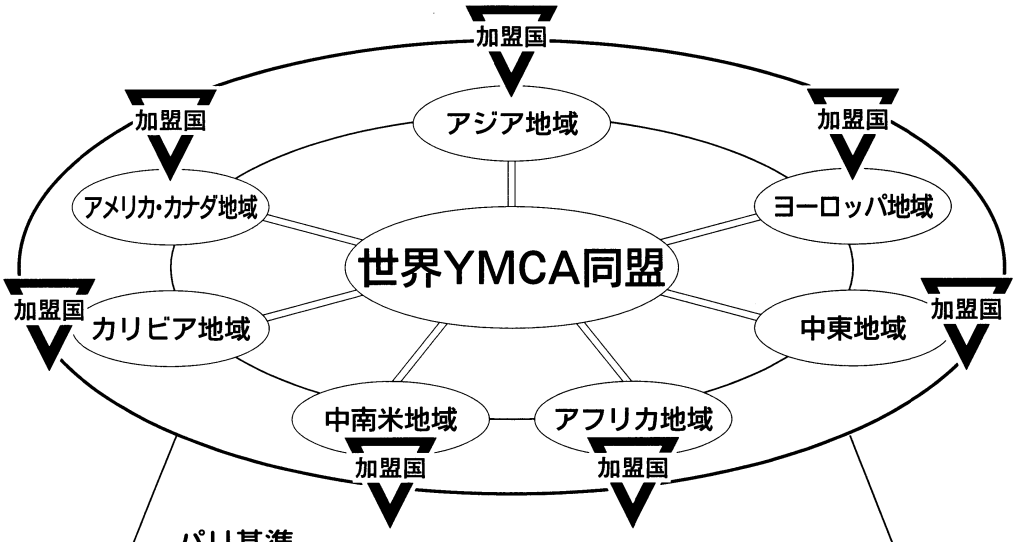
その大会で世界のYMCAの共通の使命であり、運動の基盤を示した“パリ基準”が制定され、同盟が結成されたのです。（下図参照）

Q２．世界のYMCAは民間団体ですか？それとも政府機関ですか？今、何カ国のYMCAが世界YMCA同盟のメンバーとなっていますか？

世界YMCA同盟は連盟組織で、国を単位として加盟するYMCAで構成することを原則としていますが、1カ国から1つ以上のYMCAが加盟しているケースもあります。独立した団体で非政府組織（NGO）または民間公益団体（PVO）と呼ばれています。現在（2001年6月）YMCAは122カ国にあり、町や村にあるYMCAは10,000を超えます。そして会員数はおよそ3,000万人で各都市のYMCAが集って同盟を組織し、国別同盟が世界同盟と地域同盟に加盟して世界的な連盟組織をつくっています。

Q３．日本YMCA同盟はいつ加盟しましたか？

日本のYMCAは1903年（明治36年）学生YMCA同盟と都市YMCA同盟が合体して日本YMCA同盟を結成し、世界YMCA同盟に加盟をしました。しかし、学生YMCAはその以前から世界学生キリスト教連盟（WSCF）に加盟していましたので、現在も2つの世界連盟に加盟をしています。第2次世界大戦中（1941－1945）は世界同盟との関係は中断していましたが、敗戦後直ちに上述の2つの世界連盟に復帰をしました。世界同盟の記録には1955年に再加盟手続きをとったと記されています。世界



パリ基準

われら世界のYMCAは、イエス・キリストを聖書に従ってわが神わが救い主と仰ぎ、信仰とその生活において彼の弟子でありたいと願う青年たちを一つとし、イエス・キリストの精神が広く青年の間に生かされるよう、その努力を結集する。

その他のことがらについての意見の相違は、それ自体としていかに重要であっても、そのことによって世界同盟を構成する加盟および準加盟YMCAの間の友好的な関係をそこなうものであってはならない。

運動に復帰した陰に中国、米国のYMCAの助けがあったことを忘れることはできません。

Q４．アジアにもYMCA同盟があると聞いていますが、世界YMCA同盟とはどのような関係になりますか？

アジアYMCA同盟は1957年にアジア・太平洋地域にあるYMCAが集って発足した地域組織で現在20カ国が加盟しています。

世界同盟の下部機構ではありませんが、世界YMCA運動の方針に基づいて、平和、人権、開発、環境、難民などのプログラムをアジア・太平洋地域で実施をする重要な役割を担っています。これからますます世界同盟と協力してグローバルな課題に取り組みます。

事務局は香港にあり、4年に1度開かれる総会で運動方針を決め、役員、委員を選任します。

Q５．世界YMCA同盟の委員会組織、役員構成はどのようになっていますか？それらの委員は、誰が、いつ、どのようにして選びますか？（下図参照）

- 同盟委員は正式加盟国より選出された委員によって構成されます。加盟国を代表する委員の数は、その国の登録会員数によって決まります。（例えば日本YMCAの場合は会員数が19万人ですから5人が議決権をもつ委員となります）
- 同盟委員会は同盟委員長（会長）1人、同盟副委員長（副会長）2人を選び、さらに常務委員を選任します。
- 常務委員会は27人で構成されます。但し、このうち6人は年齢を30歳以下とし、6人のうち3人は女性とすると規定しています。
- 常務委員会は常置委員会(4)、特別委員会(3)を設けて同盟委員会、各委員会、加盟国YMCAから建議されたことや、同盟委員会に諮問する事項を審議します。
- 委員長、副委員長および常務委員は4年に1度開かれる同盟委員会で選ばれます。したがって任期は4年となりますが、重任することができます。
- 常務委員会は原則として毎年1回開かれます。

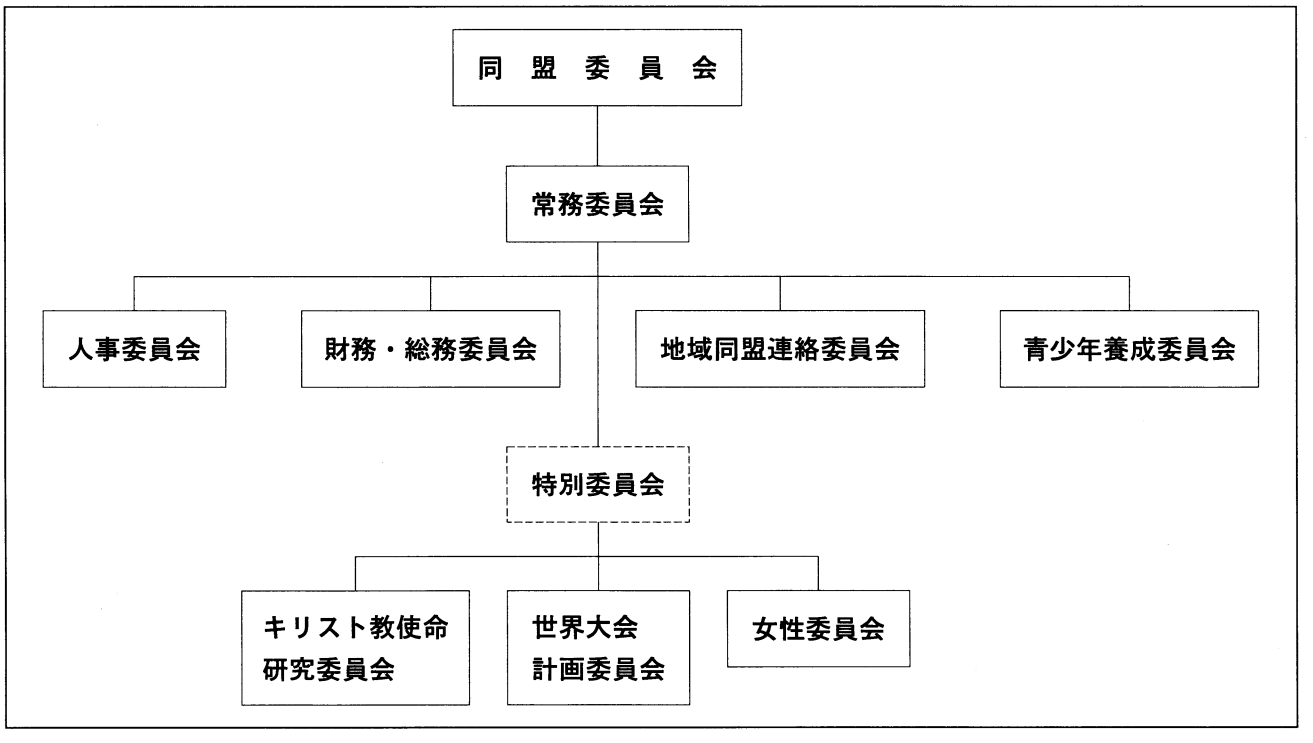
Q６．世界YMCA同盟には、何人くらいの人がどのような仕事をしていますか？

世界YMCA同盟の事務局はスイス・ジュネーブのレマン湖のほとりにあります。

- 全体の統括をする総主事と5つの地域（アジア、アフリカ、中東・カリビア、南米、ヨーロッパ・北米）を担当するスタッフ4名とその働きをサポートするスタッフ数名によって構成されています。

主な役割は、連絡と調整で下記の事業がその対象になります。

- リーダーシップ養成、エキュメニカル団体との協力、キリスト教使命の研究、難民・災害救援活動、地域同盟との連絡、資金・基金の管理、広報活動などです。



Q７．世界YMCA同盟の課題・役割また主な事業は何ですか？

グローバルプログラムとして世界同盟が行う主な事業計画（1993－98）は、下記のとおりです。

- 加盟国同盟総主事研修、レイマンワークショップ、ユースリーダーワークショップなど。
- 地域開発ワークショップ、子どもの権利ワークショップなど。
- 環境問題国際会議、他宗教とのワークキャンプ、世界学生・青年エキュメニカル会議。
- 人権問題、ユースワーカーインターンシップ、紛争解決の方法の研修など。

Q８．日本のYMCAはそれらの課題・役割・主な事業にどのようにかかわっていますか？

国際会議には都市YMCAや学生YMCAのボランティアやスタッフが参加します。例えば、地域開発ワークショップ、他宗教との対話集会、人権セミナー、YMCA間運動協力、リーダーシップ養成など。

また、これらの会合のために必要な費用の分担、発展途上国YMCA参加者の旅費の補助などを行います。

Q９．そのために用いられるお金は、どれくらいかかっていますか？

そのお金はどこから来ますか？　国連からですか？各国の政府からですか？

これらプログラムのための費用は、特別募金、助成団体からの補助金、加盟国YMCAの特別寄付金でまかなわれます。従って、各プログラムの実施はどれだけ資金が集められるかによって決まります。

Q10．日本YMCA同盟も拠出しているわけですが、どのようにして金額が決められているのですか？

世界同盟が上記のプログラムをすすめるために、事務局の管理費（人件費・会館費・旅費・通信費など）や広報・出版の費用、さらに同盟委員会の開催（4年に1回）、常務委員会（1年に1回）の開催に必要な費用（主として旅費補助）は別途集めなくてはなりません。その多くは加盟国による加盟費（負担金）と特別寄付金（分担金）によるものです。日本のYMCAの加盟費は、世界同盟とアジア同盟をあわせて負担します。これは、難民・被害救済・研修・YMCA協力など国際協力募金で集められたお金とは別の資金です。例えば、加盟金（負担金）と寄付金（分担金）の2000年度の拠出金は115,200スイスフラン（7,130千円）です。

日本YMCAの負担額は、ドイツ・イギリス・カナダとほぼ同額です。

Q11．いま世界YMCA同盟が重要な課題としていることを3つあげるとしたら、どのようなことですか？

1）YMCAのキリスト教使命の確認と現代的理解を、異なる状況のなかで明らかにし、世界運動の共通の基盤を見いだすことです。

2）それぞれのYMCAが行う若者のYMCAの政策決定への参加と、新しいリーダーシップの育成への協力をします。

3）それぞれのYMCAが行う環境問題、人権問題、宗教間の和解と協力、YMCA間協力などへの取り組みへの協力をします。

Q12．世界のYMCAは日本のYMCAにどのようなことを期待していますか？

地域の人びとのニーズ、特に困難な状況にある人びとへの支援、また環境、人権、災害、難民などグローバルな問題・課題にスタッフ、ボランティアが積極的に参加することなどが期待されています。

そして、これらに必要な資金協力をすることなどです。

Q13．これまで日本のYMCA同盟は、世界YMCA同盟に対してどのような提案を行ってきましたか？

発展途上国の地域開発の推進、アフリカ危機、湾岸戦争復興、難民・災害救援への協力、YMCA間協力の強化、キリスト教使命の確認、アジアYMCA同盟の強化・発展、途上国YMCAのスタッフの訓練の充実、地域同盟事務局の改善などへの提言をし、その実施のための協力を進めてきました。

Q14．世界YMCA同盟は国際団体だと思いますが、国際連合や他の国際組織・機関との関係はどのようになっていますか？ NGO（非政府組織）ですか？

YMCAは世界で最大の青少年団体で民間公益団

体（PVO）として国際機関、宗教団体、政府機関、市民団体などと協力関係をもっています。そして国連憲章の第71条で定められている非政府組織（NGO）のカテゴリー・の団体の1つで、国連の活動にも参加しています。

YMCAをつくるために・始めるために

Q 1．YMCAは誰が、いつ、どこで、何のために始めたのでしょうか。

1821年10月11日、イギリス南部ダルヴァトンという農村に生まれたジョージ・ウイリアムズという少年がいました。16歳のある日、町の教会の礼拝に出席し、そのとき聴いた牧師の説教に心を打たれました。それ以来彼は教会に奉仕しながら「われわれはいかに多くの人びとのために奉仕することができるか」を真剣に考えたのです。19歳になって、ロンドンにきて、服地商ヒッチコック・ロジャース商会の店員となり、仲間を集めて都市の誘惑に負けない青年の集いを始めました。そして情熱に燃え、志を同じくする青年12人が集まって、世界で初めての「キリスト教青年会」— YMCA（Young Men's Christian Association）— を組織したのです。それは、1844年6月6日でした。

Q 2．日本ではいつYMCAが始まったのですか。

1880年（明治13年）5月8日、東京市京橋区（当時）の数寄屋橋教会で日本最初のYMCA「東京基督教青年会」が発会式をあげました。その中心になった人びとは、小崎弘道を始め、キリスト教会の信仰に燃えた青年達でした。当時のYMCAは、文明開化以降の近代化のなかで、西洋文明による新しい市民社会を形成する啓発の役割を担いました。初代の会員は、知識人、文化人であり、その多くは士族出身で儒教的精神と厳格なプロテスタンティズムが結びついたクリスチャンでした。そして、彼らは新しい日本を創る志を抱き、希望と夢をもって集まったのです。

Q 3．日本のYMCAの共通の目的・綱領は何ですか。そして、世界のYMCAを結び合わせる基準は何ですか。

“私たちは、世界のYMCAと連帯して世界の平和、新しい時代の秩序を築くため、責任と自由と奉仕とに生きる人間となることを目標とします。また青少年の生涯学習活動を推進し、ともに生きる社会をつくるため、奉仕活動をする人びとを結集することを願っています。”（日本YMCA綱領の要旨）

そして、その実現にむかって努力する決意を表明して、1976年に「日本YMCA基本原則」を採択しました。それは、“イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神に基づいていのちを大切にし、健康な心と身体をつくり、ボランティア活動を推進し、ゆたかな知性と人格の向上を助け、そして公正で平和な世界をつくる”といった具体的な方針・目標を掲げています。

さらに、世界中にあるYMCAが信仰・年齢・性別・民族・社会状況の違いを越えて互いに協力・協働できる基準を示したのが「パリ基準」です。それは1855年（安政5年）パリで開かれた第1回世界YMCA大会で採択された決議文で、「この運動の中心はイエス・キリストである」ことを表明したものです。

Q 4．YMCAのシンボル・マークについて教えてください。

YMCAのシンボルは、ふつう①の逆三角形であらわされます。正三角形は、精神（Spirit）、知性（Mind）、身体（Body）の均整のとれた成長をあらわし、人間がこの三辺の均整を保って成長することを理想としています。ひとりの人間はこれら3つの側面の統一体（Whole Man＝全人）であるという聖書的人間観を象徴しており、提唱者はアメリカYMCAの体育主事ルーサー・H・ギューリック（1865－1918）です。②のマークは、ふつうに使われる正章で、外円は完全な人格を意味しています。XとPはギリシャ語の救い主キリストの頭文字と次の文字とを組み合わせたものです。真中の開かれた書物は新約聖書で、ヨハネによる福音書17章21節“みんなのものが一つとなるため”というところを開いています。この正章によってYMCAの目

的がほぼ表されています。

①

②

Q５．YMCAのない地域で、YMCAを始めるために必要なことは何ですか。

YMCAの精神・目的に賛同した人びとが集まり、人びとに呼びかけることからスタートします。その際、年齢・性別・宗教・職業・国籍など分け隔てなく、できるだけ多くの人びとに呼びかけます。

呼びかけをする人は、まず祈り、そして語り合う中から、自分達の地域で人びとが関心をもち、必要としていることが何であるのかを知ることが大切です。また、できるだけ多くの人びとを最初の立案・計画の段階から、それを具体化するプロセスに参加を促すことです。その過程で、近くにあるYMCAと連絡をとり、経験のあるスタッフやボランティア会員め協力を得ることが必要です。

Q６．YMCAをつくる基準はありますか。そしてYMCAの名称・マークを使用するためにはどのような手続きが必要ですか。

YMCAを設置するための基準は「日本キリスト教青年会同盟規則」に定められています。それは、

①都道府県または、市町村を単位として設置する。

②大学内に設置する。

③在日本外国人の間に設置する。

などがそのガイドラインです。また、どのような様態のYMCAをつくるかは設立の意図・地域の条件などによって異なります。例えば、国際奉仕センター・青少年活動センター・高齢者センター・青少年活動情報サービス・地域ボランティアセンター等があります。

YMCAの名称・マークはサービス・マーク、トレード・マークとして登録され、法的保護を受けていますから、無断で使用することはできません。これを管理している日本YMCA同盟と相談をして、どのように使用するかを決めてください。

Q７．YMCAをつくり、日本YMCA同盟に加盟をするのにはどのような条件・手続きが必要ですか。

日本国内でYMCAの名称を用いて事業や活動を行うためには、日本YMCA同盟に加盟をしなければなりません。すでに加盟している多くのYMCAは、法人格を有する財団法人として、寄付行為と寄付行為の細則となる「キリスト教青年会会則」をもっています。しかし、法人格をもたない任意団体としてのYMCAの場合は、「キリスト教青年会会則」または「登録キリスト教青年会会則」をもちます。これらの「会則」については、「モデル会則」がありますから、これからYMCAを始め、同盟への加盟（または登録）を準備するためには、この「モデル会則」に準じてそれぞれのYMCAが組織運営をする会則をつくる必要があります。会則の内容としては、

①前文にパリ基準を掲げること。

②目的・事業内容を明示すること。

③キリスト教青年会または、YMCAという名称を用いること。

④総会および、総会構成員に関する規程があること。

⑤理事・監事・常議員の人数、職務、資格、選出方法、任期を明記すること。

⑥キリスト者に関する条項を明記すること。

などがあります。

加盟の手続きは、上記の会則に定められた基準・条件を満たしていることが第一です。

そして、所定の申請様式に従って加盟（または登録）申請を行います。これを受けた日本YMCA同盟は財団理事会と同盟常務委員会で審査をし、同盟委員会に報告して承認・決定を行います。

Q８．YMCAは会員組織といわれますが、その制度はどのようになっていますか。

基本的に、会員とはYMCAの目的に賛同し、その意思を表明し、入会を認められた人をいいます。YMCAによっては、野外活動、フィットネス・ス

ポーツプログラムへの参加者も会員と呼称する場合もあります。また年齢による区分、総会構成員資格の有無による区分、協力会員、維持・賛助会員といった区分もあります。そして、すべての会員（ボランティア）は定められた会費を納入しなければなりません。

このように、定められた手続きによって会員となった人は、YMCA運動を担う一人となり、自分自身の充実・向上のみでなく、地域社会への奉仕、地球市民としての役割を果たさなくてはなりません。

Q９．YMCAは、ボランティア活動の場といわれていますが、どのような活動ができるのですか。そしてスタッフやディレクターはパートナーといわれますが、その役割はどうなっていますか。

青年・女性・中高年・高齢者を問わず、自らの意思で加わる人は誰でもボランティア（会員）として参加できます。例えば、青少年のスポーツ、野外活動、サークル活動の援助者として、またワイズメンズクラブのように奉仕の機会の提供、奉仕者への支援活動、さらに国内・国外の災害救援・開発・環境・人権などのための募金活動などさまざまな活動があります。また、YMCAの将来計画を検討し基本的方針を決定するのもボランティア（会員）の重要な役割の一つです。理事会・常議員会・事業委員会・専門委員会・実行委員会などの役割を担う人びとも、すべて無給のボランティア（会員）です。そのパートナーとしてスタッフ（有給職員）がいます。スタッフとボランティア（会員）は、立場と役割が違うので、お互いの領域を尊重し、補い合う気持ちをもって協力します。スタッフとボランティア（会員）の関係を「車の両輪」「二人三脚」に例えて説明することもできます。お互いがその役割を十分に果たすために、専門的な学習活動や研修会、会議なども両者にとって欠かすことのできない重要な機会です。

スタッフのうち、とくに指導的な役割を果たす専門職を、ディレクターと呼ぶこともあります。

Q10．YMCAは地域に根ざした働きをする必要があるとよくいわれます。具体的にはどういうことでしょうか。

YMCAの標語に「世界を見つめ、地域に生きる」というのがあります。YMCAは国際団体でもあり、キリスト教を精神的な背景とした団体ですから、地球規模での環境・人権・平和・開発教育などへの働きが必要です。グローバルな問題は、各ローカル（地域）の問題の集積されたものとも考えられます。したがってYMCAは、より良き地球市民を育成する願いをもって、青少年の健全育成活動、教育活動、ウエルネス運動、国際協力活動などを展開しています。地域に根ざした活動とは、地域の人々が共に交わり、支えあい、いたわりあい、地域の課題に取り組みつつ共に成長することが、YMCAのプログラムを通して結実していくことです。YMCAは地域自治体・諸団体、YMCAのボランティア（会員）、ワイズメンズクラブなどと協力して、心豊かな社会づくりに貢献したいものです。

Q11．日本のYMCAはいくつの都市にありますか。また世界のYMCAの組織とどのような関係をもっていますか。

北海道から沖縄まで、29の都道府県に31のYMCA、140を超えるプログラムセンターがあります。そのほとんどは、各都道府県・市から認可を受けた法人格をもち（財団法人・学校法人・社会福祉法人等）、各々が自治権（オートノミー）をもっており独立しています（都市YMCA）。また大学・短大に組織された学生YMCAがあります。その歴史は古く、1881年（明治14年）内村鑑三によって札幌農学校に最初の学生YMCAが設立されたといわれています。現在40校で活動がすすめられています。（学生YMCA）

この都市YMCAと学生YMCAが合体して、1903年（明治36年）に日本YMCA同盟が結成され、東京に事務所をもっています。

また、香港にアジア地域の19カ国で構成されるアジアYMCA同盟があります。アジアの地域開発・災害救援・難民救済定住活動や環境・平和・人権問題に取り組んでいます。さらに、スイス・ジュネーブに世界の122カ国が加盟する世界YMCA同盟があります。世界のYMCA間の連絡・調整をしたり、国連その他国際機関と協力して、地球規模の課題に取り組んでいます。

日本のYMCAは、アジア同盟と世界同盟に加盟して、国際会議・青少年交流・指導者養成・他宗教との対話・人権・平和・開発・環境ワークショップなどに人の派遣を行ったり、また災害救援・難民救済事業・地域開発事業へ資金協力をしたり、

ボランティア・ワーカーの派遣をするなど、加盟国の一員として重要な役割を担っています。

Q12. YMCA会館もなく、常勤のスタッフもおかず、ボランティアのみによって運営されるYMCAもあるときききました。また、どのようなプログラムをもち、どのようにしてリーダーシップを育てているのでしょうか。

プログラムは、地域のニーズに応えるものでなくてはなりません。そして公益団体ですから、経済的利益を得ることが主な目的ではありません。しかし経済的、社会的に自立した団体として、必要な経費は会員および参加者によって負担されることを原則としています。例えば、①地域子ども会活動　②野外活動　③スポーツ・レクリエーション　④国際交流・協力活動　⑤福祉・教育活動　⑥ボランティア研修会　⑦政策提言（オピニオン・リーダー）活動　⑧生涯学習活動などがあります。

そして、ボランティア・リーダーシップの養成が地域活動を成功させる鍵となります。例えば、

(1)自分達で日常的に行うワークショップ、研修会、募金・資金集め、会員募集への参加

(2)地域青少年団体、市や県の主催する研修会への参加

(3)同盟および近隣YMCAの主催する研修会・協議会への参加

(4)同盟および近隣YMCAの協力・応援によるトレーニング・プログラムへの参加

などがその主なプログラムで、これらの機会をとおしてリーダー・ボランティアが見いだされ、育てられていきます。

Q13. YMCAを運営する経費は誰がどこから調達するのですか。

活動に必要な資金は、YMCAを設立する意図・場所・事務所やスタッフの有無・プログラムなどによって異なりますが、基本的には自立の運動ですから、YMCA会員自身のほか、プログラム参加者・支援者・団体によって支えられています。YMCA運動を担っていく人びとが中心となって協力者や支援者に呼びかけて必要な資金を集めます。その多くは個人の会費、寄付金（個人・企業・助成団体・ロータリー・ライオンズ・J.C.・ワイズメンズクラブなど）、特別イベントの収入、プログラム参加費、補助金・助成金、基金の果実などがその主なものです。

Q14. YMCAとワイズメンズクラブの関係はどのようになっていますか。

ワイズメンズクラブとYMCAはパートナーです。それぞれ独立した団体ですが、共通の基盤に立ってお互いに協力しています。また、ワイズメンズクラブは、社会（地域）奉仕団体の一つですが、YMCAと協力して持続的な奉仕活動ができるところが他の奉仕団体にない強みです。したがって、ワイズメンズクラブの正会員（ワイズメン）はワイズメンズクラブ国際協会の会員であると同時に、YMCAの会員でもあります。

Q15. YMCAを始めるために、どのような資料や図書がありますか。また、それはどのようにすれば手に入りますか。

- YMCA運営シリーズ①「YMCA管理運営資料」
  齋藤總衛編著　日本YMCA同盟出版部（1990年）
- YMCA運営シリーズ②「組織活性化へのアプローチ」
  山根誠之・齋藤總衛著　日本YMCA同盟出版部（1990年）
- YMCA運営シリーズ⑤「YMCA戦略」
  原田宗彦・山根誠之編集　日本YMCA同盟出版部（1993年）
- YMCA運営シリーズ⑥「総合計画の実際と課題」
  齋藤總衛・牧田稔・新堀邦司著　日本YMCA同盟出版部（1994年）
- YMCA運営シリーズ⑦
  「YMCA戦略II　MEMBERSHIP RETENTION」
  日本YMCA同盟　健康教育
  日本YMCA同盟出版部（1996年）
- YMCAオリエンテーションシリーズ①
  「一粒の種が地にまかれ大きく枝をはる樹となった」
  日本YMCA研究所（1984年）
- YMCAオリエンテーションシリーズ②
  「YMCA基本用語小事典」　日本YMCA同盟（1985年）
- YMCAオリエンテーションシリーズ③
  「トライアングル」　日本YMCA研究所（1985年）
- YMCAオリエンテーションシリーズ④
  「わたしたちはこう考えます」　日本YMCA研究所（1989年）
- YMCAスタディーシリーズ④

「仕えあう出会いのよろこび」
日本YMCA同盟出版部（1991年）
◦YMCAスタディーシリーズ⑤
「聖書から学ぶ日本YMCA基本原則」
日本YMCA同盟出版部（1991年）
◦YMCAスタディーシリーズ⑦
「分かちあう世界を目指して」
日本YMCA同盟出版部（1992年）
◦YMCAスタディーシリーズ⑧
「ボランティアリズムを考える」
日本YMCA同盟出版部（1993年）
◦YMCAスタディーシリーズ⑨
「YMCA氏名再検討ガイドブック」
世界YMCA同盟原書　日本YMCA同盟出版部
（1993年）
◦YMCAスタディーシリーズ⑪
「新しいYMCAの形成ーワイズメンズクラブ／YMCAジョイントタスクチーム報告」
日本YMCA同盟出版部（1994年）
◦YMCAスタディーシリーズ⑫
「YMCAとパブリックポリシー」
日本YMCA研究所編　日本YMCA同盟出版部
（1994年）
◦YMCAプログラムシリーズ①
「これからのウエルネス」 日本YMCA同盟出版部
（1987年）
◦YMCAプログラムシリーズ②
「明日の社会とウエルネス」
日本YMCA同盟出版部（1988年）

以上の資料は日本YMCA同盟までお問い合わせください。（TEL 03－3203－0173）

※このシリーズは、京都YMCA会員委員会編「正会員のためのハンドブックQ&A」を参考にしました。
※YMCAの組織・機能・マネジメント・プログラムなどに関しては、日本YMCA同盟刊「YMCAオリエンテーションシリーズ」をご参考ください。

クラブ設立の方法

クラブをつくりたいというお気持ちはおありでも、実際にどこから始めればよいのかお判りにならない方が多いようです。そこで、「ステップ・バイ・ステップ」で、どのようにすればよいのか、ここに提案をさせて頂きましたので、ご検討下さい。その基本的な考え方は、ワイズメンズクラブの創立はシッカリと、奉仕しようとする地域社会やYMCAのニーズに根ざしているということです。

1．今まで、その地域の中で、満たされていなかったYMCAや地域社会のニーズとはどのようなものかを明確に把握して下さい。このリストアップをする為には、特にYMCAや警察、市関係、保健関係、大学や教育機関などとに当たられることが大切です。そうすると、沢山のニーズがあることがお判りになるでしょう。その中からいくつかに対象を絞って下さい。すぐに目を引くものに的を当てられても一向に構いません。
2．こうして選んだニーズへの対応に興味を持つ方をYMCAの内外に探して下さい。YMCAの主任主事や主事や役員と会って、メンバーの候補者をリストアップし、又教会関係にも当たって有望者のリストを作って下さい。他の地域奉仕団体の中にも有望者はあるはずです。
3．上記のようにして選んだ有望者に集まってもらって、ニーズを確認し、どのようにしてそれに対応すればよいのかを話し合って見て下さい。この議論の中でワイズメンズクラブとは、今議論しているような、まさにそのことをやっているクラブであり、Y（YMCAの頭文字）に属する、Yのための人々が集まることから始まったクラブだから、そう呼ばれるのだということを、知らせてみて下さい。

このような方法は、ワイズメンズクラブとは何かを説明する「ソフト型」の方法と呼んでもよいでしょう。まず、候補者の心に受入れやすい、社会やYMCAのニーズを扱うグループだという点から入って行き、ワイズメンズクラブとはこうこうだという説明は後にまわす方法です。

初めての会から、国際的な友愛だとか、BFやYEEPを通して忘れられない経験をしたとか、ワイズダムのよい点ばかりを列挙して、候補者の皆さんに圧迫感を与えてしまわないように注意して下さい。確かにこれらは素晴らしいプログラムであり、入

会勧誘のよい目玉になります。しかし、最初からそれを訴えてはいけません。むしろ、ワイズメンズクラブに入ったら、個人としての成長が出来るのだという点から説明した方がよいでしょう。ワイズメンズクラブのメリットは「奉仕一友愛一人間としての成長」だということから入った方がよいでしょう。この説明の為には、“This is Your Opportunity for Involvement and Growth”（参画と成長一ワイズはその絶好の場です）というパンフレットが国際に用意されています。

初めての会で何が議論されたかは別として、その会を閉じる時には、次の会合の日を決め、だれがその会を召集するかを決めておくことをお勧めします。

この二つのステップにおいて、YMCAの主事は、そのニーズや、メンバー候補者をよく知っているという点で、キーパーソンなのです。しかし、主事さん方が、ワイズメンズクラブを結成する責任を持つのではなくて、それは、ボランティアの方々が持つのだということははっきりさせておく必要があります。

ワイズメンズクラブとは、多くの場合、今存在しているYMCAのプログラムにはあまり興味を持たない年代層の人々を呼び集めることが出来るという意味で、YMCAの補完的な存在ということも出来るでしょう。この点も、YMCAの主事さんと話し合って得られるメリットです。YMCAとのよい関係を示す為に、1981年にYMCA世界同盟とワイズメンズクラブ国際協会が締結した「パートナーシップの原則」や、これにならって色々なレベルで交わされたものを主事さんにお見せするのもよいでしょう。

各ワイズメンズクラブは主として、直接的に、或いはYMCAが在るところではそれを通して、地域社会に対する支援を行なう団体であることを訴えるのもよいでしょう。平均すると、各ワイズメンズクラブが拠出する資金の約90％は、その地域のプロジェクトやプログラムに捧げられ、国際協会のプロジェクトに向けられるのは、わずか10％程度です。これは、日頃YMCAの健全な財政の維持に一生懸命なYMCAの主事さんにとっては非常に興味深い事実ではないでしょうか。

ワイズメンという名前が一寸まぎらわしいのですが、ワイズメンズクラブにおいては、女性も男性と全く同等に会員になれます。これは、多くの地域社会にとって、実に大切なことです。この点は、もっともっとアッピールされる必要があります。

国際本部には沢山の印刷物があります。しかし、皆さんの地域や区でおつくりになったものの方が皆さんの地域にはピッタリ当てはまるのではないでしょうか。必要なものはそろっておりますが、ワイズメンズクラブのプログラムやプロジェクト、そしてその略号を余り強調し過ぎて、混乱を起こさないようにして下さい。ワイズにかなり年季の入った人さえ、時には混乱されるのですから。

新クラブ設立に頑張って下さい。あなたの区の理事さんを通して、必要書類の添付された「加盟認証上申請書」を受け取る日が近いことを待ち望んでおります。

国際書記長　イングヴァー・ワリン
山川一郎訳（姫路グローバルクラブ）

MC　FISHBONE

●会員増強

狭義の会員増強活動

動　機　づ　け

- ワイズの使命を確認し自覚しよう！
- 会員獲得数に関する目標を設定しよう！
- 会員増強への取組みを皆で決意しよう！
- 会員増強キャンペーンと賞や表彰を設定しよう！

ブースター賞に挑戦！

会員への勧誘

- YMCA、教会、他の奉仕団体、親戚、友人、地域の人々等へ誘いかけよう！
- 募集パンフレット作成、ブレティン送付、自ら出向いて…
- クラブ例会へ会員候補者を招待しよう！

クラブ例会へ招待を！

会員増強の前提

ワイズダム自体

クラブの在り方

- 私たち自身にとってクラブは楽しく、意義があるのか？
- 私たちのクラブに、ワイズの魅力：人間的成長、友愛、奉仕の機会が満ち満ちいるように、皆で努力しよう！

まず例会の改善を

ワ イ ズ 活 動

- 新会員候補者を…TOF活動に、地域奉仕活動に、IBC/YEEPプログラムに、BFや募金活動に誘い、ワイズ活動を体験して貰おう。
- YMCA活動やYMCAとの共同奉仕に誘おう！

YMCAとの協働を！

ワイズメンとしての私

人柄で友を引付けよう

- 私の人柄や日頃の行動で、人を誘ってもついて来てくれるだろうか？
- 会員獲得の為に、ワイズの内外での私の言動と人間性を高めるよう努力しよう！

私自身の人間的高揚を

重　点　目　標

- もっと多くの若者を
- もっと多くの女性を
- ワイズウーマンとワイズメネットの関係維持に注意しよう！
- 青年・女性に会費の恩典費が必要では？
- 特に青年と女性にアッピールをしよう！

もっと青年と女性を！

精神的背景

精 神 的 独 自 性

- 我々の精神的独自性は、「愛と奉仕」。しかし、これは世の中で理解され難く、受入れられ難い。
- 「共に奉仕し、共に汗をかく」ことによって、この独自性を人々の中に広めて行こう。

共に奉仕の汗をかこう

キリスト教基盤

- 近代化は世俗化と物質主義をもたらして来た。多民族、多宗教の世界が現出し、今キリスト教の価値が問われている。新しい聖書解釈、皆に判るキリスト教の表現を皆で考えよう！

新しいキリスト教を！

1996年3月　日本語版作成　山川一郎

入会式（加盟認証状伝達式）式文

ワイズメンズクラブに入会する事は、次のようなモットーを掲げる組織に加わる事です
― 強い義務感を持とう。義務はすべての権利に伴う ―

あなた（方）の入会にあたり、ワイズメンズクラブの目的とワイズメンになる事の意味を良く理解して頂きたいと思います。ワイズメンズクラブの国際憲法には、私たちの目的が明確に述べられています。その内容は次のようなものです。

ワイズメンズクラブ国際協会は、多様な宗教・信仰を持つ人々が、互いに敬愛の念を持って共に働く世界的な友好団体です。ワイズメンは、イエスキリストの教えに共感し、YMCAのために尽くそうとする心を共にして、全人類にとってより良い世界を築くために先導的な役割をはたして行く事が出来るよう、活発な奉仕活動に励みます。

ワイズメンは、イエスキリストが教えられた愛の心を行動に移します。イエスキリストの愛の教えは、それぞれのクラブや国際協会の運営および方針決定のガイドラインとなり、また個人としてのワイズメンの生活の指針ともなります。

あなた（方）が、ワイズメンズクラブの目的と意義を認め、この目的のために誠実に奉仕される気持ちをお持ちになられたら ―「はい」― と答えて下さい。

今、あなた(方)は「奉仕」の精神をもって働き、学び、楽しむクラブに入会なさいました。

ワイズメンズクラブの奉仕活動は次の6つの綱領に基いています。

1．まず第一にYMCAのためのサービスクラブとして機能する。
2．その他の良い働きをしている組織・団体を支援する。
3．身近なそして国際的な出来事の中で、政党政治とは別の次元で正義と公正を追求する。
4．メンバーは、宗教・市民生活・経済・社会・国際の諸問題について、常に関心を持ち積極的に行動する。
5．すばらしい交友関係を作り出す。
6．この協会の国際・地域・区のレベルでの諸事業を支える。

あなた（方）が、これらの6つの綱領のために積極的に献身される気持ちをお持ちになられたら ―「はい」― と答えて下さい。

さて、ワイズメンである事は次のような5つの特別な意味を持っています

細字は入会式(認証状伝達式)の席上では省略も可。但し事前のオリエンテーションで十分に説明しておく事。

ワイズメンである事は、理想主義者である事を意味します

ワイズメンの行動は、私たちの綱領に見いだす事の出来る理想主義に基づいています。

様々な組織が様々な目的を追求しています。あるものは事業の成功を、あるものは社会的な地位の向上を、あるものは知識の獲得を、またあるものはスポーツの好成績を求めます。それら全てをワイズメンズクラブに見る事も出来るかも知れませんが、自己犠牲の精神もそこに見いだす事が出来ます。

ワイズメンである事は、YMCAに尽くす事を意味します

ワイズメンは、YMCAが、その名の示す通り、共通の目的に向かって共に働く者の集まりである事を知ってい

ます。ワイズメンズクラブの最も重要な目的は、個人として、また組織としてYMCAやその他良い働きをしている団体を支援する事です。

主事は私たちの事業を管理するために研修を重ねた専門家であり、会館は私たちの共通の目的のある部分の達成を容易にする手段です。この世界で、YMCAは教会に次いで優れた人間形成の場であり、学校や大学に次いで大きな教育機関であり、また体育の分野で指導的な立場にあります。YMCAは世界各地で信仰や階級や文化の相違から生じるいわれなき差別を打ち砕こうとする働きにおいても突出しています。YMCAは国家間あるいは人種間の不公正に対しても果敢に戦っており、世界平和の実現にも大きく貢献しています。

ワイズメンである事は、国際的な見識を持つ事を意味します

ヨーロッパ・アジア・アフリカ・大洋州・南北アメリカの多くの都市にワイズメンズクラブがあります。私たちは「人間の評価は、その人の視野の広さによる」と考えます。国家間や人種間の不公正に無関心な人、自分の身の回りの出来事だけに気を取られて他国や他国民に関心を持たない人、視野が自分の領域の狭い範囲に閉じこめられている人 ――そのような人は世界的な視野を持つワイズメンの基準に達する事が出来ません。

ワイズメンである事は、義務が全ての権利に先立つ事を承認する事を意味します

「強い義務感を持とう。義務は全ての権利に伴う」。このモットーがワイズメンに採用されているのは、人は自分の権利を十分に享受する事ばかり主張し、それらの権利を正当づけ、その権利に対応する義務を忘却し勝ちだからであります。私たちのモットーは、権利の行使にはあまり注意を払わず、それに対応する義務の発見と履行により多くの関心を持つ ――すなわち権利から義務への強調点の転換を私たちに迫っているのです。

ワイズメンである事は、誠心誠意働く者となる事を意味します

「誠心誠意（enthusiasm）」という言葉は、ギリシャ語の「中に（en）」および「神（Theos）」という言葉からきています。誠心誠意の人とは、神がその内に宿る人の事です。ワイズメン運動における熱心な奉仕活動は、常に見えざる手に導かれているのです。

そうです。ワイズメンである事は、要約すれば、理想主義者であり、YMCAに尽くし、国際的な見識を持ち、権利にまさって義務を強調し、誠心誠意働く者であるという事を意味するのです。

以上の事を「拠り所」として、あなた（方）がこの会に入会を希望されるなら、手を挙げて ―「入会します」― と宣言し、このクラブの理想と目的に献身しようとするあなた（方）の誓約として下さい。

この公の場での宣誓により、私は喜んであなた（方）をワイズメン、つまり「Yの」そして「Yのための」人であると宣言し、世界各地のワイズメン一同を代表して、あなた（方）をこの世界的友好団体にお迎えいたします。

（加盟認証状伝達式の場合、次の節を加える）

全てのワイズメンを代表し、全ワイズメンズクラブの証言であるこの認証状を貴クラブに伝達出来る事は、私の大きな喜びとするところです。

（認証状を読み、クラブ会長に手渡す）

94～95　第２回日本区役員会資料
文献委員長　奈良昭彦訳

役　員　就　任　式　式　文

今ここにワイズメンズクラブ国際協会および日本区を代表して、式辞を述べさせていただきます。

ワイズ運動において執行役員に選ばれることは大いなる名誉です。他の団体の役員に選ばれるより、はるかに名誉なことです。一般の選挙では役務が欲しいがゆえに立候補しますが、私たちの運動では役務が候補者を探すことを不文律としています。
あなた（たち）が選ばれたのはワイズメンズ会員の信頼を得ている結果で、会員はあなた（たち）の能力を信頼しまた大きな期待をしているのです。ここで、役員としての資質を「I」で始まる4つの英語で表現しましょう。

第一は**IDEALISM**、すなわち「理想を持つこと」です。会員はあなた（たち）が最も高い理想の手本を示されることを期待しています。

第二は**INTEREST**、すなわち「興味を持つこと」です。役員が率先してワイズメンズ運動のすべてに亘って興味を持ち、会員を引付け、ワイズ第一の気持ちを育ててください。

第三は**INITIATIVE**をとることです。常にアイディアを出し、計画して、これを実行する。他の人の提案に乗るだけではなく、提案者になるのです。「何かを始める人」になり、始めたことは成功させてください。

第四は**INDUSTRY**、すなわち「労をいとわぬ」ことです。打ち込む仕事に大小はありません。時にはすべてをなげうって、根気良く働いてください。

あなた（たち）を役員に選ぶにあたり、この4つの資質のほかに前向きの良き持味を発揮する人として期待しています。個々の会員をリードし、協同してワイズ運動を推進させてください。
役員就任にあたり、右手を上げて、その決意を表明してください。

「わたし（たち）は誠心誠意ワイズメンズクラブ国際協会の役員の役務を努めます」

最後に全員の拍手により、役員就任を祝福して、大いなる声援を送ります。

93/11/20　日本区役員会にて修正
93/94　文献委員会（志波、吉田）
INAUGURAL CHARGE Reprinted Oct. 82

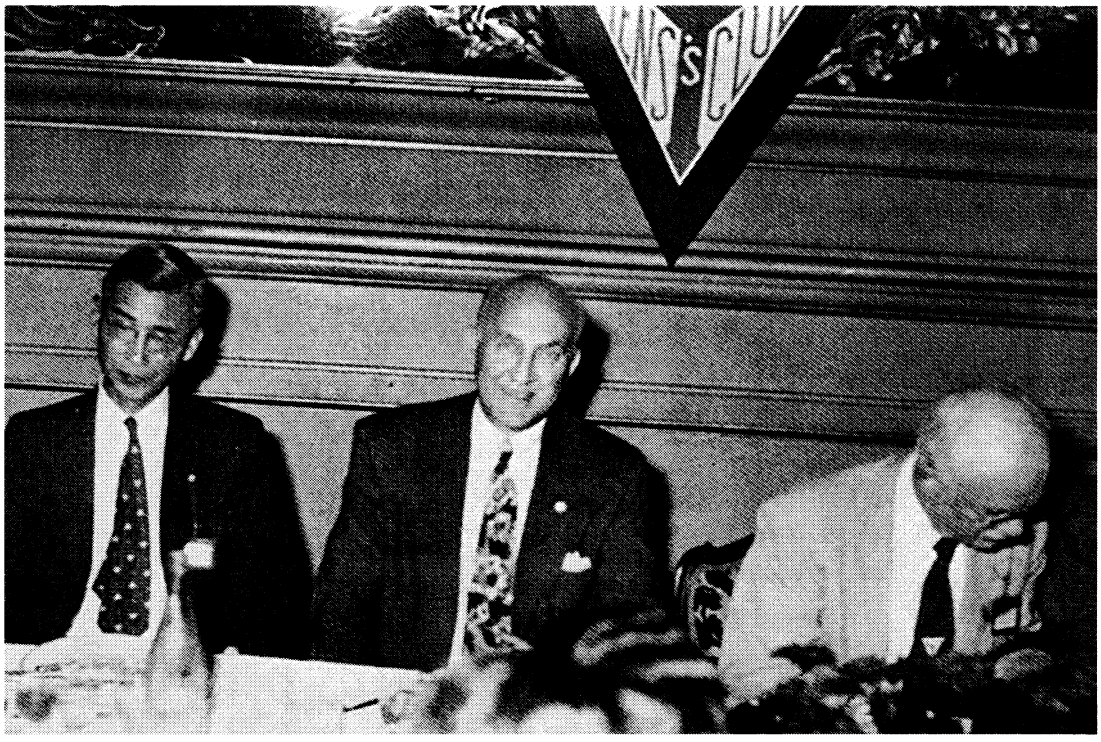
若き日の
ジョージ・ウイリアムズ

－YMCA創立者の半生－

ロンドンのヒッチコック・ウイリアムズ商会支配人当時の
創立者　ジョージ・ウイリアムズ

奈良　伝著

日本YMCA同盟出版部



左より奈良伝、P.リンバート（世界YMCA同盟総主事）、P.アレキサンダー（ワイズメンズクラブ創立者）

上段左よりG.ストー（前会長）、E.ミラー（副会長）、D.ロバートソン（英）、奈良伝（副会長）
P.リンバート、P.アレキサンダー、M.ボーマン（会長）

— Y's Men's B Hotel d'Orsey, Paris. 1955年. —

改版の序

YMCA即ちキリスト教青年会は、世界的青少年団体として今日では70余ヵ国に広がり、約10,000のYMCAと350余万の会員を有するまでに発展しているが、その本源をさぐれば、英国ロンドンの一商店内で僅か12人の青年によって発会した小さいグループにさかのぼっていく。

この最初で最小のキリスト教青年会をはじめた中心人物がジョージ・ウイリアムズで、当時（1844年）22歳の一実業青年に過ぎなかった。

YMCAの創立と、その一世紀余にわたる、発展の歴史については、既に大小の文献もあり、この小冊子では多くを記述する余地がない。しかし、ジョージの少年時代、青年時代にどういう人柄であっただろうかという関心に対し、答えるものはただこの『若き日のジョージ・ウイリアムズ』のみである。

この物語と現状とは時間的にも場所的にも大きなへだたりがある反面、時代の背景を超えて、一少年として、また一青年として、今日でもお互いに共通した何物かがある事実を思わせる資料が本書の中に満ちている。この小冊子を読まれる会員やレイリーダーたちと、創立者の若い時代との距離感が幸いに縮められて、ひときわ親近感がわき上ってくるように念願する余り、1959年第一版を発行した。

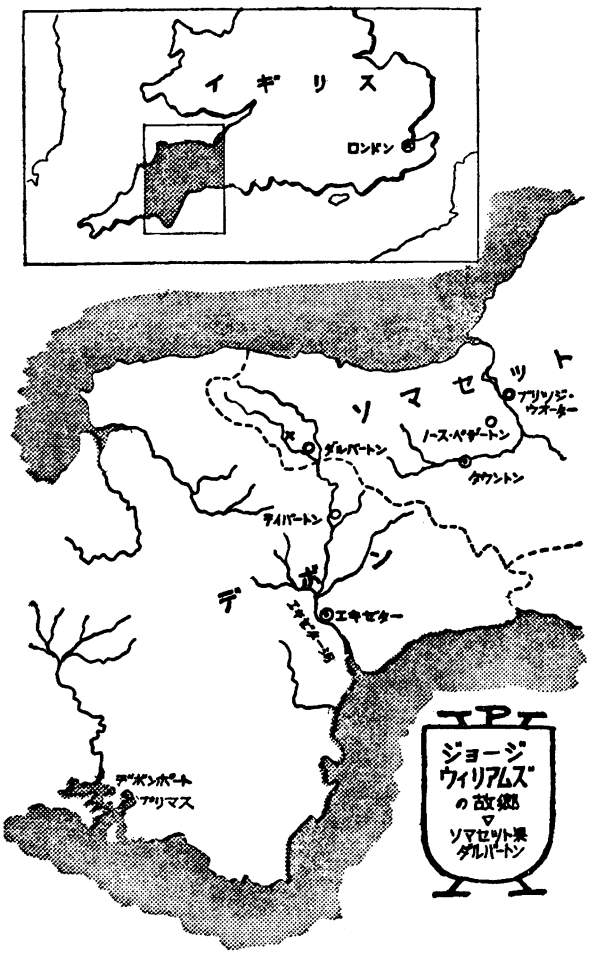
今回は少々第一版に筆を加え、今や2,000名にも及ぶワイズメン、ワイズ・メネッツの方々にも読んでいただきたいと念願し、この改訂版を発行する次第である。

1973年10月11日

ジョージ・ウイリアムズ誕生記念日
大阪YMCAにおいて
著　者

目　　次

改　版　の　序 ……139
1　農村から町へ ……140
2　霊の誕生地ブリッジ・ウォーター ……142
3　ロンドンに出た一青年 ……144
4　仕事と生活に取っ組む人 ……146
5　友を得て、共にはたらく青年たち ……149
附　　録　世界協議会はワイズメンに何を意味するか ……151
後　　記 ……157



1　農村から町へ

イギリスの南部、西にのびた大きな半島、あの英仏海峡をへだてて、フランスに背を向けた巨人が横に投げだした足のように長い半島、ちょうどその膝の部分に当るあたりにこの物語の発端地ソマセット県がある。

北から南に流れて英仏海峡に注ぐ流域百余キロのエキゼター河を、15キロほどさかのぼるとデボン県のエキゼター市がある。また更に40キロ上流へのぼり、県境を越えると河は二分され、バール河となるあたりにソマセット県ダルバートン村がある。

YMCAの創立者サー・ジョージ・ウイリアムズの故郷として、始めて陽の目を見たほんとに小さい村である。村の中心聚落から西北6キロ離れたアッシウェイ農園が彼の生誕地である。この辺一帯、大海のうねりのようになだらかな丘陵の起伏が果てしなく、丘の合間に忘れられたような農家があり、広い畑があり、丘の上の方も一部は耕やされていたり、牧草地であったり、また所々に林が続いているが、見渡す限り人影一つ見えない。イギリスの最も古い典型的な農村風景が今もなお展開している。ジョージはこの自作農園の8人目の末っ子として、1821年10月11日に誕生した。

今、当時のイギリスの農家の状態を振返って誌しておこう。それは今から見ると全く想像がつかないほどひどいものであったらしい。食糧に不足があったわけではないが、小麦粉製のパンでさえ到底口には入らない時代であった。主食といえばじゃが薯が主なものといわれている。陶磁器などの食器は都会でさえ滅多に得られない貴重品であった。農村（註）では板ぎれをえぐっていくつかのくぼみをつけて皿とし、これに食物を移し、食後は熱湯をかけて洗い、蓋をして、仕舞いこんでいた。この点、早くから中国文化に影響された日本の農村に較べると原始に近いものであった。

（註）飛騨の山奥白川村にあった合掌作りの農家が、大阪府豊中市服部緑地内ユース・ホステルに隣接する民家聚落に移築されている。そこの台所にある木製の食器類が遠く離れたイギリス農家のその頃をしのばすものが多い。

ソマセット県（註）と、これと南西につづくデボン県とは当時農業労働者の供給源であった。他県に出かせぎする農夫も多く、そうした若い者の出入りから風紀も悪く道徳も低くなっていた。とはいっても、祖先から代々農業をもって立つ地方の古い伝統は、依然として根強いものであった。一方、イギリスの工業地帯では蒸気の発見と蒸気機関の発明によって、「産業革命」はすでに始まっており、強い波動は都市を中心に始まり、その影響は少しづつ農村地方にまで波及しつつあった。

(註)イギリスのうちイングランドは40県に分れ、そのうちのソマセット県の大きさはわが国の和歌山県ほどで19世紀末でも人口はすでに50万はあった。

父親のエーモスは、母親エリザーベスとの間に8人の男児をもうけた子福者であった。一家うち揃って代々家に伝わる限られた農地を耕し、また小規模の畜産に頼っていた。しかし、時には猟銃をひっさげて鹿や兎、狐やかわうそなどの狩猟に遠出する秋晴れの楽しい日もあったという。この父親は意志の強い、そして頑固な農夫であった半面、目先のきく人でもあった。イギリス農業の中心県ソマセットに住みついて農業に専念しながらも、農家の前途についてはもはや希望をつなぐことができえず、次から次に生まれる男の子たちの前途をうれえて見ては暗然としない訳にはゆかなかった。

父親に引きかえ、母親のエリザーベスは小柄な愛嬌のある婦人で、優しく明るい気性の持主、8人の兄弟と頑固な父との間をとりもち、家庭内に風波の立つようなことはさせなかった。また父のエーモスは、後年64歳の時にまむしに足を咬まれて死んだのであるが、夫に死別してからのエリザーベスは、息子たち夫婦や大勢の孫たちの中で、最後までアッシウエイに踏み止まり、人の世話には骨身を惜しまない婦人であった。

8人兄弟の末っ子として生れたジョージ・ウイリアムズは、こうした大家族の農家でどのような生活を送っていたのであろうか。彼は平凡な田舎者であったが、いくらか神経質で興奮し易い子であった。しかし、隣家にあそび友だちがあるわけでもなく、自分より年上の者にばかり取りまかれ、たえずその指図やいいつけを受けて行動させられていたに違いない。にも拘わらず、兄の言を借りれば「ジョージは機転のきいた明るい子で、誰とでも気安くし、良く話す健康な子だった」。これが後年にYMCAを創立した青年の心身に潜んでいて、ふさわしい性格に次第に成長していったことと思われる。それにしても環境的に今は単調そのもので、無刺激な田園生活を送っていたに過ぎないだろう。そうした中にあって幼い時分から農事を手伝い、朝は小径を伝ってバール川の向うの野らに牛や羊の群を追い、夕方には安全に彼らを連れ帰ったりすることを日課にしていたという。

こうした片田舎の百姓息子にも、いくらか単調を破る変化の機会がおとずれてきた。ジョージはやがて村にあるティムレット夫人の経営する小学校に入学し、毎朝、片道でも7キロの山道を通学したからである。

その後ティバートン町の公立中学校に進んだが、ここはダルバートンから20キロ離れた川下の町で、ジョージは始めてわが家を離れ、寄宿舎生活に入った。当時この学校の気風は粗野かつ乱暴であった。何分にも遠い道をわざわざ訪ねてくれる親兄弟も滅多になく、寂しい日々を送っていたが、ここで同年輩の友だちを得たことはジョージにとって大きな喜びであったろう。

父はなかなか学校を訪ねてくれなかったが、ある日、村の知人が父親の代理としてジョージを見舞ってくれた。そして、帰りがけに大枚一シリングの銀貨1枚を手に握らせてくれた。その事はここでの思い出のうち最大の喜びとして、一生涯忘れなかった。その心温い百姓の息子が、後年職を求めてジョージを頼りにロンドンに出て来た時、このことがあったためか親切に迎えてそのねがいどうり入店させ、後々までも親身の世話をしたということが伝えられている。

ダルバートンの村にも立派な教会があった。英国国教会（聖公会）の一つで、ウイリアムズ一族はそこに属していた。幼児洗礼を受けていたジョージも、母親や兄弟たちに連れられて6、7キロの山道をこの教会に通うのが常であった。司祭はスポーツマンであったから、教会の朝礼拝が終った後は、ジョージは他の少年たちと共に司祭に伴われ、村にある広場の芝生で午後のひと時を運動に興じた。教会は村の中心であったが、殊にスポーツやレクリエーションの中心で、村の運動会のトロフィーが教会堂の片隅に飾られていた。

当時の英国国教会の教勢はといえばひどく低調で、この司祭のような牧師はスポーティン・パーソンと呼ばれるほど、救霊運動よりも運動競技の方に熱心な教職が多かった。しかし、少年ジョージにとってはこうした教会の雰囲気は心ひかるる楽しいものであった。

19世紀前半のイギリスは英国教会だけに止まらず、広く宗教的にも社会的にもまた経済的にも頭打ちの時代で、農村の行詰りはその一例であった。農作物や穀類の価格の下落と、諸物価の騰貴と相まって、農村人口の増加による息詰るような靄が農家の上にただよっていた。新世界といわれたアメリカ大陸への大量移住も、実はその脱出口の一つであったろう。ウイリアムズ一家にとっても、その影響はかくしおおえなかった。殊に8人の息子たちの前途を思うと、一刻も早く何らかの手を打って、道を押し開く必要に迫られていた。兄のフレッドはすでに見切りをつけて商売に転じ、自村でささやかな呉服店を経営していた。この低迷した農家の課題がジョージ自身の将来を左右する問題として、夕食のあと、薄暗い石油ランプの下で語られていた。

その頃ジョージは13歳になっていた。そして、1834年にはティバートン中学校を卒業した。しばらく離れていた家業に戻って、一心に農夫として修業にいそしむ時がきた。彼もその気になり毎日よく野らに出て働らいた。

こうした中にも彼の心中には何かしら憧れがこびりついて離れなかった。それは中学校時代から積りだしていたもので、もっと広い世界への思慕とも、好奇心ともつかない心の動揺であった。今は心を新たにして兄たちと野ら仕事に日を過しているが、幾代にわたって耕やされ、植えられ、取入れられる昔ながらの耕土に、彼の手足、

それに心までもなじみつかないように感じられた。こうしたジョージの態度に親や兄たちが気づかないはずはなく、問題は農家の前途よりむしろ、ジョージ自身にあるように見えてきた。家族会議は結論の出ないまでも度数を重ねられていた。ところが一挙に断を下さなければならないような珍事が、その後1年余で突発してしまった。1836年の夏、ジョージ15歳の時である。

山と積まれた牧草の前に腰かけて、1台の荷馬車を馭してゆくジョージ少年はもう一かどの農夫に見えた。天気は悪くはなかったが、黒雲が向うの丘をおうて、にわか雨の襲来は間近いことを警告していた。風も出ていた。附近の農夫たちは嵐の来ない前にと家路を急いでいた。2頭の荷馬もまた気色ばんできた。独り無関心なものはジョージだけであった。

忽ちにして大粒の雨におそわれた。慌てふためいた少年は、暴走する馬を制御することもできずに、轍のくぼみに片輪を落しこみ、牧草の山と共々地べたに放りだされてしまった。この偶然の出来事によってすべては決定した。

ダルバートン村の兄フレッドにも早速決定的知らせがもたらされた。今は百姓の荒仕事には不適格として町に出される道が求められた。兄は早速50キロ東にあるブリッジ・ウォーター町のホームズ呉服店主に事情を訴え、引き取って貰う話しを成立させた。

1836年晩夏の或る夕暮、終日の旅で疲れ切ったその父と子とは、何がしかの手廻品を携えて大通角にある大呉服店の門辺に立った。2人はその日早朝明けやらぬ靄をついて農場を発ち、村の教会や小学校の前を通り、幾つかの石橋を渡って、デボン県境に横たわる広大な緑の牧場や赤土の果樹園の間を進み、土砂道の難路に荷馬車を駆り、この町へと急いだのである。

こうしてジョージ少年は耕土におさらばして故郷の農園を去った。そして、自然の土に育った祖先たちが、幾世代となく続けたように、黙って古い耕土にいどむはずの彼の若い心身を、繁華ではあるが、混沌とした人の世界に持ち込まねばならないことになった。丘や森、畑や牧場を覆った清浄な大気の中に育った心身は、幸いにして強健であった。ジョージ・ウイリアムズは84歳の長寿を通じてつながる人の世界への奉仕の一歩を、かくして踏みだしたのである。

後年、彼が機会ある毎に述懐したように「牧草の積荷と轍の跡に落ち込んだ車輪」のために、彼の人生行路は、若くしてこのように決定的に切換えさせられたのである。

2　霊の誕生地ブリッジ・ウォーター

「産業革命の動きはたけなわとなった。近代産業が興り、社会一般の生活状態が変革の一路をたどった。農村の昔の夢は破り去られて、都会の風潮が農家の窓辺にまで吹き込んできた……水呑百姓で一生を土に埋めるより、都会へ乗り出して、一旗挙げたいと、都会を目指す若者の流れがつづいた。ジョージ・ウイリアムズもこの波に乗せられて、田舎から流れ出た平凡な農村少年の一人に過ぎなかった。」

このように記されてはいるが、読者はこうした歴史の流れ以上のものをすでに感じとり、ジョージ少年の行く手を温く見守って下さると思う。

ジョージは15歳にしてブリッジ・ウォーターの人となり、徒弟として年期奉公をする身となった。ブレーク提督（エリザベス女王に仕え英国海軍を興した勇将）の銅像のある大通り角にあるホームズ呉服店は、小店員が27名もいる大店であった。当時、小店員たちは凡ゆる店の雑用事を当てがわれ、家族の一員として住み込み、朝起きてから夜寝るまで長時間の勤労を強いられていた。当時はどこの店でもそうした雇用関係にあったが、幸いにもここのホームズ呉服店主は親切な思いやりの深い人で、それに宗教的な雰囲気の豊かな店であった。彼は町のシオン教会（組合派）の常時出席者で、店規によって、店員もまた主人の属するこの教会の朝の礼拝に出席するよう、前もって雇用契約書に誓約させられていた。ジョージは家族ぐるみ英国国教会に属していたから、この契約に悩まされ、抗議することを母親に求め訴えたこともあったが、母親は朝は主人の教会に出た上で、午後その町の英国国教会に出席し、つぐなうようにすすめて抗議することを許さなかった。

「私は無鉄砲で思慮もなく、神も知らず、口汚い若者としてブリッジ・ウォーターに出てきた」と後年彼は告白している。しかし、その頃の職場に於ける少年店員の生活については詳しく知る由もないが、わかっている2、3の点に触れておこう。

徒弟修業の最初の2年間は決して楽ではなかった。最年少の新参者として、早朝から店の土間の掃除をすませ、雑用や走り使いなど何でも骨身惜しまず働かねば、その日はたたなかった。その上、商売上のこつを何から何まで教え込まれるのであるが、彼は仕事に興味と関心を感じているように見受けられた。しかも、陰日向なく店務に励み、仲間たちからも可愛がられた。カウンターに立働くことが目立って上達し、婦人客の応待が殊に上手になった。この田舎出の少年は生れながらの商売好きで、頭脳の働き、眼識のよさ、どうしてそうなのか説明がつかない程であった。彼はきびきびとして紅顔の少年で、小間物類に明るく、暇を見ては値段書や顧客名薄を作り、商売に関するメモの紙片を入れたポケットは、いつもふくれ上っていたといわれている。

その当時に出した手紙にこんなことがかかれている。

「私とはまるで違った考えの2人の仲間がいます。その話を聞いているうち、彼らは天国に行く人、私は地獄に

落ちる人間だと感じます。その考えは益々つのります。……しかしやっと祈るようになりました。」

彼によい影響を及ぼした2人が誰なのかは判らないが、そのころ同僚のW・ハーモンとトーマス、ジラード、ハリスの3人の娘たちがいた。中でもハーモンからは最も強く感化された。この青年は真面目で敬虔な半面、精力家で決断力の強い人であった。ジョージの心を引いたのは、彼との会話よりもそのきびきびした生活であった。またその親切と友情とには深く心をとらえられた。若い日の回心も彼に負うところが大きいだろうと思われる。

1837年の初冬、それはある日曜日の夕べ、ジョージ少年はシモン会堂の最後方席に座を占めていた。その時である、神の選びが彼の上に臨んだのは。彼はその選びを受けた。牧師はその前年教会に着任したエバン・ジェームズであった。彼は着任以来、町の青少年たちの間に宣教の働きを怠らなかった。その夕べの説教題が何であったか、また引照した聖句がどこであったか今は何らの記録も残っていない。また、説教者としてのジェームズ牧師は、とりたてていうほどの雄弁でも、また人に迫る説得力の持主でもなかった。この夕拝に於いてどうして神の選びの矢がこの徒弟少年のハートにつきささったかは誰にもわからない。

後年、ジョージ・ウイリアムズの霊の誕生地ブリッジ・ウォーター市にYMCAの会館が建った。この会館は主に彼の尽力によって、市の中心部のパレット河を見おろす橋の傍らに新築されたのであるが、建物の開館式に臨んだジョージ・ウイリアムズは次のように述懐している。

「人は初恋の人を容易に忘れないものです。私はここブリッジ・ウォーターの町で救い主イエス・キリストを愛することを始めて知りました。私は精神生活が人間にとって非常に重要なことをもまた始めて覚りました。私が最初にこの町で発見したことは、二つの道があるということでした。それは“下り道”と“上り道”です。その時まで私の歩いていた道は“下り道”の方でした。もしもそのまま進んでいったなら私は何処にゆきつき、またどうなるものか、と自問しました。私はその道を歩きながらも、ついに聖い“上り道”によじのぼり得たことを今神に感謝します。私の生涯を悪魔のとりこにする滅亡への道であることに気づいて、のがれるすべはないのだろうか、のがれおおせる救いの道はないのだろうかと悩んでいた時、この町でのがれるすべを知らされたのです。それは罪を悔い改めてキリストの十字架に従い、神を信じて己れをまかせまつることであることをついに悟ったのです。……」

その日曜日の夕礼拝を契機としてジョージ少年には大きな転換が起りだした。会堂から戻った彼はすぐさま店の裏で膝まづいて祈り、神に彼の心身のすべてをまかせた。彼の生活はその日から全く変っていった。

その年も暮れて1838年を迎えた。彼は来る日曜日も、来る日曜日も待ちかまえてかかさず教会に出席した。また聖書の研究や祈祷会にも参加し、信徒として公に諮問される準備を怠らなかった。そして、2月14日の日曜日、教会二大礼典が行われた際に「信仰告白」をすることを許されて、正式に組合基督教会々員として認められた。彼が郷里ダルバートンの聖公会で幼児洗礼を受けてからちょうど16年目で、彼16歳の時であった。

同年3月下旬、シモン組合教会の総会が開かれた時、彼は早速出席した。執事選挙が行われる際には、その動議の一つに賛成人となって議案の成立に一役を果したとの記録がある。このことから察するに、今日の高校生の年齢にしてはジョージがどんなにか熱心に教会活動に参加しだしたかが判る。またその直後、店内で祈祷会を始めることを発起している。更に友人の父親が指導するバイブル・クラスを始め、日曜学校を手伝うなど、彼が入信後の教会と職場に於ける熱心な信仰的活動のほどが伺われる。

受洗、入信時代の若い人たちには今でもよくあるが、彼は聖書にある誡め「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」（マタイによる福音書19・19）との聖句に強く心をうたれていた。彼は彼ながらに、そのために自分の欲望にうちかって、人の為に尽さねばならないことを悟り、日常善事に励むことを決意した。その頃、この16歳の少年の日誌には「それはどんなに少くではない、どんなに多く人のために尽すかにかかっている」と思った通りを書き残されてある。それだのにこの事が彼が84歳に達するまで、生涯を通じて座右の銘としたモットーとなったのも興味深いことである。

〔備考〕YMCA少年事業の大先輩E・M・ロビンソン主事は、1947年の12月スプリングフイルド市の病床で著者に語った。「YMCA少年事業の発端は遠く1836年ブリッジ・ウォーターにさかのぼる」と。彼の少年事業を着想したアイディアの動機はたしかにそうであろうことがうなずかれる。

先にジョージ・ウイリアムズの「霊の誕生地」はブリッジ・ウォーターであると書いたが、彼の「霊の故郷」は職場であったともいえよう。商家という普通ありふれた環境の中で、静かでしかも強く生き抜くキリスト者の生活を送ったという記憶は、この故郷に属し、生涯を通じ時と場所は変っても常に彼に連れそって離れなかったからである。旧い地につく生活に終止符を打ち、新しい天につく生活に入る転換の時と、場所についてはっきり意識できる人は幸いである。彼もその幸いを受けた一人であったが、彼の心に主キリストを宿らせるきっかけとなったものは、第一に、同僚クリスチャンたちの言葉ではなく生活であった。彼はこのことを生涯忘れ得なかった。

次に、彼をクリスチャンに育てあげた霊的父親たちは誰であっただろうか。第一には、名声もなく、とりたてていうほどの天性に恵まれた人でもないと思われる牧師エバン・ジェームズである。荒廃に近い地方に留まって教会を守り抜き、老若の信徒を牧しながら、こつこつと

して道を説いたこの牧師によって彼は救われた。彼はこの田舎牧師の朽ちない冠につけられた宝玉であっただろう。後年、富と栄誉を与えられた後、どこにいっても清貧の牧師を助け励ますことを何よりの喜びとしたのは、こうした若き日の体験に帰することができよう。

この次に登場する人物は、アメリカの大伝道者チャールス・G・フィンニィである。彼は当時国内のみならず国外にまで福音伝道の活動を広げた人で、D・L・ムーディ（1837－99）と共に著名である。フィンニィがその後第2回伝道大会をロンドンでくり広げた時、ジョージ・ウイリアムズもすでにロンドンにおって参加したが、若き日にこの人の驚異すべき人格に打たれたのはその著書を通じてであった。すなわち『信仰告白したキリスト者への講座』と『信仰復興講演集』（1837年初版）である。

ジョージ・ウイリアムズは、学究の徒でも、読書家でもなかったから、批判や教義の詳論によって関心をかき立てられるはずがない。詩歌や神秘論議もまた彼にはなかった。只実際的宗教が、それのみが彼の心を捉え、一たんこうと決まればどんな質問にも煩わされず、どんな疑問にもためらわなかった。もっとも彼の性質は自己満足家ではなく彼の本心は頗る柔軟であった。また、「力を尽し精神をつくし、心ばせを尽して」すべての事にあたるタイプの実行家であった。

祈り、祈り、祈る、これこそフィンニィの信仰の立つ大磐石であった。彼もその影響を受けて「祈りの人」となった。フィンニィはまた目的を以て祈ることを教えた。漠とした祈りは何のお役にも立たないとさえいった。彼はたえずひざまずいて祈るために、駱駝のひざのようにこぶができていた。

フィンニィはまた実際家でもあった。商売するにも、それを信仰生活の一部となし得ない信仰は、神に仕えることのできない者だと教えた。救いに導く道にも常識がいるともいった。例えば「人の機嫌の良い時こそその人を捉えよ」とフィンニィはいう。こうした説話も彼に影響した。フィンニィはまた個々人に重い責任を課することに倦まなかった。彼に言わせると「救霊活動は信徒の地上生活に於ける第一のビジネスで、この義務を果さないのは生きている甲斐性のない者だ」と戒めた。ジョージは入信以来「生くるは主のため」とばかり、相会う人々を時を得ても、得ないでも、また異分子であってもキリストに導こうとした。これがフィンニィの信条でもあった。

フィンニィの常識論にもひどい偏狭心があった。彼はあらゆる歓楽を否定し、お茶やコーヒーを飲むことまで罪とした。この世の人たちが地獄に陥ろうとしている時、教会が茶の会に金を費すことは恐るべき罪だと叫んだ。小説やダンスやパーティに時を空費することはもちろん、新年を祝うこともクリスマスですらも彼の攻撃の矢面に立たされた。

このような狭量な主張もまたジョージに深い影響を及ぼさずにはおかなかった。万一にもフィンニィが唯一の指導者であったならばジョージのような人物は形成されなかったろう。またYMCAも生れなかったように思われる。しかし、幸いにして今一人第三の霊の父親にめぐり会った。それはジョージが後年ロンドンで会うことになるトーマス・ビンニィ牧師である。このことは後に記すとしよう。

3　ロンドンに出た一青年

1841年、ジョージ・ウイリアムズは19歳の青年となり、ブリッジ・ウォーターで送った5年間の年期奉公をおえてそこを去る時がきた。

先に農村に見限りをつけた兄のフレッド・ウイリアムズは、その郷里ダルバートンからロンドンに出て、ヒッチコック・ロジャーズ商会に暫らく雇われた。弟の徒弟時代には帰県して、ブリッジ・ウォーター近在の北ペザートンに呉服商を始めていた。そこでジョージはひとまずこの兄の店を手伝うことになり、近村の日曜学校をも助けた。

半年後、同年の秋10月、ジョージが20歳の誕生を迎えた時、季節ものの仕入れのため上京する兄に伴われ、東に250キロ離れたロンドンを始めて訪ねた。兄は旧主人ヒッチコックに弟ジョージを紹介し雇い入れ方を懇請した。旧主人は言下に「ノー」と答えた。「空席がないし、この子は小さすぎる」。兄は同じ事を熱心に歎願した。その甲斐あってか主人の気持も折れた。「まあ、そうまで言うのなら明朝もう一度きてごらん。何とか考えて置こう」と言った。

翌朝再び訪ねてふるえながら回答如何と待った時、「よろしい、お前は達者な若者らしい、ひとつ見習いにして見よう」との声がジョージの胸をおどらせた。こうして同商会の一員として働らく身となり、年40ポンドの初任給を受けた。

店主ヒッチコックはエキゼター市の徒弟出身者で、ロンドンに来て働らいた末、ロジャーズと組み、セント・ポール寺院横で、ヒツチコック・ロジャーズ商会を開店した。

共同経営者は早く引退したが、同店は婦人向きの呉服店として繁昌し、創立10年後には140人の店員をかかえる程に発展した。婦人装身具店、仕立屋、地方の服地屋が品物の豊富なことと、格安に布地を切断して売るところから仕入れに来るので半卸売も盛んであった。また絹物とショールとに特色があり、著名な高級店となっていた。

営業時間は、夏季7時から夜の9時まで14時間、冬季は短く8時に閉店した。日曜日は全休で新来の店員はすべて教会出席を求められた。見習いは即時解雇を承知の上で

約束させられていた。若い店員は揃いの黒服に白のネクタイという清そな姿をしていた。都内で最も進歩的な店と言われていたが、それでも住み込みで、階上の宿舎には小さい部屋でも数個の寝台があり1台に2人が寝ていたという。

徒弟は10時半、店員は11時が消灯時間で、その後に監視人が巡回した。彼が帰るや否や再びランプは点され卑猥な無駄話に夜を過すものが多かった。11枚ある扉の最後の1枚がぴしゃりとしまる前に店内に入らない者は翌朝その名を報告される。聖ポーロ寺院の時鐘は長々と余韻を引いて、わざとらしく帰店時間の近づきを警告するのだが、運命の時間間際に遅れじとあわてて広場を走る若者たちのおかしな姿も多かった。

ここの教会の大がらんを再建したサー・クリストファー・レンが工事事務所に使ったところは有名なバー「我鳥格子」になっていた。「ヒッチコック横丁の悲しいとげ」と店員たちに名づけられたところで、そこに引っかかって一杯飲まねば通り過ぎ切れない店員が多かった。また2、3の部屋は不幸にもそのちょうど真下にバーを見下す窓があって、そこにいる若者はかねて示し合わせていたので、口笛の合図によって、長靴の中にはビール瓶の幾本かが入れられするすると窓の中へ消えていった。

さて、この田舎出のジョージ青年はロンドンに着いて以来、このような環境の下に置かれていた。しかし、自分の職業については取立てていう程の大志を立てていたとは思われない。数年後かつてはたらいていたホームズ呉服店がたまたま売り立てられた時、一時は霊の誕生地ブリッジ・ウォーターに帰り、主イエス・キリストのためこれを買い入れようかとさえ真剣に考えたこともあった。しかし、そこの旧友から、決して田舎の呉服屋にはなるなと言葉を尽して引き止められたので結局やめてしまった。今から思って見ても彼がロンドンに出ることを決心した理由は、大都会ではキリストのために働く、より広い機会と、より大きな世界とがあるとの希望と確信に基づくもので、自分の地位の向上にあったのではないことに疑いがない。

実は彼が回心して数ヵ月の後、ブリッジ・ウォーターの店に対する考え方はすっかり一変させられていた。その後、ロンドンに出た頃には、もはやその店で一人の青年がキリスト者であることさえも不可能事となっていた。また3年後にはそれ以上に動きのとれないことになり、店も売られる破目に陥ったのである。これより先、兄の家にいたころ、自分らが始めたあの祈祷会も聖書研究会もすっかり気の抜けたものと化したことを聞いた時、パイオニア（先駆者）としての彼の熱情は彼の心をさいなんだ。しかし、彼はより大きな征服を探求した。その時ロンドンからの召命を感受した。彼はより広い機会と、より熱烈な主の御業のために祈り、主キリストは都会の中の都会への道を備え給うたのである。彼の全生涯を通じてすべてのものが与えられたが、この青年がひたむきに追求したものは、富でも名誉でも成功の喜びでもなく、実に「神の国と神の義」であった。

ところが、そのロンドンも現実にはキリスト者青年にとって手ごわい場所となっていた。その頃のロンドンは人生の戦いにおいて、最も恐るべきものと、最も輝やかしいものとを象徴していた。すべて、善い事もまた悪い事も極端に拡大されるところであった。彼がその体験を通じて、「最初の24時間で一青年の生活が悪に転落するか善を保持するかを決定する」と語ったのは正に至言である。そこには中道は存在しなかった。今日の世界は異っているが、当時、中途半端な立場の存在はなく「善か、然らざれば悪か」の二者択一、そのいずれかを選ばねばならなかった。

サー・ウォルター・ビサントが指摘するように、18世紀は1837年に至って漸く終ったといわれる。世界始まっていらい、最大の革命すなわち産業革命のあけぼの、それは18世紀からの懸案の解決、近代ルネッサンスの朝光がまばゆく現われて来た年である。そうはいうものの未だ初期で、光はロンドン片すみの暗黒には達していなかった。例えば、町の小店員たちは殆ど奴隷の域から脱却してはいなかった。今日では44時間制短縮の採用さえ一般に既定の事実であるが、当時はまだべったりと住み込み制を布き、健康や道徳面の考慮は全く無視されていた事はすでに誌した通りである。

ちょうどジョージ・ウイリアムズがロンドンに着いた1841年頃には、都内呉服店主協会が設けられ、「閉店時間の繰上げ運動」が発足していた。協会は賞金づきで、「現在の長時間営業のおよぼす一般的弊害に関し、特に呉服店員の道徳的、知的、肉体的におよぼす影響如何について」論文を募集した。応募論文集は翌42年刊行されたが、その中に引用された事例はジョージ自身もまた体験させられたところであろう。ヒッチコックの店でさえも長時間勤務は事実であったが、他の多くの店では1日に17時間の就業も行われていて、単なる伝説ではなかった。殊に日曜を控えた土曜日は、明日の聖日を愚ろうするかのように閉店がおくれ、午前1時、2時におよんで就寝する状態であった。

食堂は地下の台所が当てられ、休憩室もなく、食後の休みは3食とおやつをあわせてやっと半時間で、そのほかは持場を離れることさえできず、寝室は狭く、通風は悪く、運動や勉強の時間もなく、その日の新聞に目を通すこともなかった。まして彼らの霊魂の問題をかえりみるものは誰もあるはずはなかった。当時、15万の小店員が、ロンドンにいた。彼らもレクリエーションを求めることは今日にくらべて変りがあろうはずもないのに、それを満たす手近い場所も、まとまった時間もなかった。自然、余暇時間が出ればバーに走って強烈な酒に心身を焼き、

不道徳に身体をゆだねるだけであった。

産業革命に伴って一般の商業方面にも変革がもたらされた。店員の新規採用は烈しくなり、また反面、即時解雇の条件で雇用が約束された。そこで、人材は玉石混交で、悪玉は善玉を駆逐し、商業道徳は自然に低下していった。ロンドンの店員たちほど堕落し、不信仰に陥った者はなかったといわれている。今日では、青少年が邪道に踏み込むのには幾つかの関門を通らねばならないのに、当時は逆で、雇い主に売り渡さなかった寸刻の時をつかって善に志ざすことは、非常な努力を払ってさがし求めなければならなかった。

YMCAが孤々の声を挙げたのはこうした社会状況の下においてであった。独りYMCAのみに限られない。世界の首都としてのロンドンの生活実態がこのように低い水準にあったがために、多くの識者が黎明を求めていろいろの運動を起したのは事実であるが、YMCAだけは青年自身の中から生れ出たのであった。

もう一つ加えて置きたいことは、これらの暗い半面と共に、青年にとっては栄達や成功の道が常に開けていたことも事実である。一握りの手金をもって千金をつかみ取り、また、堅忍不抜の志望と困苦精励の努力の結果が直ちに富を実らす事もあり、幻を見た青年がその実現のために戦うことのできた時代であった。

4　仕事と生活に取っ組む人

1843年新春の聖日、ジョージ・ウイリアムズの日誌には次のように記されている。

「7時15分、ウッド・ブリッジの祈祷会に出席、9時からはわれらの祈祷会に出る。ビンニィ牧師の説教を聞く、今日は聖餐に列した。午後は引続きウエイ・ハウスの日曜学校を手伝う。4時半全部終了、商会の茶の会に出る。われらの祈祷会を開く、再びチャペルの夕拝でビンニィ師の説教を聞く、……良い一日であった。」

これは驚くべき精励さである。しかし、年始における日曜日の記録と思えば、この青年の宗教心の深さを計る尺度とはならないかも知れない。また、1週1回の敬虔さなら多くの人が示してくれる。しかし、以下誌すところを幸にして熟読していただくなら、やはり彼が熱誠さにおいて非凡な青年であった事に同意しないではおられないであろう。その上、彼の活動には底力がこもり、その頭脳や肉体も正に疲れを見せない非凡さをもっていたことが、随所にうかがい知られるのである。

ここで再びジョージの信仰上の第3の父親トーマス・ビンニィ牧師を登場させたい。彼はロンドンの有名なウエイ・ハウスの牧師で、彼の講壇はロンドンにおいて道徳的に最も影響力をもち、また最も多くの会衆を引きつけていた。彼は背高くやせ型で、演台の後に直立し何らの原稿も用いず、只手に持った一巻の小型聖書を顔に近づけながら、とうとうと流れる水のような雄弁をもって会衆を圧し去り、また魅了し尽した。会衆は大部分男性であった。彼の説教と教訓は、フィンニィの熱烈な信仰をロンドンにいる青年たちの現実生活にまで透徹させていた。彼は人生の戦いに勝利と堅実とを確保させずにはおかない迫力を示したが、常に青年の渇仰と希望、知的、道義的努力に対して心から同情的であった。彼はまた宗教問題に対する切実な教訓をたれ、当時のまがった商業慣習などを叱責し、偽善を憎んだ。また、人格の尊厳を説き、隣人への愛と奉仕とを強調し、動機と目的の純化と合一を説いた。

彼の影響によってジョージ・ウイリアムズは最後まで信仰においては厳格な福音主義の遵奉者となり、積極的かつ真摯であった。また、心は広く、常に慈悲と同情と親切の衣をまとっていた。しかし、なまのままのカルビン主義からはYMCAは起らず、また只の慈悲や同情からはYMCAは生れて来なかっただろう。フィンニィによって荒けずりされたものが、ビンニィによって仕上げられ、これらのすべてが彼の中にあって渾然として錬り上げられだからこそ、遂にYMCAがそこに生成されるに至ったのではないだろうか。

さて、先にも記したようにウエイ・ハウスに通いだして以来、ずっと日曜学校を助けていた彼は、この頃は午後の時間に貧民街を訪ねて礼拝を開いていた。彼の教友となったクリーズ青年は、ロンドンに来た最初の日に早速ジョージに伴われて、その貧民街を訪ねた時の印象深い体験をこう記している。——

「ジョージは真直ぐにかけられた梯子段を猫のように昇っていった。私は躊躇して後の方で待っていた。屋根裏では子供の声がした。母親が要心しながら少し扉を開いてのぞくと、彼はすかさず足をその隙に踏み入れて、子供はいないかと尋ねた。暫く話し合った末、私たちはとうとう内に迎え入れられた。母親とその子をやさしく説きふせ、次週日曜日には必らず日曜学校に来るように約束させ、彼が迎えにくることを告げていた。そこを下りて次の部屋の扉を叩くと早速、“はいれ！”と荒々しい声の応答があった。中では4人の荒くれたアイルランド人の男たちが、車座になってカード遊びの最中であった。彼は何の怖れもなくたけだけしく彼らの行為を叱った。“これでも朝の礼拝には出席したんだ”という抗弁にも耳をかさずにとうとう説き伏せてやめさせてしまった。彼は屋根裏の親子たちにはやさしくして、このように安息日を破る男たちには獅子のように猛然として突撃した。」

次に数週間後の日誌を紹介しよう、——

「6時48分起床、店の2号室で聖書を読み祈祷会をする。礼拝ではシャマン氏の説教“恵み深きわが避け所”を聞く、午後はダービー通りの日曜学校に行く。後でじゅう

たんの展覧会を見る。再び2号室の祈祷会に帰る。夜はブルーク通りの教会でスミス氏の説教を聞く。」

その後にはその頃礼拝に伴った青年たちの名前を表として書き添え、最後には「……甚だこの日を楽しむ」と結んでいる。1843年の初め彼はウエイ・ハウス日曜学校の書記となった。

その年の12月になると、ウエスト・ミンスター区の家鴨小路というあたりを訪ね、ローソクの燭火を手にして宿舎を廻り、呼びだした会衆を集めて福音を説いた。こうしたいろいろの宗教活動に参加したため、時にはウエイ・ハウスの礼拝に出席することができない日もあった。数ヵ月後の日記には「午前をダービー通り、午後はウェイ・ハウス、夕方にはジャーストン通の各日曜学校に働いた」ことが誌され、いつもながら子供たちに対する活動を助けている。

しかし、時がたつと共にそうした活動から次第に店内の同僚青年たちの祈祷会や聖書研究会に集中され、やがてはYMCA活動に綜合されていくのである。また、月日がたつにつれ業務上の責任は加重し、その上結婚し家庭を作り、家族も増加していくのであるが、彼の日曜日のプログラムはそうしたことに妨たげられず、終始、精励そのものであった。後半生における彼の宗教の特色はと言えば、たゆむことのない楽天主義と明朗さで貫かれ、いかにも失望することを知らぬ人とさえ思われた。ロンドンが来る日も来る日も深い霧のベールに包まれている時、彼の事務所だけは陽光に照らされたように明るかったといわれる。

やがてはこのような人物に錬達した彼であったが、22歳の青年としては他の青年たち同様に悩みの時があった。これは彼の性格的ではなく、宗教的に真剣な内省があったからである。「暗い1週間、多くの嘆かわしい事が起った。旧約聖書の預言とその成就について深く学ぶ」とか、「悩みの1週間、霊的に暗黒の日が続く、神への奉仕を怠る。祈り難し……」など真摯な青年の姿が日記の中に見える。

さて、ジョージは歌に自信がないので、エキゼター・ホールに通い、レッスンを取ることに決めた。声楽練習は相当の時間をとり、時に仕事の邪魔になることを恐れたが、進歩はすばらしく「雲雀よりはましになった」と喜んでいる。人生における音楽の重要性と価値とを高く評価していたのである。また雄弁と話し方の講習会にも参加した。これが上達すればキリストのため貢献することができると思ったからである。彼は友と語りながら郊外を散策するのを最も好んだ。一人いることを好まない青年であったせいか、その人柄がそうさせるのか、周囲にいつも朋友が集まり、外出のときも連れがあった。

時たま郷里から上京する親族でもあれば、市内を案内し、有名なマダム・タッソウのロウ人形の陳列館や展覧会、講演会に連れ出した。

上京いらい休暇で数回ソマセットに帰郷したが、農園の兄たちはこの青年の信仰の在り方に鋭い批判を加えた。「家族伝道の困難さをつくづく感じた」と日記にも認めている。それでも、しばしば一人一人を思って祈り、また手紙を出して信仰上の奨励をした。またその反響を読むことが何よりの楽しみで、数名の回心者を得ている。彼の最愛の母だけは常にジョージに同調してくれたが、母と一人の兄を連れ出して滞在中殆ど毎日教会の諸集会に出席し、また親族を訪ねては祈祷会をひらいた。近親者の救いも彼の念願であった。また、その頃タルバートン村にも進出してきていた組合教会のプール師に伴われて、附近の村々に伝道文書を配り、伝道を助け、子供たちの集会も催したという。

彼は自らの信仰生活に励みつつも、このように常に隣人への伝道を怠らなかった。そして職場における多忙な一日から階上の宿舎に帰ると、何人かの知人のことを思い、祈り、かつ手紙を書くことを日課とした。日記の中にはそうした人々の関係だけでも100人あまりの名前が見出される。これは20代の一青年にしては驚くべき熱誠の現われではないだろうか。これらのことはすべてYMCAが創立される以前のことである。しかし、その後も変らない良い習慣として貫かれた。これは彼の実践的信仰の一面を雄弁に物語る証拠である。

もしもジョージ・ウイリアムズの生涯が何らかのメッセージをもち、彼の生涯の事業であるYMCAが恒久的メッセージをもっているとすれば、生活と事業の両面で確固とした実践的信仰の実現性を示さねばならない。まず、このキリスト者青年の宗教心の誠実性と熱情とは疑う余地はないが、なまやさしいものでないこの世の煩わしさの中で、職業的生活とそれとをどのように調和させることができたかが問題である。彼は初めから抜目のない商売上手な青年であったと共に、仕事に熱中して担当部門の売上高の上り下りには人一倍関心を払う真剣な店員でもあった。彼は日記にその日の商売について「今日の出来合いよし」とか「まあまあ」とか「商売上々」などと誌している。あるいは「今日一日の売上32ポンド」とも書いている。時には委託された問屋筋からの買い入れに苦心する余り冥想も祈祷もできないほど悩んだ日もあった。

店主ヒッチコックとの関係は今日考えられる程度よりはもっと親しいもので、店主は一家の父のような存在であった。22歳の時に彼と直接話し合う機会があって大いに喜んだことや、また咽喉炎の手当を細かく教えられたことなどは、今日の人には驚ろきかも知れない。1843年、郷里の旅から店に戻るとカシミヤ部に廻わされた。勤務時間は依然として長かったが、その年の11月からは始めて7時閉店に変った。月給も昇給した。「私はこの金を自分の消費のために用いないで、神の栄光のために献げよう、店主は私に対し非常な信頼の情を示された。ますます信仰を深めねばならない」と記している。この頃、彼

は収入の3分の2をキリストのために献げていた。

1844年7月と言えばYMCAが彼と友人11人とによって創立された翌月であるが、この月22歳の彼は抜てきされた。その日記には青年らしい心のさまが典型的に記されているからここに引用する。——

「ヒッチコック氏は呉服部の仕入係になるように私に考慮を求められた。神様、あなたの新しい葡萄畑が眼前に今開かれようとしています。あなたは私をこの所に導き今に至るまで守り給うた。今私はあなたの指示を求めます。もしみ心なればヒッチコック氏をして私を任命させて下さい。み心ならずば彼の心を他に転じて思い止まらせて下さい。私はあなたのみ名の崇められんことのほか名誉も富も栄華も求めません。おお神様、どうぞ私の叫びをきき給え。イエスのみ名によりて祈ります……、主よ、私の耳べに“それこそ行く道だ、その道を進め”とのみ声を聞きうるものとなさせ給え。……もしみ心に添うものなら、聖なる父よ、あなたの行かしめたもう道を私がとっているとのみ示しを私にも得させて下さい。」

このような祈りがくり返えされていることは、彼がどんなに真剣に神と語ったかがうかがわれる。そして日記の中には、このような新らしい地位が彼を必ず直面させるであろう幾つかの困難についてまとめ、また担当部門を成功に導くために是非とも必要な仕事上の資格として「男らしい決断、判断力、眼識、在庫品の知識」を挙げ、担うべき責任に深い考慮を払っている。店主は翌日になっても彼のためを思ってか、はっきりと決定を下さなかったから、彼も進退未決定のまま悩んだが、店内の兄弟たち一同から励ましを与えられて、彼らの祈りによって必ず成功すると感じ、ついに心中深く受諾を決意した。「然り、天より授かる知恵があれば私は失敗しようとしても失敗することができない。」

彼の同輩店員中にはこの目覚ましい成功ぶりをうらやむ理由もあったし、また厳しい批判の目で見る人もあっただろう。しかし、同輩のうけは良かったと思われる。日頃、事によっては彼らと行動を共にしない場合もあったが、誰彼の区別なく同輩には心から援助する人であった。誰でも困った時に話をもち込む先は第一に彼であった。キリスト者でしかも商売上手な彼には人を引きつける何ものかが備わっていた。彼の誠実と公正とが、日頃から深い感銘を与えていたからである。

7月18日、彼はヒッチコックの会計室に招かれ正式に仕入係に任命された。翌朝初めて市場に顔を出したが、自分が商売だけで手一杯になり、他のことに心をうつす余裕のないことを嘆いている。しかし、彼はなお誌す——

「自分の目的は何であるか、金か名誉か地位か栄華か安楽か。金が何だ、金で満足させられるものか。名誉が何だ、すでに神の子とされ、朽ちない世継ぎとなる印しを受けた栄えには較べられないではないか。……」

そういう仕事の責任が増加するにつれて次第に試錬にとり巻かれ、誘惑は厳しく迫ってきた。彼は見せかけの偽りや、誇張に陥ることを最も怖れた。彼はまた祈る「神よ、この過ちより私を遠ざけ、終りまで守って下さい。私の記憶を強くして下さい。私が取引する時、ヒッチコック氏が私の側におられる時と同じようにさせて下さい。すべてのことに良心的であらせて下さい。神よ、あなたの知恵と力によりすべてが正されるように、より謙虚に、忍耐強く、判断を誤らず、正しい道に歩ませて下さい。」

この頃、彼は自分の健たんに悩みを感じだした。これは伝道者フィンニィの感化であったのではない。ただ神の宮としての身体の保健上から強く過食を戒しめ、それを青年の最も陥り易い罪としていたからである。ある時は日記にメニューを記録して注意を払ったこともある。また、予定の量を超過した時には、金6ペンスを伝道のため積み立てる約束をして、食欲にうち勝つように努力した。

彼の商売熱心も一層高まってきた。1845年（YMCAの第2年目）には、部門の売上げは半期3,800ポンドを上まわった。彼の信仰からすれば、キリスト教によっても決して商売熱心は鈍らされず、また働く能力も弱められないと信じていた。この世の神々と彼の仕える唯一神との闘いに対する自意識は強かったが、キリストによって教えられたように人生を生活していくことの可能性を一瞬間も疑わなかったし、また、一方では立派にバランス・シートを作るために果すべき業務上の仕事をちゅうちょなく実行した。

商人としても社会的方面の義務も果すことを心得ていた。商道や取引上のあらゆる改善をはかったのみならず、彼の名が常に伝道事業に連ねられたように労務改善運動でも指導者の一人であった。「閉店時間繰上げ運動」は勤務時間の短縮と能率化に好成績を挙げたが、彼の支持に負うところ多く、後年経営者側に立った彼の打出す範例によって著しく改善されたという。かつて、ロンドンに出た頃はこの運動の初期で友人のバレンタインと共に呉服商の最初の大会に出席したこともある。

14歳から徒弟となった彼には、勤務後、身体は疲労し尽して、精神が弛緩してしまうことがどんなことであるかを体験し、それが霊の弱さに大きく影響することを知っていた。彼はまた、自主独立の精神が人間に与える価値を尊重せずにはおれなかった。後進の青少年にこの過ちを繰り返えさすことを恐れて、社会的、肉体的生活のために勤務を適度に軽減するように、あらゆる努力を惜しまなかった人である。

最後に再び日記を引用する、——

「仕事における私の務めは何だろう。正しくあること、人と人との間にあって正しい事をすること、正直に仕入れること、欺したり、ごまかしたり、見せかけたりしないこと。」

「部下に対する私の務めは何だろう。親切に忍耐して彼

らの心をとらえ、かつこれを尊重しなければならない。たとえ失策がわかっても皆の前でなく相手を陰によんで言い聞かせることである……お前はその人たちに自分の誠実さをわからせているか。私の行いは他の人と異なり彼らより一層親切で辛抱強いだろうか。誰かが私のために神への不信を抱いてはいないだろうか。」

「何ととるに足りない私の生活であっただろう。私を今あらしめ給うた神が、その中に神の栄光を現わそうと、知恵と力を与えて下さることを感ずべきであったのに。信仰を強めて下さい。疑いや怖れがあってよいものか。然り、神の御助けによってもはや怖れまい、疑うまい。私は仕事について正しく聖く、キリストの御ためにそれを用いねばならない。主よ、あなたは金を与え給うた。それをもってみ心を行う者とならせて下さい。それをあなたのために用い、正しく用いる知恵を求める者とさせて下さい。」

ジョージ・ウイリアムズは神と金とに兼ね仕えようとはしなかった。

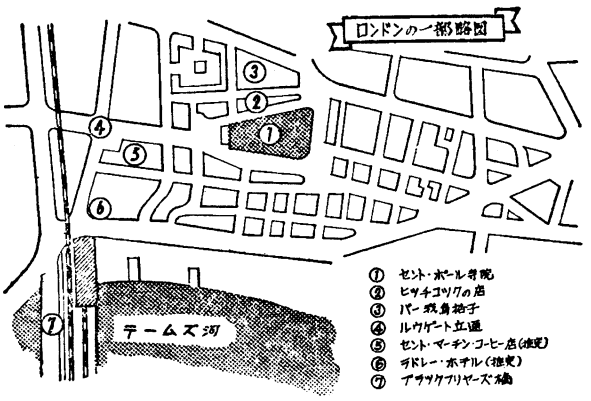
彼は神に仕え、そして金を彼に仕えさせた。

5　友を得て、共にはたらく青年たち

ロンドンの中心地、セント・ポール寺院の境内と呼ばれる一隅にヒッチコック・ウイリアムズ商会があった。その階上に一つの部屋がある。1928年のある寒い日、私は同商会を訪ねた。その小さい部屋に案内された時の感激を今も忘れることができない。それは前年私がアメリカを訪ね、国際ワイズメンの人々と会い、日本も初めてこれに参加することを約束しての帰路であった。それから27年の星霜が過ぎて、YMCAの世界大会と世界ワイズメン大会とがパリで開かれた際、1955年9月5日、再び日本のワイズメンたちを伴ってそこを訪ねたが、不幸にも第2次大戦(1940年12月29日)のロンドン空襲で、商会の建物は跡形もなく、その部屋もろとも地上から消え去っていた。この部屋こそ、祈りの部屋、YMCA創立の場所であったのである。

ジョージ・ウイリアムズがヒッチコックの小店員になってから、最初の関心は同信の友を得ることであった。140人の小店員中から漸くにして見つけた1人は向い側の寝室にいた。このクリスチャン青年と今1人の未信者の青年の3人とで最初の祈祷会を彼の寝室でひらいた。1人ではなく2人が心を合せ、1人の未信者を加えて始めたこの祈祷会が、YMCAのできるほんとに素朴な発端となった事を深く心に留めておきたい。

この祈祷会は永続し、また成長した。翌日には1人そして年末までには9人が増し加わった。みな祈祷会でマーク



ロンドンのセントポール寺院附近略図

され「キリストを受け入れた」青年たちである。店内の同志は次第に糾合され、翌年6月末の金曜日からは朝6時半に定例祈祷会が1号室に発足した。1ヶ月後には20人が常時出席者となった。9月から店員中の勉強家C・W・スミスによる「聖書の集い」も始まり25人が加わった。1843年末には27人の祈祷グループへと次第に発展していった。

先にも引用した伝道者フィンニィの2冊の著書がこのグループに紹介された結果、まず青年伝道協会が組織され、救霊運動が店内で発足した。毎回2、3の名前が挙げられて祈りは集中し、参加する者は毎月増し加わっていった。激しい信仰と熱誠が伴って、この運動は全店を揺り動かした。

ところが、一方には反対者も現われてきた。ジョージは青年にしては稀に見る機略に恵まれていた。彼が後年言っている「人を捉えるには議論を止めて飯を食え」との実践哲学を地でいく事例がその時に起った。反対グループの指導者と目される青年がいたが、彼の地位は高くて近よれなかった。信仰グループに転向する者がいると「追つけその馬鹿げた事をお前から追放してやる」と一発喰らわせるのが常であった。その青年は、例のバー「我鳥格子」で土曜日夜に催される「グーダラ会」の会長格で、反対運動が激化してきた頃には当然彼は信仰グループにマークされていた。しかし、集中した祈りも何の効果をも現わさず、かえって彼の敵意をそそっていた。そこでグループの夕べの集会で衆知が求められたが、良い知恵はでてこなかった。結局——

「何か彼の好物はないものだろうか?」、ジョージがいったとき

「ある、ある、かきが大好きだぞ!」とグループの1人が叫んだ

「よし、それならかき料理をおごろう!」

「誰か、呼び出しをかけてくれるかい?」

選び出された1人の好人物がある日、何気ない気でグーダラ会長をさそって見た。信仰グループがこんな「かき料理会」をやりだしたことは、彼の興味をそそるのに十分で、彼は胸を叩いて「よし、いってやる」と受諾した。

その晩は素晴らしく楽しい一夕であった。ジョージの口止めで一言も問題に触れる者はなかったが、この反対派の頭目も、思った程の「わからずや」でない信仰グループに対し、少々心を許してしまった。その後、彼はついに集会に出席したがその成行きについてはE・バレンタインの44年5月某日の日記に譲ろう——

「この日ジョージが来て曰く、今日は特別な事が起るだろうと……。ロジャーズという青年は霊の救いについて真剣に考えていた。ジョージは祈祷会の打ち合わせをした後に彼によく話しをした。荷造り最中にロジャーズがまた霊の救いの事を私に話しかけた。」

翌日には更にロジャーズの真剣な気持はつのっていた。W・クリーズはそれを見て「ジョージ・ロジャーズは一体どうしたのか。」、ジョージの答は「僕は知らないがもう彼のためには祈れなくなった。今朝も“宜しい”との神の声を聞くまで祈り続けたから。彼はいよいよ回心したようだ。」

この直後、エドワード・ロジャーズはその身を神に捧げて階上の信仰グループに投じた。彼の名は12名の中に加えられたばかりか、偶然にも彼只一人の会員証（註）が今もなお保存されている。それは創立日の1844年6月6日付で、第12号となっているのも感興深いものがある。

（註）エドワード・ロジャーズのYMCA会員証のように、大阪YMCAの創立者宮川経輝（25）の第14番会員証が日本最古のものとして今も私の手元に残っている。

その頃にはジョージの熱中ぶりに大分迷惑していた店員たちもいた。夜寝室に帰る時に廊下に待伏せするこの「熱心な同僚」に襲われると、もう断わりがきかなかった。彼らは予めそれを十分警戒して安全を確めた上で、そっと寝室に戻ったと言う。もっともジョージはそのために決して怨まれてはいなかった。この決活で単純な人物の大胆な男らしい指導力と、常に変らない真剣さには誰も一目置いていたからである。また、彼はロンドンでも屈指の若いセールスマンとして、今では全店の尊敬を集めていたからでもある。

大分前から彼らは店主ヒッチコックの救霊のために特別に祈薦をする決意をしていた。店主は立派な実業家であるが、信仰をみんなの前に発表してはいなかった。商会内をひっくり返すような救霊運動が始まっていることは直ぐに彼の耳にも達していた。しかし、自分がグループにマークされているとは夢にも知らなかった。一部に伝えられたように感情を害していたとの話とは反対に、彼は最大の興味をこの運動に対して感じ、かえって指導者たちを励ますようになった。43年の秋にはすでに店員の精神的福祉のために関心を払い、朝礼拝のチャプレンを招へいしてくれた。今まで幾月となく店主のために祈っていた階上のグループは、ついに青年伝道協会長を引受けてよいこと、集会に出席し、また資金も引受ける、との快諾を彼から得た。43年11月1日の秋季特別集会席上一冊の見事な大型聖書が店主に贈呈された。このようにして、店主から店員、徒弟に至る全店挙げての宗教運動が始まり、ジョージはその若い指導者となった。店内では伝道協会と並んで相互改善協会も始まり、聖書研究会、礼拝、祈祷会はますます盛り上った。ジョージは専ら伝道協会の資金獲得につとめた。彼自身が良い寄附者であり、また上手な募金者でもあった。

彼は言う。「神がこんなにまで全店を祝福し給うからには、同じ祝福をロンドンのあらゆる店舗にもなし給わぬはずはない」と。この信念がジョージの心底に鼓動し始めた時から、「キリスト教青年会」の発足は時間の問題となった。しかし、「キリスト教青年会」という考えが始めて語られたのは、有名なブラックフリャーズの橋上（註）である。今日でもこの場所は、ロンドンの生活を象徴するのにふさわしい所であるが、1844年にはなおさら、それを登場させる背景として選ばれるににあいの場所だっただろう。

（註）ブラックフリヤーズ橋はテームズ河に懸り橋長300米、中心商業地区にあり、ヒッチコック店から約10分で達せられる。

1844年5月下旬、初夏の心地よい日曜の夕べ、ジョージ・ウイリアムズは教友エドワード・ボーモントを伴いサレイ教会へ向う途上この橋に差しかかった。夕靄棚引く高い橋上には無数の若者たちがゆきかっていた。彼方に立並ぶ商舗の屋根の下には、また向うの繁華な家々の中でも、幾万の若い店員たちがその青春の日をどんなふうに過ごしているのか。彼らをすべてキリストに直面させるにはどうしたらよいのか。これが黙って歩く2人の心の中の思いであったろう。ボーモントは1年前に入店し、ジョージに導かれて回心した一人である。その橋上で何が起ったのか、後年、ジョージに彼が送った書状の一部を引用し、彼自身をして語らせよう。

「暫らく黙って歩いてから君はいつものように僕の腕を押して、テッディ、キリストのため犠牲を捧げる用意はできているか。僕は答えた。やれと言われたらやって見たい、きっと出来る積りだ。君は続けた、僕らのように全ロンドンの商店にも信仰的奉仕活動を広めることが大事だと僕は痛感してきた。もし少数でも熱心な献身犠牲をいとわぬ人々が結束したらきっとできる。熱心に祈れば神は宜しとなし給う。成功は疑いないと。僕は全く同感して喜んで一生懸命に君を助けるよと誓った。君はまたこの話は誰にもしていない、今が始めてだと言ったね。次の週も4、5名の同志がも一度話し合った。夕べの祈祷会後も残った者で詳しく考えてみた。それから店内同志を招集し、6月6日の木曜日の集会でその会を設ける重要性と実際問題を相談することを決めたね。」

これより先、店主ヒッチコックは熱心に友人のウエスト・エンドの大呉服店主W・D・オーエンに店内青年の動きを語っていた。オーエンは同じく熱心な支配人ジェー

ムズ・スミスにこれを伝え、店内で信仰の集いを始めていた。その後スミスから手紙でジョージは協力を求められた。そこで一同相談の上スミスをもこの歴史的集会に招くことに一決した。

この不朽の記念すべき会合には最も活動的な同志12名が選ばれて招かれた。参加者の名は次に誌される。

ジョージ・ウイリアムズ、クリストファー・スミス、ノートン・スミス、エドワード・バレンタイン、エドワード・ボーモント、エム・グラソン、ウイリアム・クリーズ、フランシス・ジョン・コッケット、エドワード・ロジャーズ、ジョン・ハーベイ、ジョン・サイモンズおよびウイリアム・オーエン商会のジェムズ・スミス、以上12名。

J・スミスを除く11名はヒッチコックの店員で、その過半はジョージが身をもって示した模範と努力の結果、リバイバルを通じて入信した青年たちにほかならない。

キリスト教青年会は遂にこのような経過をもって創立せられたが、誰もその真の重要性と将来の発展とを知った者はいなかった。殊に注目すべき事は、ジョージがその日の日記の中にはこの集会に触れていなかった一事である。むしろその代りに、神の御愛に対する感謝の心と、神を愛することの足らない自らの不信仰を悩んでいることが、長々と書残されている。彼は神の声を聞くよりも自らの考えに従うことをはじらい、聖書を無視し、寝過してその研究を怠ったことを嘆き、他者のために祈ることと祈り心の不足を神に詫び、6年半の教会員生活を通じほむべき事もなさず……と彼の日記には、「神の御前に出て、恥かしい、恥かしい」と本心からの叫びを記している。

したがって、後年、世に周知されたこの発会集会もその記録には乏しい。ただ席上当座の費用に13シルの献金があったこと、次でバレンタインの日記には「1844年6月6日（木)、ジョージの部屋での会の設立のために会合した。この会の目的は信仰を有つ青年たちをして、周囲の青年たちに救世主の御国を拡めるよう働かせることである。スミス氏を会長に、（ジェームズ・スミスのこと）私が会計（臨時)、クリーズとサイモンズが書記、他の出席者全員が委員となる」とだけ素朴に誌されてある。

1週間を経た13日には第2回会合が催され、20名が参加し活動を広める方策が議せられた。引続き毎週定期委員会が開かれ、ジョージの寝室では手狭であり、会の性質上誰にも集まり易い中心的な場所へ進出する必要が相談された。その結果、ヒッチコック店の西300米、ルドゲート丘の南側にある聖マルチン・コーヒー店を直ぐに1週5シルで借受けて初代集会所とした。これが、後年幾千万金の巨費を投じて建てられるYMCA会館へのスタートラインになるとはこれまた誰も知る由もなかった。ただ1人のお方を除いては。

この会の名称もまだキリスト教青年会とは正式に決まっていなかった。6月24日の新集会所における会ではジョージを議長として仮名「呉服伝道会」の改称問題を議し、次の7月4日の第5回会合では、かねて立案を委任されたC・W・スミスにより1. ベレヤ会(使徒行伝17・11、12参照)、2. キリスト教青年教会、3. キリスト教青年会の会名案が提出されて討議され、ほぼ第3案に決まったらしく思われる。しかし、7月12日の日記にはなお「宗教青年会」と書かれている。ともかく、この運動が他店にも拡がったことは7月中に開いた4回の集会司会者が外部の店舗の人人であることからわかるのである。

J・スミス会長は欠席することが多かったから、一同の諒解でジョージがその代理をすることになった。彼は発会の際、知名のJ・スミスを、特に他店の支配人である彼を会長に推したのである。ジョージはまだ22歳で一店員に過ぎなかった。しかし、キリスト教青年会の創立を発起し、他の11人を招いた人は年少でもジョージ・ウイリアムズその人であった。よって彼は創立者として記録される。

その年10月近くのある日、ブラックフリヤーズのブリッジの通りにあるラッドレ・ホテル（今日のルウゲート駅の向い側）が新しく借入れられ、以後5年間初代YMCAの集会所となった。（おわり）

附　録

世界協議会はワイズメンに何を意味するか

1955年8月23日(火)、パリの化学会館における世界ワイズメン協議会で行われた、国際ワイズ・メンズ・クラブ協会副会長奈良伝(日本・大阪)の講演で原文の英文から今回邦訳されたもの。

ボウマン会長、司会者さん、同志ワイズメン、紳士淑女のみなさん、

ずっと以前、私が初めてワイズマンになった頃、ある人がこの至言を教えてくれました。「君がスピーチをやる時は決して言い訳をもって始めてはならない。それで批評から免がれることはできないどころか、かえって火をつけるようなものだ。」それ以来、私は話をする前に弁解したいことが山ほどあっても、いっさい控えることにしています。

今朝の演題は「世界協議会はワイズメンに何を意味するか」であります。

さて、世界YMCA同盟百年祭の主なる会議の数々はほとんど終了いたしました。私共は、このたび百年祭の楽しみと栄光に満ちた祝典に参列する特権を与えられ、共々に素晴らしい経験を十分味わいつくすことができました。そして、みな共通してこの目の前にいきいきとした確証を把え、また精神的方面でも豊かに体験することができた点は、われらの世界的キリスト教団体（YMCAのこと）のもつ偉大性と一体性でありました。

それでも今朝、再びこの場所に集合したゆえんは、国際協会としても、また個々のワイズ・メンズ・クラブとしても、いったいわれらの共通使命がどこにあるか、また共同戦略はどうあるべきかなど、よく再検討するためにほかなりません。

この使命、この戦略の1つは、世界的にワイズ・メンズ・クラブ組織を助長し推進する一方、YMCAに対するサービスを一段と効果あらしめ、また活動の地平線が世界中に拡がるように、加盟全クラブのサービス網を連携し、また指向せねばならぬことに疑いはありません。

今回、世界YMCA同盟と、多くの国々のYMCA活動に関する、深められた新知識にかんがみ、全国同盟と地方YMCA運動にもっと効果的に貢献することも、あわせてはっきりと目指すべきでありましょう。

青少年団体は浮沈常なし

最初のYMCAが、1844年ロンドンで、ジョージ・ウイリアムズとその同志青年たちによって発足するにさきだち、英国のみならずよその国々においても、いろいろの青年宗教団体が成立しておりました。

米国およびカナダのYMCA同盟が調査しえた範囲の資料に従いますと、大英帝国、合衆国、ドイツおよびスイスにおいて、1632年から1842年までの210年間に起ったこの種の青少年団体の数は、なんと56種におよんでいるとのことです（これによればYMCAは57番目に当る訳であります）。

それらのあるものは大学内で組織され、あるものは都市において発足し、またあるものは教会や神学校内でできました。その名称もいろいろで、青年協会や青年団、またキリスト教青年同盟などがあり、神のクラブや作法改革協会と称するものさえあります。いずれにしても、これらもろもろの青年団体は、初期においては、ロンドンにできた最初のYMCAグループと大同小異であったように思われます。

これらグループのうち一部は他の団体に合流し、あるいは再組織され、結局は衰亡してしまいました。まれには近世に至るまで残在していたものもありましたが、実際は、全部といってよい程この世からは消滅してしまいました。

そこでわれらが共々に再認識することは、青少年団体というものは、本来変化のはげしいもの、また不安定なものであり、多くの場合、同様の道程をたどったすえ、比較的短期間に進路から逸脱して、その姿を消してしまうということであります。

YMCAを存続させたもの

そうであるとすれば、お互いあえて問いただしたい心が湧きあがってはきませんか。いったい、どうしてキリスト教青年会ただひとり、かくも信じがたい継続性を保ち、またご承知のような輝かしい世界的大発展をとげえたか、さらには何がいったい青年会にかくも長寿を保たせ、存続性をもたらした独自の要素なのであろうか。

しかり！　YMCA運動が今日の境地に到達し、偉大なる発展を来たらしたと思われる幾つかの要素を検出することは、すでに私共にはできておりましょう。したがって、この問題は、私の今朝の講演の主題ではありません。ただ私共にとり、大変意味深長と思われる要素の一つを、今持ち出してみたいだけであります。それは、発展の初期からどこのYMCAにとっても全く共通なものと思われるからであります。

われらの青年会というものは、その名も示すごとく第一義的には、キリスト教徒の青年に会員を限定したキリスト教団体でありました。他方においては、今世紀にわたり、多数の年長成人を年齢の制限なく、常にその勢力中に包含してまいり、かつ、それらの影響感化は青年会の方針や哲学にも強くかかわりをもってまいりました。

そのうえ、手っ取り早く青年会の実体を現実的に表現すれば、YMCAとは青年キリスト教徒のみに限らず、YMCA内の青少年援助に関心を寄せるその他の人々をも、広く包括する団体であるということになります。

私がもしも今、最初のYMCAがキリスト教徒の青年以外のものをいっさい排除したとしたら、おそらく10年ならずしてロンドンから姿を消したかもしれないと申したならば、諸君ははたしてどう反問されるでしょうか？しかし、幸いにも実際はそうならなかったのです。多数のYMCAリーダーたちが、YMCAは12人の青年だけによってできたとの印象をもっていられると思いますが、幸いにしてその実、そうでなかったのです。ここで私はそうでなかったことを、ちょっとだけ解明せねばなりません。

初代YMCAから継承したもの

疑いもなく、YMCAの発生場所は、ロンドンのセントポウル寺院境内、ヒッチコック・ロジャーズ商会のジョージ・ウイリアムズの寝室、「階上の小さい室」でありました。そこで青年たちが寄りあい、祈とうに聖書朗読にはげみ、1844年6月6日の歴史的会合には、選ばれた12名の青年が集まり、YMCAを発会しました。そして、全員もれなく青年会を築きあげる目的のために精進したのであります。

たしかにその通りであります！しかしながら、ここに特記せねばならないことは、この出来事に先だち、店主ジョージ・ヒッチコックが、店内に巻きおこっている青年たちの動きに親しく心をよせ、またロンドンの他の同業者たちにもこの運動を広めるよう援助の手を差しのべてくれたことであります（『若き日のジョージ・ウイリアムズ』参照のこと）。ジョージ・ヒッチコックとその友人W・D・オーエン（大呉服店社長）や他の実業家たちが、

最初のYMCAに非常な関心を払うようになったことからみると、ロンドンYMCAの発展途上においても、協賛・助力を惜しまなかった実業家たちは、英国最初のY's Menと呼んでしかるべきではないでしょうか。

〔以下はなぜか英文の原文から約一ページほど脱落しているように思われるので、当時の講演で述べたはずのことを想起し、後の方で重複する点もあるがここに挿入する。〕

「はい、そのひとにぎりのY's Menだけではありません。ご承知のとおり、Y's Menとは、一般にYMCAに属するすべての成人をさしえます。それならば、英国はじめ北欧のYMCAに限らず、世界のいずこのYMCAにも多数のY's Menが存在したわけでした。彼らは、個人会員として、役員・委員などとして、熱心にサービスする助力者たちを多数含んでおりました。しかし、これらの成人会員をピックアップし、奉仕グループとして組織する試みはあまりなかったように存じます。

ところが、1920年代にいたって、北米ではポール・W・アレキサンダーがはじめてオハイオ州トリードで、"Tol ymca Club"を組織し、別に日本では私自身の着想で、はじめてOsaka YMCA Club、略して、"Osaka Y Club"を創設しました。数年にして、これが共通名のY's Men's Clubに統一改組され、YMCA内の国際団体にまで発展したのであります。

したがって、このクラブは本来YMCAのあるすべての国、または都市に組織されてよいはずのもので、アジアとかヨーロッパとか、あるいはアメリカなどに限られるものではありません。」

熊本バンドとのかかわりをも想起

ジョン・R・モット博士（注　北米YMCA同盟や世界YMCA同盟の総主事などをつとめ、1948年ノーベル平和賞をうけた米国人主事）が、かつてその講演に世界各地でしばしば引用されたのが熊本バンドなので、私もまたこの興味あふれる物語を少し紹介いたします。

1876年1月30日早朝、時あたかも明治維新の初期、熊本市内花崗山に40名の青少年たちがよじのぼり、山頂で早朝祈とう会を開き、うち35名が署名し、日本人間にキリスト教（異教）を宣布する使命をおびたひとつの伝道団を結成しました。

その当時、最年長者でもわずかに20歳であり、受洗したクリスチャンはいないばかりか、洗礼のことさえ全く無知でありました。一層興味をわかすことは、かりに受洗を志望したとしても、当時500キロ以内に洗礼をほどこすことのできる牧師は、まだ全く存在しなかったという事実であります。

しかるに彼らは過去数年にわたり新約聖書を学び、またキリストの神に祈ることを実行しました。当時、身近なクリスチャンといえば、熊本英学校にきていた南北戦争生残りの、L・L・ジョーズ大尉ただ1人であったのです。彼らの多くは「サムライ」の子弟で、幼ない時から儒教一筋の素養を身につけていたのであります。

花崗山結団の一件は、当時の一大社会的事件で、親や親族の受けた衝撃は異常なものでした。年若い少年のだれかれは家庭に連れ戻されてかんきんされ、またいろいろの迫害も起ったのですが、みなこれを耐え忍んだのであります。後年、人よんでこれを、「熊本バンド」と申します。

6ヶ月後、熊本バンド・メンバーの多くは熊本を出奔し京都に上り、新島襄により日本の旧首都に開かれたばかりの同志社に入学しました。新島は、米国マサチューセッツ州アンドバー神学校出身で、日本最初のキリスト教教育者であります。このようにして、青少年の団体、「熊本バンド」もまた若者の会らしく、1年ならずして熊本より姿を消したのであります。しかしながら、これらの青少年たちの多くは、長じてからわが国初代プロテスタント教会のクリスチャンリーダーとなったのでありました。

ここで見逃せないことは、「熊本バンド」のリーダーの1人、後の宮川経輝博士は、1882年にいたって他のバンドメンバーや百余名の青年たちと語らい、大阪YMCAを設立し、若年25歳で会長に選ばれたことであります。

私は今、1884年に発行された宮川の会員証を持参しています。彼は生涯YMCAの会員であり、またこの会員証を大事に書斎に保存してきました。80歳でこの世を去った後、宮川夫人が私にそれを渡されました。宮川経輝もまた、身近いワイズマンであったといってもよいのではないでしょうか(私自身は宮川牧師より1917年に受洗した)。

成人たちとのかかわりを尊ぶ

戦後、私の国は約7年間連合軍の占領下にありました。最高司令官のきびしい命令下、日本の青年団体を作るには、24歳以下のボランタリーリーダーシップのみに限られて組織されることになり、この年齢を越える者は、どのような名儀でも会員になる資格がなかったのであります。

もっとも、YMCAやYWCA、ボーイ・スカウトやガール・スカウトのように伝統ある青少年団体は、当然この制限から除外されました。

特殊情勢下において上から与えられたものではありますが、このような考え方も、時には青年自身が自己の力と判断によって、自らの問題に取り組む経験の教育的価値の故に、認められぬこともないと思います。

しかしながら、私は同時に社会教育における、より高度でより見事な成果は、年齢の問題にとらわれず、適格な人物が顧問や指導役など、名称のいかんにかかわらず、青少年の真の共助者として交えられてこそ、ほんとうに達成されると考えるものであります。

そのようなこともあってか、日本における青年団活動の現況が、一般的にみて戦前よりも不安定であるのは、成人者によるリーダーシップの欠除に起因するものと痛感しております。

日本YMCAとのかかわり

さて話題を転じますと、日本では1955年までに5個のワイズ・メンズ・クラブが、まだYMCAの存在しない都市にできています（田辺、西宮、和歌山、奈良、彦根の五市)。ワイズメンの目的以外、これらのクラブの特定のねらいは、YMCAをその市に設立する準備をきずくところにあります。若きクリスチャンの世代にYMCAリーダーシップを育成するには、なお数年、あるいは十数年を要することでしょう。あるいはこのクラブのメンバーたちの中で教会学校教師である人々は、その生徒たちが青年に成育する時まで、しんぼう強く待たねばならないのかもしれません。

一方、他の都市ではすでにワイズ・メンズ・クラブをつくり、YMCAをも組織し着々として強化しつつあります。これらは、たとえば甲府、姫路、熊本などです。

なかでも甲府市は人口7万余、数個の教会もあり、キリスト教人口は500にも足りませんが、少数のキリスト教徒の実業家や専門家が発起し、甲府ワイズ・メンズ・クラブを結成し、ついで山梨YMCAの発足を助成しました。

1年ならずして、クラブは小さいYMCA会館の建築資金の募集運動をおこし、かなりの資金を得ました。これをYMCAに献げ、仮会館が竣工し、専任主事1名を招きました。

甲府クラブは一方、いくつかのHi-Y Clubの結成を助成し、ペンシルベニア州の首都、ハリスバーグの兄弟クラブより少なからぬ寄附金を受けて、昨年（1954年）ハリスバーグ奨学金制度を設けました。以来、Hi-Y Clubの数も増加し、甲府を縣都とする山梨県は日本におけるHi-Y運動の中心となりました。

最近、この種の大じかけの企画がフィリッピンYMCAでスタートしたそうです。全国を7地区にわかち、各地区に1名の担当主事をおき、おのおのが各5個のY's Men's Clubと7個のHi-Y Clubを設けるよう助成するとのことであります。

私が大変くどくどと、古めかしい話題などまで引用してまいった理由は、このような物語もなかなか味があると信じているからです。YMCAは発足の初代から現代にいたるまで、いずれの場所でも常に変わらず、これら成人たちによって与えられた不断の奉仕と協力に真に負うところ甚大であったのです。さきに申した通り、これらの人々もまたY's Menと呼ぶべき方々であったろうと存じます。今日のワイズメン諸君と区別して、正確にはPre-Y's Menと呼称いたしたらいかがですか。

さりながら、この種のPre-Y's Menが個々人の忠誠と奉仕とをもちよって、団結してYMCAの補助的クラブを設立することを着想しなかったことも事実です。それがやっと1920年にいたって初めて、さきに申した通り創立者ポール・アレキサンダーと16名の同志により、午餐会とサービス・クラブのアイディアを組合せ、YMCA内にこのクラブを結成したのでありました。

サービス・クラブとのかかわり

そんな関係もあって、最初のワイズ・メンズ・クラブは、ロータリー、ライオンズ、キワニスその他のサービス・クラブに類似する数々の共通面がありましたが、ワイズ・メンズ・クラブは同時にこれらと異なった独特な面をも備えておりました。たとえば、これらに比しては小型であったことで、YMCAの会員に限られ、中心目的をYMCAサービスにおき、クラブに入会以前、YMCA奉仕をしている建前となっていたからであります。

以来、数多のワイズ・メンズ・クラブが結成されました。あるものはこれらのサービス・クラブと同じ立場で、しばしばこれらと会員を争奪しあいました。ただし、伝統古きこれらのクラブよりは若い人々をねらい、おのずから年齢層の異なるところを獲得することもありました。また日本のクラブなどでは、YMCA会員でさえあれば、これらのクラブの会員であってもさしつかえなく、入会できるのであります。この二重性は他のサービス・クラブの間では全く受入れない習慣となっております。

一方、あるサービス・クラブの現況には実に注目に値するものがあります。たとえば、国際ロータリーのごときは今や93の国々地域に8,700個のクラブと約411,000名の会員を擁する一大組織となっています（注　18年後の1973年6月現在では150ヶ国に15,703クラブあり、会員数736,750名と飛躍的に増大し、中でも日本はこの波にのり、今では世界第2のロータリー国となった)。

それなのに、世界中に広まったYMCAのあるすべての国々に、どうして今までワイズ・メンズ・クラブが拡張せられないのでしょうか。

反省を要することども

私は「神の同労者」と題する百年祭大会協議会用研究手引書を、翻訳する大仕事を自発的に引受け、昨年秋以来全余暇をささげて、手のこんだ役目を果しました。

その仕事に従事中、ワイズマンの私として特に気づいた点は、ワイズメン運動とそのYMCAに対する効果的奉仕については、本手引書にはほとんど記述のないことでありました。諸君もまた同じように感じられませんでしたか。ただし、42ページと92ページの2ヶ所に数行、「ある国ではワイズ・メンズ・クラブが青年会のため、指導者の発見と開発のため重要な役目に任じている」とあります。

申すまでもなく本書はその性質からして、YMCAの成しとげたいろいろの業績にあわせて、今直面する課題について、YMCA運動100年の経験を謙虚に反省評価するために、提出されたものであります。ひいては、過去より継承すべきものと、将来へ伝承すべきものは何である

かを判別するためのものでもあります。

これらのことは驚くほど見事に記述され、余すところありませんが、ただワイズメン運動に関するかぎりは、ほとんど何らの考慮も払われておりません。

われわれにとってこれは失望ではないでしょうか。この事実はワイズメン運動がYMCA運動に対し影響力のなかったことを示すものではないでしょうか。あるいはまた過去30余年間、YMCA運動の舞台の一隅におかれ、気づかれもしない端役を演じていたしるしではないでしょうか。それとも本書の42ページにもあるとおり、ワイズ・メンズ・クラブは単にある一部の国に限って、重要な要素にとどまるからでしょうか。あるいは、YMCA大会の前後に「世界ワイズメン協議会」を催すので、本手引書の執筆者たちは、わざわざこの運動に触れることを遠慮したのでしょうか。

リ博士の忠言にも学ぼう

リンバート博士（当時の世界YMCA同盟総主事、スイスのジェネバ本部駐在の米人主事）の挑戦的講演は私にとっては開眼的でありました。それによると、ワイズ・メンズ・クラブはここで何らかの再考をなし、YMCA社会、特にヨーロッパにおいて広く受け入れられるように、「パリ標準」のような、基盤となるべきキリスト教的標準を、記述することが必要との印象を受けました。

注 (1)この提言は数年たった1960年代にはいり、ようやく国際協会の取上げるところとなり、1968年のフレンチ・リックス国際大会で、「綱領」として、国際憲法第2条の「目的」の前に挿入された。
(2)さらに、1973年制定の新国際憲法に、この綱領だけはそのまま受けつがれている。
(3)この綱領は、当時国際会長の顧問の1人であった私の提案原文をもとにし、次で相当の修正を加えられたものであることを明らかにしておく。

なお、リン・バート博士が講演中で考慮するよう提起し、具体的提唱とその実行を促された4つの点全部をここにくり返すいとまはありません。これらについては、適当な委員をあげて、全面的に検討せねばならないと考えています。

その次に気づいたことは、今回の世界会議で受けた印象から、ワイズ国際協会は33年を経ているにもかかわらず、100年を迎えた世界同盟の前にでる時、まだはなはだしく若造であるということです。ゆえに、パリにおいて今ひしひしと受けつつある諸経験をして、より強固で広大・かつ活力に満ちたワイズメン運動を、今後に展開する強大なモメンタムにしなければなりません。ただし、心すべきことは、われらの運動のようなレイ運動は、しょせんは専従者もおらず、不完全でどこまでいっても未完成であるということであります。

私の提唱したいことを少々

この数々の世界会議を好機として知り得た新知識にかんがみ、私は単位ワイズ・メンズ・クラブと個々のYMCAとの関係、国際協会と各国同盟、ないし世界同盟との関係を、「よりよくする」必要性をさとり、また信念を固めました。そこで、特にこの機会に運動のエキステンションに関する私見を持ち出したいと思います。

さて、YMCAがどこにあっても、われわれレイマンを必要としていることには、みな同感下さると思います。全国YMCA同盟もまた自国内YMCA地帯に新クラブが発足することを欲せられるようです。更に世界YMCA同盟も、われらの運動が無ワイズ国にまで進出することを、それぞれの国の同盟が欲する限り望まれることでありましょう。

統計によれば、78ヶ国に現在1万個たらずのYMCAがあります。しかし、例えばデンマーク、オランダ、ドイツなどのようなYMCA同盟の加盟青年会数は、他の国々より人口比においてはるかに多く、その理由は、教会と深い関係にあるため、教区単位に大部分のYMCAが組織されているからであります。また、これらのYMCAは組織的には教会から独立しているとはいうものの、大きな地域社会を背景に超教派的に会員をとり、広く未信者をも準会員として迎える普通のYMCAとははなはだその性格、規模、に相違があります。

これらの理由もあって、1万個に近い各種YMCAに一律に、同形のワイズ・メンズ・クラブを形成することはできません。とは申しましても、37ヶ国に527クラブを有する現状は、だれがみても、数多いYMCAに比して、余りにも僅少にすぎております。

今度ワイズダム史上初めて開かれた世界協議会は、ワイズメンに一層世界的に目ざむべきことを要請しております。近い将来、第2回世界協議会（註）で再会する時までには、少なくとも20ヶ国に新しく運動が広げられているよう、この機会を踏み台として飛躍せねばなりません。この運動をそれほどに発展させるためには、加盟クラブをもさらに数100クラブ増加させねばなりません。

注 1970年デンマーク、コペンハーゲンで、欧州最初に開かれた第46回国際大会を、かりにこれにかわるものとみれば、その時にはワイズメン分布国は15年間に49に、加盟クラブは820クラブになっていたことは、特記すべきである。

アジアのYMCAは、欧州からすれば遠隔の地であり、YMCAの多くは弱体で、クリスチャン人口も欧州より目だって少数にもかかわらず、世界100年祭大会には思ったよりも多数のワイズメンである代表を送りました。

太平洋方面の私の地域には、印度、ハワイ、オーストラリアの3区を含めるとすれば7区あり、国際協会に約80クラブが参加しています。この地域は数年後にはぜひ100クラブにしたいと切望し、この点フィリピンのM・C・マクボウ理事も異存ないと思います(注　1972年には17年間に215クラブに増加している)。

さらにまた、ワイズダムをビルマ、インドネシアに展開したいと願っています。これでアジアのほとんどの国に行きわたります。

このようにして、南北アメリカ大陸のYMCA17ヶ国、欧州大陸の20ヶ国、中東とアフリカ大陸の19ヶ国の全部にわたってもまた展開できないものでしょうか。もしも将来この願いが実現した暁には、世界中の73のYMCA加盟国全部に、それほど遠い将来でなく、ワイズダムを広めることが実現することでしょう。

解　説・メ　モ

(1)世界YMCA同盟成立百年祭大会について＝スイスのジェネバにある世界YMCA同盟は、1855年にパリで成立した。1955年はまさに100年記念の年にあたったため、同年8月に同じパリでこの第22回世界YMCA大会を機として百年祭が開かれた。日本からも30余名が代表として参加した。

(2)世界ワイズメン協議会について＝別記の通り、百年祭を好機とし、毎年開かれる国際大会とは別にその前後に開かれ、日本からも17名が参加した。国際協会では、この機にワイズメン運動の世界的拡大を意図し、カナダのG・マクラーレイ元国際会長を約1年間、ジェネバに派遣して準備したほどであるが、これは法規上の定例会議ではなかった。

(3)欧州諸国へのワイズダム進出について＝北米、すなわち新大陸で始まったワイズ・メンズ・クラブ運動を世界的に広めるため、まず旧大陸に進出することが望まれた。1928年、日本で大阪クラブができた年に欧州エストニアに第1クラブができた。しかしその後の発展は遅々として進まず、第2次大戦ではさらに衰えた。大会のあった1955年には、わずかに全欧で15クラブが残っていた。それが大会後18年の今日では、欧州14ヶ国にわたり140余のクラブが成立する盛況に向っている。

(4)この講演について＝当時アジア地域担当の国際副会長（1954年～57年）であった私に、名指しで40分間の特別講演を依頼された。内容的にはなんらの条件も主題も示されなかったので、私自身で自発的にこのような話を選んだ。しかし、いろいろと迷った末のことで、自分が日頃考えていること、信じていること、知っていることを卒直に語るよりほかないと思ったからである。大変苦労して初めから直接英文で執筆した。

(5)今頃古い時代の話を持出すについて＝今年の国際会長の標語“Our Future is International”には、来るべき国際対等時代の到来を望むことを含蓄しているようである。
私が一生懸命パリで叫んだことが、18年かかって、欧州といわず世界中にしみわたりいよいよ発酵してきたようである。
ことに欧州におけるワイズダムの前述のような興隆や、今年制定された新憲法などの中にもそれがはたらいているように思われる。うれしくもあり、何だか恐しくもある。古色をおびた資料箱の中から原稿を引き出し、今までいっさいご存知なかったと思われる日本のワイズメン諸兄に、改めて自分の英文を時に辞書を引いたりして自分で訳し、附録として今頃発表する気になったしだいである。

（1973年11月10日記）

編集を終えて

西日本区にリーダートレーニングの一環として、ワイズアカデミー委員会が設置され、毎年次期役員・主査・会長研修会が開催されるようになりました。最近では年中行事として定着してまいりました。

そのための資料として、「ワイズ理解の手引書」を発刊し、最初のものに手を加えた再版のものを使用してまいりましたが、在庫がなくなってまいりました。

今年度、アカデミー委員会で検討をした結果、いままではワイズ活動のリーダーの方を対象に考えていたが、組織としては一般社会におけるリーダーを育てることが、本来の目的の一つと考えれば、むしろ全員に持っていただき、ワイズメンとしての「質」の高さに寄与するものとして、「ワイズ必携」として発行することを役員会に提案し、可決されました。

低廉でしかも内容の豊富なものという編集方針のもとに、全クラブの会長、役員の皆様にも原稿の発掘にご協力をいただきました。また、前回までの内容の推敲を行い、新たに発掘したものや研修会で語られたものをベースに執筆して頂いたものを加え、上梓することができました。

編集の過程で、日本のワイズメンズクラブ創設の父といわれる奈良伝さんの「若き日のジョージ・ウイリアムズ」が、YMCAの創設に至る物語として、また、ワイズメンズクラブとの関わりの深さを歴史的に知る上で、大変貴重なものであることに思いを馳せて、ご子息の奈良信さんにご快諾を得て掲載する運びとなりました。ご一読頂ければ、ワイズメンズクラブの使命であるYMCAとの関わりの必然性がご理解頂けるものと思います。

「ワイズ必携」の全体を通して言えることは、私たちはYMCAから離れた存在ではありえないのであって、むしろ関わりを深めることによって、ワイズメンズクラブの成長とYMCAの発展が期待出来ます。また、この二つの関係が微妙にバランスをとりながら、切磋琢磨する関係が必要であり、また、YMCAの人、すなわち「ワイズメン」として誕生する過程で起こる、人と人との出会いによって体験させられる様々なプログラムによって、自己研鑽がはかられ「人」として成長するのだということであります。

このようにして鍛えられた、ワイズメンであるという誇りをもって、一般社会でのリーダーシップを発揮されますことを願っています。

終わりに、発行に際してご協力下さった皆様に心からの感謝を捧げます。

2001年12月1日

ワイズアカデミー委員長　岡　本　尚　男

2001年12月1日　発行

発　行　所　ワイズメンズクラブ国際協会西日本区
西日本区事務所
〒550-0001
大阪市西区土佐堀1-5-6　大阪YMCA会館1F
TEL 06-6459-3317　FAX 06-6459-3318

発　行　者　吉　本　貞一郎

企画・制作　株式会社　洛　陽
〒612-8252
京都市伏見区横大路一本木町27-9
(協)京都印刷センター3F
TEL 075-621-6669　FAX 075-621-6673

2,500部

後　記

巻初の序文にも書いているように、この小冊子は創立者ジョージ・ウイリアムズの生涯のうち、若いころをクローズ・アップし、最初のYMCAが創立されたところにまで及んでいる。その後、年月を重ねるとともに、彼自身もYMCAと共々、成長発展したことはいうまでもない。

もっとも、ジョージ・ウイリアムズは一度だって主事職についたことはない。また、主事になろうと思ったこともない。彼は常に一会員にとどまり、レイマンとしてYMCAのたのもしい担い手であった。彼は早くも創立1年後には、自分たちレイマンだけではYMCAは立ちゆかないことに気づき、会員中の青年T・H・タールトンを最初の主事として招へいした委員の一人であった。そしてタールトン主事を最も大切に処遇したレイマンであった。YMCAは、今日に至っても、レイマン制と主事職とを両輪として動く二輪車にたとえられる。この重要にして歴史的な原則はくずしてはならないと思う。

さて、YMCA創立後10年がたって、32歳を迎えたジョージは、店主ヒッチコックの長女ヘレンと結婚した。それから旧主の求めに応じて、ヒッチコック・ロジャーズ商会を新たにヒッチコック・ウイリアムズ商会と改め、共同経営者となるのである。

年がたつにしたがい、ロンドンYMCAは成長発展し、イギリスの各都市にもYMCAができた。彼は委員・役員としてこれらに関係し、ロンドンYMCAの会長・全英YMCAやジエネバの世界YMCA同盟などの重要な役職にもついた。しかし、常に商会の経営者であり、一実業人レイマンに止まりつつ、生涯をYMCA運動のためにささげた。やがてYMCA創立者といわれるようになったことは大きな栄誉であったが、さらに彼の責務の方が重くなったようである。

1894年、ロンドンYMCAが創立50周年記念を迎えた時、ビクトリア女王から「人道のため顕著な貢献をした」との理由で“サー”の位を賜わったので、サー・ジョージ・ウイリアムズと敬称される。

1905年11月14日、84歳でこの世を去り、ロンドンのセント・ポール寺院の地下墓地（クリプト）に葬られた。

私は1928年と、その28年後の1955年の2回、広くて薄暗いこの地下墓地を訪ね、さまよい歩いた経験がある。2回共、容易にその場所を発見できなかったのである。しかし、トラファルガー海戦のネルソン提督の墓の近くで、ついにこれを見つけた時の感激は強くかつ大きかった。

地下墓地の床面に、たたみ一畳敷より大きい広さと思われるほどの墓石が横たわり、その上を歩いても気付かぬことさえありうる構造であった。碑面にはいろいろの彫刻がある。印象の深いものは、その死の近きを悟ってから無理に出席した1905年4月パリの世界YMCA同盟50周年記念会で、フランスの青年たちの前に立って語った一節がきざまれていたことである。

それを記録したメモは散逸してみいだせない。なにしろ、45年もたつので記憶もさだかでないが、たしか

「青年諸君、私の最終の遺産……そして貴重な遺産……はキリスト教青年会である。私は各国の愛する青年諸君にのこします。これを受けつぎ、かつ進展させられるように……」

とあったように思う。これが最後のスピーチとなっている。

いずれにしても、私自身それを受けて日本に帰り、その秋、最初のワイズ・メンズ・クラブを作り、一生かけてその遺産たるYMCAを守りぬこうと決意した。今日また、その誓いを新たにしたいと祈る。

1973年11月10日

大阪ワイズ・メンズ・クラブ
創立45周年を記念して
奈　良　　伝

若き日のジョージ・ウイリアムズ

1959年12月25日　第1刷発行
1974年6月1日　改訂増補版第1刷
1993年5月20日　改訂増補版第5刷

著　者　奈良　伝
発行者　吉永　宏

発行所　日本YMCA同盟出版部
169　東京都新宿区西早稲田2-3-18
振替東京9-68869　電話(03)3203-0173

落丁・乱丁はお取替えいたします。　印刷　三秀舎